山手樹一郎長編時代小説全集＝38

紅顔夜叉

春陽堂

紅顔夜叉

山手樹一郎長編時代小説全集＝38

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井富士弥

山手文学の特色の際立った魅力は、ヒロインが男にも欲しい生一本で勝ち気な性格で活躍することにあろう。この系列は、ときには鉄火な姐御となり、そして本編の丹波笹山十万石松平志摩守の妹君で小太刀の名人、颯爽たる男装の新宮百合太郎こと百合姫に代表されるような〝お姫さま〟ものとなる。清純な深窓の乙女を愛する作者が、「ベルばら」趣味の変性女性を好んで登場させているのではない。実は、生来陰湿になりがちな女性たちにも、いつも陽当たりのよい屈託のない心を望む男の願いを立体化してみせる楽しさから発しているのであろう。

かくて物語は、東照宮拝領の菊一文字の銘刀を勝手に持ち出して主君を脅迫し、我意を押しきる国家老鬼頭左馬之介一派を斬るため、単身、男装して国元へ赴く鬼姫を助ける快男児のら太郎と、悪玉との虚々実々の道中記。今回の楽しみどころは、あくまでも男の気持ちでいる百合姫が次第に女になる過程で、この辺りの自在な作者のお家芸に、読者は心ゆくまで堪能させられよう。

紅顔夜叉

山手樹一郎長編時代小説全集＝38

春陽堂

春陽堂●370円
0193-200438-3066

紅顔夜叉

山手樹一郎長編時代小説全集

38

春陽堂

紅顔夜叉

山手樹一郎長編時代小説全集

38

春陽堂

紅顔夜叉

山手樹一郎長編時代小説全集

38

春陽堂

紅顔夜叉（やしゃ）

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
*風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

*本巻執筆者

他流試合

その朝、江戸三道場のなかでも第一といわれる神田お玉ガ池の北辰一刀流千葉周作の道場へ、妙な若衆がたずねてきた。

年ごろは十七、八、すらりとした中肉中背で、あさぎ羽二重のこそでに白小倉の袴をはき、真新しいわらじがけという目のさめるような美少年である。なによりも目立つのは、髪を総髪にしてうしろでむぞうさに紫のひもできりきりと結んでいるのがふさふさとゆたかに黒く、ふっくらと色白のうえに、きっと結んだくちびるの色が紅を含んだようにあざやかなことだ。

そして、言うことがまたかわっている。

「拙者は名もなき浪人者のせがれで、新宮百合太郎と申します。子細あってこれから旅に出る者ですが、その前に日ごろ御高名をうけたまわっております千葉先生に、ぜひこれまでのわが修業をためしていただきたくまかりこしました。お許しくださるかどうか、お取り次ぎを願います」

きれいに澄んだ声ではあるが、どこかに凛とした気魄がみなぎっている。

「つまり、他流試合でござるな」

取り次ぎに出た若い門弟があきれて聞いた。町道場に他流試合はつきものである。が、音にひびいた千葉の道場へ他流試合にくるほどの者は、いずれも一流をきわめた剣客たちだ。それにしては、この美少年はあまりにも若すぎるからである。

「いや、他流試合ではありません。拙者の修業がものの役に立つかどうか、お試し願いたいのです」

「しかし、腕前をためすには試合をしてみなければわからん。試合となれば、けいことは違うから、どうしても真剣勝負ということになる。他流試合とおなじだと思うがな」

「拙者はそうは思いません。千葉先生が拙者の言葉をどう取られるか、とにかくお取り次ぎを願います」

百合太郎は問答無益というように、にっと微笑した。その微笑がまたひどくなまめかしい。

「では、先生がなんと言われるか、しばらくお待ちなさい」

一本やりこめられた形の取り次ぎは、むっとしたように道場へ立っていった。

広い道場はいま朝のけいこの真っ最中で、元太刀を取る高弟たちが一方にずらりと並び、それに門弟たちがかわるがわるぶつかっていって、けいこをつけてもらっている。元気な掛け声、にぎやかな竹刀の音が耳を聾さんばかりだ。

それらのけいこぶりを、師範席からけいこ着姿の千葉周作がじっと見まわしている。周作は六尺近い堂々たる偉丈夫で、年配も不惑を越え、自分が創始した北辰一刀流の剣技にも、また人間としても、ようやく円熟味が加わってきたところだった。

「先生、ただいま玄関へ、ぜひ先生に腕前をためしてもらいたいという若い男がきていますが、どういたしましょう」

取り次ぎは周作の前へ出て、百合太郎の希望をくわしく告げた。

「ふうむ。その者はこれから旅へ立つのだというのか」

「はい、わらじをはいています」

「供はつれていないのだな」

「一人です。名もなき浪人者のせがれだと言っていますが、身なりも大小もなかなか立派なほうです」

周作はちょっと考えていたが、

「とにかく会ってみよう。ここへ通してみるがよい」

と言いつけた。

「はい」
取り次ぎが玄関へ引きかえしていくと、
「しばらく、けいこやめえ」
周作の声に竹刀の音はたちまちやみ、門弟たちは何事だろうと、面をはずして道場の左右へ行儀よくすわる。
そのしいんとなった道場へ、新宮百合太郎は取り次ぎの案内で、臆する色もなく姿をあらわした。門弟たちはその美少年ぶりに、思わずあっと目をみはっている。
「はじめてお目にかかります。てまえは新宮百合太郎と申す若輩者、なにとぞお見知りおき願います」
ぴたりとつかえる両手が、女のように白くしなやかだ。
「わしはおたずねにあずかった千葉周作だが、旅に立たれるそうだな」
「はい。取り次ぎの方に申し上げましたが、その前にぜひ先生に、てまえの修業がものの役に立つかどうか一度ためしていただきたく、おこがましくもお訪ねいたしました」
その悪びれぬ涼しい目の色にただならぬもののあるのは、なにか身に大望があっての旅と、周作は早くも見抜く。
「これまで何流を修業されたのかな」
「八重垣流を少々身につけました」
「小太刀だな」
「はい」
「ためしてくれという希望なら、ためしてあげてもよいが、わしでなければいけないのかね」
「いや、御門弟衆でもかまわないのです。ただ、てまえに少々勝手なお願いがございます」
「試合についてかね」
「はい。てまえは道具をつけず木剣を持たせてもらいたいのです。生意気のようですが、むろん打つべきすきがあったら十分打ちすえていただいてかまいません。その代わり、てまえも十分に打たせていただきたいと存じまして」

相手が道具をつけていても、木剣で思いきり打てばけがをする。だから強い相手でなければだめだと言いたいのらしい。
それにしても、この美少年は素面素籠手で、どんなに打ちすえられてもかまわないという。つまり、決死の覚悟なのだ。聞きようによっては小面憎い高言とも取れるが、その決死の境に身をおいてみなければ、ほんとうの実力はわからないともいえるのだ。
門弟たちはあきれたように、たがいに顔を見あわせている。
「希望ならそれでもよいが、しかし、一つまちがうと、貴公、今日は旅立ちができなくなるかもしれんが」
「今朝家を出るときから、わが命はないものと、すでに覚悟をしています」
「なるほど。ここでけがをするようでは、旅へ出てもむだだという気持ちだな」
「はい」
「よかろう。その決心でなら、すこし奇矯のようではあるが、望みにまかせて試合の相手を出そう。――臼井、相手をしてみなさい」
臼井新三郎は高弟のうちでも周作の秘蔵弟子といわれ、年はまだ三十前だが、面打ちの名人だった。
「承知いたしました。先生、道具をつけてやるのですか」
相手が素面素籠手なら、こっちもそれでいきたいという新三郎の腹だ。
「新宮うじの希望だから、貴公は道具をつけて相手をするがいい」
先生の言いつけではしようがない。いまに見ろ、目から火の出るような面を一本食わしてやるからと、手早く道具をつけて道場の中央へ出た。
美少年はたすきはち巻き、袴の股立ちをきりっと取って、一尺八寸の木剣を借り、三度四度素振りをくれてから、周作のほうへ一礼して、

新三郎の前へ出る。
「お手やわらかにお願いします」
「御同様に――」
双方剣を引いて、さっと立ちあがった。相青眼である。
新三郎は五尺八寸の上背であくまでもたくましい体軀、それが三尺八寸手なれの竹刀を構えて立った姿はまことに堂々たるものがあるのにたいして、百合太郎はせいぜい五尺四寸、新三郎とくらべるとひどくきゃしゃに見えるうえに、得物も一尺八寸の小太刀だ。だれの目にも勝負はむろん問題ではなく、むしろ美少年の素面素籠手がいたいたしい。道場は一瞬しいんと鳴りをしずめた。
「えいっ」
「おうっ」
新三郎にはただ一打ちという自信があった。が、構えてみると、一尺八寸の小太刀に案外たじたならぬ気魄がこもっている。美少年の顔は花が咲いたように紅潮して、その星のような目に恐怖を知らぬ不敵さがみなぎっている。
――そう強いとは思えないんだがな。
しかし、迂濶には打ちこめない。竹刀と違って相手は木剣だから、へたな相打ちになればこっちがけがをする。しかも、相手はこっちの仕掛けをじっと待っているらしく、自分からは少しもしかけてこようとしない。
「えいっ」
新三郎はじりじりと間合いを詰めてみた。相手はすっと水のように下がって、こっちの引く息に乗じ、すかさず無言でじりじりと押しもどしてくる。その息の正確さは、さすがに千葉の道場へ一人で乗りこんでくるだけある。
――くそっ。
新三郎はすこしじりじりしてきた。こんな小童を相手に、いつまでにらみ合ってばかりいては、千葉の高弟の実力を疑われる。相手にどんな秘太刀があるかはしらぬが、思いきり面を一本入れてやれと、
「おうっ」
青眼の竹刀をさっと得意の大上段になおした。むろん、竹刀が大上段まで行けば、一気に打って出る体勢になる。そのまだ十分に振りかぶりきれぬ途中の一瞬、
「えいっ」
火のような気合いと同時に、美少年の小太刀が躍りこみざま、あざやかに右の籠手へきまっていた。まったく目にもとまらぬ敏捷な太刀である。
「参った」
新三郎は思わず口に出して、ぼうぜんとしてしまった。
あっと、見ていたほどの者の口から感嘆の声がもれる。美少年は真っ赤な顔になって、さすがにうれしそうである。

橋場の虎吉

「お見事」
周作もまた賛辞を惜しまず、
「庄司、一本願え」
と、庄司弁吉をうながした。
庄司はこの玄武館でも四天王の一人に数えられる高弟で、これが負けるようなら、後は周作が出るほかはない。
「はは」
弁吉はすぐに面をつけて、百合太郎の前へ進みでた。これも新三郎に劣らぬ堂々たる体軀の持ち主である。
「お手柔らかにお願いします」
「拙者こそ」
型のごとくあいさつをして、さっと立った。
今の試合ぶりを見ていた庄司は、いきなり上段の構えに出る。敵の得意は籠手と見てとったからである。

「えいっ」
「おうっ」
にらみあいはかなり長くつづいたが、庄司はどうしても手が出せなかった。べつに恐ろしくはないが、といって息を抜けばまっしぐらな突きがくるのだから、全身に汗が流れてきた。
百合太郎の顔も、いまは蒼白である。目だけがあやしい闘志に燃え輝いて、その息の長いこともまた無類である。
見ている者はいちようになにかふしぎな殺気にうたれ、じっと手を握りしめてしまった。
「それまで――」
このとき、周作が師範席から、びんとひびきわたるような声をかけた。
「はっ」
飛び下がった二人の肩に、大きく息がはずんでいる。
「百合太郎どの、あっぱれな手の内です。このうえわしが立ち会ってみても、結果は同じことだ。相打ちを覚悟でなければ、飛びこんでいけない。

「えいっ」
「おうっ」
百合太郎は前とおなじ青眼だ。
――これで、どうして臼井が負けたろう。
はじめは庄司もそう思った。ひどく柔らかい構えで、敵はこんども攻撃に出る意志はすこしもないようだ。
が、さて、それではこっちから打って出るとなると、美少年の小太刀はぴたりとこっちののどに吸いついている。
上段は面を打っていくほかはない、打って出れば、捨て身のもろ手突きがくる。そうわかってみると、百合太郎の小太刀には死だに恐れぬ強靱な一念がひっそりと鳴りをしずめているのだ。
――こいつはやっかいだ。
敵はあくまでこっちの仕掛けを待つ戦法なのだ。相打ちを覚悟でなければ、飛びこんでいけない。

だ。貴公がわが命惜しいと思わぬかぎり、おそらく破れることはない。破れるときは敵もまた命をおとしている。まず天下無敵、千葉周作、折り紙をつけます」
「先生、ありがとうございます」
百合太郎は周作の前へぴたりと両手をついたまま、しばらく顔をあげなかった。
「一言餞の言葉をさしあげよう。まず朝目をさましたら、しっかりと初一念を胸に思いおこすことだ。これを土産に、安心して大望の旅にお立ちなさい。せっかく自愛を祈ります」
「先生の御教訓、肝に銘じてかならず忘れません」
美少年は周作に厚く感謝してから、
「御一同さま、今日はありがとうございました」
門弟たちにも丁重にあいさつをして、道場を出ていった。
「先生、どうもわかりません。拙者にはあの美少年が天下無敵というほど強いように思えないのです、負け惜しみでしょうか」
後で新三郎が小首をかしげながら周作に聞いた。
「さよう、腕前からいえば、おのおのがたより多少劣るかもしれぬな。しかし、真剣勝負は心だ。あの者はなにか大望があって、わが命をすてている。人間命をすてた一念ほど、世の中に強いものはない。おのおのがたもよく肝に銘じておくことだ」
「あだ討ちでしょうかなあ。あのいちずな執念には、恐るべきものがある。強引に打っていけば、やっぱり相打ちだったと思います」
庄司弁吉が述懐するように言った。
「ああなっては、こっちも無念無想、相手の精根のつきるのを待つほかはあるまい。しかし、あの体力であれだけ息がつづく、女にしては珍しい」
「えっ、あれは女ですか、先生」
一同の目が、はっとしたように周作にあつま

る。

「いや、その詮索はやめよう。それが命がけになって大望をとげようとしている新宮百合太郎への、武士としての心意気というものだ。おのおのがたはただ人の一念の強さというものをあの若者から学べばよいのだ」

千葉周作は門弟たちをそうさとして、それ以上の詮索は許さなかった。

そのころ――。

問題の美少年新宮百合太郎は、旅笠を目ぶかにかぶって、お玉ガ池から富山町へ突きあたり、左へ切れて大横町のほうへゆうゆうと歩いていた。その歩き方には、すこしも女らしいところはない。

――一度駆け出してみせねえかな、そうすりゃ男だか女だかすぐわかるんだ。

その百合太郎に疑問をもって、今朝から跡をつけているのは、橋場の虎吉という小悪党だった。一名彫虎ともいい、本職は彫り物師だが、ちょいと面がきりっとしているところから、女をたらして食っているのさと、それを自慢しているやつで、本職の彫り物より、悪事にかけては目から鼻へ抜けるすごい腕だと、ひそかにうぬぼれているまむしのような男だ。

虎吉が今朝、ふらりと神田明神の境内にはいっていくと、早春の明るい日ざしの中で、目もさめるような色若衆が、なにか一心に祈念をこらしている。引きつけられるようにそばへ寄っていって、自分も神前に合掌しながら横目でじろじろ様子をうかがってみると、その白々とした手のかっこう、肌理こまやかなほおから頤へかけてのふっくらとした肉づき、さてはすきとおるような項のあたり、どうしても女としか思えない。

そういえば、ほのかに鼻へただよってくる甘い体のにおいは、たしかに女のものだ。

――こいつは拾い物だ。

虎吉はぞくりとした。これが女なら、ただはおかねえと思った。どんな身分のものか知らぬが、講釈で聞いた小猿七之助のたとえもある。めったに手のとどかぬ御殿女中でさえ、ねらえば機会があるものだ。

身内が熱くなるような執念につかれて、やがて祈念をおえて歩きだした美少年の跡をつけだすと、その歩き方でふところもずしりと重いようである。しかも、真新しいわらじがけのところを見ると、これから旅へ出るのだろう。

――しめた、運が向いてきやがったぞ。

江戸を離れてくれれば、いっそう仕事はしやすい。

が、それが意外にも千葉の道場へはいって、武者窓から見ていると、すごい試合をやってのけたのには、さすがにびっくりさせられた。

あんなところを見ると、やっぱり男かなと小首をひねってもみたが、むろんそんなことぐらいであきらめてしまうような虎吉ではない。いまは美少年の名が新宮百合太郎というのだともわかった。

――これで女だとはっきりしてくれさえすりゃ、おれは命をかけてもいいんだがな。

虎吉はもう夢中だった。

そんな物騒な男が跡をつけていると知るや知らずや、新宮百合太郎はやがて江戸橋をわたり、三十間堀にそって汐留橋のほうへ向かっていく、目あてはどうやら東海道らしい。

のらだんな

「おい、その男――」

まもなく汐留橋へかかろうとするあたりまできて、美少年はくるりと振りかえり、虎吉を呼んだ。

「へえ、あっしですか」

虎吉はぎょっとして立ち止まる。前後にちょっと人足が遠い、あの腕前でいきなり抜き打ちにずばりとやられてはたまらないから、ちゃんとそれだけの距離は用心している。

「切りはせぬ。いっしょに歩け」
笠の下でにっとわらった顔が、ふるいつきたいほど色っぽい。
「へえ、あっしになんか御用で」
待てば海路の日和というやつだ。向こうからきっかけをつけてくれたのはありがたいと、虎吉はいそいそと肩を並べていく。
「おまえはなんという名か」
「虎吉っていいやす」
「なんとか小僧の虎吉というのか」
「御冗談で——。あっしはこう見えても橋場の彫虎で通っている彫り物師でさ」
「その彫り物師が、なんでわしの跡をつけるのだ」
「御冗談で——」
「ふうむ。では、冗談に神田明神からわしの跡を追っているのか」
なんだ、知っていたのかと、虎吉は思わず苦笑して、そうなればかえって度胸がすわる。
「ごめんなさい、若だんな。じつは、あっしは若だんなを一目見るなり、その白い肌にほれちまいましてね、ああ、なんか彫ってみてえと思ったら、もうたまらなくなっちまったんでさ」
うそも方便だが、まんざらその気持ちがなかったでもない彫虎なのだ。
「わしは彫り物はきらいだ」
「そうかなあ。惜しいなあ。若だんなの肌は、きっとまるで女の肌みたいにきれいだと思うんですがねえ」
じろりと横目を使ってみたが、顔色ひとつ動かさず、
「わしは空腹になった。どこか飯屋へ案内してくれぬか」
と、意外なことをいい出す。そういえば、ちょうど中食どきなのだ。
「お安い御用で。——けど、まさかなわのれんてわけにもいかねえでしょうね」
「いや、そのなわのれんでいい」

「そうですかあ。もっとも、若だんなは先をいそぐ旅らしいから、わらじをぬぐのは面倒でしょう。今日はどこ泊まりのおつもりでござんす」
「行けるところまで行く」
「これからじゃ、せいぜい行って神奈川泊まりかな。若だんなは旅なれねえようだから、神奈川までは無理かな。すると、川崎泊まりだ」
「そうなるかな」
「お供はいねえんですか」
「うむ、一人だ」
「そいつは危ねえなあ。道中にゃ悪雲助だの、ごまのはえだの、悪いやつがたくさんいやすからねえ。だいいち、若だんなのようなお人柄の人が、一人じゃなにかと不自由だ。どうです、どうせあっしは遊んでいる体なんだから、若だんなのいいところまでお供いたしやしょうか」
一人ではなわのれんへさえはいれないようだから、親切ごかしに持ちかけてみた。
「そうだなあ」
案の定、百合太郎は頭からついてくるなとはいいきれないようだ。もうしめたと、虎吉は思った。
「とにかく、腹をこしらえやしょう。話はそれからだ」
芝口一丁目へはいって、目についた一膳飯屋へつれこむと、幸いいま客が立った後らしく、ほかに相客もいない、さっそくおやじに上の中食を二人前注文しておいて、
「若だんな、あっしはこの間にちょいと買い物をしてきやすから、膳がきたら先へ召しあがっていてください。すぐ帰ってきやす」
といいおいて飯屋を飛びだした。
百合太郎はまったく世間なれないらしく、きょとんとあたりを見まわしながらうなずいていたようである。
——あいつはどっかいいところの娘にちがいねえ。おもしろくなってきやがった。
どんな身分の娘でも、女は女だ。江戸を離れ

て旅まくらをかさね、うんと親切にしてやって相手がだんだん心細くなったところをうまくくどきおとす。なあに、油断しているところを押さえつけてしまえばそれまでの話だと、虎吉はたまらなく胸がはずんでくる。

買い物というのは、手甲、脚絆、わらじ、菅笠の旅支度だ。江戸というところは金さえあればなんでもすぐまにあってしまうから豪儀なところである。ついでに刀屋へ寄って、道中差しを一本買った。こいつがいちばん高いものについたが、仕事の元手だと思えば気にもならない。これですっかり旅支度はできたことになる。勇みたって刀屋を飛び出したとたんに、

「おい、ねこ、珍しいところで出会ったな」

のそりと前へ立ちふさがった、これも旅支度の大きな侍がある。

「あれえ、のらだんなかあ」

いつもなら見のがせないいい鴨なのだが、今日の虎吉はちょっとうんざりした。

指先の器用な虎吉は、一度浅草でこの男の紙入れを抜いたことがある。六尺近い大男で、見るからにのそりとしているから、てっきりうまくいったと思い、仲見世の人ごみをたくみに縫って逃げ、随神門のところまできて、もう大丈夫だろうとひょいと振りかえってみると、のそりとうしろに立ってわらっていた。ぎょっとして思わず首をすくめると、

「おまえ、きんちゃく切りはまだ素人のようだなあ」

と、べつに怒っているふうにも見えない。

「申しわけありやせん。ついでき心なんでして、だんな、これはおかえししやす」

すなおに紙入れをかえそうとすると、

「まあいい。わしは賭場というものが一度見物したいと思って出てきたのだ。おまえは賭場を知っているか」

「知っていやす」

「じゃ、わしをそこへ案内して、おまえその金でばくちというものをやって見せてくれ」

まったく変な男だった。すこし気味は悪かったが、紙入れの中には五両ほどはいっていたので、山ノ宿の賭場へつれていき、丁半をやってみせた。人の金でのんきにやるのだから、ふしぎと目が出て、五両がたちまち三十両ほどになった。

「だんな、これだけになりやしたぜ、だんなもひとつやってみやせんか」

「いや、わしは見ているだけでいい」

「そうですか。じゃ、もうひとかせぎしてみやしょう」

しかし、こんどは取られつづけて、こいつはいけねえ、こいつはいけねえと夢中になっているうちに、とうとうすっからかんになってしまった。

ぼんやり外へ出ると、もう九ツ（十二時）に近い。

「つまらねえことをしちまった。あの三十両になったとき、やめておきゃよかったんだ」

「そうか。わしはおもしろかった。しかし、腹がすいたなあ。夜鷹そばでも食っていくか」

「あっしは、だんな、もう文なしですぜ」

「いや、武士のたしなみだから、そのくらいは用意している」

「失礼ですが、だんなはなんとおっしゃるんで」

「のら太郎というんだ」

「御冗談で——御直参のようでござんすね」

それも相当の家柄ののら息子と見ていた。

「おまえはなんというのだ」

「橋場の虎吉、彫虎っていう彫り物師です」

「おまえの腕じゃとらは彫れまい。せいぜいねこぐらいなものだろう」

そんな憎まれ口をきいて、雷門のそばで夜鷹そばを食ってわかれた。ついこの正月のことである。

そののら太郎だんなにばったりぶつかってしまったのである。が、今日はこんなだんなの相

手はしていられない。こっちにはもっとすばらしい鴨が待っているのだ。

「だんな、あっしはいそぎやすから、今日は賭場のお相手はできやせん。ごめんなすって」

かまわずさっさと歩きだすと、

「おまえ、旅支度だなあ。どこへ行くんだ」

と、のんびり肩をならべてくる。

「ちょいとやぼ用がございんしてね」

「東海道か――？」

「へえ、まあ、その辺でございんす」

「わしも東海道へ出る」

「なあるほど、だんなも旅支度ですねえ」

こいつはいけねえと、うんざりした。なるべく人に百合太郎は見せたくないし、いっしょに行こうなどと言いだされては、それこそ仕事のじゃまだ。

「だんな、あっしはまだ中食前なんで、ちょいと飯を食ってすぐ追いつきやすから、一歩お先へおいでなすって」

「いや、わしもまだ飯前だ、いっしょに食おう」

「そいつはいけやせん。あっしなんかがはいるのは、どうせなわのれんでさ。だんなの御身分にさわりやす」

虎吉は百合太郎を待たせてあるなわのれんを横目で見ながら、往来のまん中へ立ちどまってしまった。

「おまえ、わしの身分を知っているのか」

のら太郎はふしぎそうな顔をする。

ぽんつくめ、そんなことはどっちだっていいんだと、虎吉はじりじりしながら、

「わかってまさ。だんなはお旗本ののら息子、いいえ、のら太郎さんでしょう。ああ、そうか、あんまり道楽がすぎたんで、勘当されたんですね。しようがねえなあ、だんなはすこし物好きすぎやすからね。――とにかく、あっしはいそぎやす。ごめんなすって」

と、むりにわかれようとする。

「飯を食うのに、そういそぐこともなかろう。おかしなやつだ」

のら太郎はわらいながら、かまわずそのなわのれんのほうへ歩き出す。

「いけねえよう、だんな。そこはいけねえんだ」

虎吉はあわてた。

「なぜいかんな」

「そこは高くて、ばかにきたねえんだ」

「そうか。おまえがいやなら、ほかへ行ってもいい」

「意地が悪いねえ、だんなは。どうしてもあっしを放さねえ気ですか」

「べつにそんなことはない。わしといっしょが迷惑なら、おまえ一人で勝手にどこへでも行け。とにかく、わしはあそこで腹ごしらえをしていく」

のら太郎はあっさり言って、のこのこともうそのなわのれんの油障子の前に立つ。

――ちくしょう、勝手にしやがれ。

虎吉がそのたくましいうしろ姿をにらみつけているうちに、のら太郎はがらりと障子をあけ、

――はたして、おやというように百合太郎のほうを見たが、

「やあ、失礼――」

ずうずうしくもそう声をかけて、さっさと百合太郎のまん前の空き樽へ腰をおろした。

ちょうど飯を食べかけていた百合太郎は、行儀よく目を伏せたまま、この無作法者を怒ったのか、ぽっとほおを赤らめたようである。

高輪の大木戸

「若だんな、ただいま帰りやした」

虎吉はのら太郎にはかまわず、心安そうに百合太郎のそばへ行って、

「御飯がすんだらすぐ出かけやしょう。ここからだと川崎まで三里半、ひょっとするともう一丁場のして、神奈川泊まりにできるかもしれやせん」

と誘ってみた。どうせのらだんなはこれから

飯を注文して食うのだ。その間にこっちは飯を抜きにして、百合太郎をつれ出してしまおうというずるい腹だ。

食事中の百合太郎は黙ってうなずく。

――しめた。ざまあ見やがれ。

虎吉は得意だったが、さてそうきまってみると、目の前にちゃんと出ている自分の膳が気になって、すきっ腹だからぐうっと鳴りだす。が、こいつに手をつけてしまうと、出発がそれだけおくれてしまうのだ。

さいわい百合太郎はまもなく飯をおわって、食後の茶を喫しはじめる。

「若だんな、おすみになりやしたね。おい、おやじ、勘定してくんな」

虎吉はいそがしい。

「おや、御家来さんはお膳を召しあがらないんで」

飯屋の亭主が手のつかない膳を見て、へんな顔をする。

「うむ、おれはちょっと腹具合いが悪いんでね。けど、勘定は二人前払うぜ」

財布の中の銭をつかみ出していると、それまでこっちばかり見てにやにやわらっていたのら太郎だんなが、じつは百合太郎の食事のおわるのを待っていたらしく、

「貴公、妙なところで出会いましたな。まさか野良太郎の顔をお見忘れではないと思うが」

と、なれなれしく話しかけた。

「野良太郎――？　知らんなあ。なにか人違いじゃないかね。わしは新宮百合太郎というものだが」

百合太郎はいぶかしそうに目をみはる。ふるいつきたいような涼しいまなざしだ。

「そうですかなあ。わしのほうは、たしかにその百合太郎さんを知っているんだが」

「そんなはずはない。わしは貴公の顔をはじめて見るんだから、やっぱり人違いだろう」

「まあ、よろしい。話せばそのうちにだんだんわかってくることだ。百合太郎さんはどこへお出かけかな」

こんどは答えずに、まじまじとのら太郎の顔をながめている。

「若だんな、さあ、出かけやしょう。なにも知らないだんなの顔を、むりに思い出さなくたってようございます。こっちはいそぎの旅でございますからね」

虎吉がそばからせかせかとせきたてる。

「うむ、出かけるかな。――では、失礼」

百合太郎は旅笠を手にして、すなおに立ちあがる。ざまあ見やがれと、彫虎はまたしてもうれしくなって、

「じゃ、のらだんな、お先へごめんなすって」

と、逃げるように先に立って表へ飛び出す。

万事これで思うつぼだと、ひそかにほくそえんでいると、百合太郎のすぐ後につづいて、のらだんながのそりと出てきた。

「あれえ、だんなは飯を食わねえんですか」

「うむ。百合太郎さんに少し話があるんでな」

「くどいねえ、だんなも。若だんなはおまえさんを知らないといっていなさるんだ。なにもそうしつっこくついてこなくたっていいじゃありませんか。おかしな人だな」

「まあいい、ねこは黙って後へさがっておれ。百合太郎うじ、まいろう」

のらだんなは百合太郎をうながして、さっさと品川のほうへ歩きだす。百合太郎もしいてこばもうとはせず、黙って肩を並べている。

――ちくしょう、どうしてくれようかなあ。あんなに肩をならべやがって、もしあののら太郎に女くさいにおいでも感づかれた日にゃ、もう離れっこありゃしねえぞ。

虎吉は気が気ではない。

「貴公はいまあの男をねこと呼んだが、前からの知り合いかね」

百合太郎は少し歩いてから、思い出したようにのら太郎に聞いた。

「知っています。あれは橋場の彫り物師で虎吉、彫虎というやくざ者で、当人は悪党ぶっているが、なあに、大したことのできる男じゃない。とらを彫ってもねこにしか見えない半端なやつだから、わしは猫吉と呼ぶことにしている」

「あ、その猫吉か、わしはまたねこをかぶるのがうまいほうの猫吉かと思った」

百合太郎は笠の中で明るくわらった。

——ぬかしやがったな、ちくしょう。いまにおれがねこをぬいだらどんな大とらになるか、二人とも見ているがいいんだ。

虎吉は腹の中でせせらわらいながら、わざと知らんふりをしている。

「ねことはどこから道づれになりましたな」

こんどはのら太郎がのんびりと聞く。

「べつに道づれになったわけじゃない。今朝からわしの跡を勝手につけているんだ」

「すると、貴公の重い紙入れをねらっているとみえる」

「そうかもしれないな。急に途中であんな旅支度までしてついてくるところをみると、ただの物好きじゃない」

百合太郎はいっこう平気のようだ。

これはたいしたもんだと、のら太郎はひそかに感心した。

しかも、のら太郎にはもうちゃんと百合太郎が何者か見当がついているが、百合太郎のほうはおそらくこっちがだれかまだわかっていないはずである。そんな男にこうして肩を並べられて、いまだ探りひとつ入れてこようとしない。こっちが黙っていれば、いつまでも黙って歩いている。

——つまり、猫吉なみに扱われているのかもしれない。

そうも気がついたが、べつに腹は立たないのら太郎だった。どうせいつかは聞かずにはいられなくなるのだからと、こっちものんきに構えていると、はたして高輪海岸へかかってきてから、

「貴公はどこへ行くのかね」

と、さりげなく聞いてきた。

「わしは貴公の行くところへ行くつもりだ」

「ふうむ。わしの行くところを知っているのかね」

「たぶん、知っていると思いますな」

「ふうむ」

まだ驚いたふうなどは気ぶりにも見せず、

「だれかにたのまれたのかね」

と、さすがに頭はよく働くようだ。

「さよう。ある人が、ある目的で、あるところへ行く。一人では心もとないから、見てやってくれぬかと、その人の兄貴にたのまれましてな」

隠す必要はないから、のら太郎は正直に白状する。

「そんな心配はいらなかったになあ」

話はすっかり通じた様子だが、百合太郎は至極冷淡で、礼一言いおうとしない。もっとも、敵の多い百合太郎なのだから、そんなことをいっても油断できるものかと考えているのかもしれない。

敵か味方かは今ここでいわなくても、やがて自然にわかってくることだから、のら太郎もそれ以上説明はせず、

「まあ、旅は道づれということもあるから、行くところまで行ってみましょう」

と、あっさり出ておく。

「若だんな、若だんな、旅の道づれはのらだんなよりあっしのほうが先なんだから、忘れないでおくんなさいよ」

虎吉がぬけぬけと百合太郎の左へしゃしゃり出てきた。

「ねこ、情けない声だなあ」

のら太郎がからかうと、

「あっしはまだ昼飯ぬきですからね。そういうだんな、だんなもぬきのほうだったが、腹はすきやせんか」

と、同情するようなことをいう。
「多少すかんでもないな」
「どうせ、こうやってだんなといっしょになるんなら、あそこでゆっくりいっしょに昼飯を食ってきてもよかったんでさ」
「愚痴をいうな。旅は憂いものつらいものと相場のきまったものだ。それがいやなら、むりに道づれにならなくてもいい」
「おたがいにねえ」
負けてはいない虎吉である。
高輪海岸八町をすぎようとするところに大木戸がある。そこを出たとたん、海端の掛け茶屋から、いずれもかいがいしい旅姿の若侍が三人、ばらばらと走りでてきて、
「おお、若さま、もうおいでの時分だろうと、お待ちいたしておりました」
と、百合太郎の前へ丁重に小腰をかがめた。
時刻はやがて八ツ（二時）すぎである。

追跡

「おまえたち、どうしたのだ」
百合太郎はちらっと意外そうな顔を見せたが、すぐに落ち着いて聞いた。
「その御不審ごもっともでございますが、われら三人、殿さまの御内命をうけまして、若さまのお供をいたすため、ここにお待ちしておりました。なにとぞ御安心のうえ、お召しつれ願います」
「ふうむ」
百合太郎は黙って三人の顔を見ている。
「もっとも、殿さまおおせには、若さまたって御迷惑とあれば、陰供つかまつれとの御意もうけたまわっております。いかがいたしましょうか」
一人が声をひそめていう。
「そうか。では、いっしょに行こう」
百合太郎は動ぜぬ顔色で、あっさりうなずいた。その間に、別の一人が、

「貴公たち二人はどうしたのかね」
と、一足うしろにさがって待っているのら太郎と虎吉の方をうさんくさそうににらむ。
「われわれは若だんなと新橋から道づれになった者です。べつに怪しい者ではありません」
のら太郎が人のいい顔をして答えた。
「さようか。それは御苦労であった。このお方さまは少し子細あって、ここからはわれわれがお供をすることになっている。貴公たちはかまわず引き取っていただきたい」
「そんな手ってあるもんか」
虎吉が不平そうにしゃしゃり出ようとすると、
「黙れ。無礼を申すと手は見せんぞ」
若侍の顔が急にけわしくなる。
「だんな、なんとかいってくださいよ。だんな」
虎吉はこそこそとのら太郎のうしろへかくれながら、あきらめきれないように腰を小突いている。
「百合太郎さん、どうしたものかなあ」
のら太郎はぽかんと百合太郎の顔を見た。
「そうだなあ、貴公たちは腹がすいているんだから、まあ、飯でも食って、それからゆっくり相談するほうがいいだろう」
あいかわらず冷淡な百合太郎で、
「一同、行くぞ」
もうさっさと品川のほうへ歩きだす。三人の若侍は、引きそうようについていく。
「けっ、これじゃまるでとんびに油揚げじゃねえか」
虎吉はまったくいまいましかった。
「だんな、おまえさんは案外たよりになりやせんね」
ついのら太郎に食ってかからずにはいられない。
「まあ、そう怒るな。とにかく飯を食ってからのことにしよう。急に腹がすいてきた」
のら太郎は相手にもせず、いま三人の家来ど

もが出てきた掛け茶屋へのことはいっていく。

——ははあ、こうあきらめがいいようじゃ、このからだんなはまだあの鴨が女だとは気がついていないんだな。

そう思うにつけても、よし、おれはあきらめてたまるもんか、いそいで腹ごしらえして後を追ってやろうと、虎吉は思い直してのら太郎の後を追う。

「いらっしゃいまし。奥の見晴らしのいいところがすいております」

赤い前垂れをかけた愛想のいい女中に迎えられて、のら太郎は海端の床几へ行って腰をおろし、

「ねえさん、なんでもいいから、飯を食わせてくれぬか」

と、のんきな注文をしている。

「二人前だよ、ねえさん。大いそぎだ。早いとこたのむぜ。いそぎの旅なんだからな」

そばから虎吉がせかせかといい足す。

「なんだ、おまえどうしてもあの男の後を追いかける気か」

「だんなは——？」

「わしはおなじ道だからな、追うも追わぬもない」

けろりとしてわらっている。

「だんなはまえにほんとうにあの若だんなに会ったことがあるんですかえ」

「いや、会うのははじめてだ」

「へえ、ずうずうしいな、だんなも。じゃ、なんだってさっき汐留の飯屋で、あんないいがかりをつけたんです」

「ねこはどこからあの男の跡をつけているんだね」

「神田明神の境内からでさ。そうそう、だんなはあの若だんながすごい剣術の名人だってことを知っていやすか」

「剣術の名人——？」

「そんな顔をするところを見ると、知らないんだね。あの若だんなはなにか明神さまへ一生懸命願がけをしてから、神田お玉ガ池の千葉の道場へ乗りこんだんですぜ」

「ふうむ」

のら太郎はあきれたような顔をする。

「なにしろ、天下名題の大道場でさ。そこへ行って、自分は面も籠手もつけねえで、短い木剣を持ちましてね、むこうはちゃんと道具をつけたやつと他流試合をやったんでさ。千葉周作先生の見ている前でね」

「あきれたもんだなあ」

「だれだってあきれるでしょう。竹刀だって、素面素籠手のところを力いっぱいやられりゃけがをしまさ。そいつを平気で短い木剣でかかって、一人は籠手を取って負かした。つぎのとは勝負がつかなくて引きわけなんだが、その相手っていうのが、千葉の道場でも一番か二番かっていう庄司弁吉先生なんですぜ。まあ、だんな、悪いことはいわねえから、あの若だんなにだけは変なちょっかいは出さねえほうがようござんすぜ」

「ふうむ、そんなに強いのかねえ」

のら太郎はすっかり感心しているようだ。

「一体、だんなはあの若だんなのなにをねらっているんです」

虎吉はちょっと探りを入れてみる。

「ねこはなにをねらっているんだ」

じろりと顔を見ながら逆襲してきた。

「御冗談で——。あっしはなにもねらうだなんて、そんな、そんなんじゃありやせんや。ただ、あっしはこう見えても彫り物師だ。あの若だんなの肌を一目見るなり、どうかしてあのすばらしい肌へ、とらを、その大とらをね」

「よせよせ、あの肌へねこなどはもったいない」

「すると、するともしや、だんなもあの肌をねらって——」

「おれは彫り物師じゃない」

ふん、あの肌に気がつかねえようじゃ、やっぱり女とは知らねえんだなと、虎吉は安心して、
「けど、だんな、今の若侍たちはなんなんでげしょうね。変なことをいってやしたぜ、殿さまだとか、御内命だとか」
と、こんどはそっちが気になってくる。
「あの三人は悪党の一味だ」
ずばりとのら太郎がいう。
「な、なんですって、悪党の一味――？」
「たぶん、そうだろう」
「その、その悪党の一味が、あの若だんなになにをしようっていうんでげす」
「さあ、はっきりしたことはわからんが、いまの話の様子から察するに、百合太郎ってのはただの若だんなではなく、どこか大名の若殿か、御一門のせがれか、とにかく身分の高い出なんだな」
「へえ、若殿さまね。そういえば、やつらは若さまと呼んでいやした」
「それがたった一人で屋敷をぬけ出して国もとへ行く。なにか命がけで果たさなくてはならない大切な目的を持っている。だから、まず神田明神の社前へぬかずいて、心願をかけた。その足でお玉ガ池の道場へまわって腕試しをやったのは、自分の腕ひとつで大事が果たせるかどうか、自分の力をためしてみたんだろう」
「なるほど」
「悪人のほうでは早くもそれと感づいて、若殿に国もとへ乗りこまれては困る、途中でひそかに殺してしまえというので、あの三人が刺客に選ばれ、あそこへ先まわりをして待っていたんだ」
「ほんとうかね、だんな。さっきだんなは百合太郎さんと歩いてるとき、なにかそんな話をしていたんかね」
半信半疑の虎吉である。
「ねこ、あの若侍三人は悪人の一味だけに強そうだぞ。それに、人を切ることなどなんとも思っていないやつらだ。まあ、あの肌へねこを彫りたいなんてだいそれた野心はやめて、ここから江戸へ帰ったほうが身のためということになりそうだな」
「だんな、すると三人のやつらは、若殿さまの肌を知ってるってことになりやせんかねえ」
思わず出た言葉だった。
「知っているかもしれんな。やつらもおそらくあの肌へねこが彫りたいのかもしれぬ」
「いけねえ。だんな、あっしは失礼しやす」
「あわてて、どこへ行くんだ」
「教えてやるんでさ。この三人は悪党だから、お気をつけなさいって、百合太郎さんにね。間違いがあってからじゃ、取りかえしがつかねえ」
「そんなことは、おまえが教えてやらなくても、若だんなはもうちゃんと知っているだろう」
「そうかなあ。けど、だんな、あのぶんじゃ、どうも今夜はいっしょの旅籠だ。うっかり寝こんでいるところへ、三人に踏んごまれた日にゃ、いくら若だんなが剣術の名人だって、ねこにされちまう、やっぱりあっしは失礼しやす」
「飯は食わなくてもいいのか」
「ああ、そうか。そういや腹がすいて目がまわりそうだ」
「そうれ見ろ。腹がすいては戦ができぬということもある。どうせ今夜の泊まりは神奈川あたりだ。ゆっくりと飯を食ってから追っても十分まにあう」
のらだんなには、ちゃんと成算があるようだ。
――変だなあ。すると、のらだんなもあれが女だってことを感づいてはいるんかな。
だんだんわからなくなってくる虎吉だ。

腕くらべ

高輪の大木戸で百合太郎を待っていたのは、丹波笹山の藩士で、大西倉之助、北沢佐久馬、今井新兵衛の三人であった。
三人はむろん、百合太郎が当主松平志摩守の妹、百合姫であることを知っている。

笹山十万石の国もとは、この十年来、国家老鬼頭左馬之介が実権を握っていて、当主といえども頭があがらなかった。左馬之介は、松平家が東照宮から拝領している菊一文字の短刀を、江戸の宝庫からいつのまにか持ち出して、国もとへ持って帰り、いざとなるとこれを種にして主君を脅迫し、強引に我意を押しきるのだ。

諸侯にとって拝領物紛失の罪は重く、とくに家康からのものは家名の興廃にさえかかわるのである。

左馬之介はその拝領物で主君を脅迫しながら、そのまに国もとの富豪七家衆と結託して、領民の膏血をしぼり、三年前に一揆さえおこって、松平家は公儀から譴責されている。先君はそのために病を得て倒れたといってもいい。

当主志摩守も、ただ一つその拝領物を取りかえさぬかぎり、藩政をどう改革することもできない立場にあった。しかも、一藩の家来はこの十年の間にほとんど鬼頭組に血判荷担し、荷担せぬ者はいつのまにか葬られて、目こぼしになっているのは無能の士ばかりだから、当主のたよりになる味方は一人もなかった。

そういう国もとへ、当主の妹君が男装までして、だいたんにもひそかに一人で旅立つ。その目的はだれにもすぐ想像がつく。

百合姫は今年十八歳で、四年前にすでに縁組みの話があったが、当人が承知せず、ちょうど国もとに一揆があり、先代が病没した年でもあったので、そのままになり、今日まで本郷の下屋敷にくらしてきた。姫君の身で、女ひとりの遊芸ごとより馬を乗りまわすほうが好きで、これまでもよく男装をしては、ひそかに遠乗りをたのしんでいたというかわり種である。

「新兵衛、やっぱり本当だったな」

今井新兵衛と肩を並べていく北沢佐久馬が、前をあごでしゃくりながら小声でささやいた。

やがて大森へかかろうとするあたりで、三間ばかり前を、百合太郎と大西倉之助が肩をならべていく。

「うむ、わしもまさかと思ったが、こうなってみると、御老職はさすがに目が高い」

「いや、隠密がはいっているのは、本郷の下屋敷ばかりじゃない。これはというところへは、たいてい御老職の目が光っている。それを知らずに、うまくこっちを出しぬいたと思っているのは、かわっているといっても、やっぱり娘っこは娘っこだ」

にやりとして、あわててそのわらいを消す佐久馬だ。

「しかし、殿さまの御内意ってやつを、百合太郎さまは本当にしているかなあ」

「むろん、半信半疑ってところだろうな。それを顔色にも出さないのは、なかなかいい度胸さ」

「で、これからのわれわれの仕事は――」

「まず百合太郎さまの本心を聞き出せというんだ。こいつはちょっとむずかしいだろう」

「本心を聞き出して、どうするんだね」

「すぐ国もとの御家老に知らせる。あらためて命令がくる」

「もし本心が聞き出せなかったら」

「そこが腕さ。三人のうちで、だれがいちばん百合太郎さまに早く信用されるか、――信用されたものが本心を打ちあけられる」

「なるほど――」

新兵衛はちょっと考えてから、

「佐久馬、女を信用させるのは、ものにするのがいちばん早い。くどいてもいいのかね」

と、冗談のように目を光らせる。

「くどいちゃいかん。いやしくも相手は姫君さまだからな。しかし、あちらがどうしてもそなたでなければということにでもなれば、これはやむをえんな。そこは男と女だからな」

「本当か、佐久馬」

「おれに聞いてもしようがない。そうなるのが目的ではなく、本心を聞くのが目的なんだが、なにしろ長い旅だし、遠くて近きはなんとやら

でな、できてしまったことはどうにもならん」
「大西もその気なのか」
「まあな。仲間はずれにするのはかわいそうだから教えるが、第一日は大西、二日めが拙者、三日めが貴公、いいか、自分の番のときにものにしたほうが勝ちなんだ。お相手役でない日は、なるべくお相手役のじゃまはしない、都合によっては協力する、そういう約束なんだ」
「おもしろい」
ぽんと新兵衛がひざを打つ。
「大きな声を出すな、きこえる。その代わりな、新兵衛、相手は男まさりの百合太郎さまだぞ、一つ間違うとお手討ちだ。そんな時があっても、ほかの者はけっして命ごいなどせぬことになっているんだから、そのつもりでいろよ」
「わかっている。まあ、おれの腕を見ていてくれ」
「おたがいさまにな」
二人はちょっと不敵な顔を見合わせて、じつはそのときから敵と味方になったようなものだった。
「それはそうと、さっきの二人な」
思い出したように新兵衛がいいだす。
「うむ、一人は浪人者、一人はやくざ、江戸は生き馬の目を抜くところだからな」
「まさか、女とまでは気がついちゃいないだろうな」
「そんなことはあるまい。百合太郎さまの男装は、どうして板についている。やつらの目的は重いふところさ」
「それにしても、ひょっとするとつきまとうかもしれんぞ」
「なあに、あんなやつらは、あんまりうるさければたたっきってしまうだけのことだ」
「それもそうだな」
「おれは、それより、大西のほうが気になる」
佐久馬が思わず本音をもらす。
道は大森から蒲田へかかって、百合太郎は正

面をきって歩いているが、大西はしきりになにか話しかけて、ときどき肩へ寄りそうようなまねさえしている。気になるのは、大西の肩がふれても、百合太郎はいっこうよけようともしていないことだ。
そのすらっと均斉のとれたうしろ姿が、肉づき美しく、女とわかっている目にはたまらない魅力である。
「おれの番は明後日か」
新兵衛はため息をつくようにいった。

川崎の宿

百合太郎の一行が品川から二里半、川崎の宿へはいったのは、まだ暮れ六ツ（午後六時）には間のある明るい夕方であった。
むりをすればもう一丁場のばして神奈川まで二里半歩いても、男の足なら宵には着ける。
が、男装をして当人は男のように振る舞っていても、百合太郎は姫君だ。しかも、初旅ではあるし、このうえ二里半歩くのはむりだろうと思ったので、
「若さま、今日は川崎泊まりにいたしますか」
と、その日の当番役大西倉之助は、気をきかせて聞いてみた。
「そうだな。その方にまかせる」
あっさり答える百合太郎だ。
「では、ここ泊まりということにいたしましょう。長い旅ですから、はじめから足を疲らせてはいけません」
大西は真心こめていう。その日の当番役は、腕しだいで百合太郎をわが物にしてもいいという約束なのだから、ここが親切の見せどころなのだ。
さっきから百合太郎といっしょに歩いて、あれこれと話しながらきたが、百合太郎は少しもこっちを疑っているふうはない。なんでも気さくに答えて、安心しきっているようなところさえある。だから、今も、その方にまかせると、あ

っさり返事をしたので、
——しめたぞ。
と、大西は内心ぞくりとした。
いくら気性が強いとはいっても、女はやっぱり女だ。一人旅は心細いにちがいない。だれかたよりになる道づれをと思っているところへ、殿よりの御内命ですという口実で家来が三人あらわれたのだ。見ず知らずの赤の他人よりも、このほうが信用できる。
——しかも、三人のうちでは、おれがいちばん腕も立つし、男前だって悪くはない。
それに、いちばん先に親切にしているんだから、たのもしく思うのは当然だろう。仕事はいよいよこれからだ。
待てよと、大西は思う。女をものにするのは、ただ親切だけではだめだ。一押し、二押しということがある。明日は番を北沢にゆずらなければならないのだから、今のうちにはっきりと、おれという男を植えつけておく必要がある。

「若さま、人の前でいうのは変ですから、ここで誓っておきますが、拙者は、かならず若さまに忠義をつくします。この道中で拙者がどんなに若さまのお役に立つか、どうぞ見ていてください」
「そうか。なにぶんたのむ」
「御安心くださいませ。拙者は断じて水火をも辞しません」
百合太郎がうなずくのを見て、これでいいと大西は安心した。この分では、明日は北沢の番だが、やっぱりおれと歩きたいといいだすかもしれない。いや、ぜひそういいだすように信用を取っておかなくてはならぬと、かたい決心をした。だから、金沢屋という旅籠へ着くと、
「若さま、拙者がおぬがせいたします」
と、大西はいきなり百合太郎の足元へしゃがみこんで、まめまめしくわらじのひもを解いてやった。
北沢と今井とが、うらやましそうに横目で見

ている。が、今日一日はなにをする権利も二人にはないのだから、うらやめうらやめである。
まだ泊まり客が旅籠につくには少し早い時刻なので、四人は奥まった二間つづきの上座敷へ案内された。
——こっちの間へ二人寝て、あっちの間へ二人寝ることになるんだな。
むろん、おれは若さまとまくらをならべて寝る権利があるんだと、大西はひそかにほくそえまずにはいられない。
「若さま、お疲れだったでございましょう」
火ばちの前へきちんとすわった百合太郎の前へ行って、まずあいさつをする。
「いや、それほどでもない」
にっとわらった百合太郎の美少年ぶりには、まったくふるいつきたいものがある。
「お疲れさまでございます」
北沢と今井がおそまきながらあいさつにきた。

「両人、御苦労だったな」
泰然と答えて、こんどはわらわない。やっぱり違うぞと、大西はうれしかった。
女中がつぎの間へどてらを運んできて、
「あの、おふろがわいておりますから」
と告げ、百合太郎の顔に見とれながら、赤くなって下がっていった。
「お着がえになりますか、若さま」
「いや、わしはこのままでいい」
さすがに男の前では帯は解きたくないのだろう。しかし、寝るときには着のみ着のままというわけにはいかないから、いやでも帯を解かなくてはならない。そのときは、こっちの座敷でもう二人きりだと、大西はたのしい。
「では、われわれは失礼して——」
北沢と今井はつまらなそうに立って、つぎの間でどてらに着かえはじめる。
「おふろはどうなさいます」
わざと小声で聞いてみた。赤くなる顔がちょ

っと見たかったのである。
「そうだな」
百合太郎は考えるようにしてから、
「ほこりになった。ひとふろあびてまいろうか」
と、意外なことをいう。
「おふろへ、あの、おふろへおはいりなさいますので」
大西はわが耳を疑いながら、びっくりして聞きかえす。
つぎの間の二人も、思わず顔を見合わせているようだ。
「ふろへはいっては悪いか」
「いいえ、それはかまいませんが、裸に、お裸になりませんと、ふろへははいれませんが」
「それはむろんぬぐ。供をせい」
百合太郎はわらいながら立ちあがった。
「はっ」
ああそうか、まだほかに客もないようである。家来たちならかまわないから、今のうちに汗を流しておこうというのだろうと大西は考えて、ふらふらっと立ちあがった。
「大西、——大西」
北沢があわてて呼び止める。
「なんだ」
「われわれも、われわれもお供をしていいんだろ」
なんとなく目をつりあげている。
「いかんいかん。今日はおれの当番だ。それに、みんなで座敷をあけては、だいいち物騒だ」
「そうかなあ。しかし、留守番なら一人残ればよかろう。じゃんけんで、われわれの中から一人——」
「いかん、絶対にいかん、当番の権利だ。そういう約束なんだからしようがない」
「そうかなあ」
ぼかんとため息をついている二人を残して、大西は夢中で百合太郎の後を追う。
——もうこっちのものだ。とにかく、ふろへ

いっしょにはいろうっていうんだからな。
おれにだけは女の肌まで見せても悔いない気持ちなのだと思うと、大西は有頂天にならざるをえない。もう北沢や今井など問題ではないのである。
「おい、ふろ場はどこだ」
からすの行水で、まごまごしているまに、もうあがりましたでは一大事だから、廊下で出会った女中をつかまえてかみつくように聞くと、
「これを突きあたって、右へ行ったところです」
と、妙に後じさりをしながら教えてくれた。
走るように教えられた廊下を右へ折れると、百合太郎はふろの戸の前に立って、ちゃんと待っている。
「これはこれは、お待ちになっていてくれたのですか」
「うむ。その方はここに立って、しばらく待っていてくれ」
「はあ」
「人を入れてはならん。しかと申しつけたぞ」
百合太郎は念を押しておいて、戸をあけ、一人で中へはいって、ぴしゃりと板戸をしめきってしまった。
——なあんだ。おれはただの番犬だったのか。
よろこびが大きかっただけに、がっかりもまた大きかった。
しかし、考えてみると、裸になれば女になる若さまなのだから、番人なしではふろへははいれない。その大切な番人をいいつけられたのだから、よほど信用されていることだけはたしかだ。
道中はまだ長い。けっして悲観する必要はない。
大西はそう思いなおして、ごくりと生つばをのみこんだ。
板戸一重の脱衣場で、たしかにきぬずれの音がする。いま着物をぬいでいるのだ。
まだ、夕方の明るい光の中にさらされた姫君

の素肌が、いやでも白々とまぶたにうかびあがってくる。むっちりとした乳房、女にしては大柄で肉づきのいいほうだから、腕も脚ものびのびとして、それはすばらしい処女の裸身にちがいない。

——湯の音がするぞ。

いよいよ、はいったにちがいない。

待てよ、一押し二押しということがある。お背中を流しましょうといって、かまわずはいっていく、こっちは親切ですることなのだから、無礼なと怒ったら、申しわけありませんとあやまって、おとなしく引きさがるだけのことだ。

いくら無礼なと怒ったところで、むこうは裸なのだから、そう急に肌はかくせない。すばらしい裸身を見るだけ得だ。それに、ぬれぬうちこそ露をもいとえで、一度裸を見られてしまえば、それが弱みになって、もう仕方がないと、それだけあきらめが早くなる可能性もある。

これがふつうの姫君なら、後が怖いということもあるが、どうせ一人で旅に出ているのだし、生かすも殺すもわれわれ三人にまかされているような身のうえなのだ。

——かまわん。一押し二押しで行け。

大西は度胸をすえ、大きく深呼吸を一つして、がらりとふろ場の板戸をあけた。

「若さま、お背中を——」

目は輝くばかりの裸身を見ると思いきや、百合太郎は着物はぬがず、ただ湯で顔を洗って、ついでに襟を少しひろげながら、立って首筋をぬぐっているところだ。それでも、くつろげた胸にしっかりと乳房をまいたさらしの白さが目にしみて、

「大西、ついでだから、ちょっと背中をふいてくれ」

意外にも百合太郎はべつに怒りもせず、手のぬれ手ぬぐいをこっちへ差し出す。

「はっ」

感激しながら、思わずふらふらっと前へ進んだとたん、

「えいっ」

だっと強烈な当て身がみぞおちへきた。

「ううっ」

やられたと思ったときには、もう目の前が真っ暗になって、大西はたわいなくがくんとそこへ両ひざを突いている。

追いかけ道中

「大西、しっかりしろ」

「倉之助——」

どこか遠いところで自分を呼んでいる。

——はてな。

きょとんと大西は目をあけた。

「どうした、気がついたか」

「しっかりせい」

前から北沢が顔をのぞきこみ、自分は両足を投げ出して、だらしなくうしろから今井に抱きおこされているようだ。みぞおちが痛い。顔からしずくが垂れている。

「ここは、ここはどこだ」

われながら情けない声である。

「ここはふろ場だ」

「貴公がふろ場でてんかんをおこしているから早く見てやるようにと若さまがおっしゃるんで、いそいで二人で飛んできてみたんだ」

はっと大西はわれにかえり、やられたと思った。ちらっと百合太郎の胸にまいたさらしがまぶたをかすめ、甘いような女の肌のにおいが、まだはっきりと鼻に残っている。

「若さま、怒っていなかったか」

なによりもそれが心配である。

「いや、べつに怒ってはおらん。持病が出たのだろう、かわいそうだから早く行ってやれと、心配している」

ちくしょうと大西は思ったが、まさか当て身をくったとは二人にいいたくない。

「そうか。じつは、若さまが着物をぬがせろと

おっしゃるんでな、帯をお解きしているうちに、ふらふらっときてしまったんだ」
「ふうむ。肌を、肌を見たのか」
「そりゃ、帯を解けば、いやでも目にはいるさ」
「なるほど、それで罰があたって、目がくらんだんだな」
にやりと北沢がわらう。
「しかし、どこへみぞおちをぶつけたんだ。こぶし大のあざがついているぞ」
後から今井が、わざと胸をはだけてみせようとする。
「大きなお世話だ」
大西はあわててその手を払いのけて立ちあがった。
「貴公たち、若さまを一人でおいちゃいかんじゃないか」
せめてものしっぺ返しだ。
「こいつは、うっかりしていた。行こう、今井」
北沢がまっさきに飛び出しながら、ふっと気がついたように振りかえり、
「大西、当番はおれがゆずりうけたぞ」
またしてもにやりとわらって、さっさと走り去る。
「倉さん、正直なことをいえよ。貴公、どうして若さまに当て身などくらったんだ。まさか、いどみかかったんじゃなかろうな」
今井が心配そうに聞く。
「そんなことをするもんか。こっちはただ忠義のつもりで、お背中を流しましょうといっただけのことだ」
「じゃ、若さまの前へ出られるんだな。おわびをすればすむ程度だな」
「うむ、わしはそう悪いことをしたおぼえはないんだ」
「よし、じゃいっしょに行け」
座敷へもどってみると、北沢佐久馬が一人でうろうろしながら、
「若さまの姿が見えん。大小もないんだ」

と、顔色をかえている。
「まさか、則(かや)じゃないだろうな」
「大小をさして則へ行くやつがあるか。早く番頭に聞いてみろ」
三人は一度に廊下を走りだした。
そのころ——。
のらだんなと橋場の虎吉は、六郷の渡しをわたって、やっと川崎の宿へはいってきた。
「ねえ、だんな、まさかやつらはここ泊まりじゃないでしょうね。あっしは、どうしても神奈川泊まりとにらんでいるんだが」
いまにも駆け出したそうな虎吉だ。
「まあ、そうあわてるな。一軒一軒旅籠(はたご)屋を聞いていけば、どこへとまったかすぐ知れることだ」
「そういやそんなもんだが、だんなはどうしてそう落ち着いているんでげす。もう少しとっとと歩きゃ、とっくに途中で追いついているのに、しようがねえなあ」
「おまえはまた、なんだってそうあわてているんだ。たとえ途中で追いついたって、あの三人のおおかみ侍どもがついている間は、うっかりそばへも寄れんぞ」
のら太郎はあいかわらず鷹揚(おうよう)にかまえて、少しもいそごうとはしない。
「あっしはだんなを見そこなっちまった」
「どうしてだね」
「だんなはあんなさんぴんの二人や三人、ぱっ、ぱっとたたき伏せるぐらいの度胸はあるんだと思ったんですがねえ」
「あいにくそうはいかなかったなあ。相手がわら人形なら、十や二十、ぱっ、ぱっと引きぬいて投げとばしてみせるんだが」
「おきなせえ。わら人形なら、あっしはなにもこんな心配はしやしねえんだ」
「おまえはいったいなにを一人でそうやきもき気をもんでいるんだ」
「だんな、西の空をごらんなせえ。もうどこを

さがしたって、おてんとうさまは出ていやせんぜ」
「そりゃそうだろう。日はさっき西の空へ落ちたからな。しかし、明日になれば、また東の空からお早うといって出てくる。出てきてくれては困りますといくらたのんだって、これだけはきっと出てくるにきまっているんだから、なにもそう今あわててさがすことはない」
「だんなはきっと長生きをしやすぜ」
「うむ、わしのおじいさんは八十九まで長生きをしたからな」
「そのかわり耄碌をしちまって、夜も昼もわからなくなっちまったんでしょう」
「いや、やっぱり朝になると起きて、夜になると寝ていたようだな」
「夜になると寝る、そいつがあっしは心配なんでさ」
「おかしなことをいうやつだな。夜になって寝ないやつにろくなものはない。ぬすっとに天井のねずみ――」
「だんな、ちょいとうかがいやすがね、ねずみが一匹にねこが三匹、おんなじ部屋にいっしょに寝たらどういうことになりやす」
「そりゃ寝るどころじゃあるまい。いちばん強いねこがねずみをとって食うにきまっている」
「それごらんなせえ。おてんとうさまが引っこめば夜がくる。夜がくればねこがねずみを追っかけて、とって食う。若だんなはねずみですぜ、だんな。しかも、ただのねずみじゃねえ。ありゃたしかに雌の、――あっ、いけねえ」
虎吉はあわてて口をおさえたがまにあわない。
「ねこ、おまえはあの若だんなが雌のねずみだと知っていて、後を追いかけているのか」
「だんなはどうなんでげす」
もうしょうがないと見て、虎吉はすかさず逆襲する。
「わしはまず大黒さまかな。ねずみと遊んでやるほうだ」
「けっ、大黒さまにしちゃ少し貧相だね、だんなは。――あっ、だんな、だんな」
虎吉があわててのらだんなのたもとを引っぱる。ちょうど金沢屋の前へかかろうとして、そこからすっと旅姿の百合太郎が出てきたからだ。
「なあるほど、ねずみだな」
のら太郎も思わず目をみはっている。
百合太郎はべつにあたりを見まわすでもなく、例によってゆうゆうと神奈川の宿のほうへ歩きだす。
「一人でござんすね。三匹のねこはどうしたんでげしょう。出てきやせんね」
「そうだなあ。――ああ、わかった」
「わかりやしたか」
「わしはやっぱり頭がいいんだな」
「で、どうわかったんでげす」
「ねずみ一匹と、ねこ三匹は、今夜はここ泊まりときめて、この旅籠へ着いたんだ。すると、ここに三味線屋が先にとまっていて、三匹のねこはつかまり、たちまち皮をはがれてしまった」
「おきなせえ。だんなと掛けあっていると日が暮れちまう。あっしはいそぎやす」
虎吉は急に駆け出そうとする。
「ねこ、どこへ行くんだ」
「知れたこと、あっしは若だんなのお供をします」
「まあ待て。声はいつでもかけられる、しばらく跡をつけてみよう」
のら太郎は虎吉の腕をつかんで、ゆっくりと歩きだす。
「どうして声をかけちゃいけねえんです」
「べつにいかんというわけはないが、ちょいと考えたことがあるんだ」
「だんなは頭がいいからね」
「そのとおりだ。さっきの三味線屋は、どうやら間違いだったらしい」

「じゃ、ねこは皮をはがれたわけじゃないでげすな」
「うむ、あわてちゃいかん。ねこはふろへはいっていたんだ」
「なんですって」
「ねずみは雌だからふろへははいれない」
「なあるほど、三匹のねこがふろへはいっている間に、ねずみはそっとぬけ出してきたんですね」
「たぶん、そういうことになるんだろう。そうだとすると、ふろからあがってきたねこどもは、びっくりしてねずみの後を追いかけるにちがいあるまい」
「いまのうちに、なんとかなりやせんかね」
「そこだ。いまから三味線屋をさがしても急には見つからんだろうから、どうだ、ねこ、おまえとわしとで、やつらが追いかけてきたらちょいとからかってやるんだ」
「その間にねずみを少しでも遠くへ逃がしてやろうっていうんですね」
「うむ。おまえの頭もまんざらではないな」
「冷やかしちゃいけやせん。けど、相手は三人、しかも二本差しでげすからね。だんな一人で大丈夫かなあ」
「そこが頭の使いようだ」
「なにか計略があるんですか」
「うむ、なんとか考えてみよう」
「なあんだ、いまから考えるのか、心細い頭だなあ」
むだ口をたたきあいながら、やがて二人は川崎の宿はずれへかかってきた。まもなくたそがれに近い刻限で、二十間ばかり前を百合太郎が、べつにうしろを気にするふうもなく、ふつうの歩調で歩いている。この刻限になると、川崎へいそぐ旅人にちらほらすれ違っていくが、神奈川へむかう者はほとんどない。途中で日が暮れるからだ。
「あれえ、だんな――」

またしても虎吉はのら太郎のそでをひいて目を丸くした。
いま店をしまいかけている掛け茶屋の中から、ふっとあだっぽい旅支度の女が出てきて、百合太郎に声をかけ、いかにもなれなれしく肩をならべて、いっしょに歩き出したからだ。

御守殿お兼

「お武家さま、あの、失礼でございますけれど――」
御守殿お兼は神奈川の宿のほうへさっさと通りすぎようとする若い侍を見かけて、足ばやに掛け茶屋のかげから走り出た。
「なにか用か」
おっとりと立ちどまるその若侍の顔を見て、あっとお兼は息をのむ。
あの足の運びかたでは、どう軽く見ても百両はふところにしている。いい鴨を見つけたと、そのほうにばかり気をひかれていたのだが、それがこんな紅顔の美少年だとは思いもかけなかった。年もまだ十七か八、光源氏や維盛さまだって、この子には顔負けがするだろう。まったくふるいつきたいような殿御ぶりで、しかもどこかに凛とした気品がにおいこぼれている。
「あら、若さま、ごめんなさい」
お兼はわれにもなく、ぽうっとほおが熱くなってしまった。
「どうかしたのか」
「いいえ、あたくしぜひ神奈川の宿まで行きたいのですが、いまからでは途中で日が暮れる、どなたかに道づれになっていただきたいと思って、若さまをお呼びとめしてしまったのでございますけれど――」
御守殿の肩書は、もとさる大名の奥奉公をしていたことがあるからついたので、身は持ちくずしても、ひょっとするとその行儀が出るお兼だ。
「そうか、わしでよかったら、いっしょにきて

と、遠慮そうに聞く。
「おまえの名は――」
「兼と申します」
「わしは新宮百合太郎、若さまではない、いまは浪人だ」
「百合太郎さま――、いいお名前。あたくしのほうが年上かしら」
「わしは十八だ」
まことにすなおな若さまである。
「あたくしは二十歳、悲しゅうございますわ。二、三年早く生まれすぎました」
こんどはにっとわらっただけだ。わらったからには、こっちのいう意味が通じたにちがいない。
「若さま――」
「わしは浪人者だよ」
「いいえ、御浪人でもきっと御大身の若さま、なにかおいたをなすって、見せしめのための御勘当でございましょう。そうにちがいございま

もいい」
若さまはしごくむぞうさに言って、もう歩きだす。
「まあ、うれしい。ほんとうでございますか」
飛び立つ思いでお兼はただわくわくと肩をならべていく。よういに動悸がとまらない。
――いやだなあ、御守殿お兼ともあろういいあねごが。
ちらっとそんなことを考える下から、胸が甘ったるくうずいてきて、自分のほうが二つ三つ年上なのがひどく気になってくる。
「若さま――」
そっと呼んでみる。
「なんだ。足が速すぎるかね」
うれしいことを言ってくれるなあと、ぽうっとなりながら、
「いいえ、あたくし、一生懸命歩きます。ですから、ですから、お名前をうかがってはいけませんでしょうか」

せん」
また、にっとわらっただけだ。
「あたくし、二つ姉さんですもの、おかくしになってもだめ。なにをなすっての御勘当かしら。江戸には新吉原という殿方に喜ばれるおもしろいところがございますね」
「わしは知らぬ」
「ほんとうかしら。松の位の太夫にかわいがられて、二日も三日もお屋敷へお帰りにならない。若さまは美男子ですから、太夫のほうが夢中になって放さないんでございましょう、憎らしい」
お兼はほんとうに食いついてやりたくなる。
若さまはわらっているだけだ。
「それとも、お腰元にお手をつけて、そのお腰元が身重になって、――でも、そんなことで御勘当にはなりませんね。お腰元は宿下がりさせてしまえばいいんですもの。ああ、わかりました。虫も殺さぬ顔をしていてということがありますから、だれかとけんかをなすって、相手をおきりになったんですね。先さまも御大身の若さまで、このまま屋敷においては相手方に申しわけがない、とうぶん江戸を落ちていよと、――どこの御親戚をたよっておいでになるのです」
「あいにく、わしはそんなに強くない。気の毒だが、せっかく道づれになっても、用心棒とかの役にはたたないぞ」
「あんなことを――」
そういえば、街道はいつかすっかり暮れてきて、人足はばったり絶え、両側は青麦畑の寂しい並木道になっていた。が、さいわい空に十日ばかりの月があかるいから、歩く足もとにだけは不自由しない。
「でも、あたくし、こうして若さまと道づれになれて、ほんとうによかった。今夜は神奈川泊まりでございましょう」
「そうしようと思っている」
「ごいっしょにとまらせてくださいませね。女の一人旅はどこの旅籠でもいい顔をしてくれな

いんです」
「どうしてだね」
おや、皮肉かしらと、ひけめのある身だから気をまわして、そっと横目を使ってみたが、あいかわらずおっとりと正面をきって歩きながら、そんなふうもない。おそらく、旅なれないから、ほんとうになんにも知らないのだろう。
たしかにそれにちがいない。少しでも世間ずれがしていれば、こんな女の一人旅、はてなと素姓を疑うか、すぐにうぬぼれて変な気をおこすか、どっちにしてももうこっちの身の上話を、どこへ行くんだとか、どうして一人で歩いているんだとか、根掘り葉掘り聞きたがる時分なのである。
が、この美少年はまだ一度も自分から話しかけてくることもなく、こっちが黙っていれば、いつまでも黙って歩いている。ほんとうに初心なので、女と歩くのが恥ずかしいのかもしれぬ。
——だいいち、女を知っているかしら。
そう考えたとたん、お兼は体中がかっと熱くなってきた。
さっき腰元の話をしたとき、ほんのりと顔を赤くしていたし、この澄んだ目はまだ女を知らない目だ。かわいいなあと思い、もう煮て食おうと焼いて食おうとあたしのものだと考えると、またしてもお兼は胸がしびれるように甘ったるくなってくる。
——まず、どんなふうにくどいてやろうかな。
そんなことを考えるのもたのしい。この美少年を有頂天にさせて、あたしのとりこにしてしまう。いや、世の中には女が年上の夫婦だっていくらもあるんだから、二世三世も夫婦になって、もう一生わかれないことにしよう。そのかわり、あたしはこの子のためにどんな苦労でもしてやろう。
「若さま——」
「なんだ」
「ちっともお口をきいてくれませんのね。くたびれたんですか」
あんまり黙っていられると、つい心配になってくる。
「おまえはどうだ」
「あら、あたくしの心配をしてくださるの。うれしいこと」
「あまり疲れていないようだな」
「あたくしは大丈夫。若さまをおぶってあげてもいいくらい。おぶってあげましょうか」
ほんとうにおぶってやってもいい気さえしてくる。
「それにはおよばん」
「恥ずかしいんですか。だれも見ちゃいませんのに」
百合太郎はわらっている。
「あ、そうそう、若さまは旅籠屋というものへおとまりになったことがあるんですか」
「ないな」
「そうでしょうねえ。今日江戸をお立ちになったばかりなんでしょうからね」
「うむ」
「旅籠屋へとまると、番頭が宿帳というものをつけにきます」
「ふうむ」
「そのときあたくしたちが他人だと、変な目で見られます。駆け落ち者かなんかにされて、間屋場へ届け出られないともかぎりません」
「姉弟ではどうだ」
「だめですわ。かえって怪しまれます、ちっとも似ていないんですもの」
「そうかなあ」
「御夫婦がいちばんいいんです。世間には奥さんのほうが年上の御夫婦だってあるでしょう」
「それはある」
「御夫婦にしておきましょうよ、いいでしょう」
さあ勝負だ。なんと返事をするだろうと、思わずかたずをのんでいると、
「うむ」

と、あっさりうなずく。

しめたとお兼は思い、この人だってまんざらあたしがきらいでもないんだと自信がつくと、世の中が一度にあかるくなったような気持ちだ。

「そのかわり、ねえ、若さま、番頭や女中たちの前だけは、御夫婦のような口をきいてくれなくてはいけません」

「どんな口をきくんだね」

「あたくしは若さまをだんなさまと呼びますから、若さまはだんなさまらしく、お兼、ああしろ、こうしろと威張ってくだされればいいんです」

「威張るのか」

「ええ。少しおけいこしておきましょうか」

「まあいい」

「いいえ、いけません。おけいこをしておかないと、こんなお芝居は人の前ではなかなかうまくいかないものですわ」

「そうかなあ」

「あの、だんなさま」

「なんだ」

「お疲れでございましょう。もうお床をのべさせましょうか」

ちょいとしなを作って、声もとろんと甘ったるいが、お兼は自分の体がとろけてしまいそうにたのしい。

「こんな大道へ床をのべさせるのかね」

百合太郎はわらいながら、そんなぶちこわしをいう。

「いやだなあ。御夫婦のおけいこなんだから、ここを旅籠屋だと思わなくちゃだめじゃありませんか」

「なんだ、女房役のほうが威張るのか」

「知らない」

お兼は思わず吹きだしてしまった。

月の夜道

「おんやあ」

たのしい二人きりの夜道が、やがてなにかの社の森の木の下道へかかったとき、ぬっと前へ立ちはだかったのは、一人が空駕籠をかつぎ、相棒と二人づれの大きな雲助だった。

——悪いところで悪いやつに。

とお兼は思ったが、こんなやつに怖い顔を見せるとたちまちつけあがるから、こっちもしゃっきりと立ちどまって、黙って顔を見てやる。

「今晩は、ねえちゃん」

相棒のほうがにやりとわらって、とぼけたおじぎをした。

男のほうが初心で、侍ではあるが、なんとなく女の陰へかくれるようにしている。女のほうがあばずれで、どこか一癖ありそうだが、ちょいと水ぎわだった器量だ。

人里離れた森のかげではあるし、こっちは大の男が二人、どうせおとなしく世を送っていない荒くれ稼業の雲助どもだから、黙って見のがして通すはずはなかった。

「ねえちゃん、そう人をにらまないで、もどり駕籠だ、安くしておくから、乗ってやっておくんなさい」

「いりませんよ。あんたたちは川崎のほうへ帰るようだし、あたしたちは神奈川のほうへ行くんですからね」

「なあに、おれたちは稼業だから、乗ってくれりゃ、神奈川へだって、京大坂へだって行かあね。なあ、辰」

「行くともよ、ねえちゃんは足が達者そうだが、うしろのいい人はだいぶ疲れているようだ。いい男だねえ、役者さんかね」

「なあるほど、辰は目が高いや。かわいい役者さんをつれて、ねえちゃんは今夜神奈川泊まり、おたのしみでござんすねえ、ねえちゃん、かわいい人を駕籠にのせておやんなさいよ」

「いりませんよ。やさしく見えても、うちの人は浅利河岸の桃井道場の免許取りなんですからね。見そこなうととんだけがをしますよ」

その免許取りがどうやら自分のうしろへさがりっ放しなので、お兼は心細いなあと思い、あたしがまもってやらなくちゃと、いよいよきかない気になってくる。

「なあ、相棒、京橋の桃井道場は槍の道場だったかなあ」

「うんにゃ、薙刀の道場だろう。傷あとを調べてみりゃすぐわからあ」

「そうか、ちょいと調べてみるか」

頭からのんでかかって、お兼のはったりなど通用しそうもない。

「おまえさんたち、どうしてもすなおに通さない気かえ」

お兼はお兼で、かわいい男のためにそろそろ女豹になりかかってきた。

「すなおに通すから、駕籠へ乗ってくんなよ」

「くどいねえ。いやだったらいやなんだよう。ばか」

お兼はあわてて口を押さえるふりをしながら、そのじつ内襟にしのばせておいた針の小束を口へ含む。含み針の戦闘準備を完了したのだ。

「おんや、男にむかってばかとほざいたな」

「かまわねえから、相棒、早いとこねえちゃんを調べちまえ。おれは役者さんを引きうける」

辰は駕籠を放りだして、いきなり息づえを取りなおした。

「合点だ」

相棒がたちまち野獣に早がわりをして、お兼のほうへ躍りかかろうとしたとき、お兼の口からひゅっ、ひゅっと、針が相手の目をねらって鋭く飛んだ。

「わあっ」

野獣は悲鳴をあげながら両手で顔を押さえ、どすんとたわいなくしりもちをつく。

「どうした、相棒」

ぎょっと立ちすくむ辰の顔へも、容赦なく五、六本の針が光のように飛んで、

「あ痛っ」

悲鳴をあげてよろめくまに、

「百合さん、早く――」

お兼は百合太郎の手を引っつかみ、いっさんに神奈川のほうへ走りだす。

小一町も走ると、

「もうよかろう」

百合太郎は足をゆるめて、

「おまえは強いんだなあ」

と、感心したようにいった。

「あたし、あんなところを見せちまって、愛想をつかしちゃいやですよ」

お兼は急にそれが心配になってくる。

「なあに、この分では、おまえのほうが威張るだんなさまになったほうがよさそうだ」

「またそんなことを――」

安心すると、お兼の舌はまたしてもとろんととろけてきて、こんどは助けてやったという自負があるから、

「だんなさま、あたくしは執念深い女なんですから、もし、もし愛想などつかすと、それこそ承知しませんから」

と、ついそんなすごいせりふが口に出てしまった。

「それも旅籠屋へついてからの御夫婦ごっこのけいこかね」

百合太郎はいっこう気にもしていないようだ。

その二人から小一町ほど離れて、おなじ夜道をのら太郎と橋場の虎吉がゆっくり跡をつけている。

「おどろきやしたねえ、だんな。あの女がいま雲助をやっつけたのは、含み針ってやつですぜ」

「そうらしいなあ」

二人は森の中へしのびこんで、いまのけんかを見物していたのだ。

「あんな芸当をやるからには、あのあま、どうしてもただ者じゃねえ」

「さよう、あれはたしかにはりねずみだ」

「けっ、だんなはどうしてそうのんびりしているんだろうな」
「おまえはまた、どうしてそう一人でやきもきしているんだ」
「だんな、ああいうはりねずみは、しびれ薬って手も知ってるんですぜ。あのぶんじゃ、あのあま、なんのかんのと若だんなをさそって、うまく神奈川の旅籠へいっしょにとまりこむにちがいねえ。若だんなの胴巻の中は、どう軽くっても百両は持っている」
「ほう、よくそんなことがわかるなあ。おまえ、若だんなにそれを見せてもらったのか」
「冗談いっちゃいけやせん。そのくらいのこたあ、足の重さでちゃんとわかりまさ」
「はてな、ねこだねこだと思いきや、さてはおまえもはえねずみであったよな」
「ねずみが立って歩きゃ化け物だ」
「なるほど、それもはいねずみだな。しかし、わしのいうのはごまのはえねずみのことだ」
「だんな、わかれやしょう。あっしはもう我慢がならねえ」
ねこの虎吉はぷっとふくれて、いきなり駆け出そうとする。
「待て、ねこ。どこへ行く」
のらだんなは腕をつかんで放さない。
「いてえ、だんな、いてえよ」
急所をつかまれて、ねこは身を縮めながら悲鳴をあげる。
「痛いようならまだ生きているんだ。まあ、そうあわてるな」
「あわてずにゃいられねえ。今のうちに、あっしが行って、あのあまを追っぱらってやるんでさ」
「針が怖くないのか」
「ちくしょう、針か」
はっと気がついたようだ。
「そうれ見ろ。貴様の手には負えぬ女だ。それになあ、ねこ」
「とらだよう、あっしは」

「ああ、とらねこか。どっちでもおなじことだ。ねこはねずみをねらう」
「あたりめえでさ」
「貴様のことだ」
「冗、冗談いいっこなし。あっしはねらいやしねえ」
「うそをつけ、おまえは若さまねずみの肌へとんだほりものを入れたがっているやつだ」
「けっ、だんなだってその口でげしょう」
「あいかわらず下司の知恵だな。まあいい。たとえはりねずみでも、ねずみはねずみを食わぬ。今夜はねずみ同士をゆっくり寝かせてやれ。若さまねずみははじめての道中で疲れている」
「なるほど――」
「おれとおまえは、後からくる三匹のおおかみの番をしていればそれでいいんだ」
どこかしみじみとしたのらだんなの声音である。
「えらい。気に入りやしたよ、だんな、武士の情けってやつだ」
「さよう、ねこには小判だ」
「わかりました。わっしも男だ。今夜はおあずけにして、だんなとおおかみの番をしやす」
一方では感心しながら、一方では明日という日があらあと、煩悩の犬追えども、さすがは橋場の虎吉である。
どうやら神奈川の宿が近いらしく、夜風に潮の香がただよいはじめていた。

執念

うつらうつらと、なにかひどく甘い夢を見ながら、ふっとお兼が目をさましたのは、家の中の寝しずまり方で、もう丑三つ（三時）すぎとわかった。
お兼はいつもこの時刻から仕事にかかり、どう手間がかかっても四半刻（三十分）後には、裏口から物音ひとつ立てず街道へぬけ出しているのが例である。

——重い胴巻はまくらの下。

それもちゃんと床にはいるとき見ておいた。

そっと薄目をあけてみると、すぐ隣に百合太郎がこっちへ背を向けて、ぐっすりと深い眠りにはいっている。ほの暗い有り明け行燈の灯に、憎らしいほど房々とした髪の毛がなまめかしい。

——ふ、ふ、今夜は金じゃなかったっけ。

そう思ったとたん、お兼は乳の下がきゅっとせつないほど甘美なものが全身にたぎってきた。

宿へ着いても、酒はきらいだといってのまなかった。宿のふろはきたないからといって、ふろへもはいらず、寝るまで袴を取ろうとしない。

「だんなさま、お寝まきにお着かえなさいませ」

寝るとき着がえを手伝ってやろうと思ってすすめると、いい、一人で着かえると、さっさと座敷のすみへ立っていってしまった。

それとなくわざと体にふれてやると、そのたびに身をすくめるようにして、いそいで逃げてしまう。

——恥ずかしがり屋ってありゃしない。

それだけに、その初心なのがまたたまらない魅力でもあった。

用もないのに、年増の女中が何度もやってきて、あけすけに百合太郎の顔に見とれていく。いやな女中だなと腹が立ちながらも、こっちはともかくも女房というふれこみなのだから、かまわずべたついてうらやましがらせてやったのはいい気持ちだった。

そんなことをたのしく思いうかべながら、

——どうしてやろうかしら。

と、お兼はいやがうえにも胸がどきどきしてくる。

おやすみなさいといって自分の床へはいったときは、あまりせっついてもいやがられると思ったので、それにひどく疲れてもいるようだし、なんにもいたずらはせずにおとなしく寝かせてやったのだ。

——困ったなあ。ほんとうに——初心なんだから、おこしてふきげんにならられてもいやだし。

お兼はそっと自分の床の上へ起きあがる。考えてみると、これはまくらの下の胴巻を引きぬくよりむずかしい仕事なのだ。

両手で体を支えて、横から乗り出すように顔をのぞきこんでやると、ほおずき色のくちびるをわずかにあけて、真っ白な歯をちらっとのぞかせながら、深い寝息をたてているのである。

なんという邪気のない美しい寝顔なのだろう。夜着をおとがいの下まで深々とかぶって、まるで女のようにくの字なりに身をちぢめて寝ている。

——かんでやりたい。

お兼はかっとなって、前後のことも忘れ、夜着の上からおおいかぶさるように百合太郎の体を抱きしめて、ちょうど目の前へきた薄桜色の形のいい耳たぶへ思わずかみついていた。むろん、歯は立てないように、ちゃんと加減はしている。

「これ、乱暴をするな」

びっくりして目をさましたようだが、べつに大きな声を立てようとはしない。

「いやだ、いやだ、起きて、若さま」

われながら狂ったようになって、項の下へ手を差しこみ、力まかせに引きおこしてやる。

「乱暴はよせ」

半身を引きおこされた百合太郎は、はらりと夜着が胸から落ちて、その胸の寝まきの襟が少しはだかり、真っ白なさらしがちらっとのぞいていたが、お兼はもう目にもはいらない。

「若さま、あたしを、あたしを抱いて」

がむしゃらにその胸へ顔をうずめていって、はっとした。ほおにふれた胸の感じがむっちりと厚ぼったい。

「あっ」

夢中で手をやってみると、しっかりとさらしで巻いているが、たしかに乳房である。

「いやです、若さまは」
あっけにとられて顔を見ると、百合太郎は悪びれもせず、にっと微笑しながら、手早く胸の襟をかきあわせている。
「いやだあ、あたし、——いやだあ」
お兼はその丸やかな肩へ両手をかけてゆすぶりながら、どうにもあきらめきれなくて、ぼろぼろと涙が流れてきた。
「さあ、早くおまえも寝ろ。まだ朝にはならん」
「だって、あたし、あたし——」
「泣くやつがあるか」
「どうして、どうして、若さまはあたしをだましたんですよう」
「だれもだましはせん。わしはおまえとなら安心して眠れるから、道づれになった。そのかわり、金はほしいだけやる」
「なんですって」
「わしは寝るぞ、眠い」
百合太郎は落ちた夜着の襟を両手で持って、そのまま仰向けに寝て、行儀よくおとがいの下までかぶる。
ぽかんとすわっていたお兼は、まだ人心地がつかぬままに、おまえとなら安心して眠れるといった百合太郎の言葉が妙に耳に残り、
——この人は、この人はあたしに甘ったれているんだ。
なにか別な感情がじいんと胸へひびいてきて、
「知らない、知らない。若さまの意地悪」
またしても夜着の上からのしかかっていかずにはいられなかった。

待っていた三人

——あたしは気がへんになっちまったんじゃないかしら。
翌朝、朝の膳について、御守殿お兼は百合太郎に給仕をしてやりながら、自分で自分の気持ちがどうにもわからなくなっていた。

百合太郎が女だったとはっきりわかっている今でも、お兼はその水もしたたる若衆姿に、食いついてやりたいほどの恋心が燃えてくる。
昨夜、女だとわかったとき、一度はたしかにがっかりした。悔しくて、悔し涙さえこぼれもした。そして、あんまり悔しいから、夜着の上からのしかかるようにむしゃぶりついて、身もだえしているうちに、なにか胸を突きあげられるような甘いうずきをおぼえ、いってみれば、満たされないものがあるだけに、かえってかわいくてかわいくてたまらない狂おしさに襲われていた。
——女が女にほれるなんて、あるものなのかしら。
あってもなくても、ほんとうなのだからしようがないとお兼は思った。
今朝も着がえをするとき、もう女とわかってしまったのだから、百合太郎も平気でお兼に手伝わせ、うしろから着物を着せかけてやろうとしたお兼は、その白々と肉づきのいい輝くような肩を見たとたん、
「憎らしい、この肌」
と、思わずかっとなって食いついていた。
「お兼、痛い」
百合太郎はにっとわらって、少し恥ずかしそうな顔をする。
「だんなさま、痛かったら、よくおぼえていてくださいまし。あたしはだんなさまを横取りする男があったら、殺してしまいますからね」
だれにもこの子はやりたくない、あたし一人のものだと、お兼はきめてしまったのである。
帯をしめる前に、重い胴巻をつけなくてはならない。百合太郎はその胴巻をとって、つとお兼の手にわたした。
「これ、どうするのさ」
「重い。おまえ、持っていってくれ」
百合太郎は百合太郎で、そんな甘ったれ方をしてみせるのだ。

「重いのはあたしだっておんなじよ」
「いや、おまえのほうが強そうだから」
「憎らしい。つねってやるから」
とうとうその重い胴巻は、お兼が腹へまかなくてはならなかった。そして、
——甘ったれているんだから。
と、甘ったれられれば、甘ったれられるほど、うれしくなるお兼だった。
それにしても、この若さまぶりは、なんという美しさなのだろう。御飯をたべている姿にさえ、見とれるような端麗さがある。女中がやきもちをやいて、のぞきにきてしようがないのだ。
「だんなさま、今日は藤沢泊まりなんですから、ゆっくり立っていいんですよ」
「そうか」
「長い旅は、はじめから無理をすると、足を痛めますからね」
そう言ってから、いったいこの子はどこまで行くんだろう、どうしてこんな男の風なんかして、一人で旅に出てきたんだろうと、お兼は急にそれが気になってきた。
「ねえ、だんなさまはどこまで行くつもり」
「丹波まで行く」
「なにしに行くの」
「それはいまにわかる」
百合太郎はおっとりと微笑している。
「水くさいのね、あたしに打ちあけてくれないなんて。——ああ、丹波には大江山ってのがありましたっけね、酒呑童子のいる」
「うむ。丹波には鬼が多い」
「まさか鬼退治に行くんでもないんでしょう」
「そうそう、わしは鬼にねらわれているから、今日あたりまた追いかけてくるかもしれぬ」
「なんですって——」
「途中で鬼が出ても、あまり逆らわぬがよい。どうせたいした鬼どもではない」
「わかるように話してくれなくちゃ、わからないじゃありませんか。鬼がどうしたっていうんです」
「さあ、出かけよう。わしが話すより、おまえがその目で見たほうが早い。わしはお兼がついていてくれるから、今日から安心して旅ができる」
憎らしい殺し文句とは思ったが、それで聞きたがり虫がおさまって、
「じゃ、お勘定してもいいんですね」
と、われながらいそいそしてくるのだからたわいがない。連れ立って旅籠屋を出ると、今日もからりと晴れて、浮き立つような春日和だった。
なんの気なしに見ていると、百合太郎の歩き方は、体つきこそ優美だが、まったく男になりきっていて、どこにも女という疑いを入れるすきがない。なるほど、これではあのときまで御守殿お兼が女と気がつかなかったのも無理はないと、いまさらのように感心してしまった。
「若さま——」
「なんだ、御夫婦ごっこはもうやめか」
「あら、やっぱりあなたはだんなさまのほうがいいの」
「いや、どっちでもおまえの都合のいいほうでいい」
「なら、若さまにしておくわ。あなたはどう見たって、そんなかっこうだもの。あたしはとてもお腰元って柄じゃないから、屋敷へ出入りの遊芸の師匠が、若さまをそそのかしての道行き、まずそんなところね。ごらんなさい、みんな人が見ていくから」
それはたしかに人目をひく道づれで、宿中の目が集まっているのもまんざらうそではなかった。お兼は得意でたまらない。
が、まもなく宿はずれへかかってくると、はたして鬼が三匹待っていた。大西倉之助、北沢佐久馬、今井新兵衛の一行で、今日は北沢の当番だから、
「若さま、お待ちしておりました」

と、おそるおそる前へ出る。
「おお、佐久馬か」
「きのうは大西がとんだ粗忽をいたしましたそうで、当人もひどく後悔しております。御寛容のうえ、お供の中へ加えていただけますよう、今後はかならず不心得を慎むそうでございますから、てまえからも切にお願い申しあげます」
その大西は少し離れたところで神妙におじぎをしていた。
「忘れてとらせる」
百合太郎はべつにいやな顔も見せず、もうさっさと歩きだす。
「大西、お許しが出たぞ、慎んでお供いたせ」
佐久馬は大西のほうへそういって、いそいでお兼とは反対側へ肩をならべ、
「さっそくお聞きとどけくださいまして、ありがたき幸せに存じます」
と、大西にかわってあいさつをする。
「うむ」
百合太郎は軽くうなずいただけだ。
「ときに、若さま、その女は何者でございましょう」
なかなか色っぽい女ではあるが、どうも素姓が疑わしい。それに、相当のすれっからしのようではあるし、こんなのにそばについていられては、せっかくの当番のじゃまになると思ったから、佐久馬はついとがめるような語気になっていた。
「これは道づれだ。捨ておけ」
「それはあいなりません。不肖ながら、われわれ三人は御当主さまの堅い御内意をうけて、若さまのお供をいたしております者、そのような素姓の知れぬ女をおそばにつけて、万一若さまの身に間違いでもおこりましては面目があいたちません。ぜひ、お考えなおしを願います」
きのうの当番大西は、多少遠慮して失敗している。佐久馬は今日あくまで強引に出て、ばあいによっては手ごめにしても、ものにしてしま

おうと決心しているのだ。今日だけはなにをしても自分の権利だし、その権利は今日をのがすと、また二日待たなければ番がまわってこない。たとえ二日後にまた番がまわってきても、かんじんな獲物がそのとき人のものになっていたのでは、いくら悔しがっても後の祭りなのだ。機会というものは、一度取り逃がすと容易にまわってこないものなのである。
——なあに、相手を姫君だと思うから、遠慮が出たり、気おくれしたりするんで、そこらの街にころがっているじゃじゃ馬娘だと思って、かまわず押さえつけてしまうことだ。
はじめからそういう意気ごみでかかっている佐久馬だったのである。
「かまわぬ。そう気にするな」
百合太郎はむろん相手にしようとはしない。

林の中の決闘

「若さま、お侍のお供さんなんて、やかましいものなんですね」
お兼がこっちがわから、わざとねっとりと挑戦しだした。
「うむ、旅は道づれというから、みんな仲よく歩くことだ」
「あたしはかまいませんけれど、ゆうべ一晩大事な若さまを一人でほうっておいて、万一間違いがあっては面目が立たないなんて、少しおかしくありませんかしら」
察するに、供侍たちは家来のようだから、百合太郎が女だということを知っている。それで、昨夜、大西というやつがなにかいたずらをしようとしたので、若さまは一人川崎を逃げだし、あたしが道づれになったのを幸い、安心して神奈川の旅籠でぐっすり眠ることができたのだと、お兼にもうおよその見当がつく。
それに、どうやらこの若さまは、ほんとうに大名の姫君で、こんな姿で丹波へ出かけるにはそれ相応の深い事情があるのにちがいないとわ

かってくると、お兼はいよいよおもしろくてたまらなくなってくるのだ。

「若さま、うっかりだまされちゃだめですよ、口先だけのお供をして、なんのたよりにもなりゃしません。そこへいくと、お兼は若さまのためになら命もいらないと思っているんですからね。わかってますね」

「わかっている」

それでも佐久馬はまだ一言も挑戦に応じてこない。なあんだ、侍のくせに案外だらしがないんだなあと、内心甘く見てせせらわらっていると、じつはそうではなかった。

「おい、女、ちょいと待て」

道が台の茶屋の坂をおりきって、右手が深い林の前へかかると、佐久馬は急に立ちどまって呼んだ。声音に異様な殺気さえ含んでいるようだ。

「なんです、お供さん」

相手に殺気があろうと、殺意があろうと、こっちはこっちでいつでも女豹になれるお兼だから、けろりとした顔で立ちどまる。

「おまえに少し言って聞かせることがある。そこまでいっしょにきてくれ」

林の中を横柄にあごでしゃくってみせるので、

「若さまの前じゃ話せないことなんですか」

「よけいなことは言わなくてもいい。黙ってついてくるんだ」

「どうしようかなあ、あたし」

それとなく百合太郎の顔色をうかがってみる。

百合太郎はにっこりとあでやかに笑ってみせる。おまえは負けやしないでしょうと言っているようなまなざしだ。

「おい、いっしょに行くのが怖いのか」

「怖いわ。あんたは男、あたしは女、人のいないところへ行って、変ないたずらなんかされるといやだもの」

「ばか、だれが貴様なんかにそんなまねをするもんか」

「ほんとうですね。そううかがえば安心、どこへなりとごいっしょにまいります」

「よし、来い」

佐久馬は崖下の小道へ先に立ってはいっていこうとする。

「北沢、どうしようというんだ」

今井と大西が呼びとめて聞いた。およその見当はつくから、二人ともちょっと顔色を変えている。

「すぐもどってくる、貴公たちは若さまのお相手をしていてくれ。ただし、当番の順を忘れてはいかんぞ」

念を押していくことを忘れない佐久馬だ。

「わかっている」

二人は顔を見合わせて苦笑していた。

「若さま、ちょっと行ってまいります」

「うむ」

お兼は百合太郎にあいさつをして、まるでそこへちょっと使いにでも行くような気軽さで、佐久馬の後を追う。

二人のうしろ姿が、まもなく崖の端をまわって見えなくなると、

「倉之助――」

と、百合太郎が大西を呼んだ。

「はっ」

「あの両人を見てつかわせ。あまりむごいまねをさせては家の恥辱になる」

「承知しました」

大西は昨日の失敗がある。その自分に用を言いつけられたのだから、勇み立ったようだ。

「新兵衛も同道いたせ」

「しかし、若さまお一人では」

「かまわぬ、一人残っては後で佐久馬が気に入るまい」

なにもかも心得ているような百合太郎だ。

「はい」

と、今井も大西の後を追う。
街道から見えなくなった林の中までくると、先に立った佐久馬が立ちどまって、くるりとこっちを向いた。怖い顔だ。
お兼は油断なく、すっと抜き打ちのきかないところへ下がって立つ。
「おい、お兼とかいったな」
「そうですよ」
「貴様のねらっているのは、百合太郎さまの金か」
「いいえ、お金はもう胴巻ごとここへあずかってしまいました」
けろりとして、自分の帯の上をたたいてみせるお兼だ。
「なにっ」
佐久馬はさすがにあきれて目をみはる。
「じゃ、貴様、百合太郎さまの体を知っているのか」
「知ってますよ。ゆうべ抱いて寝てあげたんですもの。お兼、お兼って、うれしそうに甘ったれてたわ」
「なにっ」
佐久馬はまたしても息をのんで、その顔にはっきりと嫉妬の色が出てきた。
——ざまあ見やがれ。
と、お兼は勝ち誇らずにはいられない。
「よし、金は貴様にやる。ここからどこへでも消えてなくなるんだ」
「そうはいきません。今夜もあたし若さまを抱いて寝てあげる約束なんだもの」
「ならん」
「どうしてです。あたしが若さまを抱いて寝てあげる分には、いつまでも若さまは無事じゃありませんか」
「ならん、ならん」
「佐久馬さん、あんたたちは御家来のくせに、若さまの体をねらっているんですね。そんなんてありますか」

お兼がかまわず一本きめつける。
「うぬっ」
佐久馬の形相が、むらむらっと気ちがいじみてきた。
「たたっきってくれる」
「ふん」
お兼は鼻でわらって、じりじりと後ろへ下がった。きるならきってみろと、体中で挑戦している潑剌たる女豹ぶりだ。
「くそっ」
たまりかねて、佐久馬が抜刀するなり、大きく踏みこもうとした出ばな、ひゅっと木の間もる金色の日差しに、はっしと細い光がお兼の赤い口もとから飛んで、
「わっ」
佐久馬は悲鳴をもらしながら、たじたじと二、三歩うしろへよろめいた。右の目のまわりに、もう四、五本の針が突きささっている。
「やったな、女」
針は致命傷にはならないから、憤然とした佐久馬が男の面目にかけてふたたび猛然と一刀を振りかぶった時、
「待てっ、——若さまの御意だ、両人待て」
ばらばらっと大西が二人の間へ駆けこんだ。
「いや、許さん、この女」
「まあ待て、北沢。ここで目がつぶれてもつまらんし、押して乱暴を働くと、二度と若さまの前へ出られなくなる。新兵衛、ちょっと佐久馬の目を見てやれ」
大西は佐久馬をなだめておいて、
「あねご、含み針とは珍しい芸当を知ってるな。間違ってはいかんぞ。わしは百合太郎さまの使者なんだからな」
と、目を用心しながら、愛想よく声をかける。
「大丈夫よ。あたしは相手しだいでとてもおとなしい女なんだから」
「そうか。じゃ、きげんを直してくれ。若さまはけんかをしちゃならんとおっしゃるのだ」

「あたしから売ったけんかじゃありません。いくらあたしだって、黙ってきられるのはいやですからね」
「わかったわかった。ここはとにかく使者役のわしの顔を立てて、きよく仲直りをしてくれ。いいな、佐久馬」
「若さまのおおせじゃしようがない。ひどい目にあわせやがった」
今井に針を抜いてもらった佐久馬は、目のまわりに赤い針の跡を残しながら、むっつりと刀を鞘におさめた。直接、目にささらなかったのが、まだしも見つけものである。
「さあ、話がきまったら、若さまの前へ出よう。若さま一人で心配しておられる」
大西は一同をうながし、お兼を先へ立てて、うしろをまもるように歩きだした。
「あねごはうらやましいな」
「どうしてです」
「丹波まで若さまを抱き寝していくんだろう」
「ああ、そのこと——。あたしは若さまにもちゃんとことわってあるんです。もし若さまをあたしから寝取るような男があったら、きっと命を奪ってやると」
「怖いなあ。しかし、若さまのためにはいい用心棒ができて幸せだった」
うそかほんとうかわからないが、そんなうまいことも口にできる大西である。
「おや、若さま、いないじゃありませんか」
街道が見えるところまできて、まっさきに金切り声をあげたのはお兼だった。
「なるほど、見えんな。まさか用たしでもなかろうな。早くさがしてみろ」
三人はすでに一度出しぬかれた経験があるから、あわてて街道のほうへ駆けだした。
が、ついに百合太郎の姿はどこにも見あたらぬ。

とんびに油揚げ

そのころ——。
百合太郎は、のら太郎と橋場の虎吉につきそわれて、ゆうゆうと程ガ谷の宿のほうへ歩いていた。つまり、鬼どもやお兼が林の中へはいっている間に、とんびが油揚げをさらったかっこうになるのである。
「ねえ、若だんな、なんたってこの虎吉が若だんなのいちばん先の道づれなんですからね、忘れてもらっちゃこまりやすぜ」
虎吉は百合太郎と肩をならべて、やっと思いがかなったのだから、上きげんでさっきから一人でしゃべりつづけている。
「あの家来たちは悪人だね。それでなけりゃ、若だんなが川崎の宿を一人で逃げだすはずはない。あっしはあのとき、若だんなが一人で出てきたのを見て、ほっとしちまった。ねこ三匹にねずみが一匹、これが心配しないでいられましょうかというんだ」
「だれがねずみなんだね」
「きまってまさ、若だんながねずみにされちまう、いやだといったところで、ねこは三匹ですからね」
「おまえもねこだそうだな」
「けっ、若だんなはもうそんな悪口までおぼえちまったんですかい。朱に交わればなんとやら、あのお兼ってはりねずみがよくねえんだな。育ちが悪いうえに、手くせが悪い。あっしはすぐに追っ払ってしまったほうがいいと、何度ものらだんなにそういったんですがね、のらだんなとくると、いつまでたっても踏んぎりのつかねえのら太郎でござんしてね、はりねずみはおなじねずみだから、ねずみはとらねえ、今夜は疲れているだろうから、しずかに寝かしてやれってんで、——ああ、くたびれた」
「よくさえずるねこだ」
のら太郎が感心する。

「あ、そうそう、だんな、のらだんな、つまらねえ感心なんか後にして、それ、今のうちに肝心なことをたのんでおいてくださいよ」
「たのんでやるのはいいが、おまえもねこのうちなんでな」
「冗、冗談いってらあ」
「百合太郎うじ、この男は、どうしてもあなたの体にねこのほりものが入れたいのだとねらっている。気をつけることですな」
「けっ、とんでもねえ。だんなはそんなことを言って、仲間を裏切ろうっていうんですかい」
「物事は、はじめから正直にいっておくほうがいい」
まじめとも冗談ともつかぬのらだんなの声音だ。
「おっしゃったね。正直にいやあ、だんなだってねこのほうのくせに」
「下司の目で見ると、おのれだけの分にしか人が見えぬものだ」
冷たく突っ放されて、虎吉はぷっとふくれてしまった。が、本心を言えば虎吉もまた百合太郎の肌をねらっている小悪党なのだから、これ以上のらだんなに突っかかっていく勇気はない。
「のらはどうしても丹波まで行く気なのか」
ふっと百合太郎がまじめに声をかけてきた。
「そのつもりでいます」
「そんな心配にはおよばぬになあ」
「あなたこそ、よけいなことは気にかけることはない。好きにさせておくことです。ねこにもとらにもねずみにも」
のら太郎はのんびりとわらった。
「おうい」
うしろから大声で呼びながら、置いてけぼりをくった連中がやっと追いついてきたようだ。やがて程ガ谷の宿に近い並木道である。
「待ってやりますかな。道づれはなるべくおおぜいのほうがにぎやかだ」

のらだんなはそういって立ちどまった。
「いいのかね、だんな。だから、もっと急ぎやしょうっていったのに」
橋場の虎吉は不安そうである。
百合太郎は黙って木かげへはいって立った。
真っ先に駆けてくるのは北沢佐久馬である。今井がすぐその後につづき、大西はお兼の手をひいてずっとおくれている。お兼のすそが春風にもてあそばれて、遠目にひどくなまめかしい。
「やあ、貴公たちか、こんないたずらをやったのは」
右の目のふちにぽつぽつと赤い針の跡をつけた佐久馬は、のら太郎たちを見ると、かっとなったように目をむいた。
「ほう。貴公どうした、その目のふちは」
のら太郎が思わずまゆをひそめる。
「黙れっ。貴公たちには高輪でちゃんとことわってあるはずだ。なんで執念深くわれわれの跡を追うのか」
仕事のじゃまがまたふえたことになるし、佐久馬にはさっきの八つあたりもある。
「いや、あいにく東海道は一本しかないんでな、跡をつけなくても行く方面がおなじだと、こうしてよくいっしょになる」
「ならんならん。若さまはわれわれが御内命によってお供していくのだ。他人のおせっかいは迷惑だ」
「まあそう闘犬みたいに目くじら立てるものではない。貴公たちが余計な道草ばかり食っているから、百合太郎さんも道づれがほしくなるんだ」
「なにっ、百合太郎さんだと――」
「さよう。われわれは新宮百合太郎さんの江戸最初からの道づれ、なにも不都合なことはないではないか。それとも、貴公たちはなにか胸にたくらむことがあって、われわれが道づれになるのをきらうのかね」
「なに、もう一度いってみろ」

引っこみがつかなくなった佐久馬は、またしても刀の柄へ手をかけて殺気立ってくる。

「わからん男だ。内命で供をしているほどの男が、主人をよそに、そう人にけんかばかり売って歩いてどうするんだ」

おだやかにたしなめるのら太郎の冷静な目の色に、なんとなく深沈たる奥行きが感じられる。

——あの男、だれなんだろう。

やっと追いついてきた御守殿お兼は、思わずまじまじとのら太郎の顔を見つめてしまった。

いぬねこ問答

「お兼、行くぞ」

北沢佐久馬がのら太郎に食ってかかっている間に、百合太郎はお兼を呼んで、さっさと歩きだした。

「待ってくださいよ、若さま」

若さまは、やっぱり、あたしだけをたよりにしていると思うと、お兼はうれしくなって、いそいそと百合太郎に肩をならべていったが、なんとなくいま見てきたのら太郎のことが気になってしようがない。

だいいち、あきれた三人のばか侍などより、人物も男っぷりも数段上のようだ。いったいこの子とどんな関係があるんだろうと、それがまず心配になる。

「ねえ、あの人たちほっておいて、かみあいでもはじめやしないかしら」

お兼はそれとなく探りを入れてみた。

「捨てておけ。どうせみんな物好きばかりがそろっているんだ」

百合太郎はいっこう気にもしていないようである。

「あののら太郎とかいうの、だれなんです」

「だれだかわからぬ。江戸から道づれを買って出て、ついてきた男だ」

「じゃ、やっぱり若さまの体をねらってるんですね」

「気にするな」

「あのやくざ者みたいなやつは、のら太郎の仲間なんですか」

「あれは橋場の虎吉といって、下手な彫り物師だそうだ。わしの肌へぜひとらが彫ってみたいといって、いちばんはじめについてきた男だ」

「まあ、憎らしい。そんなことさせてたまるもんか。ようござんす、あたし追っぱらってやりますから」

「ほっておけ。とらを彫ってもねこにしか見えぬまの抜けた男など、からかってもしようがない。引っかかれでもするとつまらぬ」

「どいつもどいつなんですねえ。みんな若さまをねらっているんだから、男ってどうしてああけだものじみているのかしら」

そういってまゆをひそめたお兼からして、百合太郎を男と間違え、昨夜は女だてらにこっちから百合太郎の床の中へ押しかけていったことは、もうけろりと忘れているようだ。

「お兼、おまえこそねらわれないように気をつけたほうがいいぞ」

「あたしは大丈夫。変なまねをしたら、ひっぱたいて、赤恥をかかせてやります。——あら、みんなぞろぞろついてきたわ。さかりのついた犬みたい」

お兼はちらっとうしろを振りかえって、少しおかしくなってきた。

まずのら太郎と虎吉が肩をならべ、ちょっと離れて三人のあほう侍がかたまって歩いてくるのは、まだあのときのけんかの話し合いがうまくついていないのだろう。

それにしても、お兼がいちばん気になるのはのら太郎だった。腹がすわっていそうなだけに、百合太郎をねらうとすればこれがいちばん強敵である。

「若さま——」

「なんだ」

「あたし、のら太郎にちょっと掛けあってきま

すから、しばらく一人で歩いていてくださいね」
「なにを掛けあってくるんだ」
「性根をためしてみるんです」
「捨てておけ。よけいなことだ」
「いいえ、性の悪いやつなら、いまのうちに追っ払っておいたほうがいいんです」
一度思い立つと我慢のできない性分だから、お兼はわざと足をゆるめ、のら太郎と虎吉が追いついてくると、
「今日は」
虎吉には目もくれず、すまして、のら太郎にあいさつをして、肩をならべた。
「やあ、はりねずみのあねごか」
にっこりわらって迎えるのら太郎だ。
「なんですって」
「ねずみが一匹、ねこが三匹、いや、ここにも一匹いるから四匹か。いささかあぶない道中だと思っていたら、はりねずみが一匹加わった。おかげで安心して眠れる」

「けっ、のらだんなはねこのうちにはいらないんですかい」
虎吉がたちまちかみつく。
「わしは、まあ、のら犬ぐらいのところだろう」
「さかりのついたのね」
どうもこの二人は相性が悪いらしい。
「ちょいと、そちらの猫吉の兄さん」
たまりかねてお兼が、こっちから声をかける。
「おれは猫吉じゃねえ。橋場の虎吉って者だ」
「うかがっております。ねこ彫りの名人で、とらをほってもねこに見えるくらいなんですってね」
「ぬかしたな、あま」
「まあ、待ってくださいよ。猫吉の兄さんには後ほどごあいさつをします。少し黙っててくださいな」
「勝手にしやがれ」
虎吉はぷっとふくれて、そのじつ、今だと思ったのだろう、どんどん百合太郎のほうへ駆け

だしていく。
「あれあれ、なんて抜けめのないどろぼうねこなんだろう」
「あねごもあんまり口のいいほうじゃないな」
「のらさんだって、あたしに負けないわ」
「おれにはこれでもちゃんと分を心得ている、あのねずみはなあ、あねご、育ちがいいんだから、あんまり毒舌を仕込んでもらっちゃ困るぜ」
「ちょいとうかがっときますがね、のらさん」
「なんだ、改まって」
「あんたは江戸からあのねずみを追いかけているって話だけど、やっぱりさかりがついてるわんわんのほうなの」
「そうだなあ、さかりがついていても、いぬはねずみはとらないよ」
「ほんとうかしら——。じゃ、どうしてねずみのあとなんか追いかけてるんです」
「はりねずみのあねごは、どうしてあのねずみから離れないんだね、金はもう胴巻ごとあずけられてるって話じゃないか」
「あたしのはお金じゃないわ。あたしがあの子を抱いて寝てやらないと、あぶなくてしようがないじゃありませんか」
「だから、おれもよそながら番犬ぐらいはつとめてやろうと思ってね」
「なにか、そんな義理があんたにあるの」
「だんだんわかってくるさ、そんなことは自然にね」
これは聞きずてにならないとお兼は思った。
「ああ、わかった。あんたもあの人の御家来なのね。それとも、なにかもっと深いわけのある仲なの」
「なんでまたあねごはそんなことを気にするんだね」
のら太郎は自信ありげに、のんびりとわらっている。
「あたしは、あたしはあの子をだれにも取られたくないんです。あの子はあたし一人のものに

するんです。あたしはあの子がかわいくてかわいくて、食いついてやりたいほど好きなんです」

お兼はかっとなって、いささか気ちがいじみてくる。

「そうか、あねごは御守殿だったそうだから、女同士でままごとをしたことがあるんだな」

「なんですって」

お兼ははっとする。なんでも心得ているのら太郎だ。

「まあいい。好きなら好きでいいから、あんまり悪いことだけは教えてくれるな。もっとも、あのねずみはいざとなると、あねごより気が強そうだな。いらぬ心配かもしれぬ」

どうしてもかないそうもない相手である。

すると、佐久馬ねこがわざと挑戦するように二人のわきを通りぬけて、百合太郎のほうへぐんぐん歩いていく。

「ちきしょう、いやらしいやつ」

「怒るな怒るな。あのめくらねこには駄ねずみしかとれない」

「さっきのけんかはどうなったんです」

「ねこはめったにいぬにはむかってこないものだ」

「でも、気をつけたほうがようござんすよ。勤番ねこは三四、番犬は一匹ですからね」

「ありがとう。ぶっそうは承知の道中だ。まだまだ化け物はたくさん出る。まあ、せいぜい気をつけることにしよう」

たのもしげな男だなあと、お兼はなんとなくため息が出そうになってきた。

ふろのぞき

その日の泊まりは藤沢だった。神奈川からは五里あまりの道のりだから、まだ夕日が明るいうちに旅籠へ着くようになった。

一行は七人だから三間ぶっとおしの座敷へ案内され、いちばん奥の間が百合太郎とお兼、つぎの間が供侍の三人、いちばん手前がのら太郎と虎吉ときまった。そうきめたのは今日一人で横暴に振る舞っていた佐久馬である。

「だんな、大丈夫ですかねえ」

部屋をきめられて、めいめい旅籠のどてらに着かえるとき、虎吉がそっと心配そうにのら太郎に耳打ちした。

「なにが心配なんだ、ねこ」

「だって、やつらふすま一重のこっちで寝るんですぜ。草木も眠る丑満どき、すうっと音もなくふすまが一枚あけば、そこにねずみが二匹、昼の疲れでぐっすりと寝こんでいるって寸法です」

「つまらん心配をするな、武士は鼾の音で目をさまし、女はふすまの音で目をさますのがたしなみだ」

「そうですかねえ。あいにく目をさまさねえで、布団をけとばして寝ていた日にゃことですぜ」

「そんな不用心な女なら、たとえねこになめられてもしようがあるまい」

「ようし、だんながその気なら、あっしはのぞきに行きますぜ」

虎吉は本気になって、ごくりと生つばをのみこんでいた。

奥の間では、百合太郎が今日も着物を着かえようとしないので、お兼もどてら姿にはならなかった。が、なんとしてもふろへだけははいって、ひと汗流してきたい。

「若さま、おふろはどうなさいます」

念のために聞いてみると、

「そうだな、ほこりになったからひと汗流してくるか。お兼、いっしょにこい」

と、もうあっさり立ちあがった。

つぎの間の三人は思わず顔を見あわせてにやりとしたが、きのうの大西の失敗があるから、さすがに今日はだれも立とうとはしなかった。

——しめた。と思ったのは橋場の虎吉である。旅籠のふろは男女の区別はない。女がはいっているから、男は遠慮しなければいけないとい

うお触れもないはずだ。勝手なときに勝手にはいってかまわないふろなのである。

そうだ、ちょうどいい時分に知らん顔をして、ふろ場へ飛びこんでやる。

知らずに飛びこむんだからしようがねえや。まさか二人がはいっているのに、いっしょにはいるわけにゃいかねえが、すばらしい生き弁天の素肌だけは拝める。

——へ、へ、へ、しかられたら、ごめんなさいとあやまって出てきちまえば、それまでだからな。

虎吉はひそかにそんな野心をおこして、いい時分を計り、厠へ立つふりをして、ふらりと廊下へ出た。

ふろ場のあるような場所は、たいてい勘でわかる。足音を忍ばせて、そっとそっちの廊下へまがっていくと、まだおおかたの客が旅籠へ着くには少し早い時刻だから、あたりはしいんとして、さいわいどこにも人目はない。

——ちくしょう、うまくできてやがる。

虎吉は板の間がきしむのを気にしながら、抜き足差し足、ふろ場の板戸のほうへ忍び寄りながら、胸がわくわくしてきた。

百合太郎の裸身はむろん弁天さまのように後光がさしているだろうが、年増盛りのお兼のほうだって、あの体つきじゃむっちりと脂が乗りきっているだろうし、けっして捨てたもんじゃなかろう。できれば二人並べておいて拝みたい。

それにはお兼が百合太郎の背中を流してやっているところなんかがいちばんいいんだが、あいにく二人とも湯船につかっているところへ飛びこんだんでは、まさかいつまでも突っ立って見ているわけにはいかないのだから、まるっきり骨折り損になってしまう。

——一度この戸をあけたら、それっきりの勝負なんだからな。

虎吉は板戸へ耳をあてて、じいっと中の気配をうかがった。

ざあっと、かすかに湯の乱れる音がする。どうやら湯船を出たらしい。これで桶の音がすれば、弁天さまはたしかに流し場なのだ。かすかに湯の香りを立てて桜色にそまったかぐわしい裸身が、ちらりと流し場へ出て、小桶に湯を取ろうとしゃがむ腰のまろやかさまで、ありありとまぶたに焼きつけた虎吉は、なるべくお二人さんに願いやす。

ぐっと一つ息を吸いこんで、勝負、がらりと板戸を引きあけた。

「わーっ」

とたんに頭からいきなりざぶりと水を浴びせられて、虎吉は仰天しながら、どすんとそこへしりもちをつく。

「ねこ、こんなところへ、なにしに来たのさ」

するっとふろ場を出て、後ろの戸をしめきったのはお兼である。かいがいしいすそっぱしょりでたすきがけになっているのは、自分はふろへはいらず、百合太郎の背中を流してやって、こんないたずらもあろうかと、用心深く水桶まで用意して戸口に張り番をしていたのだろう。じつに颯爽たる姿だ。

「ごめんなすって。あっしはなにも、おまえさんがたがはいっていると知っていて、こんなあさましいまねをしたわけじゃないんで、——ただ、その、一っぷろあびてやれと思って、うっかり」

「お黙り。なんにも知らずにふろへはいりにきた者が、どうしてどろぼうねこみたいに床板を気にして、足音をぬすんできたんだえ」

「そ、そんなおぼえはねえ」

「よし、強情を張るんなら、あたしはこのことをあの供侍三人に話して、白いか黒いか拷問にかけてもらうから覚悟するがいい」

そんなことをされてはたまらない。もともとあの三人の勤番ねこは、こっちをじゃま者あつかいにして、なんとか難癖をつけようとしているところだから、ふろ場をのぞきに来たなどと

われながらまったく情けないことになってしまったものである。板の間の水の始末をして、ぬれた頭や顔は手ぬぐいでふけばどうやらかっこうはつくが、どうにもならないのは肩から胸へぐっしょり浴びた水の跡だ。これは急には乾かない。

「ねこ、その水はどうした」

こそこそと部屋へ帰ると、さっそくのら太郎に見とがめられてしまった。

「なあに、厠から出てきたら、いきなり女中のやつが水をぶっかけやがって、ひでえ目にあっちまった」

いそいでぬれたどてらを道中着に着がえにかかると、

「ふうむ、ここの宿屋じゃ家の中へ水をまくのか。ひどくまた癇性な宿屋だな」

と、のら太郎はわらっていた。

百合太郎たちがふろからあがってくると、隣の勤番三匹は、こっちへお先へともいわず、どかどかとふろ場へ出ていった。なにかにつけて、こっちを目の敵にしている連中である。

それが夜食の膳についたとき、とうとう爆発してしまった。

膳は百合太郎の座敷へならべられ、正面が百合太郎、その右が佐久馬を上席にして大西、今井の三人、それとむかいあった左側がお兼を上席にして、のら太郎、虎吉の順だった。

お兼がのら太郎より上へすわったのは、

「のらさん、あたしは若さまのそばがいいんだから、ここへすわってもいいでしょう」

と、相談をかけてのうえだった。

「いいとも、おまえは若さまのお守り役だからな」

席順などに文句をつけるのら太郎ではなかった。

その日は一同の膳に銚子が一本ずつついた。いっさいの采配は当番役の北沢佐久馬が取ったのである。

むろん、百合太郎は杯を口にしない。お兼も三つ四つのんだだけで、今夜はふすま一重が危険だから用心して、後はなんのかんのとのら太郎にばかり酌をしている。

今日当番の佐久馬は、昼間から失敗つづきで、大いにいらいらしていた。

第一に、あの台の茶屋の下でお兼をかたづけておけば、今夜は百合太郎とふすま一重である。仲間の二人は当番がなにをやっても知らん顔をしている約束だから、百合太郎がぐっすり眠りこんだころを見計らってしのびこんでしまえば、多少声ぐらいは立てても、完全にこっちのものなのである。

その声を立てたとき、いちばんじゃまになるのはのら太郎だ。それを途中で追っ払えなかったのが、第二の失敗である。

——どうしてくれるかなあ。

ふすま一重などというこんないい機会は、めったに得られるものじゃない。

お兼は女だから、いっしょにいたってそうじゃまにはなるまい。寝こみを襲えば、まさか含み針もまにあうまいから、これは大西と今井にまかせて縛ってしまえばいい。縛ってから二人でなにをしようと、それは勝手だ。後は百合太郎一人だから、有無はいわせない。

すると、どうしてもじゃまになるのはのら太郎だ。のら太郎さえやっつければ、虎吉はほっておいても一人で逃げだす。

少し酒がまわってきた佐久馬の熱ぼったい頭の中で、閨房にあえぎもがくお百合さまの白々とした肉体が、焼きつくように明滅しだした。

果たし合い

その夜、湯上がりの百合太郎は、紅顔輝くばかり、一段と美しかった。

気品において遠くそれにおよばぬお兼も、熟れた肌がいきいきとにおいうるんで、かえってそのしどけなさにひどく男心をそそるものがある。

「のらさん、もっと飲まない」

そのお兼がうきうきとした媚を見せて、さっきからのら太郎にだけ酌をしている。

「いや、わしはもういい。あねごは少しも飲まんな」

「だって、いっしょにねんねでしょ、若さまにお酒くさいといわれるといやだもの」

お兼のいろっぽい目が、ちらっと百合太郎を見てわらう。

それを真正面から見せつけられている佐久馬は、ついむらむらっとしてくるのを、やっとがまんしていた。

「あねごにもなかなか感心なところがあるんだな」

「あら、どうして」

「酒気をつつしむ。女のたしなみだ」

「そお——。ほめていただいたから、もう一つお酌」

自分の銚子を取りあげたが、あいにく空になっていた。

「あらあら、なくなっちまったわ。若さまのいただいてきてあげる」

「いや、それにはおよばん」

「いいじゃありませんか。のらさんは今夜ゆっくり寝ればいいんだから。——若さま、のらさんに若さまのお銚子いただいてもいいでしょう」

ひざ立ちになって、つと手をのばそうとするのを、

「ならん、やめろ」

とうとう佐久馬はどなりつけてしまった。じつは、その銚子は自分がねらっていたものだし、百合太郎のものだから、とくにのら太郎などにはやりたくないのだ。

「おや、どうしていけないんです」

「ならんといったらならん」

「だって、あんたのお銚子をくださいっていってるんじゃないですよ」

「黙れっ。だいいち、さっきから見ていれば、でれでれと、若殿の前で見苦しい。少しつつしめ」

「おお怖い。——若さまはわらって見ておいでなさるのに、なにもあんたがそう一人で怒らなくたってよさそうなもんですね。やいてるのかしら、あの人」

男を男くさくも思っていないお兼だから、そうあっさり出られると、怒った佐久馬のほうが引っこみがつかなくなる。

「下司、黙らぬか。貴様のような下司な女が御前へ出るのからして、わしはけしからんと思っているのだ」

「佐久馬うじ、おやめなさい。この道中はそんな格式張ったものじゃない。百合太郎さんがなにもかも承知していられるんだから、それは口にせぬことだ」

のら太郎がおだやかにたしなめた。

「貴公、いま百合太郎さんといったな」

たちまち聞きとがめる佐久馬だ。
「悪ければ、若さまといいなおします」
「黙れっ。貴公もまた素姓の知れぬ男だ。われわれは貴公たちの道づれにははじめから反対なんだ。しかも、貴公のつれているそこの下郎は、聞くところによると、さっき百合太郎さまのふろ場をのぞきに行ったという。そんな不埒を働いたやつを、貴公はなぜ手討ちにせんのか。それで武士が立つと思っているのか」
「そういう立派な口をきくのなら、あなたがたの中にも手討ちに値することをやった御仁がありはしないかな」
「なにっ」
佐久馬はぐっと詰まり、その隣の大西は思わず下を向いてしまう。
「どろ試合はおたがいにやめにしよう。あまり立派な口をきくと、どんなぼろが出てこないともかぎらんからな」
「どろ試合とはなんだ。無礼な放言は許さんぞ」
「もうやめなさい。そうわめき立てては相宿の者が迷惑する」
「よし、支度をして表へ出ろ。そこで話をつけてやる」
いい口実ができたと、佐久馬はすかさず挑戦する、裏へつれ出してたたっきってしまえばこっちの思うつぼだし、百合太郎もお兼も自分の勇気腕力に恐れてもうじたばたしなくなると、都合のいい計算を立てたのだ。
「つまり、刀で勝負をつけようというのかね」
のら太郎があきれた顔をする。
「そうだ。武士の意地、果たし状を突きつけられて、まさか逃げはうたんだろうな」
佐久馬は居丈高になる。
「よかろう。では、やるか」
のら太郎はにっとわらった。ばかなやつだといいたげな目の色である。
「大西、今井、見分役をたのむ。——おい、すぐ支度をしろ」

佐久馬はすっくと立って、あいのふすまをあける。そして、こんどこのふすまをあけるときこそ百合太郎はおれのものだとちらっと考え、急に勇気が出てきた。
大西と今井がつづいて支度をなおしにくる。
のら太郎も自分の部屋へ支度をしに立ったようだ。
「のらさん、あんたほんとうにやる気——」
追いかけてきたお兼の声が隣で聞いている。
「うむ、しようがない」
張りのないのら太郎の声音だ。
臆しているなと、佐久馬はうすわらいをうかべる。
「あっちは三人よ。あんた一人でいいの」
「たぶん大丈夫だろう。あねご、若さまのそばを離れちゃいかんぜ。先へ飯にして、さっさと寝ていることだ。明日は小田原までざっと八里の道中だからな」
「のんきねえ、あんたって人は、その明日の命があるかどうかわからないのに」
お兼の声があきれている。
やがて、ぱちんとさえた鍔鳴りがしたのは、相手はもう刀まで調べおわったのだろう。
——くそっ。
佐久馬はさすがに武者ぶるいをするのをおぼえた。

けんかねこ

宿の横町を二町ばかり奥へはいっていくと、急に野良がひらけ、そこの右手に手ごろな草っ原があった。空におぼろ月があるから、足もとには困らない。
「ここでよかろう」
北沢佐久馬を先頭にして、大西、今井の三人はつかつかとその草っ原へはいっていった。
少し離れて、のら太郎がゆっくりついていく。
「おい、支度をしろ」
佐久馬はのら太郎のほうへそういって、宿か

ら借りてきた下駄をぬぎ、下げ緒を取ってたすきがけになった。大西と今井は見分役だから、黙って突っ立ってのら太郎を見ている。

「いよいよやるのかね」

のら太郎は浮かない顔をして、これもたすきがけになりながら、

「物好きな男だなあ」

と苦笑した。

「この期におよんで世迷い言をいうな」

佐久馬は目をつりあげて、昂然と言い放つ。こんな食い詰め浪人などに負けてたまるものかという腹があるうえに、見分役の二人は味方だから、いざとなれば助太刀にまわってくれるという心だのみもあるのだ。

「世迷い言でも、人間は口がきけるうちが花だ。なにも自分から死にいそぎをすることはなかろう」

「なにっ」

「貴公はうぬぼれが強すぎる。ほかに聞く者がいないから正直に忠告するのだが、家来のくせに主人を手ごめにしてやろうなどという大それた野心を持つから、ついには身をほろぼすことになるのだ。改心するなら、今のうちだぞ」

「うぬっ、許さん」

図星をさされて、佐久馬はかっと逆上してきた。いや、今の今まで、一人に三人、敵はもうおじけづいているとばかり勝ち誇っていたのに、案外けろりとしてそんな口をきく。そこまで見すかされていたのでは、是が非でもたたっきってしまわなくてはという破れかぶれもあった。

「くたばれっ」

腰をひねって、だっと抜き打ちに横に払ってくるやつ、のら太郎はひらりと軽く飛びさがっておいて、

「えいっ」

空をきって体勢がくずれた敵の肩先へ、これも抜き打ちの、まったく目にもとまらぬ早業だった。

「わあっ」

したたか烈剣を左の肩へたたきつけられた佐久馬は、たわいもなく横っ倒しにぶったおれたまま、もう立ちあがろうとする気配もない。

「貴公たち、朋友の敵討ちをやるなら相手になろう」

のら太郎は息ひとつはずませていず、啞然と顔色をかえている大西と今井のほうへ大胆な目を向けた。

今井はあっとうろたえたように大西の顔色をうかがう。三人のうちでは大西倉之助がいちばん腕が立つのだ。

「いや、われわれははじめから見分役の約束なんだから」

その大西は、いそいで答えていた。

「わしもこんな乱暴はあまり好まぬ。両君がそのつもりなら結構。これで刃物三昧はおしまいにしよう。今のは峰打ちだから、後でそこに寝ている朋友の介抱をしてやっていただこうか」

のら太郎はわらいながら刀をぬぐって鞘におさめ、

「見分役、御苦労でした」

二人のほうへ会釈をして、さっさと草っ原を出ていく。

大西と今井は、ぽかんとそれを見送っているばかりだ。

――ばかなやつらだ。

のら太郎はなんとなく苦々しい。腕も才覚も人並み以下のくせに、人もなげな不敵な邪心を抱いて、昂然と威張り散らしている。これで目がさめなければ、いずれは自分で墓穴を掘るやつだと思った。

「のらさん――」

往来へ出て少しくると、うしろからお兼が呼んで、すっと肩をならべてきた。

「なんだ、あねごか。どうしたんだね」

「心配だから、そっと様子を見にきたんです。

びっくりしちまった。たのもしいのねえ、あんたって人」

お兼はため息をついている。

「いや、あの勤番ねこのほうが弱すぎるんだ。あれじゃねずみも取れないだろう」

「それだってあっちは三人なんだもの、ひきょうなやつらだからいっしょにかかられたら困りゃしないかと、ずいぶん気をもんじまったわ」

「人情があるんだなあ、あねごは。いざとなったら、針で助太刀をしてくれる気だったんかね」

「それにはおよびませんでした。ちょいと小憎らしいような度胸、あたし心配だわ」

「大丈夫さ。やつらもいくらか懲りたろうから、少しはおとなしくなるだろう」

「あんな勤番ねこのことじゃありません。あんたが心配なんです」

「おれが――？」

「お願いだから、その度胸で若さまをくどかないでくださいよ。こう見えても、あたしはひどいやきもちやきなんですからね」

「そういえば、あねごはどうしてお百合さんのそばを離れたんだ。まだねこが一匹残っているじゃないか」

橋場の虎吉の姿が見えないのである。みんなが留守になったのを幸い、猫吉は猫吉なりにつめを研いでいるのだろう。

「あんなどろぼうねこなんかになにができるもんですか。けど、あいつ薄情な野郎ねえ。あたしでさえのらさんのことを心配してこうして見にきているのに、一人で宿屋へ残るなんて、義理も人情も知らないけだものだわ」

お兼が吐きだすようにいう。

「あれははじめからそういう薄っぺらなけだものさ。ただお百合さんの肌だけねらえばいいんだ」

「ちくしょう。帰ったら、あたし、ぶん殴ってやる」

「かみつかれないようにするんだね。あれでも

男は男だ」

「負けやしないわ。生意気なまねなんかしたら、こんどこそふろ場がのぞけないように盲にしてやるからいい」

「困ったどろぼうねこだ。さっきは頭から水をぶっかけられてきたようだな」

「あたし、たぶんだれかがそんなまねをするだろうと思って、水桶を用意して待っていたんです」

「じゃ、あねごはふろへはいらなかったのか」

「そんなことしていたら、二人とものぞかれちまうじゃありませんか。いくらわたしがあばずれだって、まさか素っ裸じゃ飛び出してもいけないし、――でも、若さまはとても親切だわ。自分が着物をきてしまうと、お兼、こんどはわしが番をしているから、おまえふろへはいれって言ってくれるんです。うれしくなっちまって」

お兼はいそいそとしている。

「とにかく、あねご、今夜はふすま一重にねこが三匹ねらっている。油断は禁物だぞ」

「なら、あの三人、ずうずうしく帰ってくる気かしら」

「佐久馬ねこはどうだかわからんが、あとの二匹はたぶん帰ってくるだろう。あのねこどもにはなにか役目がありそうだからな」

「どんな役目なんだろう」

「さあ、どうせろくな役目じゃあるまい」

「のらさん――」

お兼が急にのら太郎の腕をぎゅっとつかんできた。

「なんだ、あねご」

「あたしがいちばん怖いのはあんただわ。たのむから、若さまに変な気をおこさないでくださいよ」

「心配するな。番犬はねずみはとらぬ」

のら太郎はのんびりとわらっている。

玉の肌

そのころ宿では——。

百合太郎の部屋と一間おいたこっちの部屋で、橋場の虎吉がただ一人、腕組みをしてしきりに考えこんでいた。

気違い侍どもがけんか支度をしてどかどかと出ていってしまうと、御守殿お兼もその跡を追って、そっと出かけていったようだ。

まもなく宿の女中がきて、膳をさげていく。後に残ったのは百合太郎と自分だけだ。まだ宵の口だから、旅籠はいそがしい盛りで、用のないところへは女中も番頭も寄りつかない。

——ちくしょう、こんなうまいときはめったにねえんだがなあ。

虎吉はかっかと体中が熱くなってくるのだ。

が、お兼にさっき頭から水をぶっかけられたばかりだし、いくらなんでも一人でのこのこと百合太郎の前へ出るのはなんとなく気がさす。

あんなばかなまねさえしていなければ、ねずみだって油断しているだろうし、こっちも平気でごきげんうかがいにはいっていけるのだ。

——しかし、待てよ。女なんて気まぐれなもんだ。

人前でからかわれれば、恥ずかしいから、いやなやつと怒りもするが、その実、からかわれるのを待っているってこともある。

これが勤番ねこやのらだんなら用心するってこともあるが、こっちは吹けば飛ぶような野郎で、ねずみのほうでもばかにしきっているだろう。だから、あべこべにねずみのほうで退屈まぎれにからかってやれという気になる。

そうなれば、もうしめたものだ。なんでも言うなりにへえへえとじゃれついていって、ほどよく遊んでやっているうちに、そこは男と女だ、ねずみのほうでだんだん変な気をおこしてくる。

——なにしろ二人っきりなんだからな、案外うまくいくかもしれねえや。

虎吉は急にずぶとくなってきた。それに、なにしにきたと頭からしかられるようなら、ごめんなさいとあやまって、おとなしく引きさがってくればいいんだ。ただにおいをかいでくるだけでも得である。

——よし、男は度胸だ。

そう思うと、矢も盾もたまらなくなって、もうのそりと立ちあがっていた。

廊下へ出るより、座敷づたいに行くほうが早い。あいのふすまをそろりとあけて、つぎの間へはいり、もう一つむこうのふすまをあければ、ねずみのいる座敷だ。

——なにをしていやがるだろう。

じっと耳をすましてみたが、きぬずれの音ひとつしない。

——ひょっとすると、うたた寝ってやつかな。

それならいっそう思うつぼだ。有無をいわせずに押さえつけてしまうことができる。ごくりと生つばを一つのみこみながら、そろりとふすまをあけてみた。

「あっ」

百合太郎はこっちへ背を向けて、行儀よく小机の前へすわりながら、旅日記でもつけているのだろうか、こっちを振りむこうともしない。そのすんなりとしたうしろ姿のみずみずしさ、争われないもので、閉めきってある部屋の中にほんのりと漂っている肌の香は、まぎれもなく甘い女のにおいだ。

「若だんな、書き物でござんすか」

虎吉はするりと中へはいって、後ろのふすまをしめた。

「ねこか。——なにか用か」

ちらっとこっちを振りかえった顔は、べつに怒っている様子もない。赤いくちびるがふるいつきたいほど色っぽい。

「いいえね、お侍たちがみんなけんかをしに出ていってしまったんで、若だんなが退屈してい

やしないかと思いやしてね」
そろりと虎吉はひざをすすめる。
「おまえはけんかに行かなかったのか」
「あっしはけんかはきらいでござんしてね」
「そうか、おまえの好きなのはふろのぞきだったな」
にっとわらって、百合太郎はまた書き物のほうを向いてしまう。
「ひでえや、若だんな」
虎吉はひやりとしたが、それをわらっただけですませているところを見ると、おまえならのぞいてもかまわないという気持ちじゃないだろうか。
「あっしは、若だんな、のぞくだなんて、そんな悪い気じゃなかったんです。お背中でも流してさしあげようと思いやしてね」
気をひくようなことをいいながら、するりともうひとひざ百合太郎のうしろへ近づく。
「背中はお兼が流してくれる」
こっちを見むこうともしない。油断しきった後ろ姿だ。
「お兼なんかより、あっしほうが力がありまさ。あっしはぜひ若だんなの背中が流してみてえんだ」
「盲にされるぞ。お兼は気が強いからな」
「かまいやせんとも――」
さっきはとうとう拝みそこなってしまったが、さぞ白羽二重のような玉の肌だろうと思うと、虎吉はさわってみたくてたまらなくなる。
「若だんな、お肩をたたきやしょう」
「それにはおよばぬ」
「そんなこといわねえで、少したたかしておくんなさいよ」
ふらふらっと立ちあがった虎吉は、夢中で百合太郎のむっちりとした肩へつかまって身ぶるいが出た。
「これ、それにはおよばぬというのに――」
「そ、そんなことをいわねえで、たのんます」

図に乗った虎吉は、むらがるような甘い女の肌のほてりを鼻に感じて、くらくらっとなりながら、もうどうにでもなれと、いきなり肩の手が胸乳をさぐりに行く。ふっくらとした乳房に手がとどくかとどかないかの瞬間、
「ううっ」
みぞおちへ激しい痛みを感じ、それっきりだった。
百合太郎の右ひじが痛烈な当て身を入れて、虎吉はどたんとあおむけに引っくりかえり、そのままだらしなく気を失ってしまったのである。
筆をおいてすっと立ちあがった百合太郎は、顔色ひとつ変えていなかった。まるで犬ころでも扱うように虎吉のえりがみを取って、ずるずるとつぎの間まで引きずっていき、そこへほうりだしてふすまをしめ、しずかに元の小机の前へ帰る。そのまま筆を取りあげて、なにごともなかったように日記をつけはじめるのだ。
まもなく廊下に人声がして、のら太郎とお兼が帰ってきた。
「若さま、けんかはのらさんの勝ちだったわ」
座敷へはいってくるなり、お兼はぺたりと百合太郎のそばへすわって告げる。
「そうか。物好きだな、おまえは」
「あら、どうしてさ」
「けんかなどはしたいやつにまかせておけばいい。わざわざそんなものを見に行くやつを野次馬というのだ」
「あんなことをいって――だって、一人に三人だもの、心配になるじゃありませんか。若さまは案外薄情なのね。のらさんがきられても平気だっていうんですか」
「おまえはまた、なんでそんなにのらのことばかり気にするんだ」
「いやな人、――やいてるの、若さまは」
お兼はそんなふうにとって、うれしそうな顔をする。

「お兼、つぎの間にねこが一匹てんかんをおこしているようだから、のらに教えてやれ」
「なんですって――」
お兼はびっくりして立ちあがり、がらっとふすまをあけた。虎吉がだらしのないかっこうをして、あおむけにひっくりかえっている。
「あらあら、のらさん、大変ですよ。あんたんとこのどろぼうねこが、あんなところでてんかんをおこしている」
「そうか」
そっちのふすまをあけてはいってきたのら太郎は、
「しようのないやつだ」
と、苦笑しながら虎吉を抱きおこし、背へひじがしらをあてて、ぐいと活を入れ、気つけがわりにぴしゃりと一つ横っ面へ張り手をくれる。
「わっ、いてえ、だんな、なにをするんだ」
きょとんと目をあいた虎吉が、急に顔をしかめた。
「なにいってんのさ。おまえがてんかんをおこして、こんなところへ引っくりかえっているから、のらさんが親切に活を入れてくれたんじゃないか。どうしてくれんかんなんかおこしたのか、正直に言ってごらんよ」
「あっ、いけねえ」
虎吉はやっと自分のしたことを思い出したのだろう。首をすくめながら、それでも百合太郎の胸をまさぐった右手をまじまじとながめている。
「ねこ、このつぎにはてんかんをおこす前に二つとない首が飛ぶぞ。ばかなやつだ」
のら太郎は苦い顔をして、さっさと自分の部屋へ引きとっていく。
「ま、待ってくださいよう、だんな。おいてっちゃいけません」
お兼の前にいたたまらない虎吉は、あわてて四つんばいにのら太郎の後を追いだした。

「ちくしょう。こんど変なまねをしたら、盲ねこにしてやるから」
考えてみると、急に腹が立ってくるお兼だった。

箱根越え

翌朝、藤沢の宿を立った一行の中に、北沢佐久馬の姿はなかった。さすがに身を恥じたか、彼だけは昨夜ついに旅籠へ帰ってこなかったのである。
しかし、百合太郎もお兼も、佐久馬のことは忘れてしまったように一言も口にしなかったし、むろんのら太郎も知らん顔をしていた。
その日の道中は、小田原の城下へ八里あまりの道のりである。昨日とおなじように、先頭は百合太郎とお兼が並んで歩き、つぎが勤番ねこの大西倉之助と今井新兵衛の二人、しんがりがのら太郎とねこの虎吉だった。
「ねこ、おまえの足の向く方角は少し違うようだな」
虎吉がこそこそと肩を並べてきたとき、のら太郎は冷やかすようにいってわらった。虎吉も昨夜あれだけだらしのない失敗をしているのだから、ふつうの人間なら当然恥ずかしくてついてこられないはずである。
「ひでえや、だんな。つい出来心なんだから、もう勘弁してくださいよ」
けさは虎吉もいつもの減らず口さえ出ず、神妙に小さくなっているようだ。
「わしにあやまってもしようがないが、しかしなあ、ねこ、こんど変なまねをすると、ほんとうに命がないぞ」
「へえ、もう本当に懲りやした。けっしてあんなまねは二度としやせん」
「そこまであきらめたんなら、もう江戸へ帰る気になりそうなもんだがなあ」
この男がこうしていっしょについてくる目的は、百合太郎を女と知って、その肌をねらう以

外にはなにもないはずなのである。
「だんな、そんな意地の悪いことをいわねえで、せっかくここまでいっしょにきたんでさ、もう少しお供させておくんなさいよ。あっしはついでに京大坂を見物してこようと思い立ったんでさ」
「そうか。まあ、好きにしろ」
煩悩の犬追えども去らずのたとえで、困ったやつだと内心苦笑しながら、のら太郎はほっておくことにした。
その前を歩いて行く勤番ねこの大西と今井も、今日はあまり元気がなかった。
「新兵衛、今日は貴公の当番だったな」
当番は百合太郎をその一日だけどう料理してもいい権利を持っている。が、新兵衛は今朝からまだ一度も百合太郎に近づこうとはしていないのだ。
「貴公、なにか秘策でも練っているのか」
「いや、べつにそんなものはない」
「すると、あきらめたのかね」
「あきらめもせんが、どうしてもうしろののら太郎ってやつがじゃまになる。考えてみると、ゆうべ三人いっしょにかかって片づけておいたほうがよかったかもしれないな」
いまさらになって、そんなことをいい出す新兵衛だ。
「佐久馬も後で、おまえたちは薄情だといって恨んでいたが、あののら太郎は三人がかりでもちょっとむずかしい相手だ。おれに自信があれば、どうせじゃまになるやつだから、むろんゆうべの機会をのがすものか」
大西もむっつりと本音を吐く。
「しかし、佐久馬はほんとうにやる気かねえ。どうしてもあいつをたたっきって本望を達しなければ承知できないと豪語していたが」
「勝手にやらせておくさ。だからといって、それまでわれわれはだまって見ている必要はないんだからね。明日はおれの当番だ、おれは遠慮しないぜ」
「ふうむ。貴公にはなにか自信がありそうだな」
「ないことはない」
「当て身のほうは大丈夫か」
川崎の旅籠の湯殿をのぞきに行って、百合太郎に当て身のお初をくらったのはこの男なのである。
「冗談いうな、あの当て身がこんどはものをいうんだ。見ているがいい」
「ほんとうか――？」
あんまり自信ありげにいわれると、新兵衛もちょいと気になってくる。
「貴公は女というものを知らなすぎる。友だちがいにほんの序の口だけを伝授してやるが、男にほれられて悪い気のする女なんてのは、およそないものだ。あの男はあたしに首ったけほれているとばかにすることはあっても、けっして悪い気持ちじゃない。ばかにしながらも、なんとなく好意を持ってくる。そこがこっちのつけ目だ。いいかね。おとといの当て身は、おれがほれているということを先方に十分納得させた一つの枷になるんだ。後は押しの一手という段階にはいる。ここからは中伝のうちにはいるから、ただでは伝授できんな」
「しかし、それにしても、あののら太郎がじゃまになりはせんかね」
「そうおくびょうになってはいかんな。よく考えてみたまえ、女を手に入れるということと、あの男とけんかをするということは、おのずと別問題じゃないかね。いくらあの男がやっきとなってけんかを吹っかけてきても、かんじんの玉の肌のほうさえ射落としてしまえば、敵はもう手も足も出なくなるんだ。つまり、雑兵どもは相手にせずに、いきなり本陣深くきりこむ奇襲という手が兵法にもあるじゃないか」
「なるほど――」
新兵衛はすっかり考えこんでしまった。いや、押しの一手だの、後家の手は通夜の晩に握って

おけなどというもっともらしい女話なら、なにも大西に伝授されなくても、だれもがよくわらい話にしていることだ。

が、いざそれを実行に移すとなると、現に大西と佐久馬の失敗を見て知っているだけに、用心深い新兵衛にはちょいとその決断がつきかねるのだ。

——まあ、おれはおれなりに、ゆっくり機会を待つことにしよう。

新兵衛は自重することにきめて、とうとうその日は手を出さずに小田原へはいってしまった。

翌日はいよいよ箱根越えである。上りが四里八町、下りが三里二十八町、その峠の上に箱根の関所がある。

「大西、今日は貴公の当番だな」

小田原の旅籠を立つとき、新兵衛はそういってにやりとわらった。

「うむ、まあ見ておれ」

「よろしい。ゆっくり貴公の奥伝を拝見することにしよう」

「いうにやおよぶ」

冗談とも思えぬ大西の意気ごみなのだ。

「それにしても、あののら太郎という男は、なんのつもりで百合太郎さまを追いかけているんだろうな」

新兵衛にはそれも一つの疑問なのである。

「なんのためって、いずれは色と欲の道づれさ。今日はひとつあの男から谷底へ突きおとしてやろう」

「自分が落ちないようにしろよ」

「まあ見ておれ」

大西はあくまでも強気のようだ。

いよいよ道が上りにかかってくると、大西はこれからやるぞというように、ちらっと新兵衛に目くばせしておいて、急に前を行く百合太郎とお兼のほうへ足を速めだした。

——無鉄砲なやつにはかなわぬ。

新兵衛はあきれて苦笑しながらも、なんとなくその無鉄砲さがうらやましい。

「若さま、ここからは箱根の難所にかかります。倉之助がおそばをかためます」

大西がもっともらしくうしろから声をかけると、

「ああ、今日は倉之助が当番の日か」

と、百合太郎は振りかえりながらにっとわらった。どうやら、百合太郎はなにもかも見抜いてしまっているようである。

「はあ、いっさいの責任がてまえにございますので」

わかったんならわかったでいいと、大西は度胸をきめてぬけぬけと答える。

「責任だなんて、わらわせるわ。ねこはねずみをとる責任があるんですってね、大西さん」

お兼はそんなあけすけなことをいう。

「黙れ。おまえはさがっておれ」

三人並んで歩いては、ほかの通行のじゃまになる道幅である。

「おやおや、当番だと思って、今日はいやに鼻息があらいわ。——若さま、じゃ、しばらく大西さんにお相手をさせておやりなさいませ」

お兼にすれば、昼間はそう心配しなくてもいい、ここで強情を張ってけんかをするにもあたらないと考えたので、あっさり後ろへさがってやった。

「若さま、坂道はえらいですからな。お疲れになったらいつでもお手を取ります」

大西は平気でそんなことをいいながら、百合太郎と肩を並べていく。

——どこまであつかましいやつなんだろう。

お兼はあきれながら、さて後ろへさがったものの、つぎを歩いているのは今井新兵衛だ。これもねこの仲間で、なんとなく陰険そうなやつだから、こんなやつと肩を並べたくはない。

道をよけてやりすごしておいて、のら太郎のくるのを待った。

「のらだんな、いいお天気ですねえ」
「やああねごか。どうした、百合太郎さんとけんかでもしたのか」
「いいえ、今日の当番は倉ねこなんですってさ。急に気がつよくなって、おれがお供をするから、あたしにどけっていうんです。坂道はえらいからいつでもお手を取りますだなんて、あの倉ねこは相当なもんですね」
「そうか。じゃ、あねごがくたびれたら、わしが手を引いてやろう」
「うれしいなあ、のらだんなは御親切だから、あたし大好きさ。けど、そこのとらねこがちょいと目ざわりね」
「大きなお世話だ。おれが目ざわりなら、てめえあの人と歩きな」
虎吉は意地の悪い目をして、前を行く新兵衛のほうへあごをしゃくってみせる。
「は、は、とらねこが威張っているわ。その元気で倉ねこに食いついてごらんよ。人のいないすきばかりねらって、だれかさんにちょっかいを出そうなんて、あきれたどろねこだわ」
「け、ごまねずみめ、おぼえていやがれ」
だれの前でも臆面なしのお兼は、虎吉にとっていちばん苦手だ。せめてもの捨てぜりふを残して、とっとと前へいそぎ出す。
「のらさん、あの野郎、まだお百合さんをあきらめないのかしら」
お兼が小声になって、まゆをひそめる。
「こけの一念というやつでな、どうもそうらしい」
「そういえば、倉ねこにしろあの新ねこにしろ、やっぱりそれなんだから、油断ができやしない」
「なあに、今日あたりから、もっと大きな化けねこがそろそろ出てくる時分だ。しっかりしなくちゃあだめだぜ、あねご」
「ほんとう、のらさん――」
「たぶんそういうことになりそうだと、わしはにらんでいる」

「いったい、どんな化けねこが出るの」
「さあ、それは出てみなければわからないが、箱根を越えると、この道中はだんだん物騒になってくるはずなんだ」
のら太郎はそれを人ごとのようにいって、のんびりとわらっている。

ごろんぼ剣客

のら太郎の予言した化けねこは、はたして案外早く一行の前へ姿をあらわした。
それは、一行が無事に箱根の関所を通り、芦の湖のほとりの掛け茶屋でゆっくり中食をとっているときであった。
今日は当番の大西が一人で幅をきかせているから、百合太郎は大西と一つ床几に休み、その床几とむかいあって新兵衛と虎吉がかけ、のら太郎とお兼は少し離れた床几に陣取っていた。
上りの者も下りの者も、ちょうどここが中食の時刻になるので、どのお休み所も相当に客が立てこんでいた。
「おや、のらさん」
食後の茶をのんでいた一つ床几のお兼が、ふいに顔色をかえて呼んだ。
いま表からぬっとはいってきた六尺豊かな旅のごろんぼ剣客とも見える男が、じろりと店の中を見まわしてから、つかつかと百合太郎の休んでいる床几の前へ寄っていって立ったのである。
「貴公、ちょっと表まで顔を貸してくれんか」
ごろんぼ剣客は、にこりと顔をほころばせながら、心やすそうに百合太郎にいう。
百合太郎は黙ってその無作法な男の顔を見あげている。
「貴公はだれだ」
そばにいた大西が承知しない。
「貴公は黙っていてくれ。わしはこの仁に用があるんだ」
ごろんぼ剣客はぎろりと大西をにらみつけ

る。
「いや、わしはこの方の連れだ。用があるんなら、わしが聞こう」
男を見せておくのはここだと思ったから、大西も負けてはいない。
「うるさいなあ。わしは貴公に用があるんではない。黙っていてくれというのに」
剣客がおっかぶせるように言っておいて、百合太郎のほうを向き、
「さあ、貴公、手間は取らせぬ。ちょいと表まで顔をかしてもらいたいな」
と、まったく高飛車である。
「ならんならん、用があるならここでいえ」
「おい、ここでおれが大きな声でその用をいうと、貴様たちの首が飛ぶぞ。それでもいいか」
「なに、首が飛ぶ」
相手のけんまくがあまりにも自信ありげなので、大西はちょっとたじろいだが、どう考えてもこっちにそんな恐喝されるような弱みはない。
「ばかなことをいえ。われわれは丹波――」
「倉之助、控えておれ」
なんと思ったか、百合太郎は急に大西を制して、
「よし、貴公の望みどおり、外へ出よう」
ごろんぼ剣客をうながして、しずかに立ちあがった。
「そうか、さすがに貴公は話のわかる仁だ」
剣客は満足そうにうなずいて、ゆうゆうと百合太郎の先に立って表へ出る。
「いかん、百合太郎どの。それは軽率だ。お待ちなさい」
大西があわてて後から茶店を出ようとすると、いつのまに集まっていたか、同じようなごろんぼ剣客が五、六人、ぬっと出口に立ちはだかって、道をふさいでしまう。
「おい、どいてくれ。じゃまだ」
「なにっ。なにがじゃまだ」

「道をあけてくれと言っているんだ。出口をふさぐやつがあるか」
「まあ、そうせくな。道をあけてもいいときがくれば、黙っていてもあけてやる」
「ふうむ。すると、貴公たちはぐるだな」
大西は思わずかっとなって、刀の柄に手をかけてみたが、相手はいずれも一癖ありそうなやつばかり六人もそろっている。
「新兵衛――新兵衛」
一人ではとてもかないそうもないので、いそいで新兵衛を呼んだ。
呼ばれた新兵衛はしぶしぶ立っていったが、六人に二人ではどうにも切って出る勇気などはない。
六人のやつらは、くるならこいというように、ずぶとい面構えで道をふさいでいる。
茶店の相客たちは、みんな青くなって息をのんでしまった。
「のらさん、どうするのさ」
お兼は気が気ではない。
「まあ、もう少し様子を見てからにしよう」
のら太郎は通りへつれ出された百合太郎のほうをそれとなく見ている。
百合太郎はそこに立って、ごろんぼ剣客となにか二言三言話しあっていたが、やがてすなおにうなずいて、その剣客と連れ立って三島のほうへ歩き出した。
「いいの、のらさん」
「まあ、大丈夫だろう」
そう答えているあいだに、それと見た六人の仲間たちは出口の道をひらいて、ぞろぞろと二人の後を追いはじめる。
それっというように、大西と新兵衛がその後を追ったが、六人のやつらが道幅いっぱいにふさぎながら歩いていくから、それを追い越して百合太郎に近づくことができない。
「さあ、われわれも出かけよう」
のら太郎は手早く勘定をすませて、お兼とい

ょしょに茶店を出た。虎吉がこそこそと後からついてくる。

いちばん先頭を行く百合太郎とごろんぼ剣客と、六人の仲間との間は十間ばかり離れ、大西と新兵衛の二人はその六人から二、三間のところをついていく。

のら太郎はその二人と四、五間離れて歩いているから、先頭からでは二十間ばかり離れていることになる。

「こんなに離れていて、いざというとき、まにあうかしら」

お兼は気をもまずにはいられない。

「おそらくその心配はないだろう。やつらがなにかするときには、あの六人がいっしょになる。ここから駆け出していっても十分まにあうさ」

「ねえ、いったい、あいつらなにんでしょう」

「そうだなあ。たぶん、だれかに金で買われているやつらだ」

「わかった。きっと北沢佐久馬の仕事だわ」

「まずそんなところだろうな」

「若さまはどうしておとなしくあんなやつにつれ出されたのかしら」

「関所近くで刃物三昧になると、後がうるさいからな。だいいち、大きな声ではいえないが、百合太郎さんは関所をだまして通ったことになる。それをいいたてられると、ただではすまなくなるんだ」

「じゃ、佐久馬ねこのやつ、そんなことまであいつらにばらしているんですね」

「そう見ておくほうが間違いがないだろうよ」

「ちくしょう、そんなことをして、後がどうなるか考えなかったのかしら」

お兼はもう承知できないと思った。

「ばかなやつさ。まるで自分で自分の墓穴を掘っているようなものだ」

道はやがて険しい下りになってきた。

いずれこのおさまりは血を見ずにはすまないだろうが、それにしてもなるべく関所から遠く離れた場所にしてもらいたいものだと、のら太郎はひそかに念じている。

やがて、一里ばかり峠を下ってくると、両側が深い松林になって、しばらく平坦な道になってきた。敵にとっても悪事を働くのだから、なるべく関所から離れたほうがよかったのだろう。もうここまでくれば、関所のほうの心配はなくなる。

——いよいよこの辺がくさいな。

のら太郎は油断なく先頭を見て歩く。はたして、ごろんぼ剣客が立ちどまって、百合太郎になにかいったと見るまに、百合太郎が軽くうなずいて、いっしょに松林の中の小道へ分け入っていく。

「あら、のらさん」

「わかっている。あねご、貴公は女なんだから、あんまり深入りはせんほうがいいぞ」

のら太郎はそういいおいて、急に足を速め出した。

そのあいだに、六人の仲間はくるりとこっちを向いて道をふさいでしまう。

「うぬっ、のけ」

大西と新兵衛は血相を変えて柄に手をかけたが、今度は六人の方もほんとうに切る気でむかっているのだから、その殺気に圧倒されてじりじりと後へさがるばかりだ。

「やあ、山賊の手下諸君、ひとつ威勢よくやりますかな」

つかつかと進み出たのら太郎が、不敵な面魂を見せて、にやりとわらった。

「なにをっ。くるか、貴様」

こっちは六人、まさか刀は抜けまいと、衆をたのんで油断しているのを見すまし、

「行くぞ。——えいっ、とうっ」

のら太郎は抜き打ちに躍りこんで、右を払い、つばめがえしに左をなぐ。

「わあっ」

たちまち二人が絶叫してのけぞり、残る四人

はそれやったと狼狽しながら抜きあわせる。
「えいっ、――とうっ」
のら太郎は四本の白刃をものともせず鋭くきって出るので、敵は思わず松林の中へ追い立てられる。
それに力を得た大西と新兵衛がそれぞれに抜力したので、敵は四人、味方は三人ということになる。
「のらさん、しっかり」
お兼は夢中になって、のら太郎の後からついていったが、ようやく立ちなおった敵の四人は、いずれもこんな真剣勝負にはなれているやつらとみえて、きるかきられるかの死にもの狂いになってくると、さすがに侮りがたい自力を持っている。
大西と新兵衛が一人ずつ、のら太郎は二人をむこうにまわして、そう簡単に勝負がつきそうもない。
――あっ、いけない。あたしはこうしちゃいられなかったんだ。
お兼ははっと百合太郎のことを思い出した。
百合太郎はこの中でもいちばん強そうなごろんぼ剣客に林の奥へつれこまれているのだ。しかも、そこにはひょっとするとあの佐久馬ねこが待っているかもしれないのである。
――ちくしょう、若さま、いまあたしが行きますからね、しっかりしてるんですよ。
お兼はがさがさと深い熊笹を踏みわけながら乱闘のわきをぬけて、いっさんに林の奥へ駆け出した。地形はしだいにつまさきのぼりになって見とおしがきかないから、百合太郎はどの辺までつれこまれたか、まったく見当がつかない。
――こんなことしていて、まにあうかしら。
お兼はかっと体中が熱くなってきた。
そのころ――。
百合太郎はごろんぼ剣客につれられて、一丘越したくぼ地の松林の中で、遠くこだましてくる乱刃の音を耳にしていた。

「さあ、もうこの辺でよかろう」
剣客はそこで立ちどまって、くるりとこっちを向く。
「佐久馬はどこにいるんだね」
百合太郎は顔色ひとつ変えていず、しずかに聞く。
「ほう、貴公はなかなかいい度胸のようだな」
あくまでも涼しい目の色を見て、ごろんぼ剣客はふしぎそうな顔をする。
「そんなに度胸がいいかね」
にっと百合太郎はわらった。ふるいつきたいような美貌である。
「貴公は関所破りをした。そうだろう」
「さっきもそんなことを言っていたようだな」
「うむ、わしは佐久馬からなにもかも聞いているんだ。貴公は女だそうだな」
「佐久馬から、わしをどうしろとたのまれたんだね」
「貴公をある場所までつれてきてくれ、関所破りだといえばきっと黙ってついてくるとたのまれた。しかし、途中でわしは気がかわったんだ。貴公のような美人を、むざむざ佐久馬にわたしてもつまらん。だから、約束とは違うこんな場所につれこんだんだ」
「そうか。じゃ、佐久馬はここにはいないんだな」
べつにおどろいている様子は少しもない。
「どうだ、貴公、もう観念したかね」
「観念とは――」
「わからないかなあ。貴公の連れはみんな、わしの門弟どもに、あそこできられてしまうのだ。ここまで貴公を助けにきてくれる者は、まず一人もなかろう。だから、これまでの運とあきらめて、わしはここで貴公に女になってもらいたいんだ。どうせ佐久馬の手にわたっても、貴公は女にされることになるんだ。おなじことなんだから、わしのいうことを聞いて、おとなしく女になってくれ。いいだろう」

ごろんぼ剣客の目がしだいにけだものじみてぎらぎらと燃えてくる。いまにもつかみかかってきそうな醜い面構えである。

三島の宿へ

「その方の名はなんというのか」

百合太郎は落ち着いた声で聞いた。

「わしか――。わしは赤樫藤五郎といって、これでも天流の赤樫といえば、東海道筋の道場がみんなふるえあがるほどの男だ。いまつれて歩いている門弟だけでも七人、亭主に持って損はないぞ。どうだ、わしの女房にならぬか。歩くのがいやなら、駕籠でも馬でもやとってやる。宿へつけばうまい物は食い放題、旅はおもしろいぞ」

さっするにこいつらは、党を組んで街道筋の町道場をあらして歩き、たのまれれば博徒の用心棒、悪事の手伝い、なんでも引きうけて、人に憎まれるのを世渡りにしているやくざ剣客どもなのだろう。

「つれている門弟は七人といったが、いまいたのは六人だったようだな。一人は佐久馬についているのか」

百合太郎は念のために聞いてみる。

「うむ、そうだ。あれは金主だからな」

「悪いことはやめて、わしの家来になってはどうか」

「おもしろい。昼間は家来で、夜は亭主というのはどうだ。うまい筋書きをこしらえれば、ひともうけできるぞ」

すぐそんなところへ知恵が働く。どうも救いようのない人間らしい。

「おまえはよくよく下司に生まれついているようだな」

「なにっ」

「早くその心を入れかえぬと、畳の上では死ねぬぞ」

「気が強いなあ、おまえは。おれはおまえが女だということをちゃんと知っているんだぞ。こ

こは箱根の山の中で、あたりにはだれもいない。おれがこうと思えば、おまえをここで裸にして手ごめにでもなんでもできるんだ。おまえはこの赤樫藤五郎が少しも怖くはないのか」

あまりにも百合太郎が涼しい顔をしているので、赤樫にはちょっとそれが不思議だったのだろう。

「べつに怖くはない。ただ汚らしく見えるだけだ」

ちらっと百合太郎に美しいまゆをひそめられて、

「なにっ」

と、赤樫は思わず醜悪な目をむく。汚いといわれたのが、悪党にもうぬぼれはあるから、ぐっと胸へこたえたらしい。

「ようし、汚らしい男が、貴様のその白い肌を汚くしてやるから、観念しろ」

「罰があたってもいいか」

なんの身がまえひとつしていない百合太郎なのだ。

「くそっ」

さっきから醜い野心をたぎらせていた赤樫は、つかまえてしまえばこっちのものだとばかり、舌なめずりをしながらいきなり大手をひろげてひとつかみと躍りかかっていく。

「下郎、推参――」

とっさに左足をひらいて半身になった百合太郎の手が刀の柄にかかって、抜き打ちにさっと胴を払う。

あっと、赤樫は一瞬光のように刀身が走るのをたしかにその目で見て、しまったと思ったときには、

「わあっ、――くそっ」

絶叫しながら、目の前が真っ暗になり、どさっと大きなずうたいを熊笹の中へたたきつけていた。

「まあ、若さま――」

やっと百合太郎の姿を丘の上から見つけて、

一気にそこまで坂を駆けおりてきたお兼は、あまりにもあざやかなその一瞬をはっきりと目撃して、どきりと棒立ちになる。

百合太郎はしずかに懐紙で刀をぬぐい、鞘におさめて、ゆっくりとこっちへ歩いてきながら、

「お兼、どうした」

と、あでやかな微笑をうかべている。顔色ひとつかわっていないのだ。

「あきれたなあ、あたし」

お兼はわが目を疑わずにはいられない。この美少年の、いや、洗ってみれば美しい乙女の、どこにあれだけの妙技と胆力がひそんでいるのだろう。

「驚くことはない。あの者は不埒を働いたから手討ちにしたのだ」

「強いんですねえ、若さまは」

「いや、あの者があほうなのだ。のらや勤番どもはどうした」

「いまあっちできりあいの最中なんです」

「そうか、たぶんもう片づいているだろう」

百合太郎の言葉に間違いはなかった。松山を二つばかり越えて元の街道ばたの林まで出てくると、もう敵の姿はなく、いまみんなで百合太郎をさがしに出かけようとしているところだった。

その辺にころがっている死骸は四つ、あとの二人は逃げてしまったらしい。

「おお、若さま、御無事でしたか」

まっさきに、さっそうと百合太郎を迎えたのは、当番の大西倉之助である。

「うむ。その方たちもけがはなかったか」

「なあに、あんなごろつき剣客の五人や六人――」

さっき芦の湖の掛け茶屋で、手も足も出ずに青くなったときの顔などけろりと忘れたような顔つきで、

「それより、あの大将ごろはどうなさいました』

と、さすがにそれを心配する。

「てんかんをおこしたから、そのままおいてきた」

「てんかんでございますか」

目をみはっている。

「ここに二人、あそこに二人、四人きられていますね。これみんな大西さんがきったの。お強いのねえ、あたしすっかり見なおしちまったわ」

お兼はわざとおおげさな感心のしかたをして、大西の顔を見てやる。

「さあ、若さま、いそぎましょう。こんなところにぐずぐずしていて、またじゃま者でもはいるとうるさい」

大西はお兼の言葉などきこえぬふりをして、

「一同、出発」

と、みんなに号令をかける。自分はまた百合太郎といっしょに歩くつもりらしく、そばを離れようともしない。

「倉之助、おまえは新兵衛といっしょに、しんがりをつとめろ。のらは先頭を行け。今のごろつきどものうしろには北沢佐久馬がいる。敵はまだ四人は残っているはずだから、十分注意するように」

珍しく百合太郎が自分から指図した。

「承知しました。――ねこ、こい」

言下にのら太郎は虎吉をうながして街道へ出ていく。その後へ百合太郎がお兼とつづく。

あてがはずれた大西は、むっつりとした顔つきで、もういそごうともしない。

「大西、一本やられたなあ」

新兵衛がくすりとわらった。

「なあに、いまに思い知るときがくるさ」

「しかし、あの大将ごろがてんかんをおこしたってのはほんとうかなあ」

「そうじゃあるまい。お兼がまた含み針を使ったんだ」

大西はうがったことをいう。

「そうだろうな。しかし、あぶなかったなあ、お兼がいなければ、鴨はいまごろ佐久馬の手に

わたっている」
「佐久馬のやつは思いきったことをしやあがる。油断はできん」
「こうなると、われわれとも敵味方ということになるな」
「うむ、ことによると、貴公とも敵味方になるかもしれん」
大西の百合太郎に対する執念もまた相当深いものがあるようだ。
峠は上りより下りのほうが足を痛めやすいが、しかし楽は楽だから、ぐんぐん道ははかどる。
「若さま、あたしちょいとのらだんなとうちあわせをしてきてもようございますか」
思い出したように、お兼が百合太郎にいった。
「うむ」
百合太郎はたいていのことは人まかせで、なぜだとか、どうしてだとか、そんなくどいことはめったに聞かない。育ちがそうさせるのだろうが、それだけに扱いいいようでいて気苦労がいる。
「あたしがのらさんになにを打ちあわせに行くのか、若さまはわかってるんですか」
「わからぬ」
「気にならない」
「うむ」
「張りあいのない人ね」
お兼にすれば、女の神経のこまかさで、もしやあたしがのら太郎に近づくのをお百合さんやくようなことはないだろうかと、それがときどき気になるのだ。
が、べつにそんなふうもないので、安心して、
「じゃ、行ってきますよ」
と、わらいながら駆け出した。
五、六間しか離れていないのだからすぐに追いつく。しかし、打ちあわせをするには虎吉がじゃまだ。
「ねこ――」

お兼はいきなりうしろから呼んだ。
「なにをっ」
むっとしたように虎吉が振りかえってにらみつける。
「ふ、ふ、自分でもねこだと観念しているんだから、かわいいところもあるわ」
まともに一発くわせると、
「承知しねえぞ、こんちくしょう」
と、ほんとうに顔色がかわる。
「およしよ。その勢いでさっきのごろんぼ剣客どもに食ってかかってくれれば、たのもしい虎吉さんなんだけど、――まあ、しようがない。ちょいとあたしはのらさんと話があるんだから、その間だけ若さまをたのむわ」
「ねこじゃたのみになるめえよ」
「あたしもそう思うんだけど、若さまが鉄砲弾よけぐらいにはなるだろうっておっしゃるのよ。いやかえ」
「勝手にしやがれ」
腹は立つが、なんとかしてもう一度百合太郎のきげんを取りなおしたい虎吉なのだから、やっぱりお兼の口車にはかなわなかった。

裏をかく

「のらさん、今夜は三島泊まりね」
のら太郎と肩をならべたお兼は、さっそく切りだした。
「うむ、そういうことになるな」
「あたし、三島はあぶなくはないかと思うんですけどねえ」
「うむ」
「悪いやつじゃあるけど、あすこであれだけ人をきっているから、宿改めということにでもなるとちょっとやっかいなんじゃないかしら」
「それもそうだな」
「それに、やつらのうしろに佐久馬ねこがいるとすると、関所破りというこっちには弱みがあるんだから、またどんないたずらをされないと

もかぎらない。また、三島から沼津へは一里半、いっそ今夜は沼津までのしたらどうなんかしら」

あねごはさすがに用心深い。じつは、のら太郎もはじめからそのつもりでいたのだが、

「百合太郎さんの足は大丈夫かねえ。八里の峠越えで、はじめての山道ではあるし、だいぶまいっているんじゃないかな」

と、それがちょっと心配である。

「歩くのはいやだといったら、駕籠ってものがあるんじゃありませんか」

「なるほど、それもそうだな」

「若さまあれで案外強情だから、疲れたなんて弱音は吐かないでしょうよ」

「よし、それなら今夜は沼津泊まりということにしよう。しかし、この話はだれにもいわないほうがいい。勤番ねこどもは佐久馬ねことぐるだからな。内通でもされると、夜道になるだけにやっかいだ」

三島の宿の入り口に、有名な三島神社がある。のら太郎は一行をそこへ誘って、社前へ参拝してから、

「百合太郎さん、今夜はもう一駅のして、沼津泊まりにしましょう」

と、はじめてそれを切りだした。

「うむ」

百合太郎はうなずいたきりで、あいかわらず人まかせである。

「若さま、足は大丈夫ですか」

お兼はそれとなく顔をみた。

「大丈夫だ」

「疲れたんなら、駕籠があるんですから、遠慮しなくてもいいんですよ」

「いや、それにはおよばん」

少しも弱みを見せないのである。

「大西当番――」

のら太郎が倉之助を呼んだ。

「なんだね」

のら太郎はそこまで考えていたのである。

「そうねえ。いざとなると、味方は若さまとのらさんとあたしの三人きりなんだから、考えるとあぶない道中ね」

「だから、あぶないと見たら、あねごはさっきのように百合太郎さんをつれてどんどん前へすすんでしまうことだ。おたがいに助けあってなんて了見をおこすと、かえって敵の術中に落ちやすい。今から約束しておこう」

「わかったわ」

お兼はうなずいてみせながら、この男はどうしてこうたのもしいんだろうと思い、百合太郎とはべつに、あたしはだんだんこの男が好きになってくるんじゃないかしらと、妙に心配にさえなってきた。

途中敵の襲撃も気にはなるが、百合太郎の足をいためてしまっては夜道がかけられないので、何度か休み休み峠をおりてきたので、三島の宿へはいったのはすでに夕方だった。

「貴公たちは疲れたんならここ泊まりにしてもいいんだが」

「よけいなお世話だ。他人の指図はうけん」

「じゃ、沼津まで行くかね」

「当然じゃないか。われわれこそ若さまのほんとうのお供なんだからな」

「あんまりたよりにはなりませんけれどね」

お兼がそっぽを向きながらまぜっかえす。

大西はじろりとにらみつけたが、さっきのことがあるから、べつに口に出してはなにもいわなかった。なにかいえば、もっと痛烈な悪態がかえってくるにきまっているからだ。

「では、そう話がきまったら、ここからは大西当番と新兵衛うじに先頭をつとめていただこう。しんがりはわしが守る」

のら太郎がきっぱりときめた。これからは夜になるし、二人は十分監視していないと、どんないたずらをやるかわからない。

「お立ちい――」

と、お兼が命令するように声をかけた。
大西と新兵衛はちょっと苦い顔を見あわせたが、しぶしぶと先に立つ。
次が百合太郎とお兼、しんがりはのら太郎と虎吉だ。
「ねこ、くたびれたなら、おまえこそこし泊まりにしてもいいんだぞ」
のら太郎はわらいながら虎吉にいった。
「冗談でしょう。あっしはそんな不人情な男じゃありません」
「そうか。じゃ、行け。弾よけぐらいにはなるだろう」
三島の宿を出はずれて、向新宿から八幡へかかるころ、日はすっかり暮れてきた。
が、空に月があるから、べつに足もとには困らない。
そのころから、先頭の大西と新兵衛の足がぐんぐん速くなり出した。意地になったのか、それともなにかひそかにたくらむことでもあってのことか。
のら太郎は日が暮れると、前との間隔を六尺ほどにつめている。
「のらさん、前のお二人さんはばかにおいそぎなんですけどねえ」
お兼も気になるとみえて、うしろへ声をかけてきた。
「腹でもすいたんだろう。勝手にさせておくがいい」
「どうせあてにはならない連中だからかまやしないけれど、あたしなんだか心配になってきた。この夜道、無事にすみそうもないような気がする」
「まあ、出たとこ勝負だな。しかし、ここに弾よけがついているから、鉄砲だけは心配しなくてもいい」
のら太郎は十中の八九、大丈夫だろうとふんでいるのだ。
こっちが夜道をかけると発表したのは、三島

の宿へはいってからであった。もし三島の宿に待ちかまえていた敵がそれと知ってあわてて小細工をするにしても、敵はこっちより前へ出ているはずはないのだ。追撃をかけてくるぐらいが、まあ関の山だろう。今のところまだそんな気配もない。ただ少し心配なのは、百合太郎の足だ。まだびっこをひいてはいないが、八里の山道はやっぱりこたえているらしく、だんだん足がおそくなってくるようである。沼津の城下までは、ここからまだ一里ばかり歩かなくてはならないのだ。
といって、なまじ元気づけるようなことでもいうと、これも相当強情だから、かえって意地になるおそれがある。
「あねご、夜道に日は暮れぬ。少し休んでいこうか」
喜瀬川橋へかかったところで、それとなくひと休みした。
のら太郎はわざと橋板の上へ腰をおろして、欄干に背をもたせ、両足を投げ出してみせた。
少し離れたむこうで、百合太郎も両足を投げ出している。
「けっ、だんなは案外おみ足が達者でござんすねえ」
虎吉は自慢そうにそこへしゃがみこんで、腰のたばこ入れを取り出していたが、さすがにお兼は敏感だった。黙ってこっちへ背を向けてすわって、百合太郎の足をわがひざの上へのせ、せっせとふくら脛をもんでやっているようである。
相手がお兼だから、百合太郎も黙ってもんでもらっているようである。
——こんなときお兼は役に立つ。
人は使いようだと、のら太郎はなにか胸あたたまる思いである。
石田村へかかったときも、またそれをやった。
血のめぐりのあんまりよくない虎吉にも、こんどはそれがのみこめたらしく、

「あっしにもお み足をもませてくれねえかなあ」

と、ひとりごとのようにいって、ぺろりと赤い舌を出していた。

そんなことで、沼津の城下へかかるころには、よっぽど前の二人には距離ができてしまったとみえ、影も形も見えなくなっていた。

「あの二人、どうしたんでしょうね」

またしてもお兼がそれを気にする。

「心配あるまい。宿の入り口あたりで待っているだろう。どうせ雷が鳴っても離れたくないやつなんだ」

「それならいいけれど、あたしはなにか魂胆があるんじゃないかと思って、それが心配なんです」

「しかし、わしの見込みでは、敵は前には出ていないと思うんだがな」

「そうかしら」

「むしろ追撃のほうが気になっていたんだが、いまだにそれもないとすると、もうそっちも心配はなかろう」

すでに松並木のあいだからちらちらと城下町の灯が見えるあたりまできているのだ。

しかし、それが大きな誤算であったことを、のら太郎はまもなく思い知らされたのである。

「若さま、お城下の灯が見えてきましたわ」

お兼がうれしそうにいう。百合太郎の足のために、ほっとした気持ちだったのだろう。

「うむ」

あいかわらず口数はすくないが、もう一息と見て、百合太郎もしゃっきりとしてきたようだ。

松並木の右手に一軒ぽつんと家が見えてきた。そのあたり竹やぶが黒々と夜風にゆれている。

近づいてみると、どうやら宿はずれの休み茶屋といった構えのようだ。

ふいに、その軒下から、ばらばらっと四、五人の人影が行く手へ飛びだしてきた。

「しばらく待たっしゃい」

いずれも六尺棒を持った足軽のいでたちだ。

「なにか御用か」

のら太郎が前へ出て聞いた。

「われわれは沼津藩の警固の者だが、あなたがたはいずれから来られたのですな」

「むろん、月のあるのを幸い、三島から夜道をかけてきたのだが――」

「すると、今日箱根を越えてこられたのですな」

「そうです。それがどうかしたのかな」

のら太郎は内心ぎょっとした。はたして、

「じつは、今日、箱根峠の笹原と三ツ尾の立て場の中間の松林で、浪人体の者を四人きって三島へ下った者がある。その者はことによると夜道をかけるかもしれぬから、取り押さえておいてくれるようにと関所から通知があったので、ここへ出張っている者です。役目によって、いちおうお腰のものを拝見したいから、あれへお越し願いたい」

という口上である。

「だれかまいったようだな」

茶屋の一枚あいている表戸のあいだから、水野家の定紋のついたちょうちんを持った上役らしいのが二人つかつかと出てきて、いきなりこっちの顔を改めるようにちょうちんを突きつける。

――しまった。

と、のら太郎は胸をつかれた。沼津の藩士では取り調べをこばむ口実がないし、刀を調べられれば人をきったことは一目でわかる。

いや、きったにはきった。理由があるのだから、その弁明は立つが、ひょっとして百合太郎が女だと知れると、関所破りの罪はのがれられない。

――はてな。

ふっとのら太郎の心に疑問がおこった。

あの山中の死骸が通行人の知らせで関所へ知れ、ここまで通知がきているとすれば、早馬に

しても、飛脚便にしても、かならず自分たちを追い越してこなければならぬ。三島を出てここへくるまで、自分たちを追い越していった者は一人もない。

だいいち、ここはまだ城下の入り口ではない。沼津藩士が警固につくとすれば、城下の入り口に木戸というものがあるはずだ。わざわざこんな寂しい一軒茶屋まで出張ってくるはずはなかろう。

すると、先行した大西と新兵衛の二人がこんなことをたくらんだものか。

それにしては、あまり手まわしが早すぎるようだ。ともかくも水野家の定紋のついたちょうちんを用意し、足軽の人数までそろえている。二人にはそんな時間がないはずだ。

そこまで考えてきて、のら太郎ははっと気がついた。

北沢佐久馬が先行したとすれば、この手配りができないことはない。

考えてみれば、こっちは百合太郎というあぶない人間をかかえているうえに、山中でともかくも人をきっている。今夜は三島の宿へとまるのを避けて沼津へ夜道をかけるだろうとは、少し知恵のまわるやつならだれしも考えることだった。佐久馬もそこへ山を張って、あれからすぐに沼津へ急行したのだ。

あるいは沼津藩に知人がいるので、こんな計画を思いついたのかもしれぬ。

――よし。

と、のら太郎は度胸をすえて、黙って上役二人の顔を見くらべていた。

「おてまえがた、いまも申すとおりだ。お手間はとらせぬ。あれへ御同行ください」

上役の一人がうながすようにいって、これはじろじろと百合太郎のほうを見ている。

「箱根の関所から通知があったのですな」

のら太郎がもう一度念を押す。

「そうです」

「お関所は相州小田原の支配下だが、笹原の立て場は伊豆の代官の支配地ではなかったでしょうかな」

ぼんやりと痛いところを一本ついてみる。

相手はあきらかにぎくりと目をみはったようだが、

「いや、お関所から当方へ手配の依頼がある子細がたしかにあるのです」

と、たちまち自信ありげに逆襲してきた。

悪党振り

「箱根の関所から、どういう御依頼があったのですかな」

のら太郎はおだやかに聞いてみた。

「今日のひるごろ、男五人女一人の一組みが関所を通った。男は武士が四人、町人一人だが、その侍四人の中のいちばん若い侍は、女が男に変装しているのではないかといいだした者があるので、念のためにいちおう取りしらべてもらいたいと申しきている。御承知のとおり、出女に入り鉄砲はいちばん厳重でござるからな」

取り調べの沼津藩士はそういって、じろりと百合太郎のほうを見る。

あきらかにうそだ。関所を通るときは、百合太郎、大西、今井の三人は笹山の藩士として通り、のら太郎はお兼と虎吉をつれて、べつべつに通ってきたのである。だいいち、そういう疑問が後で関所役人の間におこったとしても、そんなことを他藩の者に取りしらべてもらって、それが女だったとわかれば関所の重大な落ち度になるから、ぜったいに依頼などしてくるはずはない。この臨時警固所は、あきらかに沼津藩の命令ではなく、北沢佐久馬が黒幕でできた虚構のものにちがいない。

よし、それならこっちにも考えがあると思い、

「ごらんのとおり、われわれは男三人に女一人ですが」

と、のら太郎はまずそらっとぼける。

「さよう、先行の男二人には、あれにてお待ち願っております」

これでもかといわぬばかりの顔つきだ。

「しからば、その両人をこれへお呼び願いたい」

「当方では取りしらべたい儀があるから、あれへ御同行くださいと申しているのだが」

「同行をこばむのではありません。その両人に不審があるから、いちおうこれへお呼び願いたいのです」

「御不審かな」

沼津藩士は一寸のがれをいっているとでも取ったのだろう。

「おい、さっきの両人に、ちょっとこれへくるようにいってくれ」

と、足軽の一人に命じた。

「はっ」

その足軽が家へはいっていくとまもなく、大西倉之助と今井新兵衛の二人が往来へ出てきた。

「お呼びかな」

「いや、この御仁が貴公がたになにか不審があると申しているのです」

「われわれに不審――？」

二人は挑戦するように、のら太郎のほうをじろりと見る。

「今日の当番は大西さんだったな」

のら太郎はなに食わぬ顔をして話しかける。

「それがどうしたというんだね」

「あなたがたはどこの御藩中かな」

「とぼけてはいかん。われわれは丹波笹山藩松平志摩守の家来と、はじめからわかっているはずだ」

大西は反感を露骨にして答える。

「それはわかっている。わかっているから念のために聞くのだが、貴公たちは高輪の大木戸で会ったとき、われわれはこんどの道中、とくに御主君から百合太郎さまの警固を申しつけられている者だと申していたはずだ。あれは虚言だったのかな」

さすがに大西はぐっと返事につまったようだ。

「貴公たちは新宮百合太郎どのが笹山藩でどういう身分のお方か、よく承知しているはずである。そのお方が他藩の取り調べをうける。しかも、かようなむさくるしい小屋へ同行されようとしているのに、なぜ黙って傍観していられるのか。それではせっかく大切な君命にそむきはせぬかな」

「いや、けっして傍観しているのではない。当地を通行して、当藩で取り調べがあると申されれば、そのお役の者の言葉にそむくわけにはいかぬから、貴公たちのくるのを待っていたのだ」

大西は苦しい言いわけをする。

「よろしい。むろん、その領地へはいってその役目の者の言葉にしたがわなければならんのは当然の話だ。しかし、おなじ取り調べをうけるにしても、百合太郎どのはかような小屋で取りしらべられる身分のお方ではあるまい。そのおもむきを役人に申し入れ、貴公たち二人で百合太郎どののお供をして、城下の問屋場までお役の方々に同行してもらい、あらためて沼津藩重役の出張を求めなさい。たとえ微行の道中とはいえ、百合太郎どのが他藩の侮りをうけるようなことがあっては、笹山藩の恥辱、貴公たちが切腹したぐらいではすまぬ問題ではないかな」

理の当然に狼狽の色がかくしきれなかったのは沼津藩士たちのようだ。

「われわれにそんな余計な指図をする、いったい貴公は笹山藩にどんな関係があるんだね。藩のことは藩でする。他人の口出しは無用だ」

大西は居丈高になってきた。

「その必要があれば、わしも問屋場へ行ってから名乗る。今は仲間げんかをしているばあいではなかろう。沼津藩の方々にわらわれるぞ」

のら太郎はあっさりと突っぱねる。

「お兼、来い」

聡明な百合太郎は早くものら太郎の胸の中を読んだらしく、お兼をうながしてさっさと歩き出した。

「行くんですか、若さま」

人見知りしないお兼がすぐに後へつづく。

沼津藩士も足軽たちもすっと道をひらいて、今は押して止めだてもできないようだ。

「ともかくも問屋場までお供します」

そうしなくては形がつかないから、藩士の一人は大西と今井をうながして、百合太郎たちの後を追う。足軽二人がそれにつづいた。

「では、貴公、あれへきてくれ」

残った沼津藩士がのら太郎にいう。

「なんのお調べですな」

「いいから来てくれ」

頭から押さえるようにいって、藩士はさっさと先に立つ。これも形をつけているだけで、どうしても来いというのではないらしい。残った足軽二人も、こそこそとその男について家へはいってしまった。

「なあんだ、ばかにしてやがる」

虎吉がほっとしながらつぶやいたとき、いま三人がはいっていった戸口から、つかつかと出てきた旅支度の浪人風のやつがある。上背のあるがっしりとした男だ。つづいて一人、また一人。

「あっ、だんな」

思わず虎吉は青くなったようだ。後から出た二人は、たしかに箱根の松林から逃げ出した赤樫一味の二人である。

「おい、貴公」

先頭ののっぽがのら太郎の前へ突っ立って横柄にあごをしゃくった。

「なにか用かな」

「うむ、おれは赤樫藤五郎の舎弟分、黒川大蔵という悪党だ。貴様の命をもらうから刀を抜け」

自分から悪党だと名乗るだけあって、いうことも乱暴である。それだけ腕には自信があるのだろう。

「よしたほうがよかろう。まだ人のきれる腕ではなさそうだ」

こんな無法者にまともな問答は無益だと思ったので、のら太郎も頭からちゃかして出る。相手を怒らせて心気を乱してかかるのも兵法の一つである。

「なにっ、うぬぼれてやがるな、こやつ」

「おまえほどではないようだ」

「よし、来い。たたっきってやる」

「まあ、そうあわてるな。北沢佐久馬にたのまれたのかね」

「だれにたのまれようと大きなお世話だ。ただ、貴様をたたっきると十両になる、ちょいといい仕事なんでな」

この男は兄貴分の赤樫や仲間が松林できられたことは、それを口にしないところをみると、そうたいして問題にはしていないらしい。

「どうだ、わしが二十両出す。寝がえりを打たんか」

「貴様、ほんとうに二十両持っているのか」

「わしは二枚舌は使わん」

「しめたっ、三十両になる」

「なにっ」

「貴様をたたっきれば、貴様のふところはむろんおれの物だからな」

まったくあきれた男である。

「なるほど、おまえは心からの悪党らしいな」

「そのとおりだ。さあ来い、三十両」

大蔵はあくまでもふてぶてしくさっと抜刀した。

「よし、いくぞ」

こんな悪党なら、きっても後腐れはない。とっさに抜きあわせたのら太郎は、青眼に構えを取りながら、これはできる、油断はできないと思った。

「小僧、やるなあ」

こんな仕事にはなれているらしく、大蔵は平

何度死にもの狂いになってみてもおなじことだ。じりっじりっと後へ追い詰められて、いつか額から脂汗が吹き出してくる。

唖然としてそれを見ていた敵の一人は、のら太郎の右側面がちょうど自分の正面へきたとき、大蔵のほうへばかり気を取られているのら太郎だから、ここで不意打ちをかければきれると考えたらしい。

「とうっ」

いきなり横合いから狂気のように躍りこんで、さっと抜き打ちをかけた。

きらっと目にきらめく刀身を感じて、素早く横へ飛んだのら太郎は、空を切って前のめりになった敵の肩先へ、

「えいっ」

水もたまらず躍りこむ。

「わあっ」

そやつがのけぞったのと、正面の大蔵が得たりと一刀を振りかぶって「おうっ」火のように気で口をきく。

「まあ、おまえぐらいだろう」

のら太郎は、にっとわらってみせた。それだけの自信と度胸がのら太郎にはあるのだ。

「うぬっ」

この真剣勝負に自分をしのぐほどの気魄とゆとりを持っている。それが大蔵には意外だったらしい。しかも、うぬっと思ったときには、のら太郎ののびのびとした剣先がぴたりと自分ののど笛へはりついてきたのだ。

「えいっ」

大蔵はその切っ先を圧倒しようとして強引にじりじりと前へ出たつもりだったが、じつは足はくぎづけにされたままで、

「おうっ」

その引く息に乗じられて敵に間合いを詰められると、逆にじりじりと後へさがっている。

「えいっ」

「おうっ」

きりこんだのと同時だったが、味方ののけぞるのを見ていただけ、大蔵の剣のほうが少しおそかった。たぶんそうくるだろうと予期していたのら太郎の二の太刀は、そのまま身を沈めるようにしてつばめ返しに大蔵の胴を払っていたのだ。

「うーっ」

一瞬の差で大蔵はしたたかわき腹をきりあげられ、どっと前へ突んのめっていく。

残る一人の浪人者は、後をも見ずに三島のほうへ逃げ出していた。

「だ、だんな」

虎吉は真っ青になって、がたがたと歯の根があわないようだ。

毒蛾

時刻はやがて五ツ半(九時)に近いだろうか。街道の人通りはまったく絶えていた。

月かげを踏んで、先頭を百合太郎とお兼が黙黙と歩いていく。

五間ばかり離れて、大西と新兵衛がつづく。

足軽二人をしたがえた沼津藩士は、いつのまにかずっと後ろになってしまっていた。

——のら太郎というやつは恐ろしい。

大西はなにかむかむかしてしようがなかった。

腕からいっても、頭の働きからいっても、とうていこっちはかなわないうえに、どうやらただのおせっかいで百合太郎につきまとっているのではなく、主家になにかゆかりのあるやつだということが、さっきの問答でいよいよはっきりしてきた。まったく目の上のこぶである。

さっきの関所の策は、北沢佐久馬としては上出来だった。ともかくも沼津藩士の名をかたって、水野家の定紋のついたちょうちんまで手に入れてかかった一幕なのだ。

四人をあの茶店へ引きずりこみ、のら太郎は浪人切りの嫌疑、お兼はごまのはえ、百合太郎

は関所破りで、それぞれべつに沼津城下へ連行する。佐久馬の計画は、その途中で百合太郎になわをかけ、どこかの林へつれこんでしまうにあったらしい。

その目的さえ達してしまえば、あとの者は間違いだったからでもすませるのだ。

——うまく成功するかもしれんぞ。

大西は佐久馬からその手はずを聞かされて内心はおだやかでなかった。

その点からいえば、ああしてのら太郎に見事に裏を見すかされ、問屋場を持ち出されたのは、ちょっと痛快であった。

沼津の家来に化けた藩士も足軽も、問屋場へ行けば化けの皮がはがれるから、途中で消えてなくなるのは当然だ。

後に残ったのら太郎は、今ごろ茶店の裏にかくれていた浪人剣客の残党に取りかこまれているだろう。

のら太郎が浪人たちにきられるのを見とどけて、佐久馬は百合太郎を追ってくる。

——待てよ。

大西はふっと気がついた。

すると、結果としては事態は佐久馬の思うつぼへ進んでいるのではないか。ただ違うのは、百合太郎は一人でなく、お兼がついているということだけだ。そして、やがて追いついてくるのは佐久馬でなくて、のら太郎が浪人たちをたおしてくるほうが先になるかもしれないということもありうる。

——いずれにしても、機会は今のうちではないのか。

おれは今日まだ当番なのだから、なにも佐久馬に遠慮することはなかろう。新兵衛はむろんおれのいうなりに助力する約束になっている。今なら、むこうも二人、こっちも二人だ。うしろからふいに躍りかかって、おれが百合太郎の首をしめ、新兵衛にお兼の首をしめさせる。

——これなら十中の八九、失敗はない。

大西はごくりと生つばをのみこんで、じっと百合太郎のうしろ姿をにらんだ。

のびのびとして、しなやかな体つきである。この腕の中でふいに首をしめたら、あの柔軟な肉体がびくびく身もがきする。のがれようがなくて、ついに失神状態におちいる。

手足を縛り、口にさるぐつわをして、麦畑の中へかつぎこむ。ようやく息を吹きかえしたときは、もうあのすばらしい乙女の体はわがものになっているのだ。

今のうちだぞ。佐久馬にしろ、のら太郎にしろ、どっちか追いついてきてももうおそい。

大西はそれとなくうしろを振りかえってみた。にせ藩士も足軽たちもずっとおくれたとみえて、ただ月かげに青い道がからんと光っているだけだ。

「新兵衛、おれはやるぞ」

かっと全身の血をたぎらせながら、大西はそっと新兵衛の耳にささやいた。

「な、なにをやるんだ」

そのけだものじみた大西の目の色を見て、新兵衛はおよそその意を悟ったらしく、あえぐように聞きかえす。

「知っているのは、おれと、貴公と、お月さまだけだ。おれは百合太郎をしめる、貴公はお兼をしめろ」

「大丈夫かなあ」

「大丈夫だ。気を失ったら縛って、おれはあの林の中へかつぎこむ。貴公は貴公の勝手にするがよい」

新兵衛はちょっと返事をしぶっている。

「新兵衛、今日はおれの当番だ。約束を忘れやせんだろうな」

「うむ、それは忘れはせんが、しかし——」

「いや、なにもいうな。おれはやる。おれはどうしても決行する。いいな」

「そうか。やむをえぬ。武士の約束だからな」

新兵衛はそっとため息をついたようだ。

大西はもう少しずつ足を速めて、五間の間隔を自然に詰めていく。

やがて城下も入り口に近く、右手に雑木林が黒々と見えてきた。左手はからっとした麦畑である。

「若さま、このまま問屋場へ行ってもいいんですか」

お兼はちょっと心配である。百合太郎の男装がばれると、どんな言いわけがあるにせよ事が面倒になりそうだし、自分もまた宿役人の前ではあまり大きな口がきけない弱みを持っている。

「いや、心配するな」

百合太郎は事もなげにいってのける。

「そうかしら。のらさんはどうしたんでしょうねえ。あの人さえいてくれればいくらか安心なんだけど」

こうなると、のら太郎だけがたよりなのだ。

「お兼が弱音を吐くのはおかしいぞ」

「いいえ、あたしはたいていなことには驚きもしませんけど、役人だけはどうも苦手なんです」

「そんなことはない。おまえは百合太郎の召し使いだ」

「ほんとう、若さま」

お兼はうれしかった。百合太郎がその気でいてくれれば、度胸をきめて、またなんとでもいい張る手はあるのだ。

「うれしい、あたし」

思わず目頭が熱くなって、そっと百合太郎のたもとを握ろうとしたとき、ぱっとうしろから襲いかかってきたやつがある。

「ああ、なにすんのよう」

油断しきっていたところだから、さしも敏捷なお兼も身のかわしようがなく、

「しずかにしろ」

その声を今井新兵衛だと聞き、しまったと思ったときには、のどへたくましい腕がまきついて、ぐいと力いっぱいしめあげられていた。

ただ両足をばたばたさせるだけで、もう声さえ出ない。そして、そのうつろになりかけていく目が、おなじように百合太郎が大西にうしろからしめあげられているのをちらっと見て、

——ちくしょう、ちくしょう。

と、身もがきしながら、しだいにあたりが暗くなってくるような気持ちだった。

しかし、事実は、大西に襲われた百合太郎はとっさにあごを引いていたから、大西の腕は十分のどへかからなかった。

「うぬっ」

大西はあせって、力まかせにぐいぐい腕をしめあげる。

体勢は百合太郎にとって不利だ。全身がのびきって、大西の胸へ頭をかかえこまれていく。

が、もう一息とあせった大西の腕が、思わずあごをすべって口へきた。

かあっとその腕へ百合太郎がかみついたのである。

「あっ」

われにもなく大西の腕の力がゆるんだとたん、百合太郎は自分から強引に腰をおとしてするりと下へぬけ、しりもちをつきながらも、さっと右手で大西の足をすくっていた。

十分心得のある百合太郎に足をすくわれたのだから、大西もまたひとたまりもなくどすんとしりもちをつく。

その間にすっくと立ちあがった百合太郎は、

「不埒者っ」

抜く手も見せず、さっと大西の肩先へきりつけたから、

「わあっ」

大西は血煙あげて、そのままうしろへのけぞりたおれていく。

「新兵衛、そこ動くな」

凛然と一喝した百合太郎は、血刀をふりかぶって、お兼をしめあげている新兵衛のほうへつかつかと進む。

「あっ」
と、青くなった新兵衛は、さすがに主人に手むかいはしかねたのだろう、いきなりお兼を突っぱなして、脱兎のように三島のほうへ逃げ出した。
それと見て、百合太郎はべつに追おうとはせず、血刀をぬぐって鞘におさめ、
「お兼――、お兼」
お兼のそばへ寄って抱きおこしてやる。
「あ、若さま」
あやうく意識を失いかけていたお兼は、はっと百合太郎を見あげたが、息がせつなく肩に波打って、急には立つこともできない。
「気がついたか、お兼」
「ちくしょう――ちくしょう、あたしはくやしい」
気がついてみると、勝ち気なお兼は悔しさがどっと胸へこみあげてきた。身もだえせずにはいられない。
「立てるか」
「立てます」
意地だから無理にぐいと立ちあがって、思わずよろけるのを、百合太郎はうしろから支えて、
「無理をするな」
とわらい、つと身をかがめて着物についたほこりを払ってくれる。
「もったいない、若さま」
お兼ははっとした。
「かまわん。しかし、思わぬ不覚をとったな。のらには黙っておれよ」
「は、はい」
あやうい命が助かったよろこびと、百合太郎のうれしい心づかいと、お兼は胸が熱くなってきて、われにもなく涙がぼろぼろとあふれてくる。
「どうした。どこか痛むか」
「いいえ、あたし、うれしいんだか、悔しいんだか、自分でもわからない」

「そう激してはいかん。事はもうすんだのだ。こんどから油断しないように心がければ、それでいいのだ」
肩を抱くようにして、おだやかになぐさめてくれるのである。
「あたし、こんどこそ油断はしません。ちくしょう、新兵衛のやつ、いまに見るがいい」
「さあ、いそごう。わしは疲れた、早く旅籠へ着きたい」
「そうでしたね。こんなとこでいつまでもぐずぐずしていたってしようがありませんでした。行きましょう」
沼津の家来たちが追いついてくるとまた面倒である。二人はどっちからともなく手を取りあって、城下町のほうへ歩き出した。
「若さま、今夜沼津へとまって大丈夫かしら」
少し落ち着いてくると、お兼は急にそれが心配になってくる。
「じつは、わしも今、それを考えていたところだ」
「これで問屋場へは行かなくてもすみそうですけど、宿改めでもされるとうるさいし、――でも、若さま、くたびれているんでしょう」
沼津へとまれないとすると、つぎの宿は原宿で、沼津からまた一里半歩かなくてはならないのだ。
「お兼、野宿はどうだ。それなら安心だろう」
百合太郎が思いきったことをいい出す。
「野宿ですか」
季節からいっても、まだ野宿には少し寒すぎるだろう。
「あたしはかまわないけれど、若さまが風邪でもひくと大変ですからねえ。――おや」
お兼はふっとうしろへ聞き耳を立てながら振りかえった。
何人かの人数が追ってくるらしく、ひたっひたっという速い足音が耳についてくるのだ。

庚申堂の中

北沢佐久馬は沼津藩士に化けた三人をしたがえ、茶店小屋の表でごろんぼ剣客黒川大蔵がのら太郎にむかっているあいだに、裏手から街道へまわって出て、どんどん百合太郎たちの跡を追っていた。

一味の、いま同行している三人と、百合太郎についていった三人あわせて六人は、木瀬川の博徒定九郎常の身内で、藩士に化けた二人は用心棒、足軽に化けた四人はばくち打ちのやくざである。黒川大蔵が定九郎常を知っていたので、身内の者六人を借りて、茶店小屋で一芝居打ったのだが、のら太郎一人のために、この芝居ももう一歩というところでどうやら失敗におわった。

藤沢の宿での真剣勝負を入れると、これで三度目の失敗ということになる。

――くそっ、いまに見ろ。

佐久馬は無念だが、どうにもしようがない。が、今夜はおなじ失敗にしても、まだ一縷の望みが残っているのだ。

先行しているのは百合太郎とお兼の二人、ついている仲間の大西、今井に、定九郎常の身内三人、うまくいけば、むしろいちばんいい機会が来たと見て見られないこともない。

ただ問題なのは大西と今井である。仲間ではあるが、この二人にとっても百合太郎をねらうとすればまたとない機会なのである。しかも、彼らにその度胸さえあれば、こうしているあいだにも彼らにはそれが実行できるのだから、考えてみると佐久馬は気が気ではない。

「一同、もう少しいそごう。獲物は目の前にいるのだ。お兼という女は、すくなく見ても百両は持っている。金は貴公たちで分けるがいい。お兼も貴公たちでいいようにしろ」

「うそはねえでしょうね、だんな」

やくざの一人が念を押す。百両なら十人で分けても十両にはなるのだ。

「わしは二枚舌は使わぬ。しかし、前に行った連中がこっちより一足早く仕事をしてしまっていると、それまでの話になる」

この一言はたしかにきき目があった。

「いそげ。百両だぞ」

「合点だ」

おおかみどもの足が走るように速くなった。うしろをふりかえってみても、だれも追ってくる気配はない。大蔵とのら太郎の勝負が長びいているのだろう。これはどっちが勝つにしても、長びくだけ思うつぼだ。両虎戦えばの口で、両方がたおれてくれればますます結構である。

こうして月明の街道をいそいだ一行は、まず、道端に休んでたばこを吸っている仲間三人ののんきな姿を見つけた。

「どうしたんだ、おまえたち」

こっちの用心棒野田権左衛門というのが聞いた。

「どうしたといって、問屋場はちょっと苦手だでな」

むこうの組の用心棒島本勘兵衛が答える。

「そうか。じゃ、女の持っている百両はわれわれ三人で山分けにするから、まあ、ゆっくりそこで休んでいるがいい」

野田用心棒はにやりとわらって佐久馬の後を追う。

「なにっ、百両だと」

島本組はいっせいに立ちあがった。

「おい、待て――なるほど、そういう段取りになるのか」

「かまわん、かまわん、ゆっくりしろ」

「そうはいかん。つまり、早いもの勝ちということになるんだな」

「戦は一番槍ということにきまったもんだ」

一行は七人になった。その先頭を行く佐久馬は、

――こりゃいかん。あっちは二人と二人にな

った。

しかも、二人は女で、二人は男だ。絶好の機会ということになる。いよいよ気が気ではない。

そこへ、意外にも今井新兵衛が一人でいっさんに走ってきて、こっちを見かけると、ひょいと道のまん中へ立ちどまったのだ。

「どうした、新兵衛」

大西がやったなと、佐久馬はぎょっとする。

「えらいことになった。大西がきられた」

「なにっ。——だれにきられたんだ」

「百合太郎さまにだ」

「ふうむ。手出しをしたんだな」

大西ほどの男がきられたということより、先に手出しをしたことのほうが憎い佐久馬である。

いっしょに走り出した今井は無言だった。

すぐに大西のたおれている林の前へかかった。大西は道のまん中へあおむけに引っくりかえって、肩からどす黒い血が白い道に流れていた。

佐久馬は道をよけて通りながら、それをちらっと見ただけで、足をとめようともしない。

——よし、獲物はもう近い。

わくわくと胸がおどってきた。いっしょに走っている新兵衛など、もう眼中にない。

——しかし、どうしてあんなにむぞうさに大西はやられたんだろう。

いちばん使い手だったはずだがと、はじめてそれが頭にのぼってきた。そうか、いちおう口でくどいているところを、ふいにやられたんだ。ばかなやつだと思う。おれはいきなり手足を縛りあげてしまう。料理はそれからだと考えて、うすら笑いが顔にうかぶ。

——はてな。

もう追いつくはずなのに、いっこう姿が見あたらない。道はすでに城下はずれにかかって、いま松林を背にした庚申堂の前を通りぬけた。むこうには寺らしい建物が目につくだけで、庚申堂の前側も松林である。

「おい、だれかあの庚申堂のきつね格子をあけてみろ」

佐久馬はふっと気がついて立ちどまり、後からくるやくざどもにいいつけた。

「ちげえねえ」

足軽やくざが一人、気軽にばらばらと庚申堂のぬれ縁の前まで走った。

が、さすがにいきなりきつね格子へ手をかけようとはしなかった。そこで立ちどまって、そっと堂へ耳をすましてから、ぬれ縁の端のほうへあがって、じっときつね格子の中をのぞきこむ。

「あっ、だれかいやすぜ。——女だ」

そいつはばっと下へ飛びさがりながら叫んだ。

「なに、いたか」

つかつかと佐久馬はぬれ縁の前へ進み、一同が緊張しながらそれっとばかり佐久馬のうしろを取りかこむようにする。

「百合太郎どの、北沢佐久馬です。けっしてお手むかいはしませんから、これへお越しを願います」

佐久馬はまずおだやかに申しいれてみた。

堂の中はしいんとして、なんの返事もない。

「拙者はのら太郎という男にこそ恨みを持つ者ですが、あなたさまにたいして大西のような不埒を働く者ではございません。かならずお国もとまで無事に警固いたしますから、御安心あってそこをお出ましください」

言葉はいかにももっともらしいが、それを突っ立ったままいっている無礼には少しも気がつかない佐久馬だ。

むろん、中から返事のあるはずはなかった。

——くそっ。

佐久馬は内心舌うちをして、

「あまり強情になさると、かえっておためにならんのですがなあ」

と、そろそろ地金が出てくる。
「ふん、たぬきがとうとうしっぽを出しやがった」
お兼のつぶやくようにいうのがはっきりと耳につく。
「お兼、出てこい」
佐久馬が怒気を含んで一喝した。
「なまお言いでない、家来のくせに。いま若さまはお疲れなんだから、明朝までおとなしく待っていなさい」
「よし、出てこなければ堂へ火をかけてやるぞ」
「罰があたってもよかったら、やってごらん」
内と外とのロげんかではきりがない。外へおびき出してしまえば、こっちは大の男が八人がかりだから、なんとでもなるのだ。
幸い、足軽に化けたやつら六人は、手に手に六尺棒を持っている。
「おい、おまえたち、その棒であのきつね格子をたたき破ってしまえ。しかし、気をつけないと、あの女は含み針を使う。腰を低くして、腰板のほうからかかるんだ」
佐久馬が足軽やくざどもに命じる。
「だんな、百両のほうとあの女は、間違いなくいただけるんでしょうね」
やくざどもも抜けめがない。
「それはやる。女は組み伏せた者が自由にしろ」
まるで山賊の沙汰だが、やくざどもは現に獲物が目の先にぶらさがっているのだから、
「合点だ」
「それ、たたっこわせ」
わあっと勇み立って、きつね格子へ殺到していく。六人に六本の棒でかかられたのでは、すでに風雨にさらされて古びたきつね格子などひとたまりもないだろう。

敗走

「待てっ」
このとき、のら太郎がようやく追いついてき

て、横合いからばらばらと庚申堂の前へ走り出た。
「あっ、野郎」
「出やがったな」
一瞬思わずひるんだ足軽やくざどもも、相手は一人だし、騎虎の勢いで、
「かまわねえ、やっつけろ」
「たたき伏せてしまえ」
と、いっせいに棒を振りかぶってきた。
「手むかいするか」
なるべく殺生沙汰を好まぬのら太郎だが、こうなっては戦うよりほかに道はない。
「えいっ。——とうっ」
敵ががむしゃらに飛びこんでこようとする出ばなを、それより早くこっちから躍りこみざま、抜き打ちに右を払って、返す二の太刀は左をなぎ、さっとむこうへ飛びぬける。
「わあっ」
きられた左右の二人が悲鳴をあげ、前後してのけぞりたおれるあいだに、くるりと体勢をかえしたのら太郎は、息もつかせず、
「えいっ、——おうっ」
三の太刀、四の太刀を、火のように払って、ないで、元の堂の前へ立つ。
「ううっ」
「ちくしょうっ」
また二人、悲鳴をあげて、のけぞって、またたくまに四人が戦闘力を失ってしまった。
六人が二人になっては、もうその二人は生きた空もなく、
「わっ、先生、助けてくれ」
ばたばた二人とも真っ青になって用心棒のほうへ逃げ出す。
「うぬっ、味なまねを——。来い」
野田用心棒と島本用心棒が同時に抜刀した。二人に一人だから、なにくそっという気があったのだろう。しかも、うしろにまだ二人、味方がひかえているのだ。

が、のら太郎の剣はさえていた。
「えいっ」
いい気になって、うっかり野田用心棒がわずかに半歩つと前へ出たところを、敏捷無類、だっと躍りこんで、その気魄にあっと野田がひるみ、夢中で刀を振りかぶろうとする籠手を、むぞうさにぱろりときり捨てていた。
「うっ、やられた」
野田は死の恐怖に顔をゆがめながら、どすんとしりもちをつく。
と見るなり、島本は一度に勇気を失い、ものをもいわずばたばたと逃げ出す。
それより早かったのは佐久馬と新兵衛で、二人とものら太郎の手のうちは十分知っているから、恥もみえもなく、のら太郎が気がついたときには、もうどんどん城下町のほうへ逃げ去っていた。
のら太郎は苦笑しながら、血刀をぬぐって鞘におさめる。
庚申堂のぬれ縁へ立って、お兼といっしょにあざやかなのら太郎の剣の舞いをじっと見物していた百合太郎は、ひらりと地へおり立ち、
「のら、行くぞ」
何事もなかったような涼しい顔で、さっさと城下のほうへ歩き出す。
あっけにとられたお兼は、一言ぐらいのらさんに礼をいったってよさそうなものをと思いながら、
「どうもすみません」
わびるようにのら太郎に頭を下げて通りぬけ、百合太郎と肩をならべる。
その後から黙々とのら太郎が歩き出すと、反対側の松林から飛び出してきた虎吉が、いそいで肩をならべながら、
「すごいなあ、だんなは」
と、ため息をつくようにいった。
「やむをえぬ。なるべく急所はよけたつもりだが、一人、二人は致命傷になっているかもしれない」

ん」
ひとりごとのようにいうのら太郎だ。浮かない声音である。
「なあに、かまやしませんや。やつらは身から出たさびなんですからね」
「うむ。ねこ、おまえも悪心だけは捨てろよ」
「へえ」
一言もない虎吉である。
道はやがて町つづきになってきた。時刻はやがて四ツ（十時）に近いだろうから、城下町へはいってもほとんど人に会わない。
「のら――」
前を行く百合太郎が呼んだ。
「なんです、百合太郎さん」
「今夜この城下へとまってはいかんか」
平気をよそおってはいるが、疲れてはいるし、空腹を通りこしている百合太郎にちがいない。が、逃げた佐久馬たちはたしかにこの城下へはいっているのだ。またどんな卑劣な手段を取らないともかぎらない。
「そうですなあ」
のら太郎は急には返事ができなかった。
「やっぱり、あぶないか」
そういううしろ姿が、肩のあたりなんとなくしょぼんと力が抜けたように見える。
――きかない気でも、女は女なんだから。
のら太郎はつい情に負けて、
「よろしい。とまることにしましょう」
といわずにはいられなかった。
「そうか。わしは眠い」
ほっとしたような声である。
「わがままばかしいうのねえ、若さまは」
そういうお兼も、じつはうれしそうである。
のら太郎はなるべく城下はずれに近い旅籠を選び、そうなると上旅籠というわけにはいかない、安宿に近い井本屋という旅籠屋に着いた。
「あいにく、八畳の座敷が一間しかあいていませんが」

亭主がこっちの人柄を見て気の毒そうにいう。

「それは、二階かね、下かね」

「下のいちばん奥でございます」

「けっこう。飯もありあわせでいいから、とにかく泊めてくれ」

それは座敷もひどかったし、むろん飯も冷や飯だった。

しかし、だれも文句はいわない。冷や飯も、ありあわせのさかな、ぬるい汁も、すきっ腹には珍味嘉肴に思えた。銚子を取らぬことはいうまでもない。

「百合太郎さん、旅は薬ですな」

今夜ばかりは、だれもさかなを残した者がない。きれいな膳の上を見て、のら太郎はわらった。

「箱根八里を越えた足で、ここまでのしてきたんですものねえ」

お兼は満足したようにいってから、

「あらあら、おなかがいっぱいになったら、急に目の皮がたるんできた」

と、百合太郎の顔を見る。

欲も得もなく眠そうな顔ににっとうかべた微笑は、あきらかに女だ。今夜の百合太郎は、精も根もつきているらしい。

——勤番ねこがいなくてしあわせだった。

のら太郎はなにか冷やりとさせられるものがある。

膳をさげると、すぐに床を取らせた。その布団がまた粗末すぎるものだった。

「今夜はみんな、着のみ着のまま、帯を解かずに寝ること。持ち物はめいめいまくらもとへおいて、すぐ取れるようにしておくこと」

寝る前に、のら太郎はそう一同に注意しておくことを忘れなかった。

八畳の間へ四つの床を並べて取れない。一人分だけは三人の頭のほうへ横に取るほかはない。その一人分の頭のほうへ百合太郎を寝かせ、

お兼、のら太郎、虎吉の順で、三人はまくらを並べて寝た。

百合太郎がこうして男たちと同じ部屋へ寝るのは、今夜がはじめてである。その百合太郎がいちばん早く軽い寝息を立て、つぎがいちばん注意人物の虎吉、それからお兼。

——さすがにみんな疲れきっているんだな。

と思っているうちに、のら太郎もうつらうつらと甘い眠りに誘いこまれていく。

敵陣

どん、どん、どん——。

遠くで雨戸をたたくような音を聞いて、はっとのら太郎は目をさました。

今夜はけっして油断できないと、寝る前から心を引きしめておいたのだ。

「井本屋、御用の者だ——」

そういっておこしている声がはっきりと耳につく。

——いかん。

むくりとのら太郎は起きあがるなり、

「お兼、起きろ。——お兼」

右隣のお兼の肩をゆりおこしていた。

「どうしたんです、のらさん」

さすがにお兼は二声で目をさまして、きょとんと床の上へ起きあがった。

「百合太郎さんをそっとおこして、わしについてくるんだ」

「はい」

「虎吉、起きろ。虎吉」

「う、う、うむ」

虎吉は寝がえりを打っただけである。

が、それにいつまでもかまっているときではない。

「若さま、——若さま、おきるんですって」

お兼が百合太郎をおこしているあいだに、のら太郎はこの座敷へはいるとすぐ見ておいたお兼の寝床のわきの窓の雨戸を一枚あける。

その窓から飛びおりて、ちょっと左へ行ったところに裏木戸があるのだ。

のら太郎は旅籠賃を紙にくるんで床の間へおき、

「みんな、起きたか」

「はい」

「わしについてくるんだ」

素早く窓から下へ飛びおりた。

つぎに百合太郎の手をとって助けおろし、こんどは百合太郎がお兼に手を貸す。

裏木戸から外へ出たときには、それでもちゃんと虎吉がついてきていた。

すぐに街道へ出てはあぶない。家数にして五軒ばかり裏道を行ってから街道へ出て、井本屋のほうを振りかえってみると、もう御用ぢょうちんは井本屋へはいったとみえて、人影は一人もなかった。

「いそごう」

月はもうずっと西へ傾いていたので、そのかげのほうを軒下にそって、のら太郎はどんどん足を速める。

「どうしたのさ、のらさん」

お兼にはまだわからないらしい。

「宿改めがきたんだ」

「まあ――」

「裏に手くばりがないところを見るとただの宿改めだったかもしれないが、佐久馬たちが問屋場へ訴えて出たのだと、こっちは何人か人をきっているから申し開きに日がかかる。逃げておくほうが無事なんだ」

「それはそうですね」

「月の様子だと、まだ九ツ（十二時）をすぎたばかりらしいな」

「のらは眠らずにいたのか」

百合太郎が聞く。

「いや、とろとろとしました」

「しかし、よく目がさめたな」

「たぶん、こんなことになるかもしれないと、気を張っていましたからな。百合太郎さんはいくらか疲れが抜けましたか」

「うむ、ぐっすり眠ったから、――しかし、まだ眠い」

「この城下を出はずれると海づたいです。砂浜に舟があげてあるでしょうから、それへはいって朝までもうひと眠りさせてあげます」

「そうか」

「ただし、追っ手のほうが急だと、そうはいかなくなります」

宿改めは一部屋ずつやるから、奥までくるには多少の手間がかかるはずだ。そのあいだにぜひ城下町の外へ出てしまいたいのである。波の音が耳についてきた。海岸が近くなったのである。

幸いまだ追っ手の姿は見えないようである。

「あっ」

先頭を走っているのら太郎は、思わず声をのんだ。すでに人家はまばらになって、そのあたりは左に海が見えると思われる前方に、御用ぢょうちんが一つ見え、二、三人の人影が黒々と動いている。おそらく、片側の家のかげにも数人かくれているそうだ。

「のら、待ち伏せらしいな」

安外落ち着いた百合太郎の声である。

「そうらしいです」

のら太郎は足をゆるめた。いざというときの息をととのえておく必要がある。

「御用ぢょうちんのようだから、切るわけにはいくまい」

「沼津藩の役人が出張っているとちょっとやっかいですが、ただ目明かしだけならきりぬけましょう」

「切ってもいいか」

「目明かしには博徒の親分が多いから、佐久馬に買収されているかもしれません。ほんとうに沼津藩がわれわれを召し捕る気なら、なにもわざわざこんな城下はずれの寂しいところは選ば

ないでしょう。堂々と井本屋を取りかこむはずです」
「うむ、たしかにそうだな」
「彼らに妙な野心があるから、あんな場所を選んで、わざとわれわれを井本屋から追い出す策を取ったのでしょう」
「ちくしょう、また佐久馬ねこの悪だくみなのね。弱いくせに、執念深いってありゃしない」
お兼がいまいましそうにいう。
「ねこ――」
のら太郎がうしろへ呼んだ。
『へえ』
「おまえはどこかその辺にかくれていて、騒ぎがおさまったころ後を追ってくるがいい。いっしょにくると、そばづえを食うぞ」
『へえ、そうさせてもらいやす』
「お兼、おまえもそうしてはどうだ。人数が多いようだから、けがをしてもつまるまい」
『いやですよ、そんなこと。死なばもろともじゃありませんか』
「いや、われわれはまだ死んじゃいられない。だからそういうんだ。後から追いつけばおなじことじゃないか。おまえだけつかまっても、われわれは助けてやることができないかもしれんからなあ」
「お兼、ここはのらのいうとおりにしてはどうか」
百合太郎がやさしく口をそえる。
悔しいけれど、そういわれてみれば、お兼の含み針ではとてもおおぜいを相手にするわけにはいかない。
「若さまは大丈夫なんですか」
「わしは大丈夫だ」
「じゃ、のらさん、あたし悔しいけど、ここはそうします」
「そのほうがいい。こっちはそう手間はかかるまいと思うから、うまくかくれていて、すぐ後から来い」

『気をつけてくださいよ、若さま』
お兼はそういって、思いきって立ちどまった。
「心配するな」
百合太郎はわらってみせて、のら太郎の後を追う。
二人は、つと肩をならべた。なんだかねたましい。が、自分にそれだけの力がないのだからしようがない。
――のらさん、少し立派すぎるんだもの、心配だわ。
女の敏感さで、冷たくは見せていても、百合太郎の心がだんだんのら太郎をたよりにしだしているのをちゃんと見抜いているお兼なのだ。
その二人のうしろ姿が、しだいに月明の街道を小さく遠ざかっていく。
はるか行く手の人数も、今ははっきりと二人の姿を見つけたらしく、御用ぢょうちんを先頭にして、じっと待ちかまえているようだ。

野宿

「しばらくお待ち願いたい」
のら太郎が百合太郎とつれだって片側に海がひらける漁師の家とも思わしいあばら家の前あたりへかかってくると、そこに一団となっていた御用ぢょうちん組の中から、藩士らしい身なりをした中年の侍が二人、つかつかと行く手へ出てきた。身なりこそ侍姿だが、どこかに用心棒稼業のあかが身にしみこんでいるといった下卑た連中で、その後につづく十人あまりの手下は、いずれもけんか支度のやくざどもである。
「なにか用かな」
半歩前へ出て、のら太郎が鷹揚に聞いた。
「われらは沼津の問屋場の者だが、この深夜いずれへ行かれるのか」
二人の用心棒侍は、ぶしつけにじろじろと百合太郎のほうを見ている。
明るい月かげの中に、笠をかぶっていない百

合太郎の顔は水もしたたる美少年といいたいが、そのふっくらとした面輪のどこかになまめかしい柔らかさがにおいこぼれて、女をかくしきれない。やっぱり笠をかぶらせておかないといかんなとのら太郎は思いながら、

「われわれは子細あって原宿まで夜道をかける者だが、あなたがたは御用ぢょうちんなどを持って、こんなところでなにをしていられるのか」

と、逆にうさんくさそうに高飛車に出た。

「なにをしているんじゃない。今夜この城下はずれの三島口で、辻切り強盗を働いたやつがある。われわれはその下手人をここで張りこんでいるんだ。貴公たち、ちょいと腰の物を抜いてみせてくれ」

「それはどういうわけかな」

「だまれっ、貴様たちがその下手人だというんだ」

「おまえたち、だれにそんなことをたのまれたんだね」

「こやつ、この御用ぢょうちんが目にはいらんのか」

「いや、われわれはさっきもそんな偽御用ぢょうちんに出会っている。このごろは金でたのまれて悪事を働くほうが、こけおどしに御用ぢょうちんなど振りまわしたがるんでね」

のら太郎はにこりと冷笑しながら、はじめから相手を偽物あつかいだ。

「おのれ、許さん。神妙にせんとたたっきるぞ」

「それ、ぼろが出た。おまえたちこそ御用ぢょうちんを種にして、人をたたっきることしか知らぬ辻切り強盗だろう。けがをせんうちに、お芝居に乗せられるわれわれではない」

落ち着き払っててきぱきとやりこめられると、相手はもう口のききようがなくなってきたのだろう。

「ええ、面倒だ、やっちまえ」

とうとう用心棒根性をむきだしにして、いきなりだっと抜き打ちに出ようとした。

が、じつはそれを待っていたのら太郎だから、腕ずくならひけは取らない。

「無礼者」

一喝が気合いがわりで、同時にこっちも火のような抜き打ちをかけた。

「わあっ」

相手よりこっちの技のほうが一瞬早かったとみえて、敵は刀を半分抜きかけたまま、左袈裟にされて、たわいもなくのけぞっている。

「それ、やったぞ」

「逃がすな」

敵は一度にひしめき立ったが、その目の前で、

「えいっ」

百合太郎がもう一人の用心棒を鮮やかにきりすてた。

「ううっ」

がくんとそやつが両ひざを突く。

「いこう、百合太郎さん」

にっこりしたのら太郎がうながして、抜刀を引っさげたままさっそうと歩き出す。

「あっ」

前の敵はその気魄に圧倒されて、ばらばらっと道の両側へ飛び散っている。ほんのまたたくまにたのみにしていた用心棒二人がきられてしまったのだから、あとのやくざ者たちは手も足も出ない。

ぼうぜんと顔を見あわせているあいだに、二人はもうゆうゆうと海ぞいの道を歩き去っていく。

こういうやくざどもは勝ち戦には強いが、一度かなわぬとなるとからきし意気地がない。だれ一人先に立って二人を追いかけようという者もなかった。

「もういいようですな」

小一町も来てから、のら太郎はそういって刀をぬぐい、鞘におさめた。

「だれも追いかけてこないな」
百合太郎もそれにならう。
「思いきって機先を制したのがよかったんです」
のら太郎はそういって微笑しながら、
「しかし、見事でしたな、百合太郎さん」
と、はじめて見た百合太郎の今の手並みに感心した。
「あれはやっぱり佐久馬の小細工か」
「そうでしょうな」
「それにしては、あまりたわいがなさすぎたようだが」
「おそらく、中心になるやつらはみんな宿改めのほうへまわっていたのでしょう」
「すると、そいつらがまた追ってくるかもしれんな」
「いや、たぶん大丈夫でしょう。百合太郎さんは胴巻をお兼にあずけてある。あいつらの目的の半分はその金につられて命を張っているんだから、なにもあぶない思いをして貧乏人など追ってはこないでしょう」
「そうか、お兼はかわいそうだ」
「なあに、あれはただの女ではないから」
原宿までは一里半、街道はずっと海にそっていく。半道ほど行くと、道はやがて千本松原へかかってきた。月の位置から見ると、すでに真夜中ごろだろう。
「いい景色ですな、百合太郎さん」
どこまで行っても松原つづきのむこうに月明の春の海が青く光って見える風景は、なかなかおもしろい。昼間なら左に美しい富士の見える景勝の地だ。
「うむ」
返事はしたが、百合太郎の足はだんだん重くなってくる。旅籠へ着いて、楽々と手足をのばしたのはほんの一刻（二時間）たらずなのだからむりはない。
「のら、今夜は夜通し歩くのか」

とうとう弱音を吐いてきた。ほかにだれも人目がないから、つい気がゆるむのだろう。声にまでどこか女が出てくる。
「そうですなあ。まだ野宿はむりでしょう。風が冷たいですからなあ」
「あそこに小屋が見えるな」
なるほど、道端によしず張りの小屋が見える。昼間はそこへ茶店が出るのだろう。来てみると、簡単に屋根をこしらえて雨露はしのげるようになっているが、四方がよしず張りだから風はふせげない。
「ここへとまるのはむりだが、まあ、ひと休みしていきますかな」
のら太郎は店の前をふさいでなわでくくりつけてあるよしずを少し押しのけて、中へはいってみた。三坪ほどの土間で、一方に駄菓子などをおく台が作りつけてあり、床几が二つ腹合わせに積み重ねてある。
その一つを台のかげのほうへおろして、
「さあ、お掛けなさい。これでもいくらか風よけになるでしょう」
と、百合太郎にすすめ、自分は一つのほうへ腰をおろした。
屋根があるから、小屋の中は薄暗い。
「これでもけっこう風はしのげるな」
百合太郎はぐったりと床几にかけて、あたりを見まわしている。
「よしずが二重になっていますからな。これで、熱い茶でもあるとなおいいんだが、あいにくです」
「茶はいらぬが、少し横になってはいかんか」
子供が物でもねだるように、百合太郎が遠慮そうに聞く。
「眠ると風邪をひきますぞ」
「いや、眠りはせん。ただ、しばらく足をのばすだけだ。行儀が悪いかな」
自分では気がつかないだろうが、女だという意識が顔にまではっきり出ている。

「お待ちなさい。横になるならいいものがある」
台の下にござが巻いて突っこんであるのだ。出してみると二枚ある。一枚を床几に敷いて、一枚を上からかければいいのだ。
「しかし、眠ってはいけませんぞ」
「うむ」
背中のふろしき包みを取ってまくらにし、大小を胸へ抱くようにして、こっちへ背を見せながらくの字なりに横になる。のら太郎はその体へもう一枚のござをかけてやった。
いくら眠るなといっても、横になれば眠ってしまうに違いないのだ。こういうときお兼でもいれば、抱きあって体温を取るという手もあるのだが、こっちが男ではまさかそんなまねもしてやれない。
さっき足が重くなってきたとき腕を抱えて歩いてやることは知っていたが、それさえ遠慮していたのら太郎だ。
――まあ、いい加減におこしてやることだ。

のら太郎は自分の床几へもどって腰をおろす。横になりたいが、横になれば自分も眠ってしまうにちがいない。それでは物騒すぎる。
松籟を聞きながらじっと腕組みをしていると、やっぱり風が肌にひえびえとしてくるようだ。

女ごころ

「のら――」
さすがに眠れないとみえて、百合太郎がむこうを向いたまま声をかけてきた。
「寒いのか、百合太郎さん」
「そうじゃない。――おまえはだれなんだ」
はじめてそれを口にする百合太郎である。
「いまにわかります。しかし、わしが名乗らないと、二人きりでは安心できませんか」
百合太郎は返事をしなかった。
「安心できなければ、わしは外へ出て待っていてもいいんだが」

「それにはおよばぬ」
はっきりと言ってから、
「のらはわしのことをよく知っているんだな」
と、なにか思いだそうとしているようだ。
「それはよく知っています」
「わしの供をいいつけられているといったな」
「そうです。だから、信用してもいい男です。わしは人の信頼を裏切るようなまねはぜったいにしない男だ」
「わしにはどうもわからん」
百合太郎はつぶやくようにいう。
百合太郎にすれば、自分の供をいいつける人がいたとすれば、それは兄志摩守のほかにはない。兄がそんなに信頼している男、それはだれなのだろうということになる。
しかも、この男はけっして家来筋の者ではないようだ。自分を見るときの目が、一段高いところにいる。たえず自分をいたわり、その目はときどき深い愛情をさえたたえている。
はじめはこの男ものらねこの組だろうと思っていた。屋敷を出たときから女を捨て、男になりきっているのだから、のらねこなどは少しもこわくはない。いやらしいまねをしてくれば、きってしまえばいいのだ。
が、この男の男らしい目を見ていると、いつか女にされてしまう。ときには愛情をさえ感じていることがある。のらねこよりそのほうがよっぽど恐ろしい百合太郎なのだ。それに、兄が自分で選んでつけてくれた男とすれば、むろん途中で間違いがおこってもいい、好きなら夫婦にしよう、そこまで信頼している男にちがいない。それでなければ、女の一人旅に男をつけてよこすはずはない。そう考えられるだけに、百合太郎としてはいっそう当惑するのである。
「百合、女はとうてい男になりきれるものではない。女は女らしく、女の幸福ということを考えてはどうか」
百合がこんどの決心を兄に打ちあけたとき、

温厚な兄志摩守はそういって、けっして賛成してはくれなかった。

「いいえ、お兄さま、このままではいつかは笹山松平のお家を、家来の鬼頭左馬之介らに乗っ取られてしまいます。そんなことくやしいではございませんか。百合はこの身を犠牲にしても、きっと左馬之介から菊一文字の短刀を取りかえしてきたいと思います。百合にできないはずはございません」

「それは、おまえが男ならわしもよろこんで許しもするが、おまえは女だ。狡智の左馬之介にはとても太刀打ちはできぬ。まかり間違えば、おまえは体まで左馬之介のおもちゃにされて、一生不幸に泣くことになる。家名は大切ではあるが、そのために女が自分の体まで犠牲にする必要があるかどうか、自分の幸福なのだから、自分の心によく聞いてみなさい」

「ですから、百合は今日かぎり男になります。りっぱに男と男の勝負をして、左馬之介をきってまいります」

「さあ、女の身でその男になりきれるかどうか、もう少し自分でよく考えてみることだ」

温厚で思慮深い兄ではあるが、それだけに決断ということに乏しい。それが歯がゆくて、百合はとうとう無断で屋敷を出てきてしまった。

そういう自分が、まだ国元へも行きつかないうちに、もう女になりたがる。意地はともかくとしても、こんなことではとても左馬之介と太刀打ちはおぼつかない。それが百合太郎は悔しいのだ。

——わしはどうしても男になりきらなくては。この男に負けてはならぬ。この男の親切に甘えてはならぬ。

心にもう一度そう誓いなおしながら、いつのまにかうつらうつらしていたらしい。

「佐久馬、このよしず張りの中は大丈夫か」

はっきりとそういう男の声を耳にして、百合太郎はがばと跳ね起きようとした。

その肩を上から軽くおさえつけるようにしたのはのら太郎である。

——ああ、そうか。

百合太郎ははっと気がついて、身をかたくする。なまじ物音を立てると、かえって敵にけどられるところだったのだ。

「いや、今ごろこんなところにうろうろしているものか」

「そうかなあ」

「行こう。こんなところで寒い思いをしているより、とっくに原宿へ行っているさ」

「しかし、鴨はだいぶ疲れていたようだし、念のためということがあるぞ」

「いや、おれのねらいは富士川だ。いそごう」

あいかわらず強情な佐久馬は、新兵衛の言うことなど耳にもせず、どんどん歩き出したようである。

「そうかなあ。おれはここでお兼をねらうという手もあると思うんだがなあ」

新兵衛はそんなことを言いながら、しかたなさそうに佐久馬を追っていく。

二人の足音が遠ざかると、また松籟と波の音がひっそり耳についてきた。

「のら、佐久馬と新兵衛のようだったな」

百合太郎はわざと背を向けたままでのら太郎に話しかける。

「そうです」

のら太郎は元のところへ腰かけているらしい。

「佐久馬も案外うっかりしているようだな」

「いや、佐久馬はわざとうっかりしたんでしょう。新兵衛と二人きりでは、自分のほうがあぶない」

そんな憎いことをいってわらっているのら太郎だ。

「そうだなあ。いっそこっちから出ていってきってしまうがよかったかもしれぬ」

「人間というやつはねえ、百合太郎さん、なる

べく生かしておいたほうが役に立つものです」
「あんな悪人でもか」
「なあに、ああいう小人はそう大きな悪事も働けません。せいぜい手先に追い使われて、へまばかりやるやつらです」
百合太郎は黙ってしまった。へたに口をきくと、子供あつかいにされるばかりだからだ。
「百合太郎さん」
「なんだ」
「わしはあの二人の跡をつけてみるのもおもしろいと思うが、どうでしょうな」
のら太郎が変なことを言い出す。
「跡をつけてどうするんだ」
「やつらは国もとの手先ですからな。いずれ、もう国もとへはこっちの様子を知らせている。たぶん、国もとでは途中までわれわれに迎えの使者を出すことになるでしょう。遠巻きにして、国もとまでおびきよせるか、それとも首になわをつけて引っ張っていくか、むろん、引っぱっていかれるのは百合太郎さんで、わしはじゃまだから途中で切られることになる。いずれにせよ、敵の術中に落ちるより、敵の目の外にあるほうが、われわれとしては都合がいい。そこで、あの二人の跡をつければ、どうせ二人は途中どこかで国もと組の主力と出会うようになるだろうから、こっちがむこうよりも早く敵を発見するということになるんです」
「しかし、あの二人をつけるということがそんなに簡単にできるのか」
「ぜひやろうと思えば、できないことはないでしょう」
「どうやるんだ」
「それより、そんなことをする必要があると、百合太郎さんはほんとうに考えますか。そんな必要はないというのなら、無理にそうしなければならんということもないわけですからな」
「それは、むろん、つけられるよりつけたほうが道中は無事だからな」

「では、思いきってやりますかな」
「うむ、やろう」
百合太郎は思わずのら太郎のほうへ寝がえりを打っていた。
「あの二人はまたなにか小細工をして、富士川の渡しでわれわれを待ちうける考えらしい」
「そんなことを話していたようだな」
「そこへわれわれがこのまま乗りこんでいったのでは、彼らの術中に陥るばかりだ。そこで、姿を変える必要がある。百合太郎さんはとりあえず百姓娘に化ける」
「女になるのか」
なにかはっとせずにはいられない。
「いやですか」
「いやということはないが、わしは男だからなあ」
せっかく男になりきろうと思っているのに、女になれば心まで女になってしまいそうだ。なにか怖い。
「しかし、これは手段ですからな。なにも心まで女になれというんじゃありません」
「考えてみよう」
百合太郎はくるりとまたのら太郎に背を向けてしまった。
のら太郎もそれっきり黙りこんでしまう。
——怒ったかな。
と思うと、百合太郎はそれが気になってきて、妙に心寂しい。それをがまんして、怒るんなら怒れ、わしは男になりきってみせると、むりにそう思いながら、ひそかになにか話しかけてくれるのを待っている。
しかし、のら太郎はいつまで待っても口をきいてくれない。
「のら、怒っているのか」
とうとうがまんしきれなくなって、こっちからきいてしまった。
「怒る——？」
のら太郎はふしぎそうにいってから、

「ああ、女の計略のことでしたな。怒っちゃいません。いやならいいんです。——わしはまた百合太郎さん眠っているのかと思った」

と、至極のんびりした返事である。

——まあ、憎らしい。

そんなこと言うんじゃなかったと思いながら、百合太郎はひとりでにほおがほてってくる。

「百合太郎さん、寒いのか」

「いや、寒くはない」

「風邪をひいちゃこまるが、寒くなければもう少しおやすみなさい。夜明けにはまだちょっと間があるようだ」

「うむ」

夜風はなんとなく身にしみるが、心はあたたかい。

「のら、わしは女になってもいい。計略だからな」

百合太郎はついに負けてしまって、またしても顔が赤くなってくるのをどうしようもなかった。

若い百姓夫婦

翌朝——。

原宿の宿を遅立ちの旅人にまじって、吉原のほうへ通りぬけていく百姓の若い夫婦とも見える二人づれがあった。

女は紺がすりをすそ短にきて、菅笠を目ぶかにかぶり、赤い帯、あさぎの手甲脚絆、わらじがけ、女にしてはちょっと上背のある、いかにものびのびとした肢体が人目をひく。

男はめくら縞の着物に、これも菅笠をかぶってじんじんばしょり、紺の手甲脚絆、わらじがけ、いかにもがっしりとした体つきで、女房の着がえでもはいっているのか、背中にやや大ぶりなふろしき包みをしょい、手に長いこも包みを持っているのは、自慢のごぼうでも嫁の里へ土産にするつもりか、後生大事に女房の手をひいて歩いているところを見ると、新婚まもない若夫婦なのだろう。

そういえば、嫁っ子のほうは婿どのに手をひかれているのが気恥ずかしいらしく、下を向いたきりでわき目ひとつふらず、体中をかたくして歩いているようだ。

じつは、男はのら太郎で、女は百合太郎の百合だった。

——恥ずかしいな。

百合はなんとしても顔が赤くなってくる。心まで女になる必要はない。人の前ではぜったいに口をきかなくてもいいし、人のいないところでは今までどおり男になっているがいい、そういう約束にはなっているが、女の姿になってみると、やっぱり男の気持ちにはなりきれないのだ。

おかしかったのは、途中で百姓家へよって、二人でこの姿になるときだった。

「少し事情があって、連れを女に仕立てたいのだ。娘の着るものを一通りゆずってくれぬか」

のら太郎が留守番の老婆と娘にたのみ、座敷を借りて、百合太郎が百合になって出てくると、娘も老婆も、

「あれえ」

と、口をあけっぱなしにして顔ばかりながめていた。

「おまえさまはまるで女みたいですぞ。きれいだねえ。役者さんかね」

「うむ、江戸の立て女形でな、中村百合之丞というんだ」

のら太郎がもっともらしく答えると、

「そうだろうともね。肌のにおいまで、まったく女だ」

と、老婆は感心しながらあきれていた。

「百合太郎さん、少し顔へ墨をぬらんといかんな」

外へ出てからのら太郎がいった。

「それにもおよぶまい」

「いや、女になると役者さんが少しきれいすぎた。

ていかん。まあ、なるべく人に顔を見られないようにするんですな」
「うむ、そうしよう」
「しかし、あのばあさま、なかなかすみにおけない。肌のにおいまで女だといった」
「しようがないではないか、それだけは」
「まったくしようがないです。男でいるときも、それだけはずいぶんひやひやさせられましたからな。まあ、これだけは女になっているあいだは安心だ」
街道へ出てくると、のら太郎が黙って手をひいてくれようとする。
「のら、よせ。恥ずかしい」
思わず顔を赤くすると、
「そうそう、それでよろしい。いいですか、百合太郎さん、若い百姓の男と女が二人で歩いている、こりゃ他人じゃない。だれが見たって、夫婦か兄妹だ。兄妹というのは、かえって思わせぶりで、いらぬ詮索をされがちなものです。いっそ、新婚の夫婦と見せておくほうがいい。どこへ行くんだと聞かれたら、伊勢参りだということにしましょう」
と、一人でのら太郎はきめてしまう。
「わしはどうでもいい」
世なれていることではとてものら太郎にはおよびもつかないのだから、百合太郎はいうなりになって、こうして手をひかれている。
——恐ろしい男。
その手をひかれているのが少しもいやではないのだから、百合太郎はだんだん女にされてしまうのではないかと、それが怖い。

網にかかったおとり

原宿から吉原へ三里六町、それで中食をとって、吉原から蒲原へ二里三十町、その中ほどに富士川の渡しがある。東海道第一の早瀬で、渡し賃を二十四文取られる。
——もういいかげんに追いつくはずなのだけどなあ。
沼津の海岸で百合太郎とのら太郎にわかれた御守殿お兼は、前ばかり見てまるで走るように渡し場のほうへいそいでいた。若い女にしてはすそをけちらさんばかりの乱暴な歩きつきだから、すれ違っていくほどの者が、みんななにごとだろうといいたげな目をみはっていく。
お兼はそんな人の好奇の目など気にかけてはいられなかった。のら太郎の意見にしたがって、沼津でべつべつになり、うまく敵の目をくらまして、その夜は磯に引きあげてある小舟の中でむしろをかぶってひと眠りした。百合太郎たちも疲れきっているから、今夜はどこかで野宿をしているにちがいない。夜が明けてから追っていけば、原宿へはいるまでには追いつけると踏んでいたのだ。
が、原宿に待っていたのは、これも沼津で敵に追いまわされてわかれわかれになってしまった橋場の虎吉で、
「なんだ、あねごも一人か。あの連中はいっしょじゃないのか」
と、がっかりした顔つきだった。
虎吉は夜どおし歩いて、原宿の宿外れでひと眠りして、今朝は夜があけてから、ここでだれか後からくるのを待っていたのだという。
「だって、おかしいじゃないか。あの人たちがあたしの後になるってわけはないから、すると、あの人たち、ゆうべは原宿までむりをして旅籠屋へとまったのかしら」
「そうかもしれねえなあ」
「どうせ待っているのなら、おまえ、どうして町のむこうの出口に待っていなかったのさ」
それなら二人が原宿へとまったにしても、今朝はちゃんと会えたはずなのである。
「おれに怒ったってしようがねえや」
虎吉はしまったというような顔をして苦笑いをしていた。
いずれにしても、今朝はそう早立ちしたとは

思えないし、だいいち百合太郎の胴巻は自分があずかっているのだから、どこかで待ちあわせているはずだと思い、お兼はこうして足にまかせて二人のあとを追っているのだ。

「あねご、おれはちょいと心配になってきたぜ」

道々虎吉がいい出す。

「なにが心配なんだえ」

「ゆうべ原宿の旅籠へとまったとすると、百合太郎さんはのらだんなと二人っきりだからな」

「だからどうしたっていうのさ」

「ねずみはゆうべ疲れきっていたからなあ。ねこに少しぐらいなめられたって、知らずにぐっすり寝こんでいる。あっと気がついて目がさめたときはもうおそい」

「ばか、のらだんなはおまえなんかと人間が違うんだよ」

「そうかなあ。あねごはちっとも心配にならねえかなあ。のらだんなが立派すぎるから、なおいけねえんだ。たのもしいなあと、ねずみの方が安心して、つい足ぐらいもんでもらいたくなる。そうなると、二人っきりの部屋だし――」

「やめないか、ねこ、いやらしい」

お兼はかっとなって、思わずどなりつけてしまった。じつは、お兼もゆうべからそれが心のどこかで気になっていた。その不安が今朝になってみると胸いっぱいにひろがっている。

針のように神経をとがらせて、今までののらいやらしいところはない。自分を見るときの目も、百合太郎と話しているときの目も、いつもきれいで、おおげさにいえばこっちの魂を吸いとってしまいそうな深さをたたえている。むろん、女のきげんをとるとか、少しでも自分がいい子になろうとか、そんな気ぶりは言葉の端にも素振りにも見せたことがなかった。

それに、百合太郎ははじめから女ということを忘れている人だし、のら太郎を見るときの目にはいくぶん見下しているようなふうさえ見えるくらいだから、二人きりにしておいてもけっして間違いはない。大丈夫だとは思う。そう思うが、裸にすればやっぱり男と女なのだ。

正直にいえば、のら太郎があんまり立派すぎるだけに、なんとなく不安なのだ。

――ひょっとすると、あたしでさえあの人には甘えてみたくなるときがあるんだもの。

虎吉がいうように、昨夜は疲れきっている百合太郎だから、足ぐらいもんでもらったかもしれない。あたしならきっとそうしてもらっただろう。そんなことをねだって甘えてみたい男なのだし、こっちがほんとうに疲れているなと見れば、黙ってそのくらいのことはしてくれる実意は持っているのら太郎なのだ。

――虎吉のばか。

お兼はそんなつまらないことをいい出した間抜けな虎吉がたまらなく腹立たしくなってきた。

だから、それっきり口もきかずに、どんどん先をいそいでいた。二人に会いさえすれば、その顔つきその目の色で、そんなことのない二人か、もうただでなくなっている二人か、お兼は一目で見ぬける自信があるのだ。

――もし、二人がそうなっていたらどうしよう。

むろん、あたしはのら太郎を殺してやる。

しかし、あたしにのらさんを殺せる勇気があるかしら。

お兼は冷やっとした。ほんとうはあたしが足をもんでもらいたくなっているんじゃないかしら。

――あの男になら、あたしだって、どうされたって。

くらくらっとお兼はめまいがしそうになってきた。歯をくいしばって、夢中になって歩く。なんにも考えてはいけない、二人に会うまではと思う。

「あねご――」

うしろからついてくる虎吉が呼んだ。
「うるさいよ」
「こいつはごあいさつだ。どうしてそうごきげんが悪いのかなあ」
「知るもんか」
「そうかなあ、おれはちゃんと知ってるような気がするなあ」
「黙ってお歩きったら」
「しゃべって歩くほうが気がまぎれる」
「舌をかんだって知らないから」
「その舌の話なんだがね」
「舌がどうしたっていうのさ」
「もしあねごが舌をかんだとしたら」
「あたしは舌なんかかまないよ」
「だからよう、かんだとしたらの話だ」
「血が出るだけのことさ」
「その血をだねえ」
「うるさいったら」
「あねごはのらだんなになめてもらいたいのさ。違うかね」
「ぶん殴るぞ」
並んで歩いていれば、ほんとうにぶん殴って突き飛ばしていたかもしれない。あいにく虎吉は遠慮して、一足おくれているから、ただどなりつけただけで、お兼はなにか胸がせつなくなってくる。
——ちくしょう、虎吉の目にまで、あたしはそんなふうに見えるのかしら。
うそだ。あたしはかわいい百合太郎さんのことしか考えちゃいない。
「けどねえ、あねご——」
いけ好かない虎吉のやつがまた話しかけてくる。勝手に一人でしゃべっているがいいと、お兼は返事をしなかった。それに、今になって急にあねごあねごと立ててくるのも、なにか下心がありそうで気に入らない。
「おれはどうも、あののらだんなは食わせものような気がしてしようがねえんだ。男一匹、吹けば飛ぶようなおれなんかと違ってれっきとしたお侍が、ただでこんな命がけの道中を買って出るはずがない。——聞いてるかね、あねご」
「聞いてなんかいないよ」
「そうか、それなら安心だ。あの野郎の下心は、おれはちゃんとわかっているんだ。あんな澄ました顔をしていても、一皮むけば佐久馬ねこたちと少しもかわらねえのさ。そりゃ男だもんな。あのお百合さんの肌を見て迷わないやつがいたらお目にかからあ」
こっちの心を見すかしたように、そんな憎いことをいい出す虎吉である。
「ふうんだ。おまえや大西ねこみたいに、あの人はまだ一度もふろ場なんかのぞきにきませんようだ」
「あたりめえさ。あの野郎のほうがもっとたちが悪いや。そんな気ぶりは薬にしたくもないって顔で、お百合さんをすっかり安心させといて、二人っきりになるときを待ってやがったんだ。するとゆうべって日がきやがった」
「おまえ、やいてるのかえ、ねこ」
「もうやいたってしようがねえや、いくらきかねえ気でも女は女だ。うっかり足なんかもんでもらったのが間違いのもとで、お百合さんだってまんざらでもねえから、ぽうっと顔を赤くしてよ、わざと眠ったふりをしてみせたに違いねえんだ」
「ばかだねえ。おまえそんなにあきらめたんなら、なにもそんなに血眼になってあたしといっしょに二人を追いかけることはないじゃないか。ここからさっさと一人で江戸へお帰りよ」
「あ、そうか」
「それとも、おまえ、あたしが百合太郎さんからあずかっている胴巻の金でもねらっているのかえ」
さすがに虎吉はぐっと返事の言葉につまったらしい。
ざまあ見やがれとお兼は思った。

「おい、女、ちょっと待て」
もう富士川がそこへ見えてきたあたりへきて、休み茶屋の中から浪人者らしいやつが二人いきなり飛びだしてきて前へ立ちふさがった。
「なにか御用ですか、お武家さん」
「用があるからわざわざ呼びとめたんだ。おまえを待っている仁があれにいる。ちょっといっしょにきてくれ」
「それ、どんな人です」
もしやのら太郎ではないかと、お兼は思わず目を輝かす。
「いっしょにくればわかる。おまえに聞きたいことがあるんだそうだ」
そうか、佐久馬ねこに違いない。のらさんなら自分で迎えにきてくれる人だったと、お兼はがっかりはしたが、それならそれで、こっちにも聞きたいことはある。
「あたし、いそいでるんですけどねえ」
「なあに、手間は取らせん」
休み茶屋の軒下へきて土間をのぞいてみると、はたして佐久馬と新兵衛が奥の床几に休んでいた。ここにも雇われ浪人が二人ばかり控えているようだ。
「こらっ、貴様には用はない。あっちへ行け」
虎吉がのこのこといっしょについてはいろうとすると、たちまち一人の浪人者にえりがみをつかまれて往来へ突きだされ、うらめしそうにこっちをにらんでいた。
「あら、やっぱり北沢さんでしたねえ」
お兼は一度この男と含み針でけんかをしたことがあるので、びくともしない。
「お兼、貴様一人か」
「いいえ、虎吉と二人です」
「あとの二人はどうした」
「それはこっちで聞きたいくらいだわ。あたしもその二人を追ってきたんです」
「うそじゃなかろうな」
佐久馬の目がきらりと光る。

「だって、あの人たちがあたしたちの後になるはずはないでしょ。北沢さんたちこそ、ほんとうに二人を見かけなかったんですか」
「ふうむ。おかしいな」
佐久馬は新兵衛と顔を見あわせている。
「見のがすはずは絶対にないんだがなあ」
新兵衛が小首をかしげる。
「よし、出発だ。――お兼、いっしょに行け」
「どこへ行くんです」
「おとりは黙ってついてくればいいんだ」
あいかわらず横柄で手前勝手な佐久馬である。
――ふん、いまに見ろ、こんどこそほんとうに首ねこにしてやるから。
今日一日中むしゃくしゃ腹のお兼は、内心その憤懣を佐久馬ねこにたたきつけてしまった。

吉田小僧次郎蔵
――そのころ。

百合太郎とのら太郎の若い百姓夫婦は、富士川をわたったこっち側の土手の上のよしず張りの掛け茶屋へはいって、渋茶をのみながらゆっくりと休んでいた。目の前に富士川が一目で見わたせるいいながめである。
嫁っ子のほうはひどく疲れているらしく、笠もとらず、ぐったりと足をさすりながら、さっきから一言も口をきかない。
「そんなに疲れているんなら、今日は蒲原泊まりにするかなあ」
若い亭主がなぐさめ顔にいっても、ただうなずいてみせるだけだ。
「失礼ですが、お嫁さんはだいぶお疲れの様子ですな」
むこうの床几に番頭一人をつれて休んでいた江戸の大店の主人とも見える三十五、六の男が、おだやかな笑顔を向けてきた。
「へえ、根っから足弱で困るんです」
「どちらまで行きなさるんだね」

「お伊勢まいりをしようと思って出てきたです」
「それはまた御夫婦でうらやましい。じつは、わしも伊勢の松坂まで商用に出かける途中ですが、おなじ道だからまたどんなことでお世話にならないものでもありませんな。わしは江戸の小伝馬町の木綿問屋で、吉田屋次郎兵衛といいます。おぼえておいてください」
吉田屋は商人だけあってなかなか如才がない。
「わしらは川崎在の百姓で、新田の太兵衛、この嫁っ子は、いいえ、女房は――」
といったが、お百合とは名乗りたくない。どんなことから敵の耳にはいらないともかぎらないからだ。
「お伊勢さまにはもったいないですが、お伊勢といいます」
「お伊勢さんはおいくつかな、呉服屋はすぐおなごの年が聞きたいものでしてな」
「十八になるのです」
「失礼だが、おきれいなお嫁さんで、太兵衛さんは果報者でございますな」
吉田屋はなんとなく百合の美貌に目を細めているようだ。
「それは、だんなさま、少し違うんです」
「ほう、違いますかな」
「百姓の女房は器量なんか二の次です。足腰の丈夫な、肥桶かついでも平気な嫁でねえと用にたりません。これは町の娘で、足腰が弱いで、ついでにそれを丈夫にしてやろうと思って、こうしてお伊勢まいりに出てきたです」
色の白いのを疑われない用心だ。そういうのら太郎が百姓にしては色が白すぎるとは、さすがにうっかりしている。
「なるほど、なるほど、これは吉田屋の負けでした。若いのに太兵衛さんは立派なことをいいなさる。感心いたしました」
吉田屋は何度もうなずいている。

ちょうどむこうから渡し場へ舟がついて、人人はぞろぞろと舟をおりると広い河原道をこっちへ歩いてくるのが手に取るように見えた。
その中に、六、七人の旅の侍が一団となって、水際だった年増盛りの女を一人、のがさじと中へ取りかこむようにしてくるのが人目をひく。
――お兼だな。
佐久馬一味につかまったらしいとのら太郎が背を向けているうちに、一行はさっさと茶店の前を通りすぎていく。
「番頭さんよ、あれはどうした女だろうね」
吉田屋はまゆをひそめて、供の番頭に聞いている。
「さあ、なにか悪いことでもした女でございましょうかねえ」
「それにしては、顔色ひとつ変えていないようだったが」
吉田屋はなおもつぶやくようにいっていたが、
「どれ、そろそろこっちも出かけますかな。太兵衛さん、お先へごめんなさいよ」
と、やがて茶代を払って、一行の後を追うように出ていった。
――あの二人もただ者じゃあるまい。
のら太郎は早くもにらんでいたが、それは口に出さず、じつは佐久馬の一行をやりすごす気でここに待っていたのだから、
「お伊勢、わしらも出かけるかな」
と、まだあまり元気の出ない百合太郎をうながす。
百合太郎は黙ってうなずいただけだ。昨日から昨夜へかけてのむりがすっかりこたえたか、今日は朝からひどく張りがない。まったく足弱な嫁っ子になりきっている。おまけにきげんもあまりよくないようだ。
街道へ出て、こっちはもういそぐ必要はないのだからゆっくり歩き出すと、
「のら、手をひいて――」

と、自分から手につかまってくる。
「今夜は早泊まりにして、十分体を休めるんですな」
「お兼はどうするんだ。助けてやらなくてもいいのか」
「もう少し様子を見ましょう。佐久馬はお兼をつかまえて、わしらをおびきよせるおとりに使おうという腹なんだから、殺すようなことはないでしょう」
「そうか」
しばらく黙って歩いてから、
「虎吉はいなかったようだな」
「あれは沼津から江戸へ帰ったかもしれません」
たぶんそうだろうと、のら太郎は気にもとめていない。
「のら――」
「なんです」
「お兼は体をなぶられはしないか。かわいそうだぞ」
思いきったようにいいながら、百合太郎はぽうっと顔を赤くする。
「そうですな。あの連中はみんなけだものですからな」
のら太郎もそれを心配しないではないが、
「まあ、あれはふつうの女と違って、こっちがここにいることを教えてやれば一人で逃げてこられる女なんだから、めったに負けるようなことはないでしょう」
そうきめておくほかはない。
こんどはこっちが佐久馬たちをつけていく道なので、なるべく百合太郎の足をいたわりながらゆっくり歩いて、蒲原の宿へはいろうとする七難坂へかかったのはやがて夕方であった。
百合太郎の手を引っぱるようにして、やっと坂の上までのぼってくると、右手になにかの小さな堂があって、そのぬれ縁に腰かけて、さっきの吉田屋主従がたばこをすいながらひと休みしていた。この連中は男の足のこと、ほんとうならもうとっくに蒲原の宿へはいっているころなのである。
「やあ、太兵衛さん、やっと追いつきましたな。この坂は女の足ではちょいときつい。ひと休みしておいでなさい」
吉田屋が如才なく声をかけてくる。
「どうするね、お伊勢」
百合太郎は黙って首を振った。
「そうか。ここで休んでいくより、早く旅籠へ着いて手足を伸ばしたほうがいいか」
こんどははっきりとうなずいてみせる。
「せっかくですが、吉田屋さん、これは早く旅籠につきたいといいますので、お先へごめんこうむります」
「まあいいじゃないか。旅は道づれってこともある」
吉田屋はぬっと立ってきて、行く手に立ちふさがる。番頭はそれとなく退路へまわったようだ。
おかしいのは百合太郎で、なにか怖そうにじっと腕へしがみついてくる。
「御親切はありがてえですが、わしらまだ夫婦になったばかりで、嫁さまは見たとおり人を恥ずかしがるです。二人にしておいてくださいまし」
のら太郎がたのむようにいう。
「ならねえ。おい、土百姓、てめえは命が惜しいか、それとも女房のほうがかわいいか」
吉田屋はぎろりと目を光らせて、いよいよ本性をあらわしてきた。
「命も惜しいし、女房もかわいいです」
「この野郎、おれを甘く見やがったな」
「おまえさま、ほんとうは追いはぎかね」
「うん、今やっとわかったか。おれは吉田小僧の次郎蔵という大どろぼうだ。富士川の茶屋でてめえたちを見かけたときから、金はたいして持ってもいないそうだが、てめえにすぎた女房を

持ってやがる。そいつをふんだくって、当分おれのめかけにして連れて歩いてやろうと罪な煩悩をおこしたのがてめえたちの身の因果、どうだ、女房をすなおにわたすか、それともてめえの命を取ってから女房をつれていこうか。どっちがいい、返事をしろ」

吉田小僧は道中差しの柄に手をかけてすごんでみせる。相当な悪党とみえて、度胸もすわっているようだし、なかなかすごみもきく。

「親分はちょいとした悪党らしいな」

「なんだと――」

「まあいい。こんな街道端で四の五のいっていて、人が通ると面倒だ、このお堂の裏へ行って話をつけよう」

「ふうむ。すると、てめえも――。よし、裏へ行ってやる。来い」

吉田小僧はこっちを仲間と見たらしい。先に立って堂の裏へまわっていく。

「お伊勢、おいで」

のら太郎は百合太郎の手を取って後へつづく。そのうしろから番頭がのそりとついてきた。

裏手はうす暗い杉木立になっていた。

「おい、若造、どう話をつけようってんだ。たとえてめえが仲間でも、おれは一度いい出したら後へはひかねえ男だ。性根をすえて口をきけ」

「あいにく、おれはおまえたちの仲間ではない。なにも遠慮などしてもらわなくてもいいが、乱暴はやめろ。ぬすっとなどにおれたちは切れぬ」

「ぬかしたな、野郎」

「お伊勢、どいていろ」

のら太郎は百合太郎をうしろへ押しやる。

「くそっ」

だっと吉田小僧が抜き打ちに踏んごんでこようとするのを、のら太郎は左のこわきにこもづつみを抱えたまま、そこは敏捷無類、こっちからも風のように躍りこんでいって、敵に道中差しを抜くすきも与えず、

「えいっ」

火のような当て身が吉田小僧のみぞおちを突きあげていた。

「うーっ」

がくんと敵はひとたまりもなくそこへ両ひざをついている。

同時に、うしろではぱっと番頭のやつが百合太郎の背後から飛びかかってきたが、百合太郎もまたひょいと右半身になって、ひじでそいつのみぞおちのあたりをいやというほど突きあげる。

「わっ」

番頭もまたあっけなくそこへぶったおれていた。

「でかしたぞ、嫁っ子」

のら太郎が振りかえって、にっこりわらう。

「恥ずかしい、のら」

半身になった足さばきがつい男になっていたのを恥じるように、百合太郎は百合にかえって赤くなりながら、われにもなく男の胸へ顔をうずめてしまった。

甘い乳房

「のら、わしはやっぱり男のほうがいい。いけないか」

百合は急にのら太郎を押しのけるようにして、しゃっきりと立ちなおった。女になっていると、妙に気持ちまで女にかえってしまって、気に張りがなくなるばかりでなく、さっき吉田小僧にふいに呼びとめられたときに、思わずどきりとしてのら太郎の腕にしがみついていた。

いや、いちばんいけないのは、知らず知らずのうちにのら太郎に甘えていることである。この男といっしょに歩いていると、なにか安心で、ただ形のうえだけの百姓夫婦なのだけれど、たのしいままごとでもしているような、ときにはせつない気持ちにさえなっているのだ。

――男にならなくては。

今もこの男のたのもしい胸にすがりついて、

つい女になりかけていた百合は、はっと気がついて、百合太郎になろうとしたのである。
「そうですな、もう敵の目をくらましてこんどはこっちが跡をつける番なのだから、男にかえってもいいでしょう」
のら太郎はこっちの女心など少しも気がつかないように、あっさり言い分をとおしてくれる。
「どこで着物をきかえればいいのだ」
またしてもすねてみたくなってくる。
「あの茂みのかげはどうです」
「だれが見ているかわからないではないか」
「では、このお堂の中を借りますかな」
「うむ、そうする」
まだそこにぶったおれたまま気絶している吉田小僧と子分のやつにはかまわず、百合はさっさと堂の表へまわる。
衣類のふろしき包みと刀のこも包みをひと抱えにしたのら太郎は、一度街道筋へ出てどっちも人かげのないのをたしかめ、
「さあ、百合太郎さん、今のうちだ」
と、きつね格子の中へ包みを入れてくれる。
「のら、見てはいやだ」
「よろしい、わしは街道へ出て背中を向けていよう」
のら太郎はわらいながら、また街道へ出ていった。
百合はきつね格子をしめて、手早く帯を解く。うす暗い堂内の光を吸って白々と豊かな胸乳がこぼれ、いやでも百合は女だということをまざまざと見せつけられる。
しかし、それはまたなんという美しくも娘らしいむっちりとした乳房なのだろう。百合はなぜともなくため息が出た。この自分の大切な女の命を、たくさんのおおかみどもがねらっているのだ。
——百合はだれにもやらぬ。もしやっていいときが来たら、この乳房はのらに。
あっとわれながらほおが真っ赤になって、思わずきつね格子越しに表へ目をやると、そののら太郎は正直にこっちへ肩幅のひろい背を向けて、じっと街道端へ突っ立っていた。
——百合、いけません、早く百合太郎にならなくては。
男になるには、早くこの乳房をさらし木綿で巻きつけてしまわなくてはならない。百合は衣類の包みを解いて手早く男になる。
着物を着て、袴をつけ、すっかり身支度ができると、さすがにしゃっきりと胸を張って、もう心から新宮百合太郎になっていた。
「やあ、できましたな、百合太郎さん」
きつね格子をあけて外へ出ると、のら太郎が振りかえってにっこりわらった。
「うむ。のらはそれでいいのか」
「いや、わしも元ののら太郎にならんとつりあいが悪いでしょう」
「よし、こんどはわしが見張っていてやる」
うっかり口に出てから、
「そうか、のらはそれにはおよばなかったんだな」
と気がついて、われながらおかしかった。
のら太郎はもうさっさと堂の中へ消えている。
「あれえ、百合太郎さんだ」
百合太郎が往来端へ立ったとたん、むこうの森のかげからのぼってきた虎吉が、こっちを見つけてびっくりしたように駆け寄ってきた。
「なんだ、ねこか。おまえ江戸へ帰ったのではないのか」
百合太郎の声は冷たい。
「ひでえなあ、若だんな、これでもあっしはずいぶん心配して、若だんなをさがしていたんですぜ。のらだんなはどうしやした」
さぐるような目つきをして、きょろきょろあたりを見まわしている。
「その堂の裏へ行ってみろ」
「へえ、裏にいるんですか」

のこのこ堂の裏へまわっていって、わっと言いながら、青くなって引きかえしてきた。
「し、死んでいやすね、若だんな」
「いや、ただ気絶しているだけだ」
「百合太郎さんがやったんでげすか」
百合太郎は面倒くさいので、黙ってわらっていた。
「わかった。あいつら二人で若だんなのにおいをかぎつけて、それであんなところへ引っぱりこみやがったんですね。ちくしょう、ふてえやつらだ。こっちが腕が立つから助かったようなもんの、だから一人歩きはいけやせんや。のらだんなはどこへ行ったんでげす」
「知らぬ」
「だって、ゆうべは二人っきりで吉原宿へとまったんでしょう」
虎吉はひそかに百合太郎の顔色をうかがいながら、
「けんかでもしたんですか。まさかあのだんなが変なまねなんかしねえでしょうしね、——それとも、ゆうべは二人っきりだし、若だんなはくたびれてぐっすり眠りこんでいる、あれであののらだんなはほんとうはすみにおけねえ女たらしなんですからね、油断はできないとお兼も言っていやした。ああ、わかった、あっと気がついてみたら、のらだんながいつのまにか百合太郎さんの布団の中へはいりこんでいたんですね」
と、いやらしい探りを入れてくる。
「ねこ、なにを一人で寝言いってるんだ」
支度のできたのら太郎が、脱いだ衣類をふろしきづつみにして、ぬっと堂の中から出てきた。
「わっ」
虎吉は飛びあがらんばかりにびっくりして、
「あれえ、だんな、変なところから出てきやしたねえ」
と、たちまちうさんくさそうな顔をする。
それを見て、百合太郎は黙って蒲原宿のほうへ坂をくだり出した。
夕方もやがてたそがれに近くなっている。
「お兼はどうしたか知っているのか、ねこ」
のら太郎は虎吉とならんで歩きながら聞く。
虎吉がしゃべっていた寝言など気にもとめていないようだ。
「知っていやすよ。お兼は富士川の渡しへかかろうとするところで佐久馬ねこにつかまっちまったんでさ」
「おまえは逃げ出したのか」
「なあに、むこうでおまえにゃ用はねえと言いやしてね、あっしは置いてけぼりを食わされたんだが、まさかお兼をそのままほってもおけやせん。まずだんなたちをさがさなくちゃと思って、こうやって後を追っていたんです。だんなはどこでお兼や佐久馬ねこに会ったんでげす」
「富士川の渡しをわたったこっち側で、あの連中をやりすごしたんだ」
「へえ。よくむこうじゃ気がつきやせんでしたね」
「隠れ簑をかぶってかくれていたんだ」
「あの、いまのお堂の裏にたおれていたやつらはどうしたんです」
「あの二人は追いはぎだ。あそこに待ち伏せしていて、ぐずぐず因縁をつけてきたから、裏へ引っぱっていってちょいと眠らせておいたんだ」
のら太郎はこともなげに言ってから、
「ねこ、おまえに一つたのみたいことがあるんだがな」
と、あらためてきり出す。
「どんなことです、だんな」
「佐久馬ねこはわれわれが後になったことは知らないから、たぶん今夜は由比の宿まで足をのばしたろう。お兼をつかまえていったのは、むろんわしたちをおびきよせるおとりにするつもりだ。お兼はめったにやつらに負ける女ではない。わしたちが後になったと知らせてやれば、

きっと一人で逃げ出してこられる女だ。今夜わしたちは蒲原泊まりにするから、おまえ御苦労でも由比まで行って、お兼にそっとわしたちのことを耳に入れておいてやってくれぬか。どうだね」

「なあるほど――。それで、だんなたちはいったいこれからどうしようっていう腹なんです」

「わしたちは当分佐久馬ねこの跡をつけてみようと思う。だから、できればおまえはお兼と二人で、佐久馬たちとわしたちの中間を歩いて、ときどき連絡をとってくれるとありがたいんだがな」

「そうやって佐久馬ねこの跡をつけていくと、なにかうまいことがあるんですかえ」

虎吉は虎吉らしいことを聞く。

「うむ。やつらの跡をつけていると、百合太郎さんは敵にめぐりあえるかもしれないんだ」

「へえ、若だんなは敵討ちなんで――。なるほどねえ、だから男の姿になっているわけですね」

虎吉は本気にしたようだ。

「だから、おまえたちのおかげでめでたく本望をとげた暁は、お兼にあずけてある金をおまえとお兼に半分ずつ礼にしてもいいと、百合太郎さんも言っているんだ」

のら太郎はもっともらしくいう。こういう下司は金でつって利用するにかぎるし、また百合太郎が目的を達しさえすれば、あの金などほんとうに二人に分けてやってもいいのである。

「わかりやした。どうせあっしも乗りかかった船だ。ひとつやってみやしょう」

「そうか、やってくれるか」

「やりやすとも――。それで、だんなたちは今夜は蒲原泊まりでござんすね」

「うむ、そういうことにする」

「百合太郎さんは疲れているようですからね」

その百合太郎は二人の話を背に聞き流しながらゆっくり七難坂をくだって、やがて蒲原の宿へはいろうとしていた。

蒲原の夜

「のら、ねこは信用しないほうがいいぞ」

蒲原の松屋という旅籠へついた百合太郎は、座敷へ落ち着くとすぐ、のら太郎に注意した。

「いや、信用などしていませんが、あのくらいの使いならできるだろうと思いましてな」

例によって百合太郎は寝るまで宿のどてらに着かえないので、のら太郎もそのまま火ばちの前へすわって茶をついでやりながら答えた。

「まさか、佐久馬ねこのほうへ裏切ることもないだろうが」

百合太郎には女の敏感さで、なんとなくその不安がある。

「いくら下司でも、それだけは大丈夫でしょう」

のら太郎は気にもとめていないようだ。

「おふろがあいていますからどうぞ」

女中がそう知らせてきた。

「百合太郎さん、わしが番をしているから、ひとふろ浴びたらどうです。疲れがとれるが」

百合太郎も昨夜は野宿だったし、ふろを浴びたいには浴びたい。

が、考えてみると、二人きりで旅籠についたのは今日がはじめてなのだ。さっき虎吉が恥ずかしいことを口にしていたし、疲れてぐっすり眠っている間にもしそんなことでもあったらと、きらいな男ではないだけに、妙にほおが赤くなってくる。

「いやなら無理にすすめるんじゃありません」

のら太郎はその赤くなって目を伏せた百合太郎の花のような顔を見て、しようがないといったように苦笑する。

それがいかにもそんなに信用がないのかなあと言っているようで、百合太郎は自分が恥ずかしくなってきた。

「のら、ふろを浴びる。いっしょに行け」

万一この男が少しでもいやらしい心をおこしたら、きってしまえばいい。びくびくしていて

はきりがない。わしはもう男なのだ。この男とあくまで勝負してみようと、百合太郎はとっさに腹をきめたのだ。

だから、ふろ場へきても、べつに番をしていろとはいわず、さっさと先へはいって着物をぬぎ出した。

しかし、のら太郎は黙って外から戸をしめて見張りに立ってくれたようである。

——うれしい男。

裸になると、百合太郎はやっぱり女にならずにはいられなかった。そして、のらならいっしょにはいってきてもかまわないのにと、ゆっくり湯船に肩までひたりながら、胸が甘くうずいてくる。湯はまだ新しく、窓にたそがれの光があるから、白々と肌をすかせて見せて、その体中がうっとりとするように心地よい。

——だれかしら、兄上が選んであたくしにつけてくれたあの男。

またしても、それが気になってくる。いや、兄上が許しているほどの男なのだから、いつかはこの肌があの男のものになるときがくるに違いないと思うと、夢のようにたのしい。

——百合はのらが好き。

思わずそっと両手で湯の中の乳房をおさえたとき、急に戸の外で男の声がした。

「御入浴なら、しばらくお待ち願いたい」

のら太郎の声だ。

「なぜかな」

野太い声が聞く。

「まことに申しかねるが、てまえ主人がただいま入浴中です。もうすぐあがりますから、ほんの少々お待ちいただきたい」

「貴公の主人というのは、いったい何者なんだ」

「いささか身分のある者です」

「ばかなことをいえ。たとえどんな身分があろうと、それをかくしておなじ旅籠へつけば、おなじ人間ではないか。ふろへいっしょにはいっていかんということはあるまい」

「そうだとも。いっしょにはいっていかん身分の者なら、はじめから宿へそう言いつけて、なぜふろ場をべつにせんのか」

相手はどうやら二人らしい。理屈はたしかに相手のほうにあるのだ。

「一言もありません。じつは、女中がふろがあいていると申しますので、主人に入浴をすすめました。こっちがすむまで、まさかほかの客を入れるとは思わなかったのです。いまさら女中の手落ちを責めてもしようがありませんが、ほんのもうしばらくのことです、まげてお待ちを願いたい」

「ならん。われわれもおなじ客だ。貴公に入浴をとめられる理由はない」

「いや、おとめするのではありません。お待ち願いたいと、事情を訴えておたのみしているのです」

「貴様、どうしてもわれわれの入浴のじゃまをする気か」

「たってじゃまをすると、刀にかけてもはいってみせるぞ」

相手は二人を笠に、いよいよ意地になってきたようだ。それにしても、少し意地の悪いやつらである。

のら太郎がそうして時をかせいでいてくれる間に、百合太郎はちゃんと身支度ができたので、すっとふろ場の戸をあけた。

「のら、もうよいぞ」

にっとわらってみせた百合太郎の湯ほてりのした顔は薄桜色につやつやとして、水もしたたる美少年ぶりである。

浪人者らしい相手二人は、あっとその美貌に目も魂も奪われたようだ。

「お待たせいたした。どうぞ御入浴ください」

のら太郎はすまして一礼して、百合太郎の後につづく。二人はぼかんとそのうしろ姿を見送っていた。

「のら、あぶなかったな」

百合太郎は座敷へもどってからわらいながらいった。
「いや、大丈夫です。あなたの支度のできるまでは、けっして戸に手はかけさせません」
「たぶんそうだろうと安心して、わしはゆっくり支度をしていた。しかし、のらはだいぶ苦しそうだったな。言い分はあっちにあるのだからな」
「なに、こっちは時をかせぎさえすればよろしいのだから」
「おかげでわしはさっぱりしたが、のらはふろへもはいれなかった」
「いや、わしは寝しなにでも浴びます」
が、このちょっとしたふろ場騒ぎは、やっぱりそのまま無事にはすんでくれなかった。
まもなくさっきの浪人者二人が、案内もなくがらりと障子をあけて押し込んできたのである。ちゃんと身支度までしてきたところを見ると、なにか因縁をつけにきたのだろう。
「やあ、貴公がたか。なにか用かね」
こんな連中に無作法とがめをしたところではじまらないので、のら太郎はむしろさばけて出る。
「おい、貴公はさっき、てまえの主人はいささか身分のある者だと申したな」
「さよう、それがどうかしましたかな」
「その身分姓名をうけたまわろう。はっきり申してみい」
「そう事を好んではいかんな。見うけたところ、貴公たちももう入浴はすませてきたようだ。おたがいにさっきのことはさっぱりと水に流してはどうだろう」
「ならん。われわれはどうしても腹にすえかねることがあるのだ。主人の身分姓名から聞きたい」
二人ともすごめるだけすごんでいる。いずれは用心棒などを飯の種にして歩く札つきのごろんぼ浪人どもに違いあるまい。
「こっちの姓名が聞きたかったら、まずそっちから名乗りなさい。侍は礼儀を正しくするほうがよろしい」
のらはやるなあと、百合太郎はうれしくなってくる。
「申したな、わしは岡崎浪人五十嵐五兵衛だ」
「拙者は広島浪人大沼喜平太だ」
「岡崎五十嵐に広島大沼だな、てまえ主人は番町に屋敷をたまわる直参千五百石新宮百合太郎、わしは家来の野良太郎」
「うそをつけ」
岡崎五十嵐が一喝してきた。
「ほう、これは頭から手きびしい。けっしてうそはつきません」
「黙れっ。貴様の主人は女だ。公儀旗本に女がいるか」
「そう人に難癖をつけてはいかんな」
「難癖ではない。においでもわかる。たって男だと言い張るなら、肌をぬいで胸を見せろ」
「天下の旗本にたいして、肌を見せろとは無礼千万、あまり無法をいうと、ほんとうに怒りますぞ」
のら太郎は平然と言ってのける。百合太郎も顔色ひとつかえず、さげすむように二人を見ているのだ。
浪人どもは、はてなというように、ちらっと顔を見合わせたが、騎虎の勢いでもう後へはひけない。
「怒っているのはこっちだ。けがらわしい女のはいった後のふろなどへ入れられて、黙って引きさがれると思うか。だいいち、女の男装は天下の法度、出ようによっては二人とも問屋場へ突き出してやるからそう思え」
「出ようというと、いくらか出せと言われるのか」
のら太郎は気をひいてみる。
「出せとは言わん。ただではすまぬと言っているんだ」
金ですむなら、金ぐらいやってもいいのであ

る。しかし、金を出せばいよいよ女をあばきたがるに違いない。かえってこちらの弱みを見せるようなものなのだ。

「百合太郎さま、こうなってはいたし方ございません。出るところへ出ることにしましょう。この連中は道中の毒虫、少しこらしめてやるほがよいかと思います」

「のら、なるべくなら許してやれ。そう悪気がある者とも思えぬ」

百合太郎が鷹揚になだめる。

「どうだな、御両所、出るところへ出るか、それとも黙って引き取るか」

どうせこの連中はただではすむまいが、これだけの段取りをつけておかないと、後で宿にまで疑われることになるのだ。

「おい、二人とも裏へ出ろ。こうなったら刀にかけてもその主人というやつを裸にしてみてやる」

浪人どもも旧悪があるか、やっぱり問屋場へは出たくないらしい。腕力で勝負をしようというのだ。いや、そう出たら相手がひるむかとでも思ったのだろう。

「承知した。しからば裏へ出よう。そのほうがいちばん早い」

のら太郎はあっさり立ちあがって、床の間の大刀を取った。百合太郎もしずかに立ちあがる。

「百合太郎さまは出なくてもよろしいです」

「いや、出てみよう。久しく真剣を抜いてみぬから、幸いためしてみたい」

またしても浪人どもは顔を見あわせていたが、

「よし、来い」

いきなり袴の股立ちを取って、二人とも勇ましく縁側からはだしで庭へ飛びおりた。

この辺は砂地で、裏はすぐ浜辺になっている。のら太郎も百合太郎もはだしで、つれだって砂浜へ出た。

旅籠の客が四、五人、おなじように後からついて出たが、これはみんな裏木戸のところへ立ちどまってしまったようである。

日が暮れたばかりで、浜には星あかりが暗くただよっていた。ぷうんと磯の香が高い。

「御両所、ほんとうにやる気なのか」

のら太郎が先に歩いている二人にのんびりと声をかけた。

「なんだと――」

浪人どもが立ちどまって、くるりとこっちを向く。そんなことを聞くのら太郎を臆したとでも見たか、至極横柄な顔つきだ。

「やるんならこの辺でやろう」

すかさずのら太郎が畳みこむ。

「くそっ」

あわてて岡崎五十嵐が柄に手をかけて抜刀しようとしたとたんに、

「とうっ」

敏捷無類の太刀さばきを持っているのら太郎は、もう猛然と躍りかかって、敵の胴へだっと抜き打ちをかけていた。

「わっ」

口ほどにもなく、五十嵐はどすんと横っ倒しになる。

「立て――。今のは峰打ちだ。こんどこそほんとうにたたっきる」

さっそうとこぶし下がりの青眼につけている。

こちらは広島大沼が同時に抜刀して、百合太郎は柄に手をかけたまま、来れば抜き打ちと身構えている。

が、岡崎五十嵐があっけなくぶったおれてしまったので、ぎょっとした大沼は、もうぜんぜん闘志が消えているようだ。

「参った。あやまる。とうてい、われわれのおよぶところではない。このとおりだ」

五十嵐は刀を投げ出して、そこへ両手をついてしまった。

「そうか、文句がなければ許しておこう」

「ありがたい。このとおり、このとおり」
五十嵐はくまのように何度もおじぎをしている。
「行こう、百合太郎さん」
のら太郎は刀を鞘へおさめて、木戸口のほうへ引きかえし出す。
百合太郎がいそいそと肩をならべて、湯上がりだから女の肌が春宵の微風に甘くただよう二人の足の下で、さくっさくっと砂が鳴った。その素足さえ百合太郎のは白々として美しい。
「のらは強いな」
百合太郎がそっとため息をついた。
「いや、あちらさんが少々弱すぎるんですな。しかし、百合太郎さんの構えは絶品だなあ、気品があって」
まんざらお世辞ばかりではなかった。
「そうじゃないんだ。わしはほんとうに相手をきる気でいた。それが恥ずかしいんだ」
「そんなことはない。あなたはわしと立場が違う。いつでも相手をたおすくらいの意気がないと、男にはなりきれない」
「ほんとうか、のら」
その声音がつい女になって、のら太郎に媚びている。
——いけない、あたくし。
百合太郎は強く反省しながら、しかし胸いっぱいにふくらんでくるうっとりするような恋心を、自分でどうすることもできなかった。うるんだ春の星が美しい夜だった。

下司根性

蒲原の宿から由比へ一里、ほとんど磯づたいの道で、夜風はまだ寒いが、十六日の月が青い海に明るかった。
「ちくしょう、ばかにするねえ。おぼえてやがれ」
蒲原で百合太郎とのら太郎にわかれた橋場の虎吉は、その一里の道をつきたい放題の悪態をつきながら、まるで走るように足をいそいでいた。
「おれはもう我慢がならねえ。ああ、承知できねえとも」
虎吉はさっき七難坂の上の辻堂の前で見かけた百合太郎の顔が目に焼きついていてどうしても離れない。ぼうっと花のように上気したほお、うるんだ目もと、べにつばきのように赤くさえたくちびる、いくら澄ましてみせたって、顔は心の鏡だ。ごまかされてたまるもんかと思う。
しかも、その後からすぐのら太郎のやつが、のっそりとあの辻堂から出てきたのである。
あの二人はゆうべ原宿でもうちゃんとできていたんだ。そして、あの辻堂の前までくると、急にどっちからともなく堂の中へはいりたくなった。そこを二人の旅の者に見とがめられたんで、二人を堂の裏へ引っぱりこんで当て身をくわす。これでよしというので、手に手を取って堂の中にかくれる。
「ちくしょう、あののらのやつがずうずうしくも百合太郎の袴のひもをといてぬがしてやったに違いねえや」
昨夜はくたびれてぐっすり眠っている寝こみを押しこまれて、いくら気が強くてもそこはまだ生娘だから、のらなにをすると、かっとなって、夢中でじたばたしたことだろうが、今日はもう一度ぬれてしまっているんだから、もうしようがないとあきらめてもいるだろうし、ひょっとすると百合太郎のほうにもそんないたずら心が動いていないとはかぎらない。それだとなおさらのことだ。ただわくわくと男に袴をぬがされて、人目を心配しながら口もきけずにいそいで袴をはいて、恥ずかしいから追い立てられるように先に辻堂をのがれ出てきた。それでも人に見られずにすんでよかったとほっとしているところへこっちが行きあわせたので、
——あぶないところ、ほんの一足違いだった。
と、内心どきりとしたに違いないのだ。そん

なまだ余韻のさめきらない、とろんとしたような、当惑したような、うわずった百合太郎の顔だった。

「後からのそりと出てきたのらのいうことが憎いや、おれたちは隠れ簑を持っているとぬかしゃがった」

しかも、今夜もこのおれがじゃまになるもんだから、お兼を助けてやれと、もっともらしい用をいいつけやがる。

「くそったれめ。だれがもうてめえなんかの手に乗るもんか」

こうなりゃここまで使ってきた日当が惜しい。お兼はふところに百合太郎の百両を持っているはずだから、佐久馬ねこに二人の居どころを売って、お兼の体と取りかえ、おれはこっちで腹いせをしてやる。

「なにも恩義があるから自腹まで切って百合太郎の後をくっついてきたわけじゃねえ。こっちはこれでも仕事にきているんだ。せめて百両の金でもものにして帰らなけりゃ、男がこけになっちまわあ」

自分の頭の足りないのには気がつかず、虎吉はいっぱし悪党ぶって、もうすっかりその気になっていた。

が、考えれば考えるほど惜しい百合太郎の肌である。あの玉の肌をどんなふうにしてのらがおさえつけたか、それを思うと、うらやましいのを通り越して、むかむかと腹が立ってきてしようがなかった。

「ふん、いまに見てろよ。佐久馬ねこをけしかけて、二人ともひどいめにあわせてやるから」

虎吉はかんかんになりながら、一里の道を夢中で歩いてしまった。

由比の宿へはいって、北沢佐久馬らのとまっている旅籠をたずねてみると、ここは町の長さ四町あまり、家数百軒ばかりの小さな宿場だから、府中屋だとすぐにわかった。

「番頭さん、北沢佐久馬ってだんなに、大切な御注進があって江戸からきた、あっしは橋場の虎吉という者だが、ここまで顔がお借りしたいと取り次いでくれないか」

番頭にそうたのんで、店の土間で待っていると、まもなく佐久馬が一人で出てきて、

「なんだ、貴様か。なんの用だ」

と、うさんくさそうな顔をする。

「だんな、あっしは少し腹の立つことがあって、あの二人の居どころを売りにきたんですが、買ってくれやすか」

虎吉は声をひそめて、いきなりぶつけてみた。

「なにっ、あの二人って、百合太郎とのらのことか」

「そうですよ、のらの野郎、いやにあっしをじゃま者あつかいにしやがって、つまり百合太郎さんと二人っきりでとまりてえんです。てめえ一人でいい子になろうって了見があっしは気にいらねえから、いっそだんなに売っちまおうって気になりやしてね。そんなものはいらないとだんながおっしゃるんなら、こいつはまあしようがねえ話なんだが」

わざとどっちでもいいような顔をしていってやると、そのために執念の鬼になっている佐久馬だから、

「よし、買ってやる。いくらほしいんだ」

と、案外あっさり乗ってきた。

「なあに、金はいりやせん。ほかにほしいものがあるんでさ」

「なにがほしいんだ」

「あっしはここの裏口へまわって待っていやすから、お兼をなわつきにしてわたしておくんなさい」

「ふうむ、お兼をどうしようというんだ」

さすがに佐久馬はまゆをひそめる。

「ありゃだんな、旧悪のある女でさ。問屋場へつれていって突き出しゃ、お上からほうびがもらえて、その手柄で江戸へ帰って岡っ引きにしてもらえやすからね」

「そうか」
佐久馬はじっと虎吉の顔を見ていたが、
「よし。では、裏口で待っていろ」
と、べつに疑うふうもなく奥へはいった。
——へっ、へっ、うまくいきやがった。もっとも、だんなだって百合太郎さえ手にはいりゃ文句はねえはずだからな。
虎吉はしてやったりと一度府中屋を出て、そこの路地口から裏木戸へまわっていった。
あまり待たせもせず、裏木戸がそっとあいて、佐久馬がうしろ手に縛ったお兼の肩を押すようにしてむっつりと出てきた。
お兼は月あかりに虎吉の顔を見ると、ふんといったように底意地の悪い顔をして、ぷいとそっぽを向いてしまう。度胸のいい女だから、いまさらわめいたってわめくだけむだだと観念してしまったのだろう。
「虎吉、お兼をつれてきたぞ」
「ありがとうござんす。あの二人は、今夜、蒲原の宿の松屋という旅籠屋にとまっていやす」
「うそではなかろうな」
「この首を賭けやす。まあ、行って踏んごんでごらんなせえ。今ごろはいい気になって、一つ床の中にまくらを並べているところでさ」
佐久馬はちらっといやな顔をしながら、
「では、つれていけ」
とんとお兼の肩を邪険に突いてよこす。
「たしかに受け取りやした」
虎吉はお兼の二の腕あたりをつかんで、おじぎ一つすると、もうお兼を引っ立てて、わくわくと表通りのほうへ歩き出した。
百合太郎にはおよばなくても、これもまた年増盛りの濃艶な甘肌を持った女なのである。両手がきくと含み針というすごい芸当を持っていて、ちょっと虎吉の手には負えないあねごだが、だからこそこうしてなわつきにして受け取ったので、いざとなったとき、この鉄火な女がどんな悔しがり方をするか、虎吉は考えただけでも有頂天にならずにはいられない。しかも、この女はその腹に大枚百両という金を巻きつけているのだ。
——待てば海路のなんとやらで、虎吉さまにもいよいよ運が向いてきやがった。
宵をすぎた表通りは、もう人通りもほとんど絶えていた。ここから蒲原の方へ宿を出はずれた松林の中に、海を見晴らせるよしず張りの昼間だけの掛け茶屋が店をしめているのを、来がけにちゃんと見てきている虎吉だった。
「あねご、いやにおとなしいんだな」
腕をつかまれておとなしく肩を並べているお兼は、まだ一言も口をきかない。虎吉はついからかってみたくなる。
「虎さん、おまえいつあたしのなわをといてくれる気なんだえ」
ああ、そうか、おれが助けにきたと勘違いしているんだなと思ったので、
「まあ待ちな、宿の中じゃどこに敵の目があるかわからねえからな。宿はずれまで辛抱してくんな」
と、神妙に答えておく。
「おまえ、どこであの二人に出会ったんだえ」
「蒲原の宿へはいろうとする七難坂の上の辻堂の前で出会ったんだ」
「まさか佐久馬ねこなんかにほんとうに二人を売ったんじゃないだろうねえ」
「そんなことはしねえ。おれも男だ」
「二人はどこへとまっているの」
「蒲原を出はずれた百姓家にとまっているんだ。そういやあ、おめえ、あの百両、佐久馬にとられちまいやしなかったろうな」
虎吉はふっとそれが心配になってくる。
「大丈夫さ。金は無事だよ」
「そうか、そりゃよかった。けどなあ、あねご」
「どうしたのさ」
「怒りっこなしだぜ」

「話してごらんよ」
「のらだんなのことなんだが、――そうだ、ちょいとあそこで休んで相談していこう」
ちょうど松林の中にあるよしず張りの茶店が見えてきた。虎吉は何気なくお兼を誘って、月あかりのよしず張りの中へはいり、腹あわせにしてある床几を直して、その一つにお兼を掛けさせる。
むかいあってこっちの床几へ腰をおろした虎吉は、すぐ手の届く前に両手のきかないお兼をながめているのだから、もうこっちのものだと舌なめずりをしたい気持ちだ。
寄せてはかえす波の音が絶えずざざあっと耳に近く、しかも宿をはずれているから、めったに人が近づく心配はない。

まわりあわせ

「相談てなにさ」
お兼はまだこっちの気持ちが見ぬけないらしく、心やすそうに目をあげる。
「あねご、おめえあののらに少しでも気があるんなら、もうあきらめたほうがいいぜ。じつは、おれ、今日見つけてしまったんだ」
「なにを見つけたんだえ」
「のらが百合さんの袴のひもをといてやっているんだ、七難坂の辻堂の中でね。お百合さんぼうっと赤くなりながら、のらのするままさ。こいつは悪いとこ見ちまったと思って、おれはそっと街道へ逃げ出して、かくれて待っていたんだ。しばらくたって、あたりを見まわしながら辻堂を出てきたお百合さんの恥ずかしそうな顔、あねごに見せたかったぜ」
話しながら虎吉は自分で変な気がしてきた。
「それでどうだっていうんだえ」
「だからよう、あねごものらのことなんかすっぱりとあきらめて、どうだ、おめえのふところにゃ百両という大金がころげこんでいるんだし、それをここでおれと五十両ずつ山分けにして、二人で江戸へ帰らねえか。おめえにその気があるんなら、おれと夫婦になってよう」
「あたしがもしいやだといったら」
妙に落ち着き払っているお兼だ。
「いやだといいやしようがねえ。おめえのふところの百両をおれのものにして、ついでにここでおめえの体をおもちゃにしていくまでだ。それじゃおめえがあんまりかわいそうすぎるから、親切に相談を持ちかけているんだ」
「なわつきのままでね」
「なあに、おめえがうんといやあ、なわはすぐといてやる。どっちにする、お兼」
なぶるように虎吉がぬっといやらしいきつね面を突き出したとたん、
「ばか野郎っ」
御守殿お兼の両足が軽業師のように宙へ浮いて、油断しきっている虎吉のみぞおちのあたりをしたたかだっと体ごとけあげた。
「わあっ」
虎吉は急所をけられて、床几のむこうへあおむけに引っくりかえっていく。
けったお兼も両手がきかないから、床几もろともうしろへもんどり打たんばかりに投げ出されたが、これは承知のうえで自分から引っくりかえったのだから、髪を乱してたちまちすっと立ちあがる、まったく思いきった鮮やかな芸当だ。
虎吉はそれっきり起きあがれない。気絶してしまったのだろう。
「ざまあ見やがれ。小利口ぶった面をして、人をだましに掛けようったって、そんな手に乗ってたまるもんか。あたしをだれだと思っているのさ」
お兼は今までの鬱憤を一度にたたきつけるように吐き出しながら、さっさとよしず張りの外へ出る。
「あっ」
その前へ、そこの松の木かげからぬっと出て

きて立ちふさがった宗十郎頭巾の武士がある。
「だれさ、おまえさん――」
両手のきかないお兼は、じりじりと右へ身をずらして、抜き打ちのきかない方へと逃げながら、
「ふん、佐久馬ねこだね。ひきょう者」
と、たちまち相手を見ぬいてしまう。
佐久馬がこうして一人で跡をつけてきたとすれば、むろん虎吉を切って、百両の金も、あわよくばお兼の体までわがものにしようと考えてのことに違いない。だからこそ、虎吉のいいなりにお兼の両手を縛ってわたしたのだろう。
「うぬっ」
見ぬかれたなとわかると、佐久馬はさすがに殺意をおこしたらしく、いきなり刀の柄に手をかける。
「人殺しいっ」
お兼は金切り声をあげながら、とっさにばたばたと街道へ逃げ出した。
「うぬっ、待て」
佐久馬は狼狽しながら抜刀して後を追い出す。
両手のきかないお兼だから、とてもそういつまでも逃げれるはずはない。街道へ出たとたん、体の中心を失ってだっと前へ突んのめっていった。
――しまった。
当然拝みうちと覚悟したとき、
「ちくしょうっ」
「ううっ」
背後でふいに断末魔のうめき声があがった。
はっとして見ると、旅の男が道中差しを佐久馬のうしろから背中へ突き刺し、佐久馬がのけぞりながらどっとぶっ倒れていくところだ。
「ねえさん、あぶないところだねえ。番頭さんや、ぼかんと見ていないで、早くねえさんのなわをといてあげないか」
三十がらみの大店のだんなといった身なりの

その男は、少し離れたところに突っ立っている若い番頭にきびきびといいつける。
「へえ」
若い番頭は、はっと気がついたようにそばへきて、いそいで手のなわをといてくれた。
「ありがとうございます。おかげで助かりました。なんとお礼申し上げていいか」
さすがのお兼も、まったく夢のような気持ちで、ほっとしながら両手をつく。
「なあに、まにあってよかった。わたしどもは江戸の小伝馬町の木綿問屋で、吉田屋次郎兵衛、これは番頭の佐助といいますが、二人づれなので夜旅をかけてここまできますとな、頭巾をかぶったこの侍がしきりに暗い茶店の中をのぞいている。怪しいやつ、はて――何事だろうとそこにかくれて様子を見ていますとこの始末、いったい、ねえさんはうしろ手に縛られていなすったが、どうしたわけですね」
吉田屋は血刀をぬぐって鞘に納めながらまゆをひそめて聞く。
「はい、あたしはお兼と申しますが、お供をしていた御主人にはぐれ、それを探してここまでまいりますと、あの茶店の中にたおれている男が御主人のいるところを教えてやるからといって、あたしをあそこへつれこみ、ふいに両手を縛りあげていたずらをしようとしましたから、体でつきのけてやっと表へ逃げ出しましたら、この男がそこに待ちかまえていたんです」
お兼はうっかりほんとうのこともいえないと思ったので、あたらずさわらずにそういっておく。
「御主人はなんとおっしゃるお方かね」
「番町のお旗本の若さまで、新宮百合太郎さまとおっしゃいます」
「なるほど。――番頭さんや、茶店にたおれているという男をちょっと見ておやり――」
「いいえ、ほっておいてくださいまし。その男は道中ずっとあたしたちにつきまとって、いや

らしいことばかりいいよる虎吉という悪いやつなんです」
「なるほど、そんなやつならほっておくがいいかもしれない。それで、ねえさんはこれからどうしなさるね」
「はい、虎吉の話ですと、百合太郎さまは今夜蒲原の宿にとまっているとか申しますから、うそかほんとうか、これから引きかえしてみようと思います」
「それは大変だ。女一人で夜道はあぶない。今夜はわたしどもといっしょに由比にとまって、夜の明けるのを待ったらどうだね」
「いいえ、じつを申しますと、その頭巾の男もあたしたちにつきまとっている悪いやつで、その仲間が今夜由比にとまっているんです」
「なかなか話がこみいっているようだねえ」
「はい、これにはいろいろわけがございまして――」
お兼はそう答えておくよりしようがない。
「よろしい。わしはこれでよく話のわかるだんなでしてな、たぶんねえさんはその若さまと深いわけがあって、江戸を出てきなすった。だから悪いやつにねらわれる。くわしいわけは聞かないことにしましょう。しかし、女の夜旅はいけません。どうせその若さまも明日は薩埵峠をこえるのだろうから、今夜は由比を通り越して峠のふもとの倉沢まで行って泊まることにしましょう。これならどうだね」
吉田屋はものわかりよくそういってすすめてくれる。
かりにもいま命を助けてもらったばかりなのだから、それでも、いやだ、蒲原へ引きかえしたいと強情も張りきれない。後のことはまた後のこととして、
「では、そうさせていただきます」
と、お兼もひとまず我を折ることにした。
吉田屋次郎兵衛はむろん吉田小僧の次郎蔵である。

切られた男

翌日――。
のら太郎が百合太郎とつれだって蒲原の松屋を立ったのは、もう五ツ（八時）すぎだった。
昨日、一昨日とかなり無理な旅がつづいている。昨夜はゆっくりと百合太郎の足を休ませて、今朝もわざと遅立ちにしたのだ。
そういうあたたかい心づかいにつつまれて、昨夜は江戸を立って以来はじめてぐっすりと眠りの足りた百合太郎、今朝は顔色も晴々とすっかり元気を取りもどしていた。自然と足もとも軽い。
「のら、ゆうべねこはとうとうもどってこなかったな」
「そうですな。あの男のことだから、由比で待っていればいいとずぼらをきめているんでしょう」
「そうか、わしはあぶないものだと思う」
百合太郎はどうしても虎吉が信用できないのだ。
「もし虎吉がむこうへ寝返りを打ったとすると、どうなる」
「さあ、――まあ薩埵峠あたりで待ち伏せということになりますかな」
「お兼は無事かな」
「あの女は大丈夫です。どこかでうまく逃げだして、今日あたりこっちといっしょになるでしょう」
「そううまくいくかな」
「ぜひそううまくいってもらいたいものです。百合太郎さんの世話はお兼にかぎりますからなあ」
のら太郎はわらいながらいう。
「そんなことはない。わしはのらだってかまわん」
思わず口に出して、百合太郎は笠の下で赤くなる。

「それは百合太郎さんは男なんだからわしだってかまわないが、しかし、百合太郎さんはわしだと気兼ねをする」
「そんなことはない。ゆうべ寝床を次の間へ引っ張っていったのは、のらだぞ」
のら太郎は、いざ寝るというとき、並べて敷いてあった寝床の一つをさっさと次の間へ自分で引っぱっていって、今夜はぐっすりおやすみなさいといって、間のふすまをしめきってしまったのだ。
——うれしい男。
その心づかいに胸を打たれながらも、百合太郎はなにか寂しかった。のらならここにいてもいいのにと、そんな気がしたのだ。
「いや、次の間にいたって、百合太郎さんになにか間違いがおこればすぐ飛び起きる。心配はありません」
「そうか。しかし、今夜からそんな心配をしてくれなくったっていい」
「承知しました。百合太郎さんさえ窮屈でなければ、わしはどっちでもいいんです」
少しもそんなことにこだわろうとしないのら太郎だ。
——この男は、わしを女だと見てくれないのだろうか。
あんまり行儀よくされると、百合太郎はそんな気がして、なにか思いきってだだをこねてみたくなる。
——一度困らせてみてやろう、のらを。
そんなことを考えながら歩くのはなにかたのしい。今の百合太郎はのらと二人きりなので、心になんの苦労もないのだ。
「のら、あれはなんだ」
由比の宿へかかろうとして、そこの松原の茶店の前に四、五人、人立ちがしているのだ。
「さあ、なんでしょうな」
近づいていってみると、どうやら変死人らしい、むしろをかぶせてある間から、手足がぬっとはみ出している。
「侍のようだな、のら」
さすがに百合太郎はまゆをひそめた。
「失礼だが、果たしあいでもあったのかな」
のら太郎はそばに立っている問屋場の男に聞いてみた。
「さあ、どうかなあ。ゆうべ府中屋へ八人づれでとまった侍で、一人は若い女だったそうだが、その連中が今朝方早く立つとき、女の姿と侍が一人いなくなっていた。ここに背中を突かれて死んでいるのは、そのいなくなった侍らしいって、府中屋の番頭はいっているそうだ」
はてなと、のら太郎は思わず百合太郎と顔を見あわせる。
侍七人に女一人の泊まり客、それはたしかに佐久馬の一行に違いないからだ。いったい、殺されたのはだれなのか。のら太郎はほっておけなくなってきた。

薩埵峠

その夜、倉沢の安旅籠へとまった吉田屋主従とお兼は、翌朝これもおそ立ちにして、ゆっくり薩埵峠へかかった。
「ねえさんや、なにもここからわざわざ後もどりをしなくても、どうせ若さまも今日は峠を越しなさるんだ。ゆっくり歩いていくうちには、きっと追いついてきなさる」
なに食わぬ顔をして吉田屋がそうすすめるので、お兼もなに食わぬ顔で、
「では、そうします」
と、すなおにその言葉にしたがったのだ。そのじつ、吉田屋は昨夜あいにく相客が多くて、さすがにお兼をどうしようもなかった。今日こそ薩埵峠でうまくやってやろうという腹があるのだろう。
そんなことはむろん百も承知のお兼である。敵が頭巾をぬいだらこっちも頭巾をぬいでや

る。敵が腕力できたら、こっちにも含み針という奥の手があるからびくともしない。

ただ、気がもめてしようがないのは、二人きりで旅をしている昨日今日ののら太郎と百合太郎の仲である。

虎吉のばか野郎はもっともらしく、昨日、七難坂の辻堂で、百合太郎が顔を赤くしながら、黙ってのら太郎に袴のひもをとかせているのを見たといっていた。ばからしい、いくらなんだって神さまがまっってある辻堂でそんな行儀の悪いことができるはずもないが、一昨日の晩と昨日の晩の二晩は、たしかに二人きりで旅籠についているのだ。どっちかに少しでもその気がありさえすれば、男と女だもの、まして寂しい旅の空ではあるし、ただですむはずはない。

それに、あいかわらず冷淡なふうは装っているが、このごろのら太郎を見るときの百合太郎の目に、ときどきただならぬものがあるのをお兼は知っている。

——いやんなっちまうなあ。

まくらを並べていて女のほうから少しでもそんな目つきをすれば、どうかなすったのかと男のほうが聞きたくなるのはあたりまえである。女の方は胸がうずくから、思わずため息が出る。どこが苦しいのかと聞かれれば、胸がせつなくてと、いやでも口に出してしまう。そして、男の手が女の胸へいけば、もうそれっきりの話なのだ。

——いまさらやいたってしようがないじゃないか、できてしまったものは。

お兼はふっとそう思いなおしてもみる。が、二人とも好きなだけに、自分だけがのけ者にされたようで、なんともはかない気持ちなのだ。

——正直にいえば、あたしだってのらさんと二人きりならきっとため息がつきたくなるに違いないんだもの。

お兼は思わず胸がせつなくなってきて、ほんとうにため息が出てしまった。ちょうど急な坂

を一つまもなくのぼりきろうとするあたりである。

「ねえさん、手をひいてあげようかね」

一足先をのぼっていく吉田屋がそれを聞きとがめたらしく、わらいながら振りかえった。

「いいえ、まだ大丈夫なんです」

「ねえさんは案外足は達者なようだね」

「そうですかしら」

「若さまもさぞ心配していなさるだろうね」

「足が達者だからですか」

ついからんでいきたくなるお兼だ。

「いや、そう気をまわすものじゃない。旅なれていれば、男でも女でも自然に足は達者になります」

「そうですね。だんなども年中商用で道中なすっているんでしょうから」

「おっしゃるとおり、おかげさまでな。ねえさんの若さまってのはどうなんだね。やっぱり道中なれていなさるお方なんだろうな」

「いいえ、若さまはだめなんです。ですから、こんなにあたしが先へきちまって、うまく追いつけるかしらと、それが少し心配なんです」

「なるほど、——では、この坂をのぼりきったところでしばらく待ってみますかな」

そのあたりがちょうど七分ほどのぼった中腹になっていて、両側は熊笹の生いしげった深い杉林になっているはずである。

「山賊が出やしませんかしら」

お兼はそんな冗談をいいながら、それとなく含み針の用意をする。

「なあに、こんな山に山賊などは出ません。また、出たところで、それを怖がるようなねえさんでもなさそうだ」

吉田屋はそろそろ本性を出してきたらしい。

「いいえ、あたしこれで案外気が小さいんです」

「おっしゃるなあ、気の小さい女が百両などという大金をふところにして一人で道中が歩けるもんじゃありません」

「ですから、あたし、若さまがたよりなんです」
「どうだろうな、ねえさん、そんな足弱な若さまなどをたよりにするより、これからはこの吉田屋がたよりになってあげようじゃないか」
坂をのぼりきって暗い杉林へかかると、吉田屋はあたりに人気のないのを見すまし、つとお兼の右手を握ってきた。
「そんな御冗談を――」
お兼はべつに逆らおうとしない。
「いや、冗談じゃない。大きに本気さ。ねえさんだって一皮むきゃ、ただの白ねこでもなさそうだ」
「だんなはなんておっしゃる小僧さんなんです」
「吉田小僧の次郎蔵というのさ。さあ、ちょいとそこまでいっしょに行ってもらおうかね」
「あら、どうするんです」
「とぼけちゃいけねえ。こうして頭巾をぬいでみせたからには、いやでもおまえを女房にする。この林の奥にちょいと風流な木こり小屋があるんだ、すなおに行きなせえ」
腕をつかんでそこの小道へぐいと引っ立てようとしたとき、
「あっ」
お兼は、いや、吉田小僧もはっと棒立ちになってしまった。そこの土手のかげから、ぞろぞろと浪人者が六人、中の一人はたしかに今井新兵衛で、これは用心深く五人のいちばんうしろに下がっている。
「どなたです、あなたがたは――なにかわたしどもに御用なのですか」
吉田小僧はさすがに強気だ。
「町人、その女はこっちに少し用のある女だ。おとなしくわたして、さっさと通れ」
笹島という五人の浪人組の中ではいちばん頭分のやつが横柄にいいつける。
「ああ、わかった。おまえさんたちは昨日富士川の渡しでこのお兼をとりこにして歩いていた浪人さんたちですね。どうもどこかで見た顔だと思いました」
吉田屋もどうやらそれを思い出したらしい。
「そのとおりだ。この女はとりこにする理由があってわれわれがつれて歩いていたんだが、子細あってゆうべ逃げ出したのだ」
「そうでございますか。どういう子細がおありかは存じませんが、お兼はゆうべ由比の宿はずれであるお侍にきられようとしているところを、てまえどもが通りかかって助けてやりました。べつに悪い女とも思えませんので、こうして道連れになっておりますので、どうかここのところはひとつお見のがしを願います」
「ばかなことをいえ。もともとその女はこっちのとりこなんだ。すなおにわたさぬと、刀にかけても掛け合うぞ」
笹島は居丈高になっておどしつける。
「さようでございますか。では、こういたしましょう。てまえどももふところへ飛びこんできた窮鳥を、このままあなたがたにおわたししてしまうのはなんとなく寝ざめの悪い話で、この薩埵峠を越えればすぐ興津の宿でございます。そこの問屋場までお供いたしまして宿役人立ち会いのうえで白い黒いの話をつけるというのは、どうでございましょうな」
せっかく手にいれかけたお兼をいまさら人にさらわれたくないので、吉田屋もなんとか理屈をこねようとする。
「ならん、四の五のぬかすとたたっきるぞ」
問屋場へ出て話をつけられると、筋のとおった仕事ではないと浪人組も承知しているから、なんとなく殺気立ってきた。
「へえ、たたっきるとおっしゃる。それではまるで山賊でございますな」
「うぬっ」
たまりかねた笹島が、半分はおどしで抜刀したとたん、ぷっ、ぷっと、その目をねらってお兼の口から含み針があざやかに飛んだ。

「わっ」
笹島が思わず左手で目をおおってひるむすき、お兼は脱兎のごとく林の中へ飛びこんでいく。
「それっ、逃がすな」
「つかまえろ」
残る四人の浪人者は、目ざすのはお兼一人なのだから、吉田屋などにはかまわず、がさがさとお兼の後を追う。
つづいて吉田屋が子分に目くばせをして林の中へ駆けこんだのは、逃げるのが目的より、むしろお兼をうまく助けてやろうという腹だったのだろう。
街道筋に残ったのは、お兼に目をやられた笹島と、今井新兵衛の二人だけだ。
「笹島、どうした、大丈夫か」
新兵衛がそばへ寄って声をかけると、
「ちくしょう、すごい隠し芸を持っているあまですな」
そこにうずくまって針を抜いている笹島は、どうやら黒目だけはまぬがれたらしく、うめくようにいってまもなく立ちあがった。
「幸いめっかちにはならずにすんだようです」
「そうか、それはよかった」
「くそっ、敵を取ってやらなけりゃ腹の虫がおさまらん」
笹島は血のにじんだ左の目を二、三度ぱちぱちやってみてから、急にとらのようにがさがさっとこれも林の中へ分けいっていく。
「それっ、そっちだぞう」
「油断するな」
獲物は年増盛りのすばらしい女だし、しかもふところに大金を持っているとわかっているから、浪人者たちはわれこそ一番手柄にと先手を争って、しだいにその声は奥へ奥へと遠ざかっていく。
「正直なやつらだ、こんなところへ御本尊にでも乗りこまれては、それこそことだがなあ」

一人になった新兵衛にはちょいとその心配がある。なんでも独断でやりたがる佐久馬が、昨夜由比の宿はずれまでお兼を追っていって、たぶん今の吉田屋にやられたのだろう。そこで横死したことは、茶店で息を吹きかえしたという虎吉の知らせで、昨夜のうちに新兵衛は知った。しかし、死んだ佐久馬などの跡片づけにかかりあって主家の名が出るようにでもなると、こっちの仕事が仕事だけに、けっして無事にはおさまらなくなる。だから、虎吉には金をやって堅く口どめして帰し、こっちも今朝は早立ちをして由比を後にしてしまった。
この峠でこうして網を張っていたのは、じつは後からくるはずの百合太郎とのら太郎をつかまえるのが目的だったのだが、意外にもお兼のほうが先に網にかかってこんなことになってしまったのである。
自分一人ではとうていのら太郎におよばないことはよくわかっているので、新兵衛は気が気ではない。
と、峠のほうから漆塗りの陣笠をかぶった立派な若侍が、供侍十人ばかりをしたがえて、こっちの林の中の騒動を耳にしたのだろう、足早に駆けつけてくるのが見えた。
――つかまってはまずいな。
とは思ったが、もういまさら逃げたりかくれたりしてはよけい怪しまれる距離まで来ている。ままよと知らんふりをして、林のほうを向いていると、
「はてな、おぬしは今井新兵衛ではないか」
と、陣笠の貴公子とならんで先頭に立った大兵の武士がふいに声をかけてきた。
「おお、あなたは松川先生――」
声の主は国元の指南番松川半兵衛で、それとならんでいる貴公子は国家老鬼頭左馬之介の嫡子兵馬だ。
兵馬の生母は先君の姉にあたる人だから、兵馬は正しく主家の血をひいている嫡男で、それ

があるから父左馬之介はいずれは兵馬に主家をつがせようと、ひそかに一味を集めて陰謀をたくらんでいるのだ。

「新兵衛、あの騒ぎはなんだ」

兵馬がすでに遠い林の中の人声に耳を澄ましながら、鋭い目を向けてくる。

「はあ、若さまは江戸の百合姫さまが男装をして一人で国もとへむかっていること、御承知でございましょうか」

新兵衛もこうなっては自分の野心は捨てるほかないので、かえって気が楽だ。

「うむ、その儀は途中で江戸からの知らせを受け取っている」

「じつは、その百合姫の百合太郎さまについているお兼と申す女をいま浪人どもに追わせております。その女をつかまえると、百合太郎さまのいどころがはっきりすることになっているのです」

「ふうむ。——半兵衛、どうする」

兵馬は松川に相談する。

「さようですな。やはりつかまえたほうがよろしいでしょう。今井、追いかけている浪人は何人だ」

「五人です。女はなかなかしたたか者ですが、一人ですから、まもなくつかまるでしょう」

「そうか。とにかく、貴公たち、三人ばかり林の中へはいってみてくれ。相手が女では浪人者ばかりにまかせてもおけまい」

松川半兵衛は兵馬の相談役に選ばれているだけあって、よく頭も働く。

言下にはっと答えて、供侍が三人林の中へ駆けこんでいく。

「しかし、こんなところで若さまにお目にかかろうとは思いもかけませんでした」

新兵衛はふしぎでたまらない。

「いや、こんどは不意の御出府だ。少し子細があってな。若さまは先発隊で、後から本隊がくる」

「すると、御家老さまもごいっしょですな」

「まあ、そういうことになる。問題はその百合姫さまの百合太郎だが、いったい目的はなんであろうな」

半兵衛の奥深い目がじっと新兵衛を見すえる。

「さて、てまえはただ尾行しろと江戸の指図をうけましただけで、その点はまだ聞いておりません」

なにか気のきいた返事がしたくても、そこまで機密にあずかれないまだ下っ端の新兵衛なのである。

正面衝突

そのころ、のら太郎は百合太郎の足をいたわりながら、ちょうど薩埵峠へかかったところだった。

「百合太郎さん、ことによるとこの峠あたりで新兵衛ねこが待ち伏せしているんじゃありませんかなあ」

由比へはいろうとする宿はずれの変死人は、意外にも北沢佐久馬だった。しかも、致命傷は背中を一突きにされている。

問屋場の男の話では、昨夜府中屋へ八人とまって、今朝立ったのは六人、男と女が一人ずついなくなっていたという。男は佐久馬で、女はむろんお兼だ。

どうして佐久馬とお兼が蒲原へ引きかえそうとしたのか。くわしいことはのら太郎にもわからないが、虎吉が寝がえりを打ったことだけはたしかだ。

虎吉が寝がえりを打ったとすれば、新兵衛にはまだ五人の浪人者がついているのだから、当然この峠あたりへ網が張りたくなるだろうとのら太郎は想像するのである。

「のら、お兼もわしたちを裏切ったと見るのは少しかわいそうか」

ふっと百合太郎が遠慮そうにいう。

「いや、あれはそんな女じゃないでしょう。し

かし、なぜです、百合太郎さんは虎吉は危ないと予言したくらいだし、その点わしの目はあまりあてにならないかもしれぬ」
「わしも人は疑いたくない。しかし――」
百合太郎はなんとなく口ごもる。
「しかし、――それから」
「虎吉はわしたちのとまった旅籠を佐久馬に売ったかわりにお兼をもらったとすれば、どうなる」
「なるほど、お兼は百両持っているし、女としても虎吉がねらいそうですな」
「虎吉はお兼をだまして、あの宿はずれまでつれ出す。佐久馬が追ってきて、お兼を取りかえそうとして、二人に一人だから、虎吉にうしろから一突きにされる」
「そこまではいちおうわしも考えてみました」
尋常ではとうてい虎吉は佐久馬の敵ではないが、佐久馬がお兼を組み伏せたところなら、うしろから刺せないこともない。
「しかし、それだとお兼はゆうべのうちに蒲原へ知らせにきているでしょう」
「それが、虎吉の口ひとつでは来るのがいやになるかもしれぬ」
「というと――」
「もうよい」
百合太郎は怒ったように口をつぐんでしまう。
それから先はいいにくい百合太郎なのだ。ただ、のらはなぜ虎吉が自分たちを裏切る気になったかまだ気がつかないのかと、それが妙に歯がゆい。
――いちばんいけないのは、百合がのらを好きになってしまったことなのだ。
いくら気をつけていても、それがどこかに出る。虎吉が裏切りたくなったのもそれだし、その虎吉の口からもし勝手な想像まで加えてまことしやかにお兼の耳へそれが伝われば、お兼ものらがきらいではないのだから、きっと裏切りたくなると、百合太郎にはちゃんとわかっている。
が、それは百合太郎としても、いまさらどうすることもできない感情になってしまっているのだ。
――ほんとうに百合はお兼にさえ女の嫉妬を持つようになっている。
恥ずかしいことだといくら反省しても、百合太郎は自分がどうにもならないのが悲しい。しかも、のら太郎にはまだこっちの心がいっこうに通じていないように見えるのである。
「百合太郎さん、これにつかまるといい」
坂が急になってきて、百合太郎があえぎ出すと、のら太郎はわらいながら手を出してくれた。
「はてな――」
そののら太郎はふっと坂の上の林のほうへ聞き耳を立てる。なにかあわただしく人声が走りまわっているようだ。
「これはおかしい」
「のら、そう引っ張ってもだめだ」
のら太郎と二人きりだといっこうこらえ性を失ってわがままが出る百合太郎は、苦しくてもう歩きたくなくなっている。
「よろしい、もう少しだから我慢なさい」
なだめるようにいってのら太郎はうしろへまわり、こんどは百合太郎の腰を押しはじめる。このほうがよっぽど楽には楽だが、
「人が見ると恥ずかしいではないか」
百合太郎はそんな勝手なことをいう。
「背に腹はかえられませんからな」
のら太郎はかまわず腰を押して、とうとう坂の上へのぼりきっていく。
「あっ、のら――」
百合太郎が急にしゃっきりとした姿勢になる。むこうの林のそばに、りっぱな陣笠をかぶった若侍が供侍たちにまもられて、じっとこっちを見ながら立っているのだ。
「新兵衛がいるぞ、のら」

「なるほど、新兵衛ですな。あれをごらんなさい。あの陣笠の定紋は九曜のようだ」
九曜の紋は松平家の紋どころである。
「あのそばに立っている大きな男は、国もとの指南番松川半兵衛のようだぞ」
「すると、あの陣笠の若者は、鬼頭のせがれ兵馬ということになりそうだ。彼らの出府にはまだひと月あまりも早いはずだがな」
公儀の拝領品改めは今年は五月となっている。そのときはどうしても菊一文字の短刀を江戸へ運ぶ必要があるので、いつも左馬之介が自分で持って出府することになっているのだ。
百合太郎はその五月までになんとか拝領の家宝を取りもどそうと考え、こうして一人で江戸を立ってきたのだが、ここで兵馬の出府とぶつかろうとは夢にも考えていなかった。
「どうする、のら」
むろん、新兵衛がそばにいる以上、兵馬は無事にこっちを通すはずはない。とっさのことで百合太郎は思案にあまり、ついのら太郎をたのみにしたくなる。
「まあ、まかせておくことです」
のら太郎は百合太郎と肩を並べ、のんびりとした顔つきで敵の前へ近づいていく。
「若さま、百合太郎さまです」
新兵衛が兵馬にささやく。
兵馬は自分も松平家の一族だという自負があるから、毅然と百合太郎を見すえながら、そのたぐいなき美貌に内心啞然としているようである。
「あの供の者は――」
「野良太郎と自称している浪人者で、途中から道づれになったやつです」
「若さま、百合姫としてではなく、百合太郎として引っとらえましょう」
松川半兵衛が狡猾な目をきらりと光らせて入れ知恵をする。
「まかせる。半兵衛、かならず逃がすなよ」

兵馬が厳命した。逃がしてたまるものかという心が、その目にぎらぎらと燃えているようだ。
ついに二人は九尺ばかりのあたりへ来て、こっちが道をふさいでいるので立ちどまった。
百合太郎の涼しい目が少しも悪びれずにこっちを見くだしている。
「その方どもは何者か」
まず半兵衛がわざと横柄に誰何した。
「これなるは松平志摩守さま御一門の新宮百合太郎さま、わしは家来の野良太郎です。あなたがたは――」
「このお方さまはこのたび松平家のお世つぎになられる松平兵馬さまである。われわれは松平家国詰めの藩士だ」
「それはおかしい。当家の一門に松平兵馬というのはない。国もとの鬼頭兵馬なら左馬之介のせがれだが、陣笠に九曜の紋がついているのは解せないな」
のら太郎はじろじろと兵馬のほうを見まわす。
「黙れっ、そういう貴様は何者だ。だいいち、当家に新宮百合太郎などという御一門はない。御当主さまに百合姫さまと申すお妹君はいられるが、これは男ではない、姫君のはずだ」
「松川さん、いまさらわしの口まねをしてもおそい。そんな御一門があるかないかは、あなたがたが出府して御当主さまにおうかがいすれば納得いくこと。しかし、鬼頭兵馬が勝手に松平兵馬になって、お世つぎだの、若殿だのになろうというのは、ずいぶん公儀を盲にした話で、江戸では通らないからおやめなさい」
「黙れ黙れっ、貴様こそ素浪人の分際でいらざる口出し、ましてや御一門でもなき新宮百合太郎なる者が、松平家を笠にきて道中いたすとは不届き至極、からめ取ってきっと詮議におよぶから、さよう心得ろ」
居丈高になってきめつけてくる半兵衛だ。
「まあだめだろうな。われわれをからめ取って

公儀へ突き出せば、かえってあなたがたの陰謀が露見するばかりだ。それなら監禁して一服盛るという手がないではないが、あいにくわれわれのうしろには絶えず公儀隠密の目が光っている。どっちみちあなたがたの無理は通らん。むしろおとなしく左馬之介に会わせなさい。あなたがたの器量では笹山十万石の家柄をつぶすばかりで、話にならん」

のら太郎は相手をけいべつしきった顔つきだ。

「半兵衛、不届き者を召し捕れっ」

憤怒の色を露骨にした兵馬がたまりかねて一喝する。

枯れ草の中

「それっ、若さまの御意だ。不埒者を召し捕れ。家来のほうはきってもいいぞ」

松川半兵衛は兵馬の意中を察して、すかさず供侍どもに命じる。

「はっ」

うしろに控えていた供侍のうち、五人ばかりがばらばらっと前へ走りいでて、

「神妙にしろ、若さまの御意だ」

「不届き者、覚悟」

のら太郎にむかった三人は抜刀し、百合太郎にむかった二人は手取りにしようと身構える。

「控えろ。お家を乱す謀反人鬼頭左馬之介に荷担する悪人ども、おまえたちにわれわれはきれぬ」

のら太郎は柄に手をかけて、まず大声に叱咤した。

鬼頭組はだれしも多少良心にとがめるものを持っているから、悪人どもという一喝は、面罵されてみるとやっぱり胸にこたえるらしい。

「黙れっ、不届き者」

抜刀の三人はかっとなってのら太郎に殺到した。

「えいっ」

「とうっ」

それより早くこっちからも一足踏みこむようにしたのら太郎は、抜き打ちに右を払い、かえす二の太刀で左をなぐ。

同時に百合太郎を手取りにしようと襲いかかった二人は、たかが女の男装と侮りきっているから、至極むぞうさに大手をひろげて出るところを、

「えいっ。――おうっ」

敏捷無類の百合太郎だから、十分そばへ引きつけておいて、抜く手も見せず左右にきり払って、ひらりと飛びのく。

「わあっ」

「ううっ」

立ちむかった五人のうち四人までが絶叫しながら一瞬にしてのけぞりたおれたから、さすがに見ていた兵馬と半兵衛もあっと顔色を変えた。

が、半兵衛はさすがに強気である。

「きれきれ、敵は二人だ」

たちまち味方を励ましたが、自分も抜刀する。

「百合太郎さん」

それと見たのら太郎は、百合太郎を呼んでさっと杉林の中へ駆けこむ。ここで無理をして、まだ十二、三人もいる敵に取りかこまれるのは不利だ。しかも、敵にはまだ本隊があると見なければならない。いちおうここは逃げのびて、後の策を立てたほうがいいと、はじめからその気でいたのら太郎である。

それと察した百合太郎が、素早くのら太郎の後を追う。

「それっ、逃がすな」

「きれきれ。百合太郎は手取りだぞ」

半兵衛と兵馬に叫ばれて、敵がうしろを見せたとなると急に勇気を盛りかえした供侍どもは、わあっといっせいに林の中へ躍りこむ。

が、こうして深い林の中へはいってしまえば、もう取りかこまれる心配はないから、のら太郎

と百合太郎はただ追いついてくる敵を順々にきって逃げればいいのだ。

追うほうはさっきの手並みで、一人と一人ではとうていかなわないとわかっているから、なるべく一団となって追いかけようとする。

「こっちだぞう」

「逃がすなあ」

先へ出た組は後の組へ声をかけて、できるだけ歩調をあわせようとするから、自然そこに距離のひらきができてくる。

「のら、敵の声は少しそれていったようだな」

二山ほど越えて、下り口にかかろうとするあたりまできたとき、百合太郎は耳を澄ましながら立ちどまった。

「おうい、こっちだぞう」

そう呼んでいる声がずっと見当違いのほうからきこえて、

「おうい、いま行くぞう」

とこたえた近い声が、だんだんそっちへ引き寄せられていくようだ。

「この辺でしばらく様子を見ますかな」

のら太郎はあたりを見まわしながら、斜面の手ごろなくぼ地に枯れ草が生いしげっているところを見つけ、ちょうどそこが日だまりにもなっているので、

「百合太郎さん、あそこへ行って休んでいるといい。わしはもう少しここで見張っていてみよう」

と、見とおしのきく杉木立の間へ身をひそめた。

百合太郎はうなずいて、刀をぬぐって鞘におさめ、そこからだらだらと五、六間下ったくぼ地へ行って腰をおろす。

こっちから見ると、百合太郎の体はすっかり枯れ草の下に沈んで、どこにいるかわからなくなった。

「おうい」

「おうい」

敵の呼びあう声は、さいわいしだいに遠くなっていくようだ。

時刻はすでに八ツ（二時）に近いだろうか、この辺から下は若葉の雑木林になっていて、小鳥の声がのどかである。

——もうよさそうだな。

もともと敵の若侍どもは危険をおかしてまでもこっちをきる気はなく、ただ兵馬と半兵衛の手前だけ追いかけてきたのだから、いいかげんにときをつぶせば、見つかりませんでしたといってのこのこ帰ってしまうに違いない。

「百合太郎さん、もう大丈夫です」

のら太郎も刀をおさめて、枯れ草のくぼ地へおりていった。

「うむ、すっかりしずかになったようだな」

百合太郎は枯れ草の上へ投げ出していた両足をそれとなく引っこめて横ずわりになる。

「さて、これからどうしますかな」

のら太郎は百合太郎とならんで腰をおろして、さっそくこれからの方針を立てなければならないのだ。

「憎いやつ——」

百合太郎は我慢ができないというように鬱憤をもらす。

「兵馬はお兄上を押しのけて、松平家を横領するつもりなのだ。こんどの出府は左馬之介もいっしょに違いない」

「むろん、それはいっしょでしょう。ひと月あまり早く、しかもこうして不意に出てきたのは、なにか容易ならんことをたくらんでいるのです」

「うむ」

「百合太郎さんはもう国もとまで行く必要がなくなったかわりに、彼ら親子が江戸へ着く前にどうしても菊一文字を手に入れなければならなくなったのだ」

「うむ」

百合太郎は胸が重い。

「のら、左馬之介たちは今夜どこ泊まりだろう」
「おそらく、今夜は吉原泊まりの予定だったでしょう。しかし、ここで百合太郎さんに出会ったからには、由比泊まりですな。兵馬は倉沢に網を張って、是が非でもわれわれをつかまえる策に出るでしょう」
「左馬之介をきろう。それ以外に手はなくなってきた」
最後は身を犠牲にして刺し違えるほかはないと、江戸を立つときから百合太郎は覚悟していた。
「問題は、どうして左馬之介に近づくかですな」
敵も厳重に警戒しているだろうから、きるということより、どうして近づくかということの方がむずかしい。
「のらはほんとうにわしの味方か」
いよいよ死ぬときがきたと思うと、百合太郎はもう一度それをたしかめておかずにはいられない。
「むろん、わしは百合太郎さん一人殺すわけにはいかない男です。死ぬときはいっしょだが、なるべく生きて帰らなければなりません」
のら太郎はきっぱりと答える。
「のらはまだわしにほんとうの名を教えてはくれられないのか」
かっと胸が熱くなってきて、百合太郎は思わず男のひざへ手をおいている。
「そうですな、いつ名乗ってもかまわないが、やっぱり江戸へ帰ってからにしましょう。しかし、不幸にしてその前に死ぬようなときがきたら、それは名乗って死にます。かつぐようでおかしいが、いま名乗ってしまうと、なんだか事が失敗におわりそうな気がする。わしはどうしても百合太郎さんを生きて江戸へつれて帰らなければならないんだ」
「それならそれでいい」
いっしょに死んでくれる男、名などはもうどうでもよかった。しかし、今夜由比の宿へ左馬之介をきりに行くとすれば、ゆっくりこの男と話のできるのもいまのうちだけのような気がする。一生に一度の恋、それだけは打ちあけておきたい。
「のら、目をつぶれ」
百合太郎の声は、いつか甘い女の声音になっていた。
「こうですか」
のら太郎はわらいながら、しっかりと目をつむった顔を百合太郎のほうへ向けた。
「わしがいいというまで、目をあけてはいやだ」
「よろしい、雷が鳴ってもあけません」
「きっとですよ」
「はい」
百合太郎の顔が美しい桜色になって、そっとあたりを見まわし、ここは枯れ草にかくれていてどこからも人目はとどかないことをたしかめると、思いきってのら太郎の左手をつかむ。
「きっと目をあけてはいやだ」
「あけません」
百合太郎は自分の右手でつかんだのら太郎の手を体を寄りそうようにしてそで口から引き入れ、内ぶところへ持っていく。
「これ、のらにあげる」
さらしをまいてむっちりと高い胸乳の上へ男の手をしっかりと押しあて、百合太郎はくずれるように男のひざの上へ体を投げかけていった。
とうとう女の命をこの男にやってしまったと思うと、うれしいような、恥ずかしいような全身の血が甘く燃えあがってきて、胸がせつない。
「ありがとう」
のら太郎は目をつむったまますなおに答えて、じっと身動きひとつしない。
ほかほかと早春の日ざしがのどかにあたたかい枯れ草の中だった。

命の瀬戸ぎわ

そのころ。

百合太郎たちがかくれている山のもう一つむこうの山の急崖の中途へ落ちこんで、お兼は気を失っていた。

お兼を追いまわす浪人ども五人はひどく執拗だった。うまくつかまえれば百両という大金がふところにはいるうえに、金は五人でわけても、お兼の体だけは独占できるのだから、やくざ浪人どもがやっきになるのも無理はない。

さすがのお兼も三方から追い立てられて、そこまできたときにはついに逃げ場を失ってしまった。どうせつかまればただではすまない体である。

——ままよ、どうにでもなれ。

きかない気のお兼は、自分から崖へ飛びこんだのである。

「のらさん、さよなら」

両足が宙に浮いたとき、お兼ははっきりとのら太郎の顔をまぶたにうかべ、ああ、あたしはのらさんに捨てられたからこんなやけな気になったんだと、はじめて自分の心の中がわかった。つぎの瞬間、意識がなくなっていたのである。

急崖は三十尺ばかり落ちたところで、四坪ほど出張ったそこだけのたなを作り、そこから二十尺ばかりさがったところに谷川が流れていた。たなはくぼ地になって自然のほら穴を作り、落ち葉と枯れ草にうずもれている。

幸いお兼はそこへ落ちこんで、気を失っていたのだ。

「なあんだ、骨折り損か」

浪人どもは唖然として、しばらくがっかりした顔を見あわせていた。下をのぞいてみても、木や草が深いから、そこからではとうてい見とおしがきかない。

「どうだ、だれか谷までおりていってみる勇士はないか」

「まあ、むだだな。百両の金は惜しいが、こっちの命のほうがもっと惜しい」

たとえまわり道をして道を求めてみても、慣れない山では自分が迷子になるばかりなのだ。

「よし、しからば仲よくここから引きかえすことにしよう」

やくざ浪人どもはやがてあきらめて、ぞろぞろと引きかえしていった。道のないところを夢中になって走りまわってきたのだから、その引きかえすことさえそう簡単ではないのである。

——ちくしょう、まったく思いきったまねをしたもんだなあ。

それを少し離れた山かげからながめていた吉田小僧の次郎蔵は、息をのみながらお兼が途中のたなへ引っかかったのをたしかに見ていた。

どうせ無事というわけにはいくまいが、ことによるとまだ命があるかもしれない。

そう考えると、そこは人情で、欲得ずくではなく、息のある人間を見殺しにしていくわけにはいかなくなってきた。

といって、上から滑りおりられる場所ではない。助けるとすれば、一度谷へおりて、そこからまたのぼっていかなければならないところだ。

「三吉、——おうい、三吉」

子分の名を呼んでみたが、どこで離ればなれになったか、三吉の返事はなかった。

「あれでもいねえよりましなんだが、しようがねえ、一人でやっつけるか」

次郎蔵は度胸をきめて、そこから五十尺ばかりの急崖を、用心しながらどうにか滑りおりた。一つ間違えば谷底まで一気に転落してしまいそうだから、文字どおり命がけの仕事である。

自慢にもならないが、次郎蔵はもと鳶職あがりだから身が軽い。やっと谷へおりて、そこからまたほら穴まで二十尺ばかりのぼるのだが、むしろこのほうが楽だった。

やっとたなのくぼ地へはいあがってみると、お兼はつもった落ち葉の中へうつ伏せに半分うもれて、ぐったりと白い両手を投げ出している。

——やれやれ、まるでだだっ子っていうかっこうだぜ。

次郎蔵はいそいでそばへ行って、両わきから手を入れ、ぐいとお兼を抱きおこしてみる。

幸いうまく落ちて、一時気は失ったが、もう息を吹きかえすときがきていたのだろう。

「あっ、なにをするんだ、ばか」

はっと正気にかえったお兼は、両の胸乳のあたりへ男の手がきているので、いきなり身もがきしながらその腕へつめを立てようとする。

「おっとっと、あぶねえ。気の強いあねごだ」

次郎蔵は苦笑いをしながら、あわてて手を放して逃げる。

「おや、おまえは——」

とっさにすわりなおったお兼は、柳眉を逆だてるといった怖い顔つきで、素早く襟をさぐっている。

「冗談じゃねえ、あねごを命がけでこんなところまで助けにきてやって盲にされちゃたまらねえや。少し落ち着いたらどうだ」

「なんだって——」

お兼はじりじりと後ずさりをしながら、ひょいと上を見てぎょっとしたらしい。自分が落ちてきた急崖が高々と頭の上にそびえているのだ。

「おいおい、そうそっちへしりを持っていくと、また谷へ落ちるぜ」

はっと気がついて下を見ると、二十尺も下を谷川が流れている。

「あたしは、あたしはここへ落ちたんだねえ」

「落ちたんじゃねえ。おまえ自分からここへ飛びこんだんだ。壺坂のお里みたいにな」

「ここは、ここはどこなんだろう」

「あの崖の中途さ。運よくここへ引っかかったから助かったようなものの、下の谷川まで落ちたりをもんでいる。

「やっぱり、やられているか」

「痛い、骨が折れたのかしら」

さっと顔から血の気が引くお兼だ。こんなところで歩けなくなったとなると、もうおおかみを覚悟しなければならないのだ。

「どれ、見せな」

「いやだ、そばへ寄っちゃ」

「お兼、怒るぜ。おれはぬすっとだが、ここへ命がけできてやったのは、金でも、おまえの体でもねえ。人間同士だから、おまえが生きているようなら助けてやりたかった。ただそれだけだ。疑うんなら、おれはここからすぐ消えてなくなろう」

次郎蔵はきっぱりといって、さっさと今のぼってきた崖っぷちへ行く。

「待っておくれよ、あたしが悪かった、あやまるから待っておくれよ」

お兼は金切り声をあげながら、必死にいざっていれば命のないところだった。どうだ、どこもけがをしちゃいないか、立ってみな」

「おまえも、おまえも落ちたのかえ」

「冗談言いなさんな。おれは、それ、あそこのあたりからおまえがここへ落ちこむのを見ていたんだ」

次郎蔵はそこから斜め上のほうの崖を指さしてみせる。

「どうしてここへこられたのさ」

「命がけで、あの崖を下までおりて、それからまたここへはいのぼってきたんだ。もしおまえに息があると、ほってもおけない。夜になるとおおかみに食われちまう」

「怖い。——おおかみが出るの、ここへ」

「そりゃ出るかもしれないやね。おおかみは山につきものだ」

「じゃ、早く逃げなくちゃ」

あわてて立ちあがったお兼は、あつつつと顔をしかめてそこへ腰をおとし、急いで足首のあ

よっていく。
「なあに、あやまらなくたっていいんだ。おれの気持ちがわかってくれりゃ、どうせ助けようと思ってきたんだから、おれ一人で行こうとは言いやしねえ」
「つれてって、恩にきるから助けてください」
「よし。じゃ、娑婆へ出るまで、ぬすっとごっこはたんまだぜ」
「わかったわ。ちょっとここを見て。骨が折れているんだと、やっぱりあたしはだめかもしれない」
「心配するな。こうなりゃおぶってだってつれていかあ。どれ足を見せな」
左の足くびだった。次郎蔵はしずかにわらじをぬがせ、脚絆、足袋をぬがせる。見ると、足くびが少しはれているようだ。
「我慢しろ」
次郎蔵は左手でかかとを支え、右手でつまさきをつかんでじわじわと逆にかえしていく。
「痛いっ。いやだ、痛い」
お兼は身をもんで悲鳴をあげる。
「よし、わかった。もういい。骨じゃねえ、筋がのびたんだ。五、六日もぬれ手ぬぐいでまいておきゃ、すぐ直っちまう」
次郎蔵はまた足袋をはかせ、脚絆をまいてやる。
「五、六日もここにいるの。あたし歩けやしない」
「それもそうだなあ」
おぶってこの崖がおりられるだろうか。たとえここはころげ落ちるにしても、谷川づたいにどこまで行けば街道筋へ出られるのか、途中で日でも暮れたらそれこそことだ。
といって、いつまでここにいて夜になっても、なおさら困ることになる。
「あねご、やっつけてみよう。おれがうしろから帯をおさえていてやるから、痛くないほうの足でとにかく谷川へおりるんだ、後はおれがおぶっていく」
「大丈夫かしら。ずいぶん高そうだねえ」
「目つぶって滑りおりりゃいい」
「そんな恥ずかしいかっこう――」
「命の瀬戸際に恥も外聞もあるもんか。よし、この手ぬぐいで二人の帯をつないでいこう。死なばもろともだ」
手ぬぐいを二本つないで、こっちの帯とお兼の帯を結びつける。
「なんだか心中するみたい」
「できれば、おれはまだ死にたくねえんだ。三十になるやならずだからな。さあ、出かけよう」
「怖いなあ」
「しっかりするんだ」
うしろから片手で帯をつかみ、片手で木の根、藤蔓をつかみながら、しずかにお兼を先へおろしていく。
左足のきかないお兼だが、いざとなればふつうの娘っ子とは違うから、自分もしっかりと木の根、草の根を両手でつかんで支えにしながら、必死に下へ下へとおりはじめる。
もう二人とも口をきくゆとりはなかった。一つ足をすべらせたら最後、一直線に谷川へ転落してしまうのだ。たとえ命はあっても、大けがはまぬがれない。
しかも、ここは谷間だから、たえず強い風がごうごうっと下からうずをまいて吹きつけるのだ。すそをあおられるお兼のかっこうは、われながら恥ずかしいとは思うが、もうそれを言っているひまさえなかった。
「ああ、助かった」
それでもやっと谷川のふちの小道へすべりおりて、ひょいと立ちあがりながら、
「あつつつ」
お兼はわれにもなく次郎蔵の体へしがみついていた。うっかり突いた左足の痛みが、ずきんと全身にひびいてきたのだ。
「どうした、あねご」

「うっかり痛い足を使っちまって」
「しっかりしろよ、自分の足じゃねえか。子供じゃあるめえし」
「つい、ほっとして、忘れちまったんだもの」
「ああ、そうだ、その痛いほうの足を一度水につけておくといい。筋を違えたときは、なまじもむより冷やすのがいちばんいいんだ」
「水がのみたいねえ」
「遠慮なく召しあがれ。こんなにたくさんある水だ、のんで、足をぬらしても、まだあまる」
「ばかばっかし――」
清水でのどをうるおし、痛い足を冷やして、お兼はまたふっと心配になってきた。
「ねえ、吉田屋のだんなはこの道知ってるの」
「知りやせんねえ。この道はまだはじめてでござんして」
「心細いなあ。里か街道へ出られるかしら」
「そりゃ大丈夫だろう。川ってものはみんな海へ出るのにきまっているからね」
「途中で日が暮れたらどうするの」
「まあ、野宿かなあ」
「おおかみが出やしないかしら」
「だから、日の暮れないうちにそろそろ出かけるとしよう。それ、こんどはおんぶだ」
「いいえ、あたし少し歩いてみる」
「やせ我慢しなさんな。今のうち少し足を休ませておいたほうが直りが早い。さあ、おぶさんな」
くるりとたくましい肩を向けてしゃがんでくれる。
「すまないねえ」
お兼はなにか目頭が熱くなってきた。
あんなにいやらしいやつだと思っていたのに、人間ここまで追いつめられてくると、やっぱり美しい本性が出てくるものらしい。
――見なおしたなあ、この男。
お兼は男の肩へおぶさっていきながら、しみじみとそう思った。

網にかかる

その夜、今井新兵衛は倉沢の安旅籠恵比寿屋の軒下に立って、国侍二人といっしょに宵番の組頭をつとめていた。
「百合太郎とのら太郎はかならず今夜ここを通る。一刻(二時間)交代で見張りをするように」
そういう兵馬の厳命なのだ。
油障子を四枚入れた恵比寿屋の土間には、新兵衛が途中で雇ってつれていた浪人組五人も加えられて、十人の人数がいつでも飛び出せるように身支度をして待機している。
奥の間には御曹子兵馬が松川半兵衛につきそわれて休息し、ここにも十人ばかりの供侍が交代のときのくるのを待っていた。
国家老鬼頭左馬之介のひきいる本隊は三十人ほどの人数で、今夜は由比泊まりである。
――よせばいいのになあ。
早春の夜の外気はまだ肌寒いので、新兵衛はさっきから軒下を行きつもどりつしながら、なにかほろ苦いものをかみしめていた。
兵馬がこんなにもやっきになって百合太郎をつかまえたいのは、むろん自家にある菊一文字をあくまで守らなければならないからではあるが、それにも増して百合太郎の柔肌に野心をおこしたからだとわかりきっている。
新兵衛もまた一度は不敵にもそれをねらったことがあった。いや、薩埵峠で今朝この国もとの一行に出会うまでは、まだあわよくばという欲望をすてかねていた。
が、今はもうたとえその機会がきても、手のとどかぬ高嶺の花になってしまったのである。ひどく味気ない気がすると同時に、
――あの肌だけは兵馬さんの手にだって負えるもんじゃない。
と、せせらわらってやりたい気がしてくるのだ。
絶好の機会をつかんで、もう一歩というとこ

ろまでいった大西でさえ、どたん場へきてあえない最期をとげている。力ずくでは到底どうにもならぬ名花なのである。

——しかし、百合太郎さん一人さえどうにもできないようでは、御家老の大望もあぶないもんだということになりはせんかな。

新兵衛はまたしても背筋がうすら寒くなってくる。

こんどの左馬之介のふいの出府はなにをたくらんでのことか、新兵衛のような末輩には想像もつきかねるが、こうして大がかりな出府をするからには、なにか大きな目的があるのだろう。万一、左馬之介がそれに失敗したとなると、一味に荷担した者は一挙に成敗されてしまう。

ことに、新兵衛は不敵にも当主の妹姫に手をかけようとした大罪があるのだ。とても命は助かるまい。

——こいつ色恋どころのさたじゃない。

またしてもほろ苦いものが胸にうずき出しながら、ふっと新兵衛は聞き耳を立てた。宵闇の峠のほうから、ひたひたと重いわらじの音が耳についてきたのだ。

「おい、だれかきたようだな」

「うむ」

三人ひとかたまりになってそっちへ目をすえていると、油障子から街道へ流れている黄ばんだ薄明かりの中へ、女をおぶった町人風の旅の男が一人、足重そうに通りかかってきた。

「なんだ、病人か」

相番の一人は気ぬけがしたようにつぶやいたが、新兵衛ははっと目をみはった。たしかにその男に見おぼえがあるばかりでなく、おぶわれている女はぐったりと顔を男の肩へ伏せてはいるが、着物の縞柄と帯とでわかる。お兼に違いないのだ。

「おい、ちょっと待て」

新兵衛はつかつかと前へ出ていった。

「おや、だんな、今朝ほどは失礼いたしました」

吉田屋は悪びれもせず立ちどまって、汗のにじみ出た顔に愛想わらいをうかべる。

「おぶっているのはお兼だな。どこへ行くんだ」

新兵衛の針のような目はいかにも全身をまかせきっておぶわれているお兼の体中を見まわしながら、つい言葉が荒っぽくなる。一度はこの女の体にも煩悩をおこしたことがあるだけに、こんな姿を見せつけられるのははなはだおもしろくないのだ。

「へえ、お兼が峠で足をくじきましてな、とても歩けないと申しますので、由比の宿へもどって医者に診てもらおうと思います」

「おい、お兼、おりろ」

お兼はまだぐったりとむこうむきに男の肩へほおをおしつけたまま眠ったふりをしている。

「お兼、だんながおりろとおっしゃるんだがねえ」

「あたし眠いんだから、ことわってくださいよ、おまえさん」

甘ったるい声で平気でそんなことをいうお兼だ。

「こやつ、わしをばかにする気だな」

「あら、聞いたような声だと思ったら、今井のだんなですね」

お兼はひょいと顔をあげて、

「今井さん、山賊みたいに薩埵峠で人を待ち伏せしたり、こんなところで網を張ったり、おまえさんほんとうに丹波笹山の御家来なんですか」

と、わざと大きな声を出す。

「よし、おい、ちょっとこっちへ来てくれ」

寂しい立て場とはいえ、近所に家がないわけではない、人に聞かれて騒ぎ立てられるとやっぱり面倒なことになるので、新兵衛は怖い顔をして吉田屋にいった。

「恵比寿屋へまいりますので」

「そうだ」

「かしこまりました。あそこはゆうべ私どもがとまりました家で——なあお兼、だんなが御用

「しかし、あの女、すごいべっぴんじゃないか」
二人が啞然とそっちへ気をとられているとき、峠のほうから菅笠をかぶった若い百姓夫婦が一組み、手をひかれんばかりに寄りそってすたすたと通りすぎていったが、
——なんだ、百姓か。
というように一人のほうが振りかえっただけで、二人ともまったく気にもとめていなかった。
それどころではない、障子一重の土間の中では、吉田屋とお兼を迎えて、五人の浪人どもがいっせいに床几から立ちあがってがやがやとわめき出したのが、いまにも事ありげに表まできこえてくるのだ。
「やあ、お兼だ」
「こいつ、よく生きていたなあ」
「おい、足があるか調べてみろ」
浪人者たちは現に昼間お兼を追いまわして急崖から谷底へ飛びこんだのをたしかにその目で見ているのだから、いまこうして生きておぶわ

だとおっしゃる。まさか、山の中と違ってここは立て場なんだから、いきなり乱暴もなさるまい。お供してもいいだろう」
「大丈夫なの、おまえさん」
「まあ、まかせておきなさい。浪人さんなら知らぬこと、お主持ちの立派なお侍さんがまさか町人いじめもなさるまい」
吉田屋はきこえよがしにいいながら、
「だんな、お供いたします」
と、新兵衛のほうへ小腰をかがめる。
「おい、後をたのむぞ」
新兵衛は国侍二人にいいつけて、むっくりと先に立ち、がらりと油障子をあける。
「はいれ」
「へえ、ごめんくださいまし」
吉田屋がお兼をおぶったまま土間にはいると、自分も後からついてはいって、ぴしゃりと戸をしめてしまう。
「何者だ、あれは」
れてきたのを見ると、さすがに愕然とせずにはいられなかったのだろう。
いっしょに待機していた国侍たちのほうは、お兼も吉田屋も見るのははじめてで、なんのことか事情がわからないから、みんなぽかんとお兼の顔ばかり見ている。
「おい、だれか松川先生をお呼びしてくれ」
新兵衛がいうと、
「心得た」
国侍の一人がすぐに奥へ立っていった。
——よし、上役がここへ出てくるようなら大丈夫だ。
早くも見てとった吉田屋は、
「お兼、少しおりて休ませていただいたらどうだね」
と、やさしくお兼にいう。
「そうします。重かったでしょう、おまえさん」
「なあに、おまえ、義理で他人をおぶっているわけじゃなし、——かかとを突かないようにしなくちゃだめだよ」
そっとお兼をおろして、腕を支えてやりながら空いた床几へ掛けさせてやる姿が、どうみても仲のいい夫婦としか見えない。
「すまないねえ」
びっこをひきながらその吉田屋の手にすがって床几へ掛けたお兼は、今は心からその言葉が出た。
軽いとはいっても女一人を背にして、あの谷川の細道をのぼったりおりたり、それはとても普通の男にはできない芸当だった。
こっちも満足に歩けさえすれば、とてもそんな男の苦労は見ていられないが、どうにもならない足なのだから、歯をくいしばって男の必死の苦労を黙って見ているほかはなかった。
吉田屋はまったく牛のように辛抱強かった。全身に滝のような汗を流しながら、重い、疲れた、苦しいなどという弱音は一言も口にしなかった。

「一休みしておくれよ、だんな。もし日が暮れて、おおかみに食われても、あたしはおまえさんとならかまやしない」

見るに見かねてお兼はいった。

「冗談いうなよ。ここまで苦労してきて、いまさらおおかみの餌になることはなかろう。おおかみなんてけだものは、後でありがとうもいいやしねえぜ」

「そりゃそうだけれど、すまないねえ」

「いやにしおらしいぜ、あねご」

「だって、こんな地獄を二人きりで歩いていれば、女だもの、生きるも死ぬもおまえさんまかせ、それよりしようがないじゃないか。あたしはただ一人で捨てていかれるのが怖い」

「その心配は御無用だ。おれにしたって、一人で死ぬより連れがあるほうがいい。また、一人なら助かる、二人だから死ぬと、そんなものでもなかろう。死ぬ山なら一人になっても死ぬ、助かる山なら二人でも助かる、そうきめておこうじゃねえか」

「うれしいよ、おまえさん」

お兼はぽろぽろと涙が流れてきた。

「人間なんて、どたん場へ立つと、案外きれいな気持ちになるからおかしなもんだ」

吉田屋は自分でもふしぎそうにそんなことをつぶやいていた。

こうして二人がやっと峠道にかかった見おぼえの小橋の下へ出たのは、もう夕方もたそがれに近いころだった。

その橋のたもとの草むらへどうやらはいあがった吉田屋は、さすがにほっとして精も根もつきたらしく、

「やっと助かったようだぜ、あねご」

そういってお兼をそこへおろすと、ごろりとあおむけに引っくりかえってあらしのような息をつきながら、しばらくは口もきけないようだった。

お兼は黙ってそのそばへすわり、吉田屋へひざまくらをして、いつまでも男の胸をなでさすってやっていた。幸い人も通らなかったが、たとえだれが通ろうとかまうもんかと、お兼は往来へ背を向けている。

吉田屋はうとうとと眠りかけたらしく、まもなくかすかないびきをかきはじめた。

——あらあら、風邪をひかないかしら。

ちょっとそんな心配をしながら、自分のひざをまくらに安心して眠ってしまう男がもう他人ではないような気がして、お兼はとてもうれしかった。

「風邪をひくよ、おまえさん」

そっと声をかけてみたが、返事をしようともしない。

「ほんとうに疲れちまったんだねえ、この人」

うっとりとその顔に見とれていると、ふっと峠を下ってくる人の足音が耳につき出した。あたりはいつかたそがれてきて、谷にも山にも白いもやがはい出している。

ぎょっとしたように吉田屋が目をあいた。

「そんなに驚かなくたっていいじゃないか。あたしがちゃんと番をしているんだもの」

「うむ。おれは眠ったようだな」

「くたびれているんだもの。いびきをかいていたわ」

「冗談じゃねえ。ここまできておかみを待っていることもなかろう。さあ、もう一息だ。出かけようぜ」

苦笑いをしながらむくりと起きあがった吉田屋は、あっと往来のほうへ目をみはった。

菅笠をかぶった若い百姓風の旅の夫婦づれがそこへ立ちどまって、男のほうがじっとこっちを見ているのだ。

「やあ、お兼、——やっぱりあねごだったか」

「あっ、のらさん」

「よく、あねご、無事でいたな、心配していたぞ」

ここでのら太郎に出会おうとはまったく意外だったが、すると男の背にかくれるようにして

いる女は百合太郎なのだろうか。
「のらさん、あの人は――？」
「あ、百合太郎さんか。ここにいるよ」
ひょいと体をどけると、やっぱりその百姓娘が百合太郎で、笠の下からいくぶん恥ずかしそうにこっちへわらっている。
――似合いの夫婦。
お兼はそう見ながら、いまはそれが少しもうらやましくもねたましくもなくなっていた。
「おまえさん、ちょっと待っていてくださいね」
お兼は吉田屋にことわって、びっこをひきながら往来へ出ていった。
「なんだ、けがをしたのか、あねご」
のら太郎がびっくりしたようにまゆをよせる。
「新兵衛の浪人たちに追いまわされて谷底へおっこちまったんです。すんでに命のないところを、あの人に助けられて、やっとここまではいあがってきたんだけど、そんなわけでこんな体じゃあたしはもうなんの役にも立ちません。若さまにあずかった胴巻、おかえしします」
お兼は内ふところへ手を入れて重い胴巻をほどきかけた。
「お兼、それはもういらぬ。おまえにはいろいろ世話になった。傷養生のたしにでもつかってくれ」
身なりは百姓娘になっていながら、百合太郎が男のような言葉で鷹揚にいう。
「だって、若さま、道中をするにはお金がいりますよ」
「いや、あねご、百合太郎さんは今夜、敵の中へきりこむ覚悟をきめているんだ。それは形見に遠慮なく取っておくがいい」
のら太郎がそばから口をそえる。
「なんですって、のらさん」
「まあいい。人にはそれぞれ生きていく道がある。あねごはあねごで自分の道に生きてくれ。いろいろ世話になった。心から礼をいう」

「ちょっと待って、のらさん。そりゃあたしはこんな足で、いまどうしてくれとたのまれたってどうしようもないけれど、たとえ五日でも六日でもいっしょに苦労してきた若さまが今夜命をかけようというのを、ああそうですかと黙ってわかれるわけにはいかないじゃありませんか。敵って、いったいどんな敵なんです、まさか今井新兵衛なんかじゃないんでしょう」
新兵衛などは眼中にないのら太郎のはずである。
「どうしますかな、百合太郎さん」
のら太郎は百合太郎に相談する。
「話してやれ、お兼ならいい」
百合太郎はやっぱりのら太郎の主人といった格である。
「だんな、昨日はどうも失礼いたしやした」
なんと思ったか、吉田屋がつかつかと立ってきて、のら太郎にあいさつをした。
「やあ、吉田屋のだんなか。また会ったな」
のら太郎はさりげなくわらっている。
「あら、のらさんを知っているの、おまえさんも」
「うむ。あねご、おれは一足先にわかれることにしよう」
「なんですって――。いやだなあ、この人。なにがそんなに気に入らないんだろう」
お兼はびっくりして、あわてて吉田屋のたもとをつかんでいる。
「いや、気にいる気にいらないじゃない。だんなにはなにか大切な話がありそうだ。じつは、おれは昨日七難坂の庚申堂で、そういういわくのあるだんなとは知らないから、このお二人を待ち伏せして一仕事しようとして、あべこべに当て身をくらっているんだ。こんなのがそばについていたんじゃだんながたも安心できまいから、遠慮したほうがいいと思ってね」
吉田屋は悪びれずに旧悪をぶちまける。
「吉田屋うじ、そのことならもう忘れよう。水

はどんなによごれていても、一尺流れるともとの川水にかえるそうだ。土三日見ずば刮目して見よということもある。昨日は昨日、今日は今日だ。死の谷底から命がけでお兼を助けあげてきた今日の貴公は、もう昨日の貴公じゃあるまい。人はいつわれても、おのれの心はいつわれぬ。貴公が自分で、おれはお兼のそばについてやったほうがいい人間だと思うなら、お兼といっしょにここにいてやるがいい」

のらさんはうれしいことをいってくれると、お兼はじいんと胸が熱くなってくる。

「ほんとうですか、だんな」

吉田屋もさっと目を輝かしていた。

「うむ。わしはなるべく人を疑わないことにしている」

「ありがてえ。あっしは無学で、講釈で聞いたんだが、士はおのれを知る者のために死ぬってことがあるんですってね、だんな」

「支那の聖人さまの論しだ」

「あっしはとても士って柄じゃないが、だんなはあっしを人間あつかいにしてくれやしたから、あっしもだんなに人間の道でつきあいやす」

「結構だな。じゃ、そういうことにして、いつまでこんなところに立っていてもしようがない。歩きながら話すことにしようか。お兼は歩けるかな」

「なあに、これはあっしがおぶっていきやす。そのほうが二人でいっしょに話が聞けまさ」

そして、お兼が吉田屋の背中におぶわれて歩きながら聞いた話が、丹波笹山藩の家宝菊一文字にまつわる国家老鬼頭左馬之介一味の陰謀の顚末であった。

「わかりましたよ、だんな。そういうわけなら、ともかく倉沢の立て場はあっしたちにまかせてみてください」

そういって吉田屋の書いた筋書きは、自分たちがわざと敵の網に引っかかってみるから、そのどさくさまぎれにのら太郎たちは網の目をくぐって由比へむかうという策だった。

松川の腹

――たのもしいなあ。

お兼は恵比寿屋の店の土間の炉の前の床几に自分とならんできまじめな顔をして腰掛け、ゆっくりとたばこ入れを取り出す吉田屋を見て、うっとりとせずにはいられなかった。こうして見ると、吉田屋はどこから見ても江戸の大店のだんなといったかっこうである。

がやがやと立ちさわぐ浪人者たちも、前の床几に掛けてぼかんとこっちの顔を見くらべている国侍たちも、吉田屋があまり落ち着き払っているので、ちょいと気をのまれたといった形で、急には言葉が出ないようである。

新兵衛もうっかりした口をきくとお兼がどんなすっぱぬきをしゃべり出すかわからない。こっちにもそれだけの弱みはあるのだから、黙って松川半兵衛の出てくるのを待っていた。

「お兼、一服つけるかい」

吉田屋は二、三服たばこをすってから、やさしくお兼に聞く。

「いただこうかしら、あたし」

お兼がきせるとたばこ入れをうけとったとき、奥から松川半兵衛がぬっと出てきて、店の座敷へすわった。

「新兵衛、この二人は何者かな」

じろりと二人を見すえながら新兵衛に聞く。小達派一刀流の達人で、左馬之介のふところ刀といわれるだけあって、さすがににらみのきく目だ。

「はっ、この女は今朝てまえどもが峠で追っていたお兼でございまして、道中ずっと百合太郎さまについていた女です」

「さようか。たしか昨夜由比の宿で北沢佐久馬が逃がしてやったと聞いたが」

「さようです」

「その男のほうは――？」
「昨夜お兼を助けて道づれになったとかで、江戸の吉田屋という木綿問屋の主人だと自分では申しております」
「そうか」
松川はだいたいの様子がのみこめたらしく、
「吉田屋、拙者は丹波笹山藩の松川半兵衛という者だ、見知りおいてくれ」
と、あらためて吉田屋のほうへ如才なく声をかける。
「これはどうも恐れ入ります。てまえは吉田屋次郎兵衛、てまえこそよろしくお願い申し上げます」
吉田屋はていねいにあいさつをかえす。
「つかぬことを聞くが、貴公は昨夜由比の宿はずれでそのお兼を助けたんだな」
「はい」
「すると、北沢佐久馬をきったのは貴公ということになるのか」
なに食わぬ顔をして、松川が急所を突いてくる。
「失礼でございますが、その北沢さまとおっしゃる方は、やはり御藩中の方でございますか」
吉田屋もなに食わぬ顔をして逆襲する。佐久馬はお兼を一度虎吉に売っておきながら、その跡を追ってお兼をきり、ふところの百両をねらった男だ。まさか藩中の侍とはいえないはずである。
「貴公はなかなか腹がすわっているようだな」
松川は苦笑して、
「お兼、おまえはこの連中に追いまわされて谷底へ落ちたそうだが、気の毒なことをした。どこもけがはなかったかな」
と、いたわるように聞く。
「いいえ、おかげさまで足をくじいてしまい、やっと吉田屋のだんなに助けてもらって命びろいをいたしました」
「そうか。わしの行くのがもう一足早ければ、

おまえを追いまわすようなまねはさせなかった。まあ不運とあきらめてくれ。しかし、そのかわりに吉田屋にあぶないところを二度まで助けてもらう羽目になった。男の親切というものがほんとうにわかったろうから、その点は女として一生のひろい物だ。大切にするがいい」
なかなか味なことをいう松川である。
「それはもう、あたし足の一本ぐらいにはかえられません。男って、いざとなるとこんなにもたのもしいものかと、涙がこぼれちまいました。女はやっぱり女、あたしはこれからこの人のいいおかみさんになって、一生恩がえしをしようと思っています」
お兼も相手しだいで、腹の中はともかくも、松川がおだやかに出ればつい本音が出るようになる。
「けっこうけっこう、いろいろな間違いから、新兵衛たちがたびたび迷惑をかけたようだが、まあ許してやってくれ。由比の宿へ医者をさがしに行くのか」
「はい。この人が早いほうがいいといってくれるもんですから」
「そうか、捻挫は固まってしまうと後がやっかいだ。――吉田屋、手間をとらせてすまなかったな。かまわぬから引き取ってくれ」
べつになにを聞こうとはせず、あっさりと出る松川だ。
力みかえっていた新兵衛も浪人たちも、ただ不審そうに松川の顔をながめている。

身から出たさび

倉沢から由比へは一里あまりの道のりである。十七日の月がのぼって、海ぞいの土手道はすっかり明るくなっていた。
お兼をおぶって恵比寿屋を出た吉田屋は、よくもこう体力がつづくと思うほど、その人通りの絶えた土手道を走るように歩き出した。
「大丈夫なの。そんなにいそいで、疲れやしな

い」

しっかりと吉田屋のたくましい肩につかまっているお兼は、心配そうに聞いた。

「なあに、そんな心配はしなくたっていい。あんまり自慢にもならねえが、足だけはまだ人に負けたことがないんでね」

「だって、昼間からずっとおぶわれどおしなんだもの、いくらなんでも心配になるじゃないか。重いでしょう」

「人のものをおぶっているんじゃないやね」

「そりゃそうだけど、なんだかあたしすまなくて」

「じつはな、お兼、すむのすまねえのじゃねえ、おれは命がけで突っ走っているんだ」

「じゃ、やっぱり追いかけてくるの、あいつたち」

松川半兵衛は案外さばけた出方で、べつに何もきこうともせず放してくれた。こんなことですむんだろうかという不安はお兼にもあった。

「おれはたぶん追いかけてくるだろうと思う。だいいち浪人組が承知しねえだろうし、松川にしたって、藩内のいざこざを多少とも知っているおれたちだ、口をふさいでおいたほうが後くされがなくていいからな」

「憎らしいねえ。もしやってきたらどうしよう」

浪人組は五人そろってくるだろうし、こっちは二人きりで、しかも自分は足が思うようにならないのだから、とてもかないそうもない。

「しようがねえ、きやがったら戦うだけのことだ」

「だって、おまえさん一人で大丈夫かい」

これは聞くだけやぼな話だ。

「お兼、おれにちょいと計略ってやつがあるんだがな」

「どんな計略なの」

「おれはやつらがきやあがったら戦えるだけは戦う。けど、ここで死んじまっちゃつまらねえ。そこで考えたんだが、おまえはたとえ浪人組につかまっても、やつらは命までもとはいわねえだろう。ねらいはおまえの持っている百両と、それから体だ。百両のほうは簡単に五人でわけられても、体のほうはそうはいかない。きっといざこざがおこるだろうし、どこかへ運んでいくことになるだろう。そこがこっちのつけ目だ。おれはあぶなくなったら一度おまえをおいて逃げる。そして、やつらを油断させておいて、一人ずつたたっきっておまえを助けようってんだ。どうだろうな」

「そりゃ、あたしはこんな足なんだから、おまえさんのいうとおりにするよりしようがないけれど、あたしはもし体があぶないようだったら、舌をかみきって死んじまいますからね」

「冗談いうなよ。おれがせっかく命がけで山から拾ってきた大事なおまえの体じゃねえか、だれがあんなやつらのおもちゃにさせるもんか。ただ、まともじゃやつらにかなわねえから、お得意の忍びの術で一人一人片づけようっていうんだ。まあ、おれを信用していてくんな」

「きっとあたしを捨てちゃいやだよ」

お兼は吉田屋の肩へしがみついてほおずりしていく。

「今になっておまえを捨てるくらいなら、山ん中であんな苦労はするもんか」

吉田屋はまつわりつくお兼をしっかりとおぶいなおして、どんどん足を速める。

「おうい、吉田屋あ」

はるか後ろから呼び立てる声が、波のまにまにきこえてきた。やがて半道も走ったころで、道は砂浜がやや広くなり、松林の中へかかろうとしている。

「とうとうきやがったようだな」

吉田屋が舌うちをする。

「おまえさん、どうせ逃げきれやしないんだから、その辺で一息入れておいたらどう」

いざとなると、さすがにお兼も度胸がすわってくる。

「よし、そうしよう」
松林の中を少し行くと、左手によしず張りの掛け茶屋らしい小屋が見えてきた。むろん、夜だから店はしまっている。
「おうい、吉田屋あ」
「用があるんだあ、待ってくれえ」
から身ならだれにもひけはとらない吉田屋の足だが、女一人を背中にのせていたのではやっぱり競走にはならない。追っ手の声はぐんぐん近くなってきた。
「この辺でよかろう。お兼、おまえはあんまり無理をしねえほうがいいぜ」
吉田屋は茶店の前でそっとお兼をおろしながらいった。
「この足さえ言うことを聞いてくれりゃねえ」
お兼は左の足をかばいながらつい愚痴が出る。
「おや、敵は六人らしいな。すると、今井新兵衛がついてきたのかな」
「そうかもしれないよ、見とどけ役にねえ」
そんなことを話しあいながら一息二息ついているうちに、もう敵はどかどかと追ってきた。先頭は昼間峠でお兼に含み針をくらった笹島である。
「速い足だなあ、吉田屋」
笹島は用心深く六尺あまり離れたところへ立ちどまる。
「御苦労さまです。なにか御用ですか、笹島さん」
吉田屋はなにくわぬ顔だ。
「うむ、おまえたちが出ていくとまもなく、松川さまが、聞きもらしたことがある、もう一度おまえたちを呼んできてくれということでな、迷惑だろうがいっしょに行ってくれぬか」
そんな口から出まかせをいって、笹島は呼吸をととのえているようだ。
「それは困りましたなあ。御承知のとおり、てまえはけが人をおぶって歩いておりますので、

骨が折れます」
「いや、けが人はわたしたちがかわるがわるおぶってやってもいい」
浪人組の一人がまじめな顔をして口を出す。
「これはてまえでないといやだと申しますんで、——なあ、お兼」
「ねえ、おまえさん、どんな御用なんだか、今井さんがいっしょなんだから、ここで聞いてもらって、引きかえすのは勘弁してもらいましょうよ」
お兼は一行のいちばんうしろに立って、前へ出ようともしない今井新兵衛を見てわざと言ってやる。
が、これは思わぬ不覚だった。口をきくからにはまだ針をふくんでいないと見た笹島が、
「今だ、かかれっ」
一同に下知しながら、自分はいきなりだっと吉田屋に抜き打ちをかけていった。
「あっ、なにをしやがる」
吉田屋があぶなく飛びさがって道中差しを抜きあわせたのと、ほかの二人がすかさずお兼に躍りかかっていったのと同時だった。
「あっ、ちくしょう、なにをするのさ」
含み針がまにあわないうえに、左足をかばっているお兼だからどうしようもない、たちまち二人に左右の腕を取られて、そこへねじ伏せられてしまった。
「おまえさん、助けてえ」
お兼の悲鳴を聞きながらくそっと吉田屋は歯ぎしりをしたが、こっちもそれどころではない。
「えいっ、——とうっ」
初太刀を仕損じた笹島に鋭くきり立てられて、自分の命があぶない吉田屋なのだ。
「おい、その女は縛ってしまえ」
新兵衛がお兼の前へ立って横柄に命じた。
「ふうんだ。あたしを縛って、ふところの百両を抜く気かえ、今井さん」
「黙れっ。なにをしようと、こうなればこっち

の勝手だ」
新兵衛がふてぶてしくせせらわらったとき、つかつかとそばへ寄ってきて立った百姓娘があった。
「だれだ、おまえは――。あっ」
菅笠はかぶっているが、たしかに百合太郎のお百合さまである。
「あなたは、――あなたさまはいつここへ」
さすがに新兵衛は青くなってじりじりと後ろへさがり出す。百合太郎は腰に小刀を帯び、美しい目に氷のような殺気をみなぎらせているのだ。
「きれっ、この娘をきれっ」
あぶないと見た新兵衛は、思わず絶叫しながら夢中で抜刀した。いや、正確にいえば抜刀しかけたとたん、
「不埒者っ」
叱咤といっしょに、百合太郎が踏みこみざま新兵衛をきっていたのだ。

「わあっ」
ひとたまりもなく新兵衛が大きくのけぞる。
「それっ、小娘がやった」
「きってしまえ」
お兼をおさえつけていた二人の浪人者は百合太郎が小太刀の達人だとは知るはずもなく、たかが百姓娘と見くびっているから、お兼を放して同時にきりこんできた。
「さがれっ、下郎」
百合太郎はこっちからも踏みこみざま一喝して、さっと一人の胴を払い、かえす刀で身を沈めるようにして一人の高股をなぎ立てている。
「わあっ」
一瞬にして、三人が三人ともあっけなく戦闘力を失ってしまったようだ。
一方、少し離れた松林の中で、吉田屋はぼかんと百合太郎のすごい手なみをながめていた。
「おいおい、強盗はやめろ」
掛け茶屋のかげからぬっと出てきた百姓男が、必死に吉田屋を追いまわしている笹島のうしろからからかうように声をかけた。
「なにっ」
ひょいと振りかえった笹島は、これも相手をただの百姓男と見たのだろう。
「おい、この土百姓を片づけてしまえ、じゃまだ」
むっとしたように、自分についている浪人者二人にいいつける。
「よし、引きうけた」
「土百姓、くたばれっ」
おもしろ半分に同時にきってかかるやつ、
「えいっ、――とうっ」
のら太郎は抜き打ちに一人の右腕を片手なぎに払い、返す二の太刀であざやかに一人の胴へきりこんでいた。こっちは十分それだけの手練があるうえに、敵はそれとは知らず頭から甘く見てかかってきたのだから、ひとたまりもない。
「わあっ」

「ううっ」
前後して二人が悲鳴をあげたのを見て、
「おのれっ、土百姓――」
笹島が憤然とこっちへむかってきた。これもまだその土百姓が恐るべき剣士だとは気がつかないから、ただ一打ちと大上段に一刀を振りかぶった。とたんに、
「強盗だあ」
のら太郎はわざととぼけた舌刀を使いながら、敏捷無類のもろ手突きを入れる。笹島の振りおろす烈火の太刀が早いか、こっちの疾風の突きが早いか、勝負は一瞬の遅速できまる。土百姓がそれほど激しい不敵な勝負に出ようとはまったく意外な笹島だから、しまったとうろたえたときにはもう胸もとを一突きにささされて、
「うぬっ」
と目がくらみ、たちまち虚空をつかんで大きくのけぞっていた。
一方では、ちょうど百合太郎が二人をたおし

たときである。

乙女心

「だんな、おかげで助かりやした」

吉田屋はあっけにとられながらも、ほっとして、思わず頭を下げていた。

「いや、貴公たちがうまいところまで逃げてきてくれたんで、こっちも助かった。とにかく歩きながら話すとしよう」

追っ手は一人残らずたおしたが、敵は第二陣を出していないともかぎらない。ぐずぐずしているばあいではないのだ。のら太郎は血刀をぬぐって鞘におさめると、掛け茶屋へ引きかえして、刀のこも包みとふろしき包みを取って引きかえし、

「百合太郎さん、出かけましょう」

と声をかけた。

百合太郎はうなずいて、小刀を鞘ごと抜き取り、黙ってのら太郎にわたす。

そのあいだに吉田屋はお兼のそばへ寄って、

「さあ、出かけるんだ」

と、有無を言わせず肩へのせてしまう。

「若さま、ごめんなさい」

なんとなく百合太郎の目が恥ずかしいお兼である。

百合太郎はにっとわらってみせて、のら太郎と肩をならべて歩き出す。

「だんなはあそこであっしたちを待っていてくれたんですか」

後ろについて歩きながら、そうとしか思えないから、吉田屋は聞いてみた。

「うむ。こっちは無事に倉沢を通りぬけることができたが、万一貴公たちがひどい目にでもあわされていては大変だ。こっちはここまでくればもう大丈夫だから、もう少し貴公たちの来ようがおそかったら、わしだけ倉沢まで引きかえしてみようと相談していたところだ」

「そいつはどうもすみませんでした。なあに、

あっしたちはゆうべあそこへ一晩とまっています。まさか旅籠屋の者が見ている前じゃひどいこともできなかったんでしょう。松川とかいう先生が出てきやしてね、べつに面倒なことも言わずに放してくれたんで、こいつ追っ手をかける気だなと、走れるだけ走ってみたんだが、とうとうあんなことになっちまいましてね——。けど、よかったなあ、お兼」

ほんとうに吉田屋は助かったという感が深い。

「あたしはこの足がうらめしい」

「まあ、そうじれたってしようがねえ。二、三日たてばすぐまた歩けるようにならあな」

「明日はまだだめかしら。このどたん場へきて、あたしが手足まといになっていちゃ申しわけなくてしようがありゃしない」

「けど、だんなも百合太郎さんも、すごい腕前ですねえ」

吉田屋はお兼の気をかえるようにのら太郎に話しかける。

「なあに、相手が少し弱すぎるんだ」

のら太郎はあいかわらずのんびりとしたことをいう。

「のらさん、身から出たさびとでもいうか、これで江戸から若さまにつきまとってきた三人が三人とも、みんなきられてしまったことになりますねえ」

お兼がしみじみといった。大西倉之助と今井新兵衛は百合太郎の手にかかり、北沢佐久馬は吉田屋が手にかけたのである。

「自業自得でしようがあるまい。悪というものは、たとえその悪をなしとげてみたところで、けっして安住の地は得られるものじゃないのに、あわれな人間どもだ」

吉田屋は耳が痛かったとみえて、えへんとせき払いをした。

「なにさ、この人。おまえさんはもう悪人じゃないじゃないか」

お兼はわらいながら、そっと吉田屋にほおずりをしていく。

「そうだとも。いいことをするってものは、骨は折れるがけっして悪い気持ちじゃないものさ」

「ふ、ふ、あたしが足の骨を折りそこなったばかしに、おまえさんにこんな骨を折らせる、気の毒だねえ、ほんとうに」

「そういいなさんな。あの地獄の苦しみをなめてみて、人間は悪いことをするよりいいことをしたほうが気持ちよく死ねそうだと、はじめて目がさめやがった。おれのは骨折り損のくたびれもうけではなくて、骨折り得の極楽もうけってやつだ」

命のせとぎわから生きかえった気の軽さにこっちはついそんな冗談が出るのに、百合太郎のお百合さまはさっきから一言も口をきこうとしない。

お兼はふっと気がついて、

「若さまはどうしても今夜本陣へきりこむ気なんですか」

ときいてみた。

「うむ、百合太郎さんはその気でいるようだが、わしは明日という日もあるとすすめているところだ」

のら太郎がかわって答える。

「そいつは、百合太郎さん、少しせっかちすぎやす。こいつも講釈場で仕入れてきたんだが、戦をするにはまず敵を知るってことがあるでしょう。大将がどこに寝ているか、宝物がどこにあるか、そいつをよく突きとめてからでないといのししし武者になります。どうでしょう、今夜はあっしに間者の役をつとめさせてもらえませんかねえ」

吉田屋がさっそく一役買って出る。

「じつは、さっきからわしもそうすすめていたんだが、百合太郎さんは、これ以上貴公たちに迷惑をかけてはいけない、つまり貴公たちの幸

せをそんなことでこわすようなことがあっては気の毒だという気持ちなんだ」

のら太郎はそんなふうに軽く説明したが、それはさっき掛け茶屋で二人の追いついてくるのを待っていたあいだのことで、事実は少し違っているのだ。

今日、峠で兵馬たちに出会ってからの百合太郎は、大事近しと知って、女になりたがる心と、あくまでも鬼になろうとする心とが、胸の中で激しく戦い出したらしい。のら太郎に一度胸乳をさわらせてしまってからは、その苦悩がいっそう募ってきたらしく、

「のら、もうお兼たちを待つのはよそう。二人で本陣へきりこめばいいではないか」

と、あの掛け茶屋のなかでとつぜん言い出したのである。

いってみれば、こうしてのら太郎のそばにいると、女になりたくてしょうがなくなってくる。いっそ切り死にをして、さっぱりしたいという気持ちなのだろう。

「それは、百合太郎さん、少し無謀だ。万一のばあい、きり死には覚悟のうえだが、それはあくまでも家宝が取りもどせるという確信がついてからのことです」

「いや、左馬之介さえきってしまえば、たとえ家宝は取りもどせなくても、悪人は自然にほろびる。わしははじめからその決心だった」

「最悪のばあいにはの話なんでしょう」

百合太郎は黙ってしまった。

「最悪のばあいは、むろんそうするよりしようがありません。しかし、今はそのときではないでしょう。彼らが江戸へはいるまでにはまだ日がある。手段をつくして、できれば血を見ずに家宝が手にはいればこれに越したことはないのです」

のら太郎はなだめるようにいった。いわれなくてもそんなことは百も承知の百合太郎なのだから、

「のらは吉田屋を使って家宝を盗ませるつもりか」

と、わざとすねて出てきた。

「それができれば、それでいいと思います」

「わしは反対だ。なんの縁故もないあの二人に、これ以上あぶない橋はわたらせたくない。あの二人とはこれきりでわかれてやるほうが、二人の幸せだとは考えないのか」

「それは、百合太郎さん、少し違う。あの二人はせっかくわれわれのために働いて、自分たちが生まれ変わろうと一生懸命になっているのだ。一つの善を積むということが一つの悪のつぐないになる二人の前身なのだ。いまその人の張り合いを失ってしまうと、二人ともまたどんな道に迷いこむかもしれない。二人を救うということは、われわれがどんなに二人を信用してやるかということです」

「のら、おまえ、ほんとうに左馬之介に勝てる確信があるのか」

百合太郎がついに本音を出してきた。勝てるとわかっていれば生きて勝つに越したことはないのだが、もし失敗におわったとなると、百合太郎としては、いやでものら太郎に甘えた女心に苦い自責を感じさせられなければならない。恥を知る百合太郎は、たとえ死んでもそれがいちばんつらいのだろう。

「百合太郎さん、人間には天から与えられた分というものがある。われわれはその分にしたがって命をかければいいので、やれるだけのことをやって、後は事の成否も、自分の命も、天に待てばいいんじゃないかと思う。——その意味からいえば、わしはきっと左馬之介に勝ってみせるとあなたに誓ってもいい」

のら太郎はきっぱりと答えた。

「じゃ、わしはいっさいをのらにまかせておいてもいいのか」

「むろん、のらがいっさいを引きうけます」

「わしは鬼になる気だったのに、のらがだめにしてしまったんだ」

「どうだめにしたのです」

「のらはわしより強い。わしはのらに負けて、女の命まで許してしまったではないか。わしは恥ずかしいんだ」

百合太郎はいきなりのら太郎の胸の中へ顔を伏せてきた。

「かまわんのです。人間はいくら鬼になっても、だれかにたよらなくては生きていけないものです。百合太郎さんものらにだけはどんなに甘えてもよろしい。そのかわり、百合太郎さんの鬼はのらがきっと引きうける」

のら太郎は、いつか百姓娘になりきってしまった百合太郎の肩を抱いて、われにもなくはじめてくちびるをあわせていた。

「恥ずかしい、のら」

「なにいうだ、百姓娘のお伊勢はのらの嫁っ子でねえか」

「お伊勢、——いまの百合はお伊勢ね」

やっと安心したように百合太郎はたわいなく目をつむって、全身から甘く力がぬけてしまったようだった。

そんな夢のような一時、街道を走ってくる吉田屋の重い足音を耳にしたのである。

「百合太郎さん、二人は追っ手をうけているようだ」

のら太郎は百合太郎を放して、手早く刀のこもづつみを解く。小刀をうけ取った百合太郎は、もうしゃっきりとうなずいてみせて、すぐに菅笠をかぶっていた。

そして、二人できって出たのだが、それからこうして四人の夜旅になっても、唖になってしまったように一言も口はきかない百合太郎なのだ。

——今の百合太郎は、お伊勢の気持ちなのか、それとも鬼の百合太郎の気持ちなのか。

さすがにのら太郎にも百合太郎のあやの多い乙女心は計りかねる。

やがてむこうに由比の宿の灯がちらちらと目についてきたようだ。

箱根越え

その夜、由比の宿で旅籠についたのは、のら太郎と百合太郎、それに足を痛めているお兼の三人だった。

吉田屋は旅籠へもつかず、その足ですぐ左馬之介のとまっている宿へ様子を探りに行ってくれたのである。

「だんな、あっしは今夜は帰りません。だんながたはあっしにはかまわず明日は一番でここを立ち、百合太郎さんとお兼は駕籠で少し無理でも三島まで行って、伊勢屋という宿屋へとまってください。敵は明日はたぶん沼津泊まりでしょう。もう一晩だけあっしはやつらの様子を探ってみて、あさっての朝、だんながたが朝三島を立つ前にきっと追いつきます」

これが別れるときの吉田屋との打ちあわせだった。

「御苦労だが、なにぶんたのむ」

のら太郎はあくまでも吉田屋を信用する腹だった。

「おまえさん、しっかりたのみますよ」

お兼はちょっと名残惜しかったが、ここで吉田屋に立派な手柄を立ててもらわないとのら太郎や百合太郎の前で大きな顔をして夫婦になれないと考えたので、未練らしいことは一言も口にしなかった。

「わかってらあな。おれも吉田屋だ、けっしてどじは踏まねえ。——おまえ、足を無理しちゃいけねえぜ」

吉田屋は男らしくわらいながら、さっさとその横町へ消えていった。

百合太郎はあいかわらず無言の行をつづけている。

その夜は三人ともそれぞれ胸に重い思いはあるが、疲れきっているので、まくらについたがしかし、のら太郎はいつものように大丈夫だよとはいわず、黙ってわらっていた。それはもう切り死にを覚悟して、わかりきったことは聞くもんじゃないといっているような明るい苦笑にも似たわらいなのだ。

お兼はいまさらのように青くならずにはいられない。

それに、意外だったのは、自分は二人の仲をあんなに勝手な妄想で塗りつぶしていたのに、こうして昨夜からそばで見ていると、そんな甘ったるいふうは気ぶりにも見せなかった。二人はあくまでも行儀よく礼儀正しい。もっとも、へたをすれば切り死にをしなければならない最悪などたん場に直面しているのだから、そんな色恋ざたどころではないのかもしれない。

——お待ってやっぱり意地の強いもんだな。

お兼はまったく感心してしまった。

「若さま、吉田屋がもし家宝の短刀を手に入れてきたら、なにも切りこみはかけなくたってい

最後、朝までぐっすりひと眠りしてしまった。

翌日に百合太郎とお兼は宿場駕籠を乗りつぎ、約束どおり三島まで足をのばして伊勢屋という旅籠についた。

「のらさん、百合太郎さんふきげんなのかしら。ちっとも口をききませんね」

お兼は気になるので、百合太郎がいないとき、のら太郎にそっと聞いてみた。

「そうじゃあるまい。吉田屋が敵の様子をさぐってくると、いよいよ切りこみになる。そのときの手段をあれこれと練っておられるんだろう」

のら太郎はべつに気にもかけていないようだった。

「じゃ、どうしても切りこむんですか」

「たぶん、そうなるだろうよ」

「大丈夫かしら、そんなまねをして——それはのらさんや若さまの強いことはわかってますけど、なにしろ相手は大勢ですからね」

いんでしょう」

その夜、三島の宿でまくらを並べて床についたとき、お兼はそんなわかりきったことを百合太郎に聞いた。

「それはそうだが、なかなかむずかしいだろう」

百合太郎は寂しくわらってみせる。

「いいえ、こんどというこんどはあの人も一生懸命なんですから、ひょっとするとうまくいくかもしれません」

どうかそうあってくれるようにと祈りたいお兼だ。

その吉田屋が帰ってきたのは、今日は箱根越えで、昨夜のうちにたのんでおいた駕籠が二丁、伊勢屋の店先へ迎えにきたときだった。

「だんな、あっしたちは歩きながら話しましょう。さあ、百合太郎さんとお兼は遠慮なく駕籠に乗ってください」

吉田屋は女たち二人を駕籠にのせて先に立たせ、後からのら太郎と肩を並べて歩きながら、一昨夜の晩からの報告をした。

「倉沢の立て場であの夜を明かした鬼頭のせがれ兵馬は、昨日の朝、由比でおやじといっしょになりましてね、手傷だけですんだ例の浪人者たちからこっちの話を聞いたんですね。きり口があまりあざやかだ、その百姓の若い夫婦者と見せかけているのが、のら太郎と百合太郎に違いないと見当をつけました。それじゃ百合太郎たちはこっちより先へ出たことになるから、いよいよ油断ができないというので、左馬之介の警戒ぶりはひどく厳重になってしまったんです」

「そりゃそうだろうな。あっちもここまできて菊一文字を奪われてはたまらない」

のら太郎は苦笑した。

「じつは、その菊一文字なんですが、なんとかならないものかと、あっしは一日二晩ねらってみました。どうにも手の出しようがありません。道中は左馬之介が駕籠へ持って乗って、その駕籠のまわりをびっしり家来たちが取りまいているんです。本陣へ着いて寝るときは、箱入りの家宝をちゃんとまくらもとへおいて、その寝間へ二人ずつ半刻（一時間）交代で寝ず番がつくんです。左馬之介ってやつは人間がひどく用心深くできているんですね、敵ながら感心しちまいました」

さすがに吉田屋も手を焼いたらしい。

「ゆうべはたしか沼津泊まりだったな」

「そうです」

「すると、今夜は小田原泊まりだ」

明日の晩は戸塚泊まりで、明後日は江戸へはいってしまう。ねらう機会はもう、今日、明日の二日しかないのだ。

「だんな、あっしは今夜は小田原でもう一度ねらってみますが、だんながたは今夜は手を出さないほうがようござんすよ。城下町で騒ぎをおこすと、後がうるそうございますからね」

「つまり、われわれのねらえるのは明日の晩、戸塚でということになるな。そして、その明日の晩をのがすと、後は江戸へはいられてしまう」

「まあそういうことになります」

のら太郎は考えこまざるをえなかった。百合太郎がいうようにがむしゃらに切りこむのなら、それはいつでもできる。しかし、敵は五十人からの警固を持っているのだ。たとえうまくいって左馬之介をきりえたとしても、こっちの切り死にもまぬがれないだろう。

それではあまりにも能がなさすぎる。

「吉田屋は天井か」

のら太郎はふっと思いついて、小声で聞いてみた。

「お手の筋、——あそこがいちばん安全ですからね」

「すると、左馬之介の目がほんのしばらくでもわきへそれると刀箱を空にすることができるわけだな」

「そりゃ厠でも立ってくれりゃ細工にはぞうさありませんが、敵もさる者で、ちゃんとおまる

が用意してあるんです」
「そうか、――よし、一工夫してみよう」
「といいますと――」
「どっちみちない命と覚悟してかからなくちゃならないんだ。百合太郎さんに因果をふくめるよりしようがあるまい」
「因果――？」
「それにな、われわれが百姓夫婦の姿になっていると敵に知られてしまった以上、もうこのかっこうではまずい。もとの侍にかえろう。箱根で百合太郎さんの駕籠はかえして、われわれは話しながら歩くことにするから、貴公はお兼の駕籠につきそって、かまわず小田原へ先へ行ってくれ。旅籠は本町の虎屋ときめておこう」
「承知しやした」
吉田屋は大きくうなずいてから、
「けど、だんな、そいつはあんまり無理にすすめちゃ罪ですぜ」
と、どうやらこっちの腹を読んだらしく、まゆをひそめる。
「いや、それは心得ている。まあ、まかせておいてくれ」
のら太郎としても、いちかばちかこれが最後の手段なので、危険なことは十分承知の上だった。

最後の手段

「のら、どうしてあの二人を先へやったのだ」
箱根の関所を越えて、峠道が下りにかかってから、百合太郎がむっつりと聞いた。
「われわれは着物をきかえる必要があるし、わしは百合太郎さんに少し話もあるのです」
「ふうむ、もう百姓のお嫁はやめか」
珍しくそんな冗談を口にして百合太郎はほおをそめる。
「そうです。この変装はもう敵にわかってしまったのだから、元の侍にかえりましょう」
のら太郎は百合太郎を誘って街道をそれ、熊

笹の深い杉木立へはいっていった。
「ここでよろしいでしょう」
「そうか」
百合太郎は立ちどまって、納得のいくまであたりを見まわしてから、さっさと赤い帯を解き出した。
そのあいだにのら太郎はふろしき包みを解いて、手早く百合太郎のこそでを取り出し、うしろから肩へきせかけてやる。百合太郎は姫君育ちで、すぽんと着物をぬぐ癖があるから、白々とした肩のあたりから豊かな乙女の胸乳が木の間もる春の日を吸って目もあやに美しい。と見ているうちに、
「のら、さらしを取ってくれ」
相手がのら太郎だから、百合太郎はちょっと着物の襟をあわせただけで、平気でこっちを向く。
――この肌がおとりだ。
のら太郎はその大胆な美しさがなにか悲しかった。
二人とも身支度ができると、もう用のない百姓夫婦の衣類はひとまとめにふろしき包みにして、そこの草むらの上へおいた。
「のら、もう今日と明日の二日きりだぞ」
ふっと百合太郎が詰問するようにいった。
「まあ、掛けましょう」
のら太郎はふろしき包みの上へ百合太郎を掛けさせ、自分もそのそばへ腰をおろした。
「話があるといったな。どんな話だ」
二人きりだとすっかり気が楽になってしまう百合太郎らしい。
「小田原は城下ですから、見のがしましょう」
「すると、明日の晩、戸塚でということになるのか」
「そうです。戸塚で決行しましょう」
「手はずは――？」
さすがに百合太郎の顔がさっと緊張してくる。

「百合太郎さんにぜひ一役、大役をつとめてもらわなくてはなりません」
「どうせよというのだ」
「明晩、左馬之介らがまくらについたころ、百合太郎さんに裏口から本陣へ忍び入ってもらいます」
「かならず夜番がいるだろう」
「つかまってもかまわんのです。つかまったら、その夜番の者に、左馬之介の前へひいていけ、申しつけたいことがあると出ます」
「それで――」
百合太郎の美しい顔がなんとなく曇ってくる。
「左馬之介は百合太郎さんになわをかけて、一室へ監禁するでしょう。しかし、左馬之介はかならず煩悩をおこす。百合太郎さんの監禁されている座敷へきっと心ひかれる。その間に吉田屋が家宝を奪って逃げます」
「のらはどうするんだ」
「わしは庭へ忍びこんでいて、ころあいを計って百合太郎さんの座敷へ押しこみます。これ以外に策はないと思うんですがな」
百合太郎はじっとくちびるをかんでいたが、
「のらは、そんなこと、うまくいくと考えているのか」
と、怒ったように聞いた。
「かならずうまくいきます。そう信じてかかるより、今のばあい手はありません」
押しつけがましいが、不安がっていたのではきりがないのだ。
「一つ間違うと、わしは左馬之介に取りかえしのつかない体にされる、のらはそれでもいいのか」
百合太郎の目がうらみがましく燃えてくる。それはもう隠すことのできない激しい思慕のまなざしだった。
「百合太郎さん、わしは命にかけても、きっとあなたを守りきってみせる。どうかわしを信じてもらいたい」
口ではいったが、ほんとうはのら太郎にもそれほどの自信は持てないのだ。が、万一のばあいは自分の命でつぐないをする。少なくともこの方法なら百合太郎は命をすてずにすむだろうし、問題の菊一文字は吉田屋の手によって正統な当主の手へもどるのだ。
「どうしても、わしが体をおとりにしなくてはいけないのか」
「何事も主君のため、お家のために忍んでください。たのみます」
「いやだ、百合は――」
かっと百合太郎のほおに火が燃える。
「無理はありません。いやなのは当然なんだ。ほかに手段があれば、わしもあぶない橋はわたりたくない」
「わしがいやだというと、のらはほんとうに困るのか」
「いや、なにかべつに考えましょう」
しいてもいいきれないのら太郎なのだ。
「のら――」
「なんです」
「百合を抱いてくれ」
いきなり百合太郎は男の肩を抱いて、たくましい胸の中へ顔を伏せながら、
「百合は、百合は、のらのものだ。それだったら覚悟する。それでなければいやだ」
またしても百合太郎の女心は押さえきれなくなってきたようである。

死ぬも生きるも

「おまえさん――」
お兼は横ずわりになって、髪を気にしながらうしろ向きのまま呼んだ。
「どうした」
吉田屋はもう火ばちの前ですましてたばこ入れを取りあげている。
「あたしたち、これでほんとうに御夫婦になっ

たのね」
「うむ、鬼女の女房に鬼神――」
「ふ、ふ、それもうやめたんじゃないか」
振りかえったお兼の目は、まだ熱ぼったくうるんで、甘く男をにらむ。
「おっと、間違えた。仏の女房に弁天さま」
「こんなおかめ弁天で、すまなかったわねえ」
「その遠慮にゃおよびやせん」
「ええ、あたし遠慮なんかしないで、やきもちをやきます。浮気なんかすると承知しないから」
お兼はわらいながら立って、廊下へ出ていった。
――こいつはとんだやきもち弁天だ。
吉田屋は苦笑いしながら、しかし、けっして悪い気持ちではなかった。
箱根でのら太郎たちにわかれた二人は、お兼は駕籠だから案外早く小田原へはいって、すぐについた旅籠はまだがらんとしていた。吉田屋はまた今夜左馬之介の本陣へ物見に行って、一晩中宿へは帰れない。つい男心を駆り立てられて、お兼を引き寄せてしまったのだ。
「だれかこないかしら」
口ではそんなことをいっても、もう女房の気持ちになりきっているお兼だから、くずれるように男の胸の中へ引き寄せられて、後は黙って目をつむっていた。
――もっとあばずれかと思ったのに、案外だった。
吉田屋はなにか夢のように心たのしい。
お兼がすなおな世話女房になってくれれば、こっちも堅気になって一生懸命働いて、できるだけこれまでの罪のつぐないをしてみよう。それで一日でも娑婆が長ければ、それだけでも人間のしわせというもんだ。
ぼんやりそんなことを考えているところへお兼が帰ってきた。
「おまえ、足はよっぽどいいようだな。もうあんまりびっこをひかないじゃないか」

「二日駕籠だったんだもの。この分なら、明日はもう歩けるかもしれない」
いそいそと火ばちの横へきてすわって、男のきせるを取りあげる。
「まあ、あんまり無理はしないがいい」
「おまえさんはまた今夜本陣なの」
「うむ。もう今夜と明日の晩の二晩きりになったからな」
「あの二人は、どうして箱根でわかれたんです」
お兼はその話はまだなんにも聞いていないのである。
「二人が百姓夫婦の姿で歩いてるってことが敵にわかってしまったんだ。それならもとの侍の姿に着かえようというのと、ついでにだんなは百合太郎さんをくどくことに腹をきめたらしいんだ」
「あら、そんな山ん中なんかで、おかしいじゃないか」
「勘違いをしちゃいけねえ。おれたちとは育ちが違うんだ。そんなことをくどくんじゃない」
「じゃ、なにをくどくの」
「今夜は小田原泊まりで、ここは城下町だから、うっかり騒動はおこせない。すると、明日の戸塚泊まりが、あのお二人にとっては敵をねらう最後の晩ということになる。これはおれがだんなの腹を読んでの話で、口からこうと打ち明けられたわけじゃないが、だんなもいよいよ最後の腹をきめたんじゃないかと思う」
「どんな腹なんです」
「百合太郎さんをわざと敵のとりこにする。左馬之介と兵馬が親子で百合太郎さんの肌をねらう。そこがつけ目だ。左馬之介が百合太郎さんの監禁されているところへ忍んでいくようならしめたもんで、その留守におれが寝所のまくらもとから家宝の菊一文字を奪い返すことができる」
「――まあ、そのかわり百合太郎さんの体は無事にすまないんじゃないかしら」

「たのみ手、つまりくどき手がおれでもか。おれの命のせとぎわだ、お兼たのむといってもことわるかね」

吉田屋が冗談のように、目でわらいながら聞く。

「そうだねえ」

お兼ははっと目をすえて、

「そりゃ、おまえさんとあたしはもうほんとうの御夫婦なんだもの、話あいによっては覚悟のしようもあるけれど、あの二人はまだきれいな仲なんですからね。それを、まかり間違えば敵に肌身をけがされるなんて、それじゃ百合太郎さんが少しかわいそうすぎはしないかしら」

と、お兼は百合太郎に同情するのである。

「さあ、のらだんながどんなふうに百合太郎さんをくどきおとすか、侍にはまた侍の心意気というものがあるだろう。ここでおれたちがいくら心配してみたところで、明日を待ってみるよりしようがあるまい。ただ、おれたちはおれたちで、ちゃんと覚悟をきめておけばいいんだ」

「どうあたしたちが覚悟をきめるの」

「おれたちはあの二人がきっかけになってこうして夫婦にもなったし、堅気になろうともしている。いってみれば、おれはあの二人のために働いているんじゃなくて、自分の運試しをやっている気なんだ。あの二人がうまくいけば、こっちの二人もうまくいく。まかり間違ってそのために命をおとしても、おれはそれまでの運だと思って、けっして後悔はしないつもりだ。おれはどんなあぶない仕事でも、きっとあの二人といっしょにやる。お兼はどうなんだ」

「なにいってるのさ。あたしはもうおまえさんしだいじゃないか。地獄へおちようと、極楽へ行こうと、女房なんだもの、どこへだっておまえさんといっしょに行きます」

「ありがてえ。どうやらおまえはおれに過ぎた女房のようだ」

顔を見あわせてにっこりしながら、しかしそのわらいの底に生死をかけた深い思いがひそんでいるから、

「おまえさん――」

お兼はたまらなくなって、男の胸へしがみついていき、吉田屋もまたしっかりとお兼を抱いて、

「死んでも夫婦だぜ」

と、ついそれが口に出る。

百合太郎とのら太郎がもとの侍姿になって、旅籠についたのは、もう暮れ六ツすぎだった。

「あいにく鬼頭の行列が追いついてきたんで、それをやりすごしていたものだから」

のら太郎は二人にそう説明したが、百合太郎はあいかわらずむっつりと黙りこんでいて、自分からは少しも口をきこうとしなかった。

戸塚の本陣

翌日、のら太郎の意見でこっちが小田原を立ったのは、やがて四ツ（十時）をすぎるころで

あった。

小田原からその日の泊まりの戸塚まで十里あまり、四ツに立ったのではとうてい日いっぱいには戸塚へはいれない。

「用心深い左馬之介のことだから、朝は一番立ち前から五ツ半（九時）ごろまではかならず城下はずれに見張りが出してある。四ツにもなれば、その見張りももうあきらめて引きあげるだろう」

それがのら太郎のねらいだった。

そのゆっくりと構えこんだ朝のうちに、のら太郎ははじめてその夜の計画をお兼と吉田屋に打ちあけたのである。

「左馬之介の警戒ぶりは、吉田屋の骨折りで三晩ともおなじだということがわかった。むろん、今夜の戸塚の手配りもおなじと見ていい。尋常の手段ではとても目的は達しられない。そこで、今夜は百合太郎さんと吉田屋に虎穴に飛びこんでもらうほかはないと思う」

「だんな、わたしはどこへでも飛びこみますから、遠慮なくいいつけてください」

吉田屋が気軽に頭から引きうける。

「貴公にはべつにこれという恩義もないのに、こんな甘え方はすまんと思うが、いまさらそれはいうまい。ただ、今後わしは貴公とかならず男と男の付き合いをする。まあ、今はその言葉だけで我慢してくれ」

「結構ですとも。こっちからいえば、まんざら恩義がないとは思っちゃいませんが、それはいまいわないことにします。とにかく、てまえも男ですから、こうなれば後へはひきません」

「ありがとう。そこで、今夜百合太郎さんは五ツ半（九時）すぎごろ、ちょうど敵がまくらについた時分、裏口から本陣の庭へ忍びこむことになっている。庭には敵の夜番がいるから、むろんすぐ発見される。百合太郎さんは名を名乗って、夜番の者に左馬之介の前へつれていかせる。左馬之介は廊下まで出て、百合太郎さんに会うだろう。そのとき、例のものをまくらもとへおいて出るようならしめたものだ。そうだろう、吉田屋」

「そうです。てまえのほうはほんの少々ばかり寝所が留守になればそれでよろしいので」

にやりとわらってみせる吉田屋だ。

「家宝が消えてなくなれば、敵はすぐ騒ぎ出す。そうなれば百合太郎さんもおとなしくしていることはない。しかし、第一の機会がこっちの思うつぼにはまらなかったら、百合太郎さんにとりこになってもらう。そこに第二の機会がかならずくると、わしは信じるのだ」

お兼は思わず息をのんで百合太郎の顔を見た。

百合太郎は顔色ひとつ動かさず、さっきからむっつりと庭のほうをながめている。その様子が、のらはのら、わしはわしだと、なにか別のことを考えているようで、ちょっと不安な気がないでもないが、それより百姓娘でいるときより数段立ちまさってなまめかしい百合太郎の若衆姿が、やっぱり心配でたまらない。左馬之介にしろ、兵馬にしろ、黙って指をくわえて見ているはずは絶対にないからだ。

「わしは庭に忍んでいて、吉田屋の仕事を待っている。たとえ家宝奪還が成功してもしなくても、百合太郎さんに危機が迫れば、その騒ぎのほうへ即座にきりこむ。吉田屋はもしうまく家宝が手にはいったら、後のことはかまわずに戸塚を立って、できるだけ遠くへ逃げのびてくれ。お兼は御苦労でも宿はずれに待っていてもらう。吉田屋が落ちのびて、半刻たってもわしたちが行かなかったら、わしたちに間違いがあったと思ってもらっていい。そのときは江戸で吉田屋と落ちあって、江戸駒込に丹波笹山藩松平志摩守の下屋敷がある。そこの用人落合久左衛門という者を二人でたずね、われわれのことをくわしく話して、家宝を手渡してくれ。これが今夜の手はずだ。なにぶんたのみおく」

「あたし、なんだか悲しくなっちまった」
いよいよどたん場へきたんだと思うと、お兼はさすがに三人の顔を見あわさずにはいられなかったが、
「なに、いちかばちか、おれたちはだんなの指図にしたがって、自分のできるだけのことをすればいいのさ」
と、吉田屋はもう腹がきまったようである。
くだくだしいことはなにも口にしなかった。
今日も百合太郎とお兼は小田原から駕籠だった。小田原から大磯へ四里、ここで中食を取ったのは八ツ（二時）前で、大磯から平塚を通り藤沢までは四里十二町、ここで日が暮れた。
藤沢から戸塚へは一里三十町だ。吉田屋はここから一足先に戸塚へ急行して、今夜の本陣の様子をひととおりさぐり、宿はずれまで一行を迎えに出てくれることになっている。
百合太郎、のら太郎、お兼の三人は藤沢で夕飯をとり、百合太郎とお兼はふたたび駕籠で敵地戸塚へむかった。
一行が戸塚の宿はずれへかかったのは、やがて五ツ半（九時）に近い時刻で、駕籠はここでかえした。
月の出は九ツ（十二時）すぎになるだろうから、駕籠屋のちょうちんが並木道を遠ざかっていくと、あたりは急に暗くなる。
「もう少し進んでみましょう」
空の星あかりをたよりに、のら太郎は先に立って、ゆっくり町のほうへ歩き出した。
まもなく場末の人家がまばらにつづき出したが、もうみんな表戸をおろしてひっそりとしている、むこうに掛け行燈が一つ、ぼんやりと黄ばんだ光を往来へ投げているのは安旅籠でもあろう。
ふっとその光の中へ黒い人影が見えたと思うと、足早にそこを通りすぎて、ひたひたとこっちへ近づいてくる。
「吉田屋か」

「ああ、だんなですね、待ちましたか」
「いや、いま着いたところだ」
「歩きながら話しましょう。すみませんが、百合太郎さんも肩をならべてください」
百合太郎は黙って吉田屋を中にして肩をならべた。
「ちょうどいいところでした。やつらはいま寝支度にかかったところでしてね——本陣の手前を右へはいっていくと、そこに裏木戸があります。植え込みがちょいとあって、その庭の左手の雨戸が奥の間、つまり左馬之介の寝所になっているんです。夜番は今夜もたぶん三人一組み、一人がちょうちんを持って、絶えずその庭をぶらぶらしているでしょう。長旅でみんな疲れているから寝つきが早いのと、今夜はほかに大名、御用道中の目ぼしいのはとまっていないから、安心して仕事ができます」
「そうか、ありがとう。寝所の寝ず番もいつものとおりと見ていいな」
「いいと思います。これも三人一組み、一刻交代です」
「兵馬の寝所は近いのか」
「これは木戸をはいって正面の雨戸の右のはずれのようです。つまり、左馬之介の寝所の廊下とかぎ形になったいちばん奥ということになります」
「百合太郎さん、わかりましたか」
のら太郎が百合太郎に聞く。
「わかった」
「ほかに聞くことはありませんか」
「ない。——吉田屋、御苦労だった」
百合太郎の口から珍しく礼の言葉が出た。
「どういたしまして。じゃ、手前は一足先へ行って、裏木戸のかぎをはずしておきますから」
「たのむ」
「お兼——」
吉田屋はすっと一足さがってお兼と肩をならべる。

「おまえさん」
お兼はそでかくしてそっと吉田屋の手を握った。その手を握りかえして、
「おまえは宿はずれの鎌倉街道とのわかれ道のところで待っていてくれ」
と、吉田屋は念を押す。
「わかりました。そうします」
「じゃ、行くぞ」
「しっかりやってくださいね、おまえさん」
「やるとも。――。だんな、百合太郎さん、一足お先へ」
吉田屋はもうとっとと三人の先へ出て、たちまちやみへ姿を消していった。
「あたしだって、この足さえ満足だったら、仲間はずれになんかされちゃいないんだけど」
お兼がだれにともなくつぶやく。
「いや、あねごにはさんざん世話になっている。しかも、こんどは骨を拾ってもらわなければならなくなるかもしれないんだ」
「鶴亀、鶴亀、そんな縁起でもないことはよしましょうよ」
それっきり、もうだれも口はきかなかった。
本陣のあたりまでくると、さすがに旅籠や小料理屋はまだ起きているから、町並みにところどころ灯の光が流れていた。
「のら、行くぞ」
町の前後に人目のないのをたしかめてから、百合太郎は教えられた本陣の手前の路地へ思いきりよくすっとはいっていった。
「あっ」
声をかける暇さえないお兼は、なんという気の強い姫君なんだろうと、思わず立ちどまってしまった。
「あねご、そんなところに立っていると目につく。じゃ、また会おう」
のら太郎もにっこりわらってみせて、百合太郎の後を追っていく。
――うちの人もこの中だし、あたしはとうとう一人になってしまった。
とぼとぼと大きな本陣の前をまだ少しびっこをひきながら通りすぎるお兼は、ひとりでに涙があふれてくる。
その路地を本陣の板塀にそって二十間ばかりはいっていくと、なるほど木戸の前へ出た。
百合太郎はもうなにも考えていない。
「のら、わしは来世を待つ」
昨日箱根の裏山で、小鳥の声を聞きながら、のら太郎のたくましい胸の中にひしと抱かれた百合太郎は夢のようにつぶやいていた。
「いや、わしはあの世まであなたについていくんだから、来世まで待つ必要はない」
のら太郎は微笑しながら、じっとこっちの目を見すえて、いきなりくちびるをかさねてきた。かっと体中が甘く燃えて、百合太郎は思わず目をつむっていた。
「うれしい。百合はもうのらのもの」
「わしのものだ、姫は」
二度も三度も熱いくちびるをあわせて、胸がせつなくなるほど息がはずんできた。
「さあ、出かけましょう」
百合太郎はかぶりを振って、男の胸を離れようとしなかった。思いきり甘えてみたかったし、酔ったように体中の力がぬけてしまって、立つのが物憂い気さえした。
「よし、そこまで抱いていこう」
のら太郎は軽々と百合太郎を抱いて立ちあがった。
「恥ずかしい、のら」
「だれも見ちゃいません」
それは女のすべてを許したのもおなじたのしい夢だった。
――のらといっしょに死ぬんだから。
口先だけではなく、のらはきっといっしょに死んでくれる男だと、百合太郎は信じて疑わない。そののら太郎が、今も自分のうしろから、ちゃんと自分を見ていてくれるのだ。だから、

百合太郎は安心して死ねるのである。

なんのちゅうちょもなく裏木戸へ手をかけてみると、約束どおり吉田屋がかぎをはずしておいてくれたとみえて、木戸はすぐにあいた。

目の前は植え込みらしい。その植え込みをとおして、むこうに灯が動いているのは三人一組みの夜番だろう。

こっちはその夜番につかまるのが目的なのだから、木戸はのら太郎のために開けっ放しにしておいて、かまわずちょうちんの火のほうへ進んでいった。

そう広い庭ではない。夜番はすぐに足音を聞きつけたとみえて、

「そこへくるのはだれだ」

と、ちょうちんをこっちへかざした。

まさか敵だとは思いもかけなかったのだろう。すっと前へ進んで立った百合太郎の端麗な若衆姿を見ると、愕然としながら、

「だれだ、あなたは」

と、いっせいに刀の柄に手をかける。薩埵峠で百合太郎の手並みは十分知っているから、相手をきるというより、まず自分の身を用心したのである。

「これ、鬼頭左馬之介はどこにいるのか」

「何者だ、あなたは」

「新宮百合太郎、聞かなくても承知しているであろう。左馬之介のところへ案内せよ」

夜番は顔を見あわせて、急には返事ができない。百合太郎が江戸の主君志摩守の妹君だとは、もうちゃんと知っている家来たちなのである。

「あなたお一人か」

「さよう、見てのとおりわしは一人だ」

すぐそこが寝所の雨戸なので、寝ず番の耳に庭の声がはいらぬはずはない。

まもなく中から雨戸が一枚あいて、

「どうかしたか、夜番」

と、寝ず番の一人が顔を出した。

「ああ、大崎うじか。いま新宮百合太郎という

者が庭へきて、御家老と会わせろといっているんだ。ちょっと取り次いでみてくれぬか」

「なにっ、新宮百合太郎」

大崎もはっとしたようにこっちを見たが、

「待て、御家老にうかがってみる」

と、いそいで雨戸をしめてしまった。

百合太郎は毅然とそこに立っている。

夜番たちは少し離れて立って、どうしていいのか処置に当惑しているようだ。

雨戸のむこうの廊下に人の足音が入りみだれて、家の中は急に騒がしくなったようだ。

家来たちをおこしてまわっているんだなと見ているうちに、たちまちその座敷の雨戸ががらがらと引きあけられて、明るい灯の光がさっと庭へ流れてきた。

ばらばらっと七、八人、身支度をした侍たちが庭へ飛びおりてきて、百合太郎のまわりを取りまく。

雨戸があけきると、座敷の廊下近くには白羽二重の寝まきのまま左馬之介が左手に刀を取って突っ立っていた。まだ五十を少し出たばかりのがっしりとした男で、さすがに一門の家老職たる人品は十分に備わっている。左右に十人ばかりの警固の士が油断なく目を光らせ、いちばん廊下に近く松川半兵衛がすわっている。

——しまった。

百合太郎はひそかにがっかりした。

左馬之介のうしろに、家宝のはいっているらしい桐の箱をささげた家来がちゃんとすわっている。

これではいくら吉田屋でもどうしようもないだろう。

「新宮百合太郎、この夜中、用件はなんだ、そこで申しあげてみよ」

松川半兵衛が声をかけてきた。

「黙れっ、その方は黙ってひかえていよ」

百合太郎はおだやかに半兵衛をたしなめておいて、

「左馬之介、そこでは話が遠い、もう少し前へ出なさい」

と、左馬之介に声をかける。

左馬之介は不敵にも黙ってこっちを見おろしている。頭からこっちを相手にしない気らしい。

「これこれ、そんな大きな口をきくのはどこの馬の骨だ。神妙にせぬと、その分には捨ておかぬぞ」

半兵衛がぎろりと目をむいてみせる。

「左馬之介、その方はつんぼか？」

百合太郎は半兵衛を無視して、あくまでも左馬之介を相手にしようとする。

「半兵衛、その者は少し狂っているようだな」

左馬之介がいかにもさげすむように半兵衛に聞いた。

「そうのようでございます。しかし、薩埵峠で当家の者を二人ほどきっていますので、このまま許すわけにもまいりますまい」

ぬけぬけ答える半兵衛だ。

一瞬のすき

「半兵衛、狂人を手捕りにせよ」

百合太郎の夜目にもあでやかな若衆姿を無遠慮に見まわしていた左馬之介は、廊下にすわっている松川半兵衛に鷹揚に命じた。

あきらかに食指が動いた好色らしい目の色だ。

「手捕りでござりますな。かしこまりました」

半兵衛は左馬之介の日ごろをよく承知しているので、その目が御意にかないましたかというように微笑する。

その二人が、ほんの一瞬、不謹慎な想念に駆られて目と目を見かわしたとたん、潔癖な百合太郎は思わずぞっとして、

——いやだ、左馬之介ごときに。

とっさにそう考えたのと、袴の腰板のあたりに忍ばせておいた手裏剣を手にしたのと同時で、

「えいっ」

手裏剣は気合いもろとも左馬之介の胸板目がけて流星のように飛んでいた。

「あっ」

左馬之介は愕然として身をかわしたが、かわしきれずに、手裏剣はぐさと左の肩先へ突き刺さる。

——百合太郎の手練をもってしても、いささか距離がありすぎたのだ。

「うぬっ、——半兵衛、つかまえろ」

肩先を朱に染めて、左馬之介は苦痛の顔をゆがめながら、それでもまだ切れとはいわぬ。

「はっ」

色を失った半兵衛は、うろたえながら、

「一同、いっしょにかかれ」

と、庭へわめき立て、自分もすっくと立ちあがる。

その間に左馬之介は近習二人にまもられながら、広間の奥の寝所へ引き取っていった。

「それっ」

「おお」

庭にいた家来たちは、命令だからしようがない、一度に三人、三方から百合太郎に躍りかかっていったが、

「無礼者っ」

なんとしても男たちの手を体に触れさせることは百合太郎の乙女心がゆるさない。われにもなく抜き打ちにさっと三人を横なぎにしたのだ。

「わあっ」

三人が三人とも、胸、胴、腕のあたりへ切っ先をうけて、たわいもなく三方へ飛びのきたおれていた。

「きれきれっ、——峰打ちにするんだ。刀をたきおとしてしまえ」

廊下の半兵衛がまたしてもわめき立てる。

「はっ」

家来たちは自分の身があぶないから、いっせ

いに抜刀した。
——のら、許せ。わしはつかまるのはいやだ。悲しくも意を決した百合太郎は、もうこうなっては切り死にをするまでも左馬之介の寝所まで押し入って、いっきょに勝敗を決するほかはない。
「えいっ、——とうっ」
こっちの刀をたたきおとそうと、これも死にもの狂いの敵の中へ百合太郎は恐れ気もなくきりこんでいく。大勢の敵だが、こっちはほんとうにきる気だし、敵はこっちをきるわけにはいかないのだから、到底じゃまはしきれない。
百合太郎は前へまわる敵をきり払い追い払い、ぐんぐん廊下のほうへ近づいていく。
早くも百合太郎の意を悟った松川半兵衛は、こりゃいかんと思い、
「一同、引け」
ひらりと庭へ飛びおりるなり、自分から百合太郎の前へ立ちはだかった。
「狂人、まいるぞ」
百合太郎の腕前は十分知っているが、半兵衛にはたかが姫御前のやせ腕という腹がある。一刀を青眼に取りながら、すきあらば刀をたたきおとしてやろうと身構える。
「僭上者め」
百合太郎の燃えるようなくちびるから鋭い叱咤の声が飛んで、ぐいとこっちを圧倒してくる。
——あっ、これは強い。
半兵衛はじりじりと後ろへさがりながら愕然とした。相手は捨て身とはいいながら、すさまじい気魄の上に、天稟の太刀筋を持っている。しかも、少しも恐怖というものを持っていないから、剣先がへびのように柔軟で、いつどう変化に出るかわからない。
——しようがない。切れ。
切らなければこっちが切られてしまうのだ。半兵衛の顔に凶暴なものが血走ってきた。
「えいっ」

「とうっ」
いけない、半兵衛はやっぱり押され気味である。
味方の者は七、八人、百合太郎の背後を囲んで構えをつけているが、ただそれだけのことで、全然うしろからきって出ようという意志はないようだ。みんな当惑したように形をつけているだけである。
——ばか者どもめ。なぜ、足を払うなり、肩先へ峰打ちを入れるなり、うしろから攻勢に出ようとしないのだ。
百合太郎の気合いがほんの一瞬そっちへ動いただけでも、こっちは踏みこんで勝機がつかめるのにと、半兵衛は苦しまぎれにそんなことまでいらいらと癇にさわってきた。
が、うっかりそっちへ気が散ったのは、それこそほんの一瞬のことではあったが、やっぱり不覚だった。
「えいっ」
激しい気合いと同時に百合太郎が思いきり踏みこんできて、——来たなと思った半兵衛は、
「おうっ」
夢中で引っ払って大きく飛びのいた。が、事実は半兵衛が引っ払う前に、百合太郎の敏捷無類の打ちこみのほうが早く、それでも同時に飛びのいたから左の肩先を切っ先にかけられて致命傷には至らなかったが、われにもなくどっとそこへしりもちをついていた。
——しまった。
瞬間、半兵衛は目の前が真っ暗になる。すかさず踏みこんで二の太刀を入れられれば、それまでの命なのだ。
むろん、半兵衛はてっきりやられたと観念したが、百合太郎のほうは奥に目的があるから、たおれた半兵衛などには目もくれず、その足でひらりと広間の廊下へ躍りあがっていた。
そのころ——。
吉田屋は寝所の天井裏から百合太郎が庭へ押

し入ってきた物音を聞いていたが、左馬之介が寝所から広間へ出て行くとすぐ、床の間のわきの押入の中へ降り、戸を少しあけて素早く左馬之介のまくらもとを見た。

いつもそこに置いてある宝刀の桐の箱は見あたらぬ。

――ちくしょう、抜けめのないおやじだ。

吉田屋はがっかりした。自分の労はかまわないが、これだとこんどはどうしても百合太郎がつかまってくれないと筋書きどおりには事が運ばない。

いや、百合太郎がつかまるまでは筋書きどおりにいっても、それからがのらだんなの計画どおりに運んでくれるかどうかが頭痛の種なのである。

ひょっとして、百合太郎がなわつきのままこの寝所へでも引っぱってこられると、目の前で大切な姫君がむざむざ好色おやじの毒牙にかけられるのは見ているわけにいかないから、どうしても命がけで飛び出すことになる。

そうなればむろん左馬之介の命はもらってやる。が、そのかわり、自分もまた百合太郎といっしょにここで討ち死にを覚悟しなければならない。

――かわいそうに、いやでもお兼を泣かさなくちゃならないのか。

吉田屋はじいんと胸が熱くなってくる。正直にいえば、せっかくすばらしい女房をさがしあてたばかりだのに、こんなところで死にたくはないのだ。

――おや、百合太郎さんが暴れ出したようだぞ。

激しい気合いの声がびいんとひびいて、人びとの走りまわる足音がただごとでない。

――そうか、ちょいと暴れてからつかまってやろうという腹かな。

それにしては百合太郎の気合いにあまりにも激しいものがあると聞き耳を立てているうちに、がらりと寝所のふすまがあいて、左馬之介が帰ってきた。

「あっ」

右手で押さえた左の肩先にべっとりと血があふれ出ているのを見て、吉田屋はあやうく声を立てるところだった。

若い家来が二人ついてきて、一人は例の桐の箱を大切そうにささげていた。

「お痛みになりますか」

「いや、たいしたことはない。医者がくるまで、とにかく傷口をしばっておいてくれ」

「はい」

左馬之介はもろはだぬぎになろうとして、ふっと気がついたように、血のついた右の手のひらをいそいで寝巻きのひざでぬぐい、内ふところから錦の袋を取り出してひざの下へ敷いた。中は短刀のようだ。

――驚いたなあ。

吉田屋は思わず目をみはった。どうやら、桐の箱の中の菊一文字は偽物で、錦の袋の中のが本物らしいからである。

家来たち二人もちらっとそれを見て、すぐ気がつかない振りはしているが、内心は驚いているようだ。

――あぶねえ、あぶねえ。こんなに骨を折って、とんだ偽物をつかまされるところだった。

吉田屋は冷やりとせずにはいられない。

「さらしがなかったら、その寝巻きを裂け」

「はい」

「そこの水差しに水がある」

「はい。――傷はわりに浅いようです」

「そうだろう。たかが小娘の打った手裏剣だ。それに、距離が少し遠すぎたからな」

「痛みますか」

若侍の一人が傷口を水でぬぐいながら聞く。

そのあいだに一人は左馬之介が脱ぎすてた白羽二重の寝巻きを、小柄で手ごろに切り裂いていた。

「手早くしなさい。もうそれでいいから、傷口を縛っておいてくれ」
庭の乱闘が手に取るようにきこえるので、左馬之介は心がせくらしい。
「まだつかまえぬらしいな」
「はあ。相手が相手ですから、つかまえにくいのでしょう」
「知恵がないからいかん。はしご攻め、棒攻め、なわ攻め、いくらでも手はあるではないか。半兵衛にそう言いなさい」
手早く衣類を着かえて、帯をしめさせながら、老獪な左馬之介がいう。
——こいつはことだ。筋書きがすっかりかわっちまったようだぞ。
押入の中で吉田屋がちょっと青くなったとき、
「父上、あぶない。百合太郎です」
と、ふすまの外で絶叫する兵馬の声がした。
「えいっ」
「おう」
「それっ、防げ」
激しい剣戟の音が広間へ移ってきたのだ。
「ふすまをあけよ」
左馬之介が刀を取りながら叫んだ。
「はっ」
一人がふすまをあけ、一人が偽物の桐の箱をいそいで取りあげる。
百合太郎はもうすぐそこまできているのだ。さすがに寝所の前だから、今は防ぐほうも必死だ。
「これ、だれかはしごを持て。——一組みは棒攻めにたたき伏せよっ」
つかつかと寝所の前まで出て、左馬之介が言いつける。
「はっ」
廊下にいた二、三人がそっちへ走ったようだ。
「左馬之介、そこ動くな」
百合太郎がまなじりを裂いて叫んだが、前に

五人一団となった剣陣があるので、さすがに急にはどうすることもできない。
——しめた。今だ。
吉田屋はそっと押入の戸をあけた。今まで左馬之介のすわっていた褥の下に、錦の袋の短刀が顔をのぞかしている。すぐ寝所の前に左馬之介は立っているが、だれも彼も百合太郎の方へばかり気を取られているようだ。
するりと押入から飛びおりた吉田屋は、まるでとんびが油揚げをさらうような素早さで、さっと錦の袋を取りあげるなり、口にくわえて、もとの押入へ飛びあがっていく。
その気配にふっと振りかえった偽物持ちの若侍が、
「あっ、くせ者、——くせ者です」
とわめきたてたときには、吉田屋はちらりとその黒いうしろ姿を残しただけで、もうするすると天井裏へはいあがっていた。
「それっ、逃がすな。追え」
愕然と気のついた左馬之介は怒号しながら、狂ったように押入の前へ走り寄って、刀を引き抜くなり、ずぶりずぶりとそのあたりの天井板をところきらわず突きあげていた。

春の星

——よし、吉田屋がやった。
それと見た百合太郎は、もうこんなところに用はない。さっと身をひるがえすなり、ひらりと庭へ飛びおりる。
前の敵は百合太郎をきろうというより寝所をまもるだけで精いっぱいだったのだから、みんなほっとして百合太郎のうしろ姿を見ているし、庭にいた敵はふいに白刃をふるって百合太郎が目の前へ迫ってきたので、あっと左右にうろたえ散る。
「こっちは百合太郎にかかれ、ひきょう者はわしが見ているぞ」
それと見た兵馬が、憤然と味方を叱咤した。

一味の家来たちは、世なれた左馬之介より、わがまま育ちで驕慢な兵馬のほうがむしろ怖い。ひきょう者と見られると、後でどんな制裁をうけるかわからないからである。

「それ、逃がすな」

「若さまの御前だぞ」

座敷の敵は庭へ飛びおりてくるし、庭の敵は死にもの狂いでばらばらっと前から取りかこんでくる。

悪いことには、このとき足軽組が十人あまり、手に手に六尺棒を持って戦列に参加してきた。

「えいっ、——とうっ」

百合太郎も今は必死で、一刀を右にたたきつけ、左にかえし、血路をひらいては前へ進むが、その前へ前へと敵は入りかわり立ちかわり先まわりをして、容易に裏木戸のほうへは近づけない。

さすがにさっきからの乱闘で百合太郎もいささか呼吸が乱れてきた。

「それ、今だ」

「えいっ」

「おうっ」

それと見た足軽が、激しく左右から六尺棒をふるってきた。一人は足、一人は腰をねらってくる。

「おのれっ」

足を払ってきた棒は飛びあがって流し、腰へくるやつはきってのがれた。

とたんに、前から一人が肩へ振りこんでくる。体をひらいてかわせば、うしろの棒が足を払ってくる。車がかりの戦法だ。

「あっ」

百合太郎はもう息をつく暇もなく、うしろから投げた棒に足をからまれ、不覚にも前へばったりよろめきたおれる。

「それ、やった」

棒組がすかさず棒で、手、足、首、腰を押さえつけようとひしめき立ったとき、

「下郎、下がれっ」

大喝と同時に、その角の二人が、

「わあっ」

悲鳴をあげながらのけぞっている。

木戸近い植え込みの中に身をひそめて機会を待っていたのら太郎が、決然ときって出たのだ。

「わっ、くせ者」

ぎょっと棒を構えなおした足軽が、

「推参っ」

叱咤の声といっしょにまた二人、

「わあっ」

と悲鳴をあげると、その疾風の太刀さばきにおじけをふるった棒組は、思わずたじたじと後へさがる。

「のら——」

その間にはね起きた百合太郎が、われにもなくなつかしい名を呼んで背後へかくれ、ほっと一息つく。

「早く、裏木戸へ——」

小声で言っておいて、

「えいっ、——とうっ」

のら太郎は猛然と足軽組の中へきってはいる。

——ああ、そうだった。

はっと気がついた百合太郎は、そのあいだにいっさんに裏木戸のほうへ走り出す。

そこにも敵の一味が三人ばかりがんばっていたが、一息ついた百合太郎は苦もなくきり破って、表の路地へ脱出していた。

「わあっ」

「わあっ」

庭のほうで敵の喊声が盛りかえしてきたのは、のら太郎がまだ暴れまわっているのだろう。

——一人で逃げてもいいかしら。

それにしても、どっちへ走ったものだろうと、百合太郎がちょっとためらっていると、

「こっちだ、百合太郎さん」

ひょっこりのら太郎が木戸から躍り出してき

て、百合太郎の腕をつかむなりどんどん裏のほうへ走り出す。

が、ものの十間とは走らぬうちに、のら太郎は立ちどまって、素早く物陰へ百合太郎を誘いこむ。どこかの納屋のかげらしい。

「おい、一組みは表通りへ出てみろ、われわれは裏へ追ってみる」

いま出てきた木戸口のほうでそんな声がきこえたと思うと、もう数人の足音がこっちへ駆け出してくる。

「やっぱり表通りのほうじゃないかな」

「そうかもしれん。しかし、道が裏と表と両方あるときは、両方追ってみるのがほんとうだ」

「天井裏へ逃げたやつはどうしたろう」

「ねずみやねこでないと、なかなかつかまらんものだ」

一人一人が勝手なことをいいながら、前の路地をどかどかと通りすぎていく。まさかこんな目と鼻の間にかくれていようとは夢にも考えつかないのだろう。

のらは憎いことをする男。

百合太郎はあいている手でのら太郎の胸へすがりつき、あらしのような息をひそかに肩で切りながら、もうのらにさえまかせておけば大丈夫なんだとすっかり安心していた。

さすがに激しい疲労を感じてくる。焼きつくように水がほしい。

「のら、水をくれ」

無理を承知でちょっと甘えてみたい気持ちなのだ。

のら太郎は黙って、いきなりくちびるを押しつけてきた。

——うれしい。

こうして命があったと思うと、百合太郎は急に涙がほおにあふれてきた。

「夢のようだなあ、百合太郎さん」

ほおずりをしながら、のら太郎が耳もとへささやく。

「百合もうだめかと思った」

「わしもびっくりした。百合太郎さんの暴れ方は筋書きと少し違う。困ったことになったと心配していました」

「百合はだめ、——のらよりほかの男には体をさわられたくない」

「たぶんそんなことだろうとは思っていました。しかし、けがの功名とでもいうか、吉田屋がうまくやってくれたようなのでほっとしました」

「のら、あれはなんだ」

百合太郎がぎくりとしたように聞き耳を立てる。

本陣の表のほうで馬のいななく声がしたと思うと、とつぜん馬蹄の音が程ガ谷のほうへ走り出したのである。一騎ではない。どうやら三騎のようだ。

「吉田屋を追うのかもしれません。いや、たしかにそれでしょう」

「大丈夫か、のら」

「たぶん大丈夫でしょう、吉田屋は常人にはまねのできない芸を身につけている。——しかし、この分だと敵は今夜のうちに六郷川に陣を構える気かもしれません」

左馬之介も大切な家宝を奪いかえされては翼を失った鳥とおなじで、なんの力もなくなるのだから、今は必死なのだろう。

「わしたちはどうすればいいんだ」

「そうですなあ。もう無益な血を流すだけはたくさんです。しばらく様子を見て考えましょう」

「お兼のほうは心配してやらなくてもいいのか」

「あれもただの女ではありません。めったには田舎侍などの網にはかからないでしょう。——百合太郎さん、おたがいにもう物騒なものはしまいましょう」

のら太郎はわらいながら百合太郎の肩を放して、刀をぬぐい、音のしないように鞘におさめ

る。百合太郎も気がついてそれにならった。
「のら、さっきのやつらはまだ帰ってこないな。どこまで行ったのだろう」
百合太郎は聞き耳を立てながら、またしてもそっと男の胸の中へ行く。今は体中の力がぬけてしまったように疲れきってはいたが、それよりのら太郎への激しい恋心が胸にうずいて、少しでも離れていたくないのである。
「わかった、百合太郎さん。今までやつらが引きかえしてこないところを見ると、あの連中は裏表からわしらの跡を追いながら、ついでに程ガ谷口をふさぎに行ったんでしょう。左馬之介というやつはそういう抜けめのないやつなんです」
「うむ」
「その左馬之介がうっかり菊一文字から目を放したというのは、こっちからいえば天祐、あっちからいえば魔がさしたとでもいうんでしょうな」
「それで、のら、わしたちはこれからどうするんだ、やつらのふさいでいる宿はずれをまた突破するのか」
「いや、刀で突破するのは最後の手段です。もうしばらくここで様子を見てみましょう」
「抱いてくれ、のら。わしはもう疲れて立っているのがいやになってきた」
百合太郎がまたそんなわがままを言い出す。空に甘い春の星がまたたいている、ひっそりとしたやみ夜だった。

三　晩一一日

百合太郎とのら太郎は、戸塚の宿も藤沢に近い平戸屋という貧しい商人宿で、あれから三晩二日の明け暮れをすごした。
「もう目的は九分どおり達したのですから、このうえ血なまぐさい危険をおかす必要はありません。どこか目立たぬ旅籠へついて、江戸から迎えの者を呼びよせましょう」

あの本陣の裏の納屋のかげで、のら太郎はそんなことをいい出したのだった。
「これから旅籠をさがすのか」
百合太郎はぐったりとのら太郎のひざの上へ横抱きにされて、もう眠そうな声を出していた。
「そうです。江戸とは反対のほうの、なるべく宿はずれに近い旅籠をさがしましょう」
「のらとならどこへでも行く。このまま抱いていってくれ」
「眠いのか、百合太郎さん」
「うむ、眠くなってしまった」
「よろしい。では抱いていってあげるが、その前にわしの名を打ちあけておきましょう。もうそのほうがいいと思うから」
「ほんとうか、のら」
百合太郎はぎくりとした。ぜひ聞きたい名ではあるが、いざとなると、やっぱり怖いような気がする。
「たぶん、百合太郎さんも聞いているだろうが、わしは愛宕下の松平信太郎です」
「まあ」
ひょっとしたらそうではないかと考えないでもなかったが、あらためて名乗られてみると、いまさらのように百合太郎はかっと体中が燃えてくる。
愛宕下に屋敷のある寄合旗本三千石松平信太郎は笹山十万石の別家で、今から四年前、百合姫が十四のとき、似合いの縁組みだからぜひ信太郎の夫人にという話が老臣たちのあいだにあった。
当時の百合姫は、女らしいことより武術に夢中になっていたころだったし、信太郎は放埒でよく屋敷を抜け出しては街を遊び歩くとも耳にしていたので、
「いやじゃ。百合は一生だれとも縁組みなどしたくない」
と、一言のもとにはねつけて、話はそれっきり立ち消えになってしまったのである。

——やっぱり縁というものかしら。

いまその人のひざの上に身をまかせていて、百合太郎はしみじみと宿縁のふしぎさに胸をうたれずにはいられなかった。

「のらは、のらは兄上さまからたのまれて、わしについてきたといっていたな」

「そうです」

「では、兄上はやっぱりわしを愛宕下へ縁づけるつもりでおられるのか」

「たぶんそうでしょうな。お百合さんは不服か」

「のらは好きだといっているではないか。百合はもうのらのものだ」

返事のかわりに、信太郎はしっかりと百合太郎を抱きしめて、思いきりくちびるをかさねてきた。

生死の境を何度となくともにしてきて、それでなくてさえ、ともすれば激しい思慕の情をおさえかねていたのが、今は兄の志摩守さえ許している相手とわかったのだから、百合姫は幸せの雲にのって天翔けているようなうっとりした幸福感にたわいなく酔いしれて、もうどうされようと信太郎のなすがままだった。

平戸屋は物のにおいが鼻につくようなむさくるしい商人宿で、その奥のいちばん上等な六畳の間さえ、天井はすすけ、畳は表がすりむけているというひどい座敷だった。

が、その一間が生涯の初夜をちぎった忘れられぬうれしい座敷になったのだから、むしろそのむさくるしさが百合太郎にとっては物珍しくもたのしくてたまらない三晩二日の明け暮れだったのである。

「百合太郎さん、屋敷へ帰ると家来たちがいるからこんなわけにもいくまい。江戸から迎えのくるまでは、あなたは新宮百合太郎、わしはのら太郎で、気ままにのんびりすごすことにしましょう」

のら太郎はそういって、百合太郎のどんなわがままもきいてくれた。

「のら、わしは女なのか男なのか」

百合太郎はときどき自分でおかしくなることがあった。

旅籠へは男で泊まっているのだから、朝、起きればきちんと男になって袴をつけ、髪を若衆髷に結って上座へすわる。のら太郎は例によって下座へさがって家来のごとく、百合太郎さん百合太郎さんといって仕えてくれる。

百合太郎は今まで男の心になりきって、どうして左馬之介から家宝菊一文字を取りかえしてやろうかとそればかり考えてきたから、女らしいことはなにも気がつかぬ。たとえば、食膳にむかっても、給仕役は家来ということになっているのら太郎がやってくれるので、食事がすむと、

「のら、もう茶でいい」

と、すましていいつけているのである。

ふろへはいるときはむろんのら太郎が戸口で番をしてくれるし、寝巻きに着かえればぬぎすてた着物はのら太郎がちゃんとたたんでくれる。

「のらはなんでもできるんだなあ」

「そうですな。わしは街へ出て町人の生活をよく見てきているし、そこに寝とまりして、自分のことはなんでも自分ですることをおぼえてきた、それがいま役に立つんですな」

「では、わしも一度街へ行ってこなくては、のらのいい世話女房にはなれないかもしれないな」

「そんなことはありません。百合太郎さんはこんどこうして旅に出て、ずいぶんいろいろな目にあい、いろいろなことを見てきた。それがいまにだんだん役に立ってくる。人間は男でも女でも心に愛情さえあれば、その愛情がどうすれば相手がよろこんでくれるかを自然に教えてくれるものです」

なるほど、そうかもしれないと百合太郎は思った。自分はただのら太郎に甘えているだけだが、のら太郎が自分にしてくれることは、なに

一つとして愛情から出ていないものはない。
——かわいいから、わがまま娘のいうなりになんでもしてやる。
たしかにそれなのだ。
そういえば、百合太郎もまたのら太郎のよろこぶことならなんでもしてやりたいと考えてはいる。現に、のら太郎の朝の髷は自分で結んでやっているし、月代も自分があたってやっている、いや、なによりも夜も昼も二人きりの世界なのだから、百合太郎はもうすっかり安心して、男装を忘れているときのほうが多い。一度男の愛撫をうけた女体は、その男の前ではもう男になりきれないのかもしれない。
「のら——」
百合太郎は肌寂しくなると、ついたくましいのら太郎の体にまつわりついていきたくなる。それは、もうのら太郎なしでは一日も生きていられない、そんな気持ちにさえされている百合太郎なのだ。

「お百合さん、また抱いてもらいたそうな顔をしているな」
「のらが悪いんだ。百合にそんなことを教えてしまったのだもの」
「よし、屋敷へ帰ると、まさかそんなまねもできなくなる。さあ、抱いてやろう」
のら太郎はよく百合太郎を軽々と抱いて、座敷中を歩いてくれたりした。
まったく夢のようにたわいなく、骨の髄までとろけてしまったような甘美な二人きりの夜と昼ではあったが、しかしまた、そんなたわむれに酔いしれてばかりもいられない二人でもあった。
百合太郎はあまり気にもしなかったが、のら太郎はいつこのかくれ家を敵にかぎつけられるかもしれない用心をけっしておこたってはいなかった。旅籠屋のことだから、ことに朝晩の人の出入りにはそれとなく注意して、寝る前にはかならず一度家のまわりをまわってくる。きら

いではない酒も、ここでは一度も杯を口にしなかった。
「今夜は百合が夜番をつとめるから、のんでもいい」
心から百合太郎がそうすすめても、
「いや、殿さまから大切な姫君をあずかっているんですからな」
と、そういう意志はあくまでも強固なのら太郎だった。
「のら、お兼や吉田屋は心配しているだろうな」
百合太郎がいちばん気にしているのはそれである。
「それは心配はしているでしょう。しかし、切り死にをしたとは思わない。どこかに生きていることだけはわかっていると思います」
「なぜだ」
「吉田屋のことだから、まず左馬之介党の様子をさぐっている。左馬之介はまた、駒込の下屋敷へも、松平家の上屋敷へも、内外からわれわれがいつ帰ってくるかもしれないと見張りを出しています。そういう動静を見れば、こっちが生きていることだけはすぐぴんとくる男ですからな」
「そうかもしれません。菊一文字はどうかしら。もう殿さまのお手もとへとどきましたかしら」
つい百合姫になってすわりなおしている。
「まだかもしれません。吉田屋もお兼も、五、六日はわれわれが江戸へ帰るのを心待ちにしているでしょうし、敵の見張りがあるとすると、うっかり駒込へは近づけないでしょう」
「では、早く江戸へ帰らなければなりませんね」
「そうです。明日あたりは迎えの駕籠がつくはずです」
「すると、のらと二人きりでいられるのも今日だけ——」
さびしいような、うれしいような百合姫の顔が、思わず桜色に上気してくる。女になって、男に甘えることを知ってから、いちだんとなま

めかしさを増してきた百合姫なのだ。

——しかし、明日、江戸から迎えがこぬと、やっかいなことになる。

のら太郎にはその心配があった。左馬之介はまだうっかりしているようだが、あの翌朝ここから江戸へ使いを出せば、中一日おいて三日めには迎えの者がここへ着く。その計算に思いつくと、かならずもう一度討っ手が戸塚の宿中の旅籠を洗い出すおそれがあるのだ。

が、幸いにも、江戸からの迎えは、予定どおり翌朝五ツ半（九時）ごろ、愛宕下の用人桜井平左衛門を先頭にして戸塚へ到着してくれた。

最後の襲撃

三千石の旗本の格式を備えた行列がいきなり二丁の駕籠を門口へ横着けにしたので、平戸屋ではなんの間違いだろうと、みんな青くなった。そして、それが奥の六畳にとまっている二人の侍のものだとわかると、平戸屋の亭主は度肝をぬかれた様子で、ただおろおろと口も満足にきけないふうだった。

そのあいだに百合太郎には腰元二人がかしずいて、髪を高島田髷になおし、用意してきた振りそでに着かえて、金糸銀糸で縫いとりのある絢爛たる掻取りを着ると、たちまち高雅な百合姫にかえった。

のら太郎もまた黒羽二重の紋服に仙台平の袴をつけて松平信太郎になる。

「のら、もうのらと呼んではいけませんね。なんと呼べばいいのです」

百合姫がそっと信太郎の耳もとへ聞く。

「いや、やっぱりのらで結構です。そのほうがわしには親しみ深い」

快活な信太郎は平気でそう答えてわらっていた。

「百合ものらにお百合さんと呼ばれるのがいちばんうれしいのです」

「よろしい。では、一生お百合さんと呼ぶことにしよう」

百合姫はにっこりうなずいて、うれしそうにほおをそめていた。腰元たちがさがってしまって、また二人きりの座敷である。

「しかし、お百合さんはやっぱり百合姫さまのほうが美しくてよく似合う」

「そうでしょうか。——のら、今までは乱暴な口ばかりきいて許してください」

百合姫は、しとやかな百合姫でいられることがどんなに幸せなことか、さんざん苦労してきて今はっきりとそれがわかるような気がした。

「いや、わしこそ大切なあずかり物を勝手にわがものにしてしまって、まことに申しわけない」

あまりにも美しい姫君になってしまったので、ついいからかってみたくなる人の悪い信太郎だった。

「そんな、恥ずかしい、百合は——」

さすがに真っ赤になりながらも、

「お百合さん、もうこれが最後だから、もう一度抱いて歩いてあげようか」

と、信太郎が両手を出すと、黙ってうなずいて、いそいそと信太郎の胸の中へ身を投げかけてくる百合姫である。

が、戸塚から江戸までは十里半、駒込の百合姫屋敷まで送っていくには今日中に十二里半は歩かなくてはならないので、そういつまでも二人きりでたわむれをたのしんでいるわけにはいかなかった。

やがて信太郎と百合姫が並んで着座して、手をたたくと、支度ができたとみて、用人平左衛門がうやうやしく座敷へはいってきた。

平左衛門は先代のころから愛宕下の屋敷を一手に切り盛りしている忠義者で、もう六十に近い。

「若も、姫君さまも、お支度はよろしゅうございますかな」

「うむ、こっちはもうよい。旅籠の払いはすませてくれたか」

「十分につかわしましてございます」
「そうか。念のために聞いておきたいが、左馬之介はいまどこに泊まっているかわかっているか」
「高輪の下屋敷へはいって、しきりにこっちの様子をさぐっているようでございまする」
「すると、見張りは街道筋へ出ているわけだな。行列の跡をつけているような様子はなかったか」
いざとなると例によってあくまでも頭の働く信太郎が、百合姫にはとてもたのもしい。
「その心配はないかと存じます。左馬之介の頭の中にはまだ愛宕下は思いついていませんようで、屋敷を見張っていると思われるようなやつもべつに見あたりませんでした」
「そうか。のら太郎というやつは仕官がしたくて命がけになっている浪人者、そう思いこんでいるのかもしれんな」
「おそらくそんなところでございましょう」
「それが、じつはたいへんな浪人者だった。なあ、お百合さん」
わらいながら二人きりに通じる目顔をちらっと百合姫に向けると、
「若、御本家の姫君にお百合さんは失礼でございますぞ」
と、平左衛門が律儀にたしなめる。
「平左、よろしいのです。百合はいずれ愛宕下へまいる者なのですから」
軽くそんなことが口に出せるのも、もう信太郎のものになっている百合姫だからである。
「それはそれは。――そうなっていただければ愛宕下も万々歳で、平左も一安心いたします」
平左衛門はあくまでもまじめである。
「よし、いまにきっと平左を安心させてつかわす。しかし、この道中は駒込へ着くまで安心はできぬ。十分注意して、さあ、出発しよう」
信太郎は、さっそうと立ちあがった。
信太郎の駕籠が前で、百合姫の女乗り物がこれにつづき、供侍、腰元、若党、中間など二十人あまりの行列が戸塚の宿を後にしたのは、やがて四ツ（十時）を少しまわった時刻であった。
程ガ谷まで二里九町、ここで中食を取り、川崎の宿まで四里あまり、六郷を渡ったのはもう夕方であった。
川崎から品川へ二里半、その途中で日が暮れだし、高輪の大木戸をはいったのはもう六ツ半（七時）をまわったころである。
このへんは鬼頭左馬之介がはいっている下屋敷の近くだからいちばん危ないと見ていたが、べつに怪しいこともなく通りすぎてしまった。
後は江戸の街つづきになるから、待ち伏せをかけられるような場所はない。
――案ずるより産むがやすいということになるかな。
札ノ辻をすぎるころ、信太郎はほっとしてそんなことを考えていた。
金杉橋から疲れている腰元二人は人をつけて愛宕下の屋敷へかえし、行列はこれから駒込までまだ三里近く進まなければならないのだ。百合姫屋敷へ着くころは、やがて四ツ（十時）すぎになるだろう。
もう月末に近いから、空に春の星はきれいだが、ずっとやみ夜の道である。
日本橋から本郷の追分へ出て、肴町へかかるころ、信太郎はふっと思い出した。
「平左、――平左」
駕籠の中から呼ぶと、
「は」
平左衛門がいそいで駕籠わきへ走り寄ってきた。
「ちょっと行列をとめろ」
「どうなされましたか、若」
急に腹痛でもおこしたかと心配しているようなせきこみ方である。
「心配するな。念のためだから、わしはここから歩いてまいる」

「と申せられますと――」
「ここからは寺町つづきだ、どんなことで敵が待ち伏せをしていないともかぎらぬ。九仞の功を一簣にかくようなことがあっては、なんにもならんからな」
「なるほど、それはそうでございますな」
行列はとまった。
信太郎は駕籠をおりて百合姫の駕籠わきへつき、ふたたび行列が進み出す。
「のら、どうかしたのですか」
声を聞きつけて、百合姫が駕籠の中から聞く。
「いや、お百合さんが寂しいだろうと思って、そばへきてあげたのです」
「でも、顔が見えなければつまりません」
しごく甘い声である。
「辛抱なさい。もう屋敷はすぐそこです」
「ここはどのへんなのです」
「もう吉祥寺が近いでしょう」
「では、百合も歩きます」
「おひきずりで、掻取りを着ていては歩けません。もう百合太郎さんではないんですからな」
「あ、そうでした」
百合姫もはっと気がついたらしい。
「お掻取りをぬいで、おはしょりをしてもいけませんか」
こんどはそんなだだをこねてくる。
「ことによると、ぜひそうしてもらわなくてはならなくなるかもしれませんな」
「どうしてです」
「ここは寺町つづきで、これからだんだん道は寂しくなるばかりです」
「まあ、――敵が出るのですか」
「出ないとは断言できません」
「だから、のらは百合のそばへきてくれたのですか」
「そうです。ころばぬ先のつえということがありますからな」
「のら、百合はおはしょりしてここから歩きます」
百合姫の声が急に勇ましくなってきた。
「まあそうあわてないで、おはしょりの必要があるまでおとなしく駕籠に乗っていることです。無事にすめばこれに越したことはありませんからな」
敵が出るかもしれないという信太郎のこの行動は、疲れている行列の家来たちを緊張させるにも十分役に立った。
供の者は何人かがちょうちんを持ってそれぞれの足元を照らしていくから、道は案外あかるい。
そして、行列はやがてどこかの寺の長い土塀にかかってきた。
はたして、さっと行列の前方へ数人の黒い人影が走り出たと思うと、
「出たあっ」
「くせ者だ」
しんがりのほうからもそういう絶叫がおこって、もう白刃のふれあう不気味な音が夜空にひびきだす。
左馬之介もこれが最後の決戦と覚悟して、十分に待ちかまえていたのだろうから、それははじめから関の声もなにもない、黒いあらしのような、想像していたよりはるかに猛烈な襲撃であった。
「わっ」
六尺は思わず駕籠を投げ出すようにして、ばらばらっと一方へ難を避けてしまう。
「お百合さん、すぐ出るんだ」
「はい」
百合姫が駕籠のとびらをあけて、掻取りをぬぎすてるなり、さっそうと外へおり立つ。
「さあ、これを――」
信太郎は手早く自分の小刀を取ってわたす。
「お百合さんは小太刀の名手だから、これでも十分だろう」
「あの、おはしょりがまにあいませんでしたの」

にっとわらいながら、小刀を取って帯にたばさむ百合姫は、数度白刃の下をくぐりぬけてきているだけに、まったくたのもしい姫君であった。

「者ども、一歩もひくな。松平信太郎ここで見ているぞ」

信太郎が凛然と味方を激励する。

その声を聞きつけたか、ばらばらっと新手が七、八人、まっしぐらにこっちへ白刃をかざして突っこんでくる。

勝閧

のら太郎の松平信太郎は、はじめは絶対に百合姫のそばを離れまいと、その覚悟で敵をむかえた。

が、今夜の敵は人数も相当用意しているらしく、思ったよりはるかに攻撃ぶりが猛烈である。

「お百合さん、ここを動いてはいかんぞ」

「はい」

百合姫が返事をしているまに、七、八人の覆面どもが一隊となって、もうつむじ風のようにこっちへ襲いかかってきたので、

「下郎、推参」

叱咤と同時に、のら太郎は自分からそのつむじ風の中へ抜刀をふるって躍りこんでいった。

乱戦にはもう何度となく経験のあるのら太郎だし、腕と勇気にかけてはけっして人後におちない男一匹だから、

「えいっ、——とう」

右に払って左へかえすあざやかな太刀さばきで、面もふらず前へ前へと切りまくっていく。

——のらはほんとうに強い。

百合太郎は心から感心しながらも、さすがに女心で、どうかけがのないようにと、一方では心配でたまらない。

「えいっ」

「おうっ」

「うぬっ」

そのころはもう前にもうしろにも暗い星空の下で悽惨必死のきりあいが幾組にも分かれて、生死をかけた激しい攻防戦が展開されていた。

人が人の命を奪う、世の中にこんな悲惨なことはない。しかも、きる者もきられる者も当人同士にはなんの恨みも遺恨もないのだ。事はただ、鬼頭左馬之介の醜い野心からおこっているのである。

——憎いやつ。

百合姫は左馬之介に対して許しがたい怒りを新たにせずにはいられない。

その百合姫の目の前へばらばらっと走り寄ってきた者がある。屈強な覆面侍二人に左右をまもられた左馬之介の嫡子鬼頭兵馬である。

「おお、百合姫」

夜目にも白々と鴉籠わきに立った高島田髷振りそで姿の、高雅なうちにも凛とした百合姫の美しさは、こんな姿をはじめて見る兵馬の目を奪ったに違いない。一瞬啞然として、まじまじと顔を見ている。

「兵馬、この襲撃はそなたの指図ですか」

詰問するように百合姫が声をかけた。

「そうです。わしの指図です」

はっと気がついたように、兵馬が昂然と答える。

「すぐにやめさせなさい。無益に血を流して、家来たちがかわいそうではありませんか」

「百合姫がわしといっしょに高輪へまいることを約束してくれれば、むろんすぐに襲撃はやめさせます」

「百合がそなたと高輪へなにしに行くのです」

「百合姫は父左馬之介から志摩守どのに願い出て、この兵馬が妻に申しうけることになっているのです」

ずぶとい左馬之介の子だけあって、そんな臆面もないことを平気で口にする兵馬である。

「お黙りなさい。百合は四年前から愛宕下の松平信太郎のもとへまいることにきまっているも

のです。そなたのところへなどはまいりません」
「四年前の約束など、気にすることはないでしょう。愛宕下のほうへは父からことわってもらえばなんでもない話だ」
「約束を平気で破ったり、主君を困らせたり、はては主家まで横領しようとする悪い家風は、鬼頭家代々のものとみえますね」
百合姫が負けずに手きびしく面罵する。
「許さん――」
わがまま育ちの兵馬は、かっと顔色を変えたが、事実この数年来そういう横暴なことをやってきているのだから、返す言葉がない。
「おい、かまわぬ。百合姫をたたき伏せて、高輪へ引っ立てろ」
ついにおおかみの本性を露骨にして、牙をむいてきた。
「はっ」
左右にひかえていた覆面二人が同時に抜刀して、
「ごめん」
峰打ちにたたき伏せようと、たっと踏んごんでくる。
百合姫の百合太郎が相当の使い手であることは、戸塚の宿のきりこみでみんなよく知っているから、この二人の覆面はいずれも腕前すぐれた者を選んできたに違いない。思いきって鋭い必死の太刀さばきだったが、百合姫の小太刀はお玉ガ池の千葉周作が天稟と絶賛したほどで、敵が考えていたよりはるかに敏捷であった。
「無礼者っ」
一喝したのが気合いがわりで、あでやかな振りそでが夜風にさっと舞ったと見るまに、
「わあっ」
「うーっ」
二人とも左右に見事籠手を払われ、どっとその場へしりもちをついていた。峰打ちだから手首こそきりおとされずにすんだが、骨にひびくらいははいったに違いない。二人とも真剣をぼ

ろりとおとしている。
「手向かいいたすと、こんどはきる」
その二人の前へ小刀を片手上段に振りかぶってさっそうと立った百合姫の構えには、みじんのすきもない。うっかり立てば、こんどこそほんとうに一刀両断にされそうな気魄だ。
二人の覆面はわれにもなく夢中で、いざりのように尻で後じさりをしていた。
「兵馬、くるか」
百合姫の目がきっと兵馬に向いて、じりじりと間合いを詰めてきた。
「うぬっ」
とっさのことで兵馬はまだ刀を抜いていない。抜くまがなかったのだ。今うっかり抜けばきられるばかりなので、柄に手をかけたままどうすることもできず、これも後へさがるばかりだ。
「憎いやつ、刀を抜け」
百合姫が容赦なく追い詰めていく。きろうと思えばとっくにきっているやつだが、百合姫はもう紅顔夜叉の百合太郎ではない。松平信太郎の妻だという気持ちがあるから、女だてらに人はきりたくなかった。兵馬の降参するのを待っているのだ。
「うぬっ」
手も足も出ない兵馬は真っ青になって、たかが女一人にと歯がみをしている。
が、とてもかなわぬとわかると、急に死の恐怖にかり立てられてきたのだろう。
「だれか、だれかきてくれえ」
われにもなく大声を立てながらばっと飛びのいて、一目散に逃げ出した。完全な男の敗北である。
「どうした、お百合さん」
そこへ乱髪になったのら太郎が勇ましく駆けもどってきた。
「いま兵馬が逃げましたの」
「そうか。もう一息だな」

まだ乱戦はつづいているのだ。味方はよく戦っているが、残念ながら小勢である。

「よし、もう一戦――」

あなたは一人で大丈夫かというように百合姫の顔を見たとき、

ぴ、ぴーっ。ぴ、ぴーっ。

と、どこからともなく呼び子の笛がきこえてきた。

それが敵の引きあげの合図だったらしい。覆面どもはいっせいにおもいおもいのほうへばらばらっと逃げだしはじめた。

「わあっ」

思わず味方は関の声をあげながら、だれしも主人の身がいちばん気になるとみえて、

「殿、御無事でございましたか」

「姫君は――」

と、期せずしてみんな主人のまわりへ集まってくる。

「わしは無事だ。姫君も無事だぞ。味方に死者はないか」

のら太郎が気ぜわしく聞く。

「殿、死者は一人もないようでござります」

老用人桜井平左衛門がこれも勇ましい乱髪姿で駆けもどってきた。

「平左、あっぱれだぞ。けがはないか」

「なんの、かすり傷少々ばかり。大事ござりませぬ。それより、殿、一刻も早く姫君をお屋敷へ。後は平左が手負いをまとめてもどります」

さすがに老用人はよく気がつく。

「そうか。お百合さん、かまわず駕籠へ」

ぐずぐずしていて、こんど敵が盛りかえしてくると、こっちは手負いがあるから苦戦はまぬがれない。後始末は平左衛門にまかせて、のら太郎は百合姫を駕籠にのせ、無事な家来たちだけを供に加えて、もうそうほど遠からぬ駒込の百合姫屋敷へいそいだ。

幸せな顔

吉田屋がお兼をつれて今夜も百合姫屋敷へ立ちまわってみたのは、やがて九ツ（十二時）に近い時刻であった。今日で二日二晩、昼も夜もこのあたりへきてみるのだが、いつも怪しい侍がうろうろしていて、うっかり屋敷へ近づけない。今夜は思いきってこんなにおそくやってきてみたのだ。

「お兼、今夜は珍しくだれもうろついていないようだな」

「でも、油断はできないよ、どこにかくれているかわかりゃしないもの」

「ところがよう、おれの勘でいくと、今夜は少しも人っ気を感じねえんだ。ことによると四ツ（十時）すぎから見張りも帰ってしまうんじゃないかな。まさか夜おそくはお屋敷へ出入りする者もなかろうからな」

「そうだねえ。そういえば、おまえさん、こんなにおそく、よしんばお屋敷の門の前まで行けたとしても、門番があたしたちを御用人さまに会わせてくれるかしら」

お兼はそれも心配になってくる。

「なあに、だから今夜はおまえをわざわざ引っぱり出してきたんだ。まさか夫婦づれの怪しいやつなんてのはないから、話の持ちかけようで、門番だってきっと取り次いでくれらあね」

「そうかしら」

話しながら来てみると、意外にもその表門が八文字にひらいていて、ちょうちんを持った侍、足軽たちが四、五人、厳重にそこをかためている。

「はあてな、どうしたんだろう」

「こんな夜更けにおかしいねえ」

二人がちょっとあっけに取られて前に立っていると、

「おい、何者だ、おまえたちは」

いきなり門の中から足軽が三人、六尺棒を持

って飛び出してきた。
「へえ、あやしい者じゃありません。てまえは吉田屋次郎蔵という商人で、これは女房のお兼と申しますが、御当家はたしか百合姫さまのお屋敷でございますね」
「そうだ」
「御当家に御用人さまで落合久左衛門さまとおっしゃるお方がおいでございましょう」
「よくそんなことまで知っているなあ。ちょっとこっちへはいれ」
足軽たちはなにか目くばせしながらぐるりとまわりを取りかこんでくる。
「なんだかへんでございますねえ」
吉田屋はわざとびっくりした顔をしてみせる。
「黙れっ、へんなのはそっちだ。おまえたち高輪の間者だろう」
「御冗談で――。夫婦づれの間者なんて、だれが考えたっておかしいじゃありませんか。私どもは落合さまに用があってまいりましたんで、どうか乱暴をなさらないでお取り次ぎを願います」
「いま取り次いでおる。黙って待っておれ」
なんとなく足軽たちの顔は殺気立っているようだ。
やがて、玄関のほうから若侍が駆けもどってきて、
「落合さまが会うそうだ。こっちへこい」
と、これも用心深い目の色である。
どう用心されたところで、こっちは用人に会って大切な品さえ渡せば用がすむのだから、吉田屋もお兼もその点は平気だ。
内玄関へ案内されると、そこに腰元が二人ぼんぼりを持って待っていた。黙っておじぎをする様子が、こんどはばかにていねいである。
「お兼、なんだかきつねにばかされているみたいだな」
そこはずぶとい吉田屋が小声でそんな冗談口

をきいて、
「おまえさん――」
と、お兼にたしなめられる。
先に立って長い廊下を奥へ進んでいく腰元がくすりとわらった。
その廊下を二つ三つまがっていくと、障子に灯のあかるくともっている座敷の前へ出た。
「お連れいたしましてございます」
腰元がそこへひざまずいて中へ取り次ぐので、来たなと思ったから吉田屋もお兼もおなじようにその畳廊下へひざまずく。二人の腰元が左右へ障子をすっと引きあけてくれた。
「あっ」
正面の褥に行儀よくすわっているのは、掻取り姿の気品高いびっくりするような美しい姫君である。
「まあ、百合太郎、――いいえ、百合姫さま」
それはたしかに百合太郎の百合姫である。
「へえ、こちらはのらだんなでござんすね」
吉田屋もあきれて口をあいたのは、少しさがった右手にのら太郎が立派な羽織袴ですわっているからだ。
「お兼も吉田屋も、遠慮なくずっとおはいりなさい」
百合姫がにっこりとわらいながらさわやかに声をかけてきた。
「さあ、二人ともずっと進め」
のら太郎もいっしょになってすすめる。
「では、ごめんこうむりまして」
吉田屋はお兼に目くばせして座敷へはいり、
「驚きましたなあ。まさかお二人さまがここへ帰っていられるとは、夢にも考えていませんでした」
と、正直にいう。
「じつはな、吉田屋、わしは百合姫さまのお供をして、今夜たったいまこの屋敷へ着いたところなのだ」
「へえ、たったいまね。なるほど、それで御門

があいているんですね」
「いや、門のあいているのはそういうわけではない。行列がさっき寺町へかかったとき、兵馬が一味の者をつれて襲撃してきた。幸い死んだ者はなかったが、重傷の者が三人ほど出た。いま家来の者がそのけが人を迎えにまいっているので、われわれもこうしてもどるのを待ちうけているのだ」
「なるほど、それでわかりました、あっしどもは門のところで足軽さんたちに、高輪の間者だろうといわれましてね、おかしなことをいうとふしぎに思っていましたんで」
「お兼、吉田屋、このたびはいろいろ世話をかけました。百合からも厚く礼を申します」
百合姫がつと褥をはずして、あらためて丁重に会釈をする。
「あ、お姫さま、それはいけません。どうぞお席へおなおりいただきます。それではこっちがあいさつに困りますんで。——なあ、兼」
「そのとおりでございます。困っちまいます、あたしたち」
お兼も当惑してもじもじしているところを見ると、御守殿という肩書があって、もとは大名の奥へ奉公したことがあるというのは、どうやら怪しいものになってきた。
「お百合さん、もういい、席へおなおりなさい。——お兼も吉田屋も、今夜は遠慮なく道中のときとおなじ気持ちで話すがよい。おたがいにこんどは命がけの旅だったからな」
のら太郎は感慨深げにとりなす。
「だんな、じゃ御免をこうむりまして、大切なお品、さっそくそちらへおもどしいたします。あっしはまだ中も見ちゃいませんが、どうぞお改めなすって」
吉田屋がふところから短刀のはいった錦の袋を取り出してのら太郎に渡す。
「お、持参してくれたか」
のら太郎はうけ取って、ちょっと押しいただき、袋のひもをといて、懐紙を口にくわえ、作法どおり菊一文字の中身を抜いて改める。
「百合はまだそれを拝見したことがありませんが、菊一文字に相違ありませんか」
百合姫がそばからながめながら聞く。
さすがに左馬之介もこれだけは常に手入れを怠らなかったとみえて、刀身に一点の曇りもないようだ。
のら太郎は改めおわって、短刀を鞘におさめ、もとのとおり錦の袋にしまって、
「たしかに間違いございません。明日にも姫君からお兄上のお手もとへさしあげるがよろしい」
と、うやうやしく百合姫のほうへさし出す。
「吉田屋、ほんとうに御苦労でした」
百合姫は袋ごと押しいただいて、帯の間へ大切そうにさしこむ。
「ようござんしたね、お姫さま」
「ありがとう、お兼」
この短刀一本のために、何度か死ぬほどの苦労をかさねてきているのだから、百合姫の目にふっと涙さえひかって、
「みんなお兼や吉田屋のおかげです。そなたたちのことは一生忘れません」
と、思わずそでで口を目にあてる。
「どういたしまして——。けれど、お姫さま、おかげといえばのらだんながいちばん働いたんですからね。そいつをお忘れになっちゃいけません」
吉田屋が正直に注意する。
「忘れはしませんけれど、のらはよいのです」
百合姫がちらっとのら太郎のほうを見てほおをそめたようだ。
「へえ、のらはよいのですって、それはまたどういうわけでございます」
「わしから話そう。わしは姫君の御一門で、愛宕下に屋敷がある松平信太郎という旗本でな、四年前からお百合さんをお嫁にもらうことにな

っていたのだ。もっとも、顔をあわせたのはこんどの旅先ではじめてだったが——だから、のらはよいのですよいのだ」

のら太郎がわらいながら説明する。

「なるほど。つまり、お姫さまはのらだんなとこんど夫婦になる、だから忘れようにも一生忘れられないってことになるんでござんすね」

「うむ、吉田屋とお兼のようにな」

「あれえ、こいつはとんだしっぺがえしだ。どうもだんなは頭がよすぎていけやせんや」

吉田屋は頭をかきながら、

「しかしねえ、だんな、お姫さまもお聞きになってください。こいつはのろけなんかじゃございません。あの薩埵峠の谷底で、あっしはこのお兼を助けました。自分でいっちゃなんですが、ほんとうに死ぬほど汗をかきました。人一人をこうして助けたと思うと、急に命の大切なことがわかりましてね、こいつは改心しなくちゃいけない、残る命の日は大切にしようと気がつきました。お兼もおなじ心でしてね、よし、それならだんながたと生死を共にしてみよう、だんながたの仕事がうまくいくようなら、こっちにも命運があるんだから、一生懸命に働いてみて、その上で、命があったら夫婦になろうと約束したんです。——ありがとうござんす。あっしたちはだんながたのおかげでこうして晴れて夫婦になれました。あっしたちこそ、この御恩は一生忘れやしません」

と、しみじみ述懐して、心から両手をつくのである。

「あたし、幸せ者です、お姫さま」

お兼も本当にうれしそうである。

「なあに、幸せ者はあっしのほうで、これは日本一のいい女房でございます」

「およし、おまえさん。恥ずかしいじゃないか」

ここにもまた幸せな夫婦が一対できたのである。

「めでたいな、吉田屋。これからは愛宕下の屋敷へもときどきたずねてくれ。そのときはわれわれもまた日本一の幸せ者になって、長くまじわりを結ぼうぞ」

のら太郎もまた百合姫と幸せな顔を見あわせるのである。

「姫君さま、ただ今手負いが玄関先までもどりましてございます」

廊下へきて老用人があわただしく告げた。これが落合久左衛門という人であろう。

「のら、出迎えてやりましょう」

百合姫がすらりと立ちあがる。

「両人とも、しばらく待っていてくれ。今夜はとっくり話そう」

そういいおいて、のら太郎が百合姫の後につづく。

廊下の足音がだんだん遠くなって、後に残ったのは吉田屋とお兼二人きりだった。

「ねえ、おまえさん、お百合さんはもうのらだんなのお嫁ときまっても、ここでまだお姫さまの下座につかなくてはならないのかねえ」

「そうらしいなあ。お姫さまはあいかわらず、のら、のらとだんなを呼びすてにしているからなあ」

「よかったねえ、あたしたち大名の家へ生まれてこなくて——」

お兼はまたしても幸せな顔を吉田屋と見あわせる。

まもなく九ツ（十二時）の鐘が鳴る時刻だろう。幸せな夜は、こうして幸せの朝をむかえようとしているのである。

●江戸おもしろ事典

実説・お家騒動

お家騒動の「お家」とは何か

お家騒動ということばからわれわれがすぐ連想するのは、忠義の侍とお家に仇をなす悪党一味との争いである。

その争いの過程に不義密通などの色模様があり、毒殺や拷問などのスリルが何場面かあって、最後に悪党一味がやられ、めでたく幕となる。おそらく、こんな世界であるに違いない。

たしかに、歌舞伎などで上演されるお家騒動ものはほとんどこのパターンで、善玉、悪玉の対立というきわめて単純なわりきり方をしている。いったい江戸時代のお家騒動というものは、善玉悪玉でわりきれるような単純なものだったのだろうか。

その疑問を個々の事件の実例に即して解きほぐしていく前に、お家騒動の「お家」とはそもそも何か、ということを少しはっきりさせておく必要がある。

お家騒動ということばが現れたのはおそらく江戸時代で、学者か文人がつくったものだろうが、だれがはじめに使いだしたのかは分からない。

常識的に考えれば「お家」ということばから想像できるとおり、それは長屋住まいの庶民には関係のない大きな集団的存在――つまり、天皇家・徳川家、そして大名・旗本・豪商などの家ということになるわけだが、実際はもっと狭い使われ方をしているようだ。

時代ものでよく使われることばに「お家の一大事」とか「お家ご安泰」というのがあるが、それは普通、大名家に対して使われている。これと同じで、お家騒動の「お家」も一般に、江戸期における大名家を指す、と解釈するのが妥当である。

この辺の事情について、お家騒動研究の泰斗として知られる三田村鳶魚は「なんといっても天下の諸侯の家に起こった事件だから、世間が目をむくのも当然。自然、お家騒動といえば、お大名にかぎったようになってしまった」という意味のことをいっている。

お家騒動の「騒動」とは何か

結論からいってしまえば「騒動」の中身は利害相反する勢力の主導権の奪い合いである。

大名家の主人――つまり、藩主がしっかりした人物であり、彼の世継ぎもきちんと決まっており、彼らをとりまく家臣団も賢明で忠実な人物ばかりというような状況であれば、それこそ「お家ご安泰」なのだが、そのような状況はむしろまれで、だからこそ江戸時代を通じて大なり小なり「騒動」の起こらなかった藩はなかった、といえるのだ。

藩主にはその血筋の「御一門」という一族があり、政務担当の家老グループが直属しており、その外に各種奉行職をうけもつ実務家の一団がある。さらに、これらの実力者とは別に、陰の実力者ともいうべき女性の一団（正妻、妾および彼女らに仕える女役人たち）が密接につながっている。

このように、ひとりの主人を何十人、何百人という、それぞれ一癖も二癖もある男女がとりまいているのだから、権力抗争が起こらぬのがむしろ不思議なのだ。ことに藩主が幼弱であったり、政治能力を欠いた場合に、家中対立の危機が表面化し、相争う勢力がお互いに主導権を握ろうとして騒動に発展する。

さて、『加賀騒動』の著者若林喜三郎は、お家騒動には江戸前期と後期とで、それぞれ違った特色を備えているといっている。

〈前期の特色〉

一、藩主の領主権確立の契機となったとみられるものが多いこと。

黒田騒動の栗山大膳や会津騒動の堀主水のように、藩主と強豪な家臣とが対立したもの。「伽羅先代萩」で有名な伊達騒動もやや変型だがこの系列に入る。

二、幕府の大名統制に関連しているものが多いこと（幕府権力の介入）。

肥後熊本藩の牛方・馬方騒動。重臣加藤美作（牛方）と加藤右馬允（馬方）とがそれぞれ党をつくって争ったもの。藩主忠広は後に改易の憂き目に遭う。このように、騒動が幕府の裁断に持ち込まれた結果、取りつぶされたり、あるいは減知・転封されたりした。

三、幕府の政情が反映していること。

前記の伊達騒動は、時の大老酒井忠清の威力で解決したが、重臣間の抗争で事件となった越後騒動は、その酒井が失脚したために、重臣の処罰だけにとどまらず、一藩取りつぶしの悲劇を招いた。

〈後期の特色〉

一、藩財政の立て直しに起因するものが多いこと。

黒田騒動、伊達騒動とともに三大騒動の一つに数えられる加賀騒動の主役大槻伝蔵は、家中きっての財政実務家だったが、彼の行う改革がことごとく保守派の反目を買い、騒動の原因となった。

二、閨房の女たちの隠微な抗争や陰謀が前面に押し出されてくるということ。

もっとも陰惨なのは薩摩藩のお由羅騒動だ。中心人物は藩主島津斉興の妾お由羅の方。わが子久光を世継ぎにしようと図ったことから反対派との抗争がはじまり、多数の犠牲者を出した。

三、天保期（一八三〇年代）以後、幕藩体制

崩壊の危機に直面し、それへの対応策との関連を深めたものが出てきたこと。

改革派と保守派、勤王派と俗論派との対立抗争で、ほとんどの藩が時代の激しい波をかぶり、血で血を洗う闘争を行った。水戸藩の天狗党と諸生派との争いはその代表的なものだ。

このように要約してしまうと、お家騒動もはなはだ無味乾燥なものになってしまうが、事件の一つ一つに当たってみると、人間の利害・打算・欲望などが渦巻き、とても善悪の道徳律だけではわりきれない人間葛藤の姿が透けてみえ、深くさぐればさぐるほど興味は増す。

したがって、古くは森鷗外の『栗山大膳』『黒田騒動』から、最近では山本周五郎の『樅ノ木は残った』『伊達騒動』に至るまで、お家騒動ものは常に作家が好んで手を染める題材となっているのである。

考えようによれば、大名たちがてんでに血道をあげて内輪もめばかりしている間に、庶民たちが力をつけて、ついに彼らの天下をひっくり返したのが明治維新であった、といえなくもない。

栗山大膳は忠臣か逆臣か（黒田騒動）

寛永九年（一六三二）といえば三代将軍家光の時代。ようやく徳川政権の基礎が固まったころだ。

折も折、九州の雄藩黒田官兵衛を祖とする福岡藩の家老栗山大膳から「藩主黒田忠之に謀反の疑いあり」という訴状が幕府あてに出された。家老が主人の藩主を訴えたのである。これで大騒ぎにならなかったらどうかしている。

家光はじきじき調査にのりだしたが、どうも事件の真相がつかめない。

栗山父子は黒田家中にあっては重臣中の重臣で、典型的な剛直の黒田武士だ。それに反して、忠之は坊ちゃん育ちの三代目、文武をおろそか

にし、男色、浪費などの乱行が年とともに目立つようになる。側近の倉八十太夫が彼をおだてて、ますますばか殿さまにしてしまった。

忠之を直諫するのはただひとり大膳のみ。ほかの重臣連中は忠之に強要されると、「我々は決して君に二心を持つようなことは致しません。万一何事かあった場合には必ず倉八十太夫に連絡をとるように致します」(檜垣元吉『福岡藩』)という一札を入れる腰抜けぶりであった。大膳は将来を憂えて倉八を除こうとしたが、逆に忠之の逆鱗に触れた。忠之は倉八に命じて鉄砲隊をくりだし、大膳の屋敷を包囲、攻撃しようとしたのである。そこで、大膳も腹をきめ、九州総目付の竹中重次の手を通じて幕府へ訴え出た、という次第だった。

まさかと思った忠之は、幕府から呼び出しをうけて顔色を変えた。ことが幕府へ知れた以上、いくら自分の家臣といっても勝手に殺すことはできない。ぎりぎりと歯をかみ鳴らしながら江戸へ出発した。同じく大膳も倉八も、その他の重臣連もそれぞれ出府して裁判を受けることになる。

結果は大膳のいうような謀反の事実はないとして、一応、忠之の勝ちとなった。そして、大膳は奥州盛岡へ配流、倉八もまた高野山に追放され、家臣だけが処罰されるかたちで決着がついたのである。

当時、忠之の悪評は相当世間に広まっており、早晩幕府の手にかかってお家取りつぶしの目に遭う運命だったのを、わざと大膳が事件をひき起こし、崩壊を未然に防いだという見方がある。

一方、大膳は主人を主人とも思わず、お家取りつぶしを覚悟の上でうそをデッチあげ、幕府に直訴したのだという見方もある。前者だと彼は忠臣の顔となり、後者だと逆臣の顔になる。はたしてどちらが実像に近いのか。

三宅雪嶺によると、「自分を忠とし、他を奸とし、最後の勝利を得たものが忠と呼ばれる」のがお家騒動の特徴だという。つまり、勝てば官軍で、官軍側の資料しか残らないというのが歴史の常なのだ。この騒動の場合も例外ではなく、大膳側に有利な資料というものはない。しかし、さまざまな状況から判断して、檜垣元吉のいうとおり、「大膳は才能があって自信があり、生まれながら屈辱に甘んじ得ない自尊心を持ちつづけていた人物だから、蛮勇をふるって禍根を絶とうと考えたのではあるまいか」という評価は下せそうだ。少なくとも、大膳は逆臣ではなかった、といえるのである。

喧嘩両成敗の幕府のねらいは(会津騒動)

寛永十六年(一六三九)というから、黒田騒動から七年ほどたったころ、会津に一藩をゆるがすほどの大騒動が起こった。

家老の堀主水が、一族郎党三百余人をひきつれて、突如として脱藩したのである。一人や二人の脱藩というのなら驚くには当たらないが、なにしろ百を超す人数が槍・鉄砲などでものものしく武装したまま城下を立ち退いたのだからコトは大きい。

主水は街道口にある橋を焼き払い、城に向けて発砲すると、戦闘態勢を整えてそのまま江戸に向かった。ちょうど藩主の加藤明成は在府中で留守。一門の加藤監物らが集まって対策を協議している間に、主水たちは遠く逃れ去る。

急報に接した加藤明成はいそいで帰藩、あらためて探索をはじめた。一方、いったん鎌倉に入った主水一族は、治外法権の高野山にのぼり、一応彼らの追跡を絶ちきった。

主水は戦場往来の剛勇の士だ。それに比べて明成は苦労知らずの二代目。勝手に城を改築したり、ろくに調べもせずにキリシタンの嫌疑で家来を拷問にかけて死なせたり、庶民からとりたてた金銀をすべて一歩金に鋳造してみたり、藩主としてとかく気ままな暴状が多かった。

主水がたびたび直諫したが聞き入れないどこ

ろか、戦功により藩祖加藤嘉明から受けた金の采配までとりあげてしまう。戦国武士の主水にとって、これは堪えがたい侮辱だ。もはや主従の縁もこれまでと腹をきめた主水は、幕府にあてて七カ条にわたる明成の非難状を出し、処罰を訴えた上で脱藩したのである。

一方、明成は相手が高野山に入ってしまったので手も足も出ない。といって、このままでは到底腹の虫がおさまらぬ。それならば最後の手段というわけで、幕府に対し主水の引き渡し方を願い出た。

「もし主水めをお引き渡しくだされば、会津四十万石を棒にふっても結構でござる！」

こんな大見得を切った。幕府としては願ってもないこと。四十万石はタダで懐に入るし、幕藩体制の根幹である「主従関係」を明確にできる。「主従関係は、たとい主が悪くても諫言これをつくし、なおきかざる時は切腹してでも諫言すべきが臣たるものの義である」（庄司吉之助『会津藩』）というタテの掟だ。これをしっかり確立しないと、幕府そのものがつぶれる。結果は、主水が明成の手により殺され、その代わり彼も四十万石を失った。

原田甲斐は陰謀家だったか（伊達騒動）

〽あと見送りて政岡が、まさなきことも身にかかる。とがは晴れても晴れやらぬ、養い君の行く末を、だれに問うべきようもなく心一つの憂き思い……

ご存じ「伽羅先代萩」御殿の場の幕開きである。ここで忠義の女政岡と二人の子供、鶴千代・千松とのやりとりが観客の涙をしぼるわけで、伊達騒動を扱ったこの芝居の一番の見せ場となっている。

奥州の太守伊達義綱は、在府中に吉原の遊女高尾にうつつをぬかし、政治をかえりみない。奸臣仁木弾正（原田甲斐のモデル）は彼を無理に隠居させ、幼君鶴千代を立ててお家横領をたくらむ。やがて鶴千代を毒殺しようとするが、老女政岡がこれを救い、事件は幕府にまで持ち込まれる。裁判の結果、弾正は敗れ、忠臣派の伊達外記を刺して自殺する、というのがこの芝居のあらすじである。

では真相はどうか。騒動の起きたのは万治三年（一六六〇）、四代家綱の時代。芝居に出てくる伊達義綱のモデルは綱宗。たしかに放蕩者で酒と女にうつつをぬかしたため、幕命により隠居。わずか二歳の亀千代（鶴千代のモデル、後の綱村）が襲封する。ここで登場する二人の後見役が伊達兵部と田村宗良で、兵部は政宗の子供だけあって知謀にたけ政治力も抜群。たちまち宗良を圧倒して藩政を一手に牛耳るわけだが、この兵部の片腕となったのが家老の原田甲斐だった。

両派の対立抗争は年とともに激化し、宗良派が幼君毒殺の陰謀ありと兵部を非難すれば、兵部派は反対党の一人を斬首刑にしたりして弾圧。その間にまた兵部の暗殺未遂事件が起きるといった具合いである。

事件は結局のところ、宗良派の一人である伊達宗重の手により幕府に提訴され、大老酒井忠清の屋敷で審問がはじまったが、状況はどうやら兵部派に不利なもようで、敗訴の結果を読んだものか、原田甲斐が突如として裁判相手の宗重に斬りかかり、これを殺害してしまう。しかし、甲斐もまた忠清の家来に斬られて絶命。ほかに数人が死亡している。

その結果、兵部は土佐藩にお預け、宗良は閉門。対立した両派はこれで没落した。甲斐がなぜ一命を捨ててまでこの非常手段に出たのかは永遠の謎だが、少なくとも芝居などで描かれるお家横領の大悪人などではなく、文字どおり兵部の手足となって働いた忠実な実務家肌の人間だったようだ。

「伊達騒動を招いた要因はいろいろ考えられるが、藩主幼弱による藩主権力の弱体化が直接の

契機となり、それに乗じて一門の権力争いが激化し、その争いに勝った兵部・甲斐ラインの恐怖政治は、一門と譜代の合作による藩政改革であり、強力な経済統制によって藩財政を安定させ、藩主権力の集中・強化をはかろうとする進歩的な政治姿勢の反映とみるべきであろう。こうなると藩主に対して、真忠は兵部・甲斐グループか、宗良・宗重グループか、おのずから明らかになろう」(北島正元『大名家の騒動とは何か』)。つまり、原田甲斐は政治を前向きに進めた忠臣であった、という見方が成り立つのである。ちなみに、芝居での重要人物である政岡は実在しない。

小栗美作に横領の意志はあったか(越後騒動)

延宝七年(一六七九)、五代綱吉時代に起こったこの事件は、いわゆる「お為方」のボス永見大蔵が「逆意方」の小栗美作を、お家横領のたくらみありとして騒ぎたて、幕府の手によって裁断されたお家騒動である。

時代は海陸交通網の整備発達による商工業の飛躍的発展期。紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門、河村瑞賢らの実業家が続々として輩出した時期でもあった。武士にしても発想の転換が要求され、経営才腕のない者は要職に就けなくなった。

越後高田藩の家老小栗美作は、この時代にぴったりの人物で経済的手腕にすぐれ、家柄もよく、その上に美男ときている。男ざかりの彼はつぎつぎプロジェクトを組んで、実利的な事業を進めていく。城下町の整備・灌漑用水の建設・港湾の改良・銀山の発掘・開墾事業・新種作物の栽培増産等々、しかも江戸から実業家の河村瑞賢をわざわざ呼んだりして、その指導を受けている。

藩主松平光長は、彼のおかげですこぶる人気がよく、町人たちは「越後中将さまさま」と手を合わせて喜んでいた。あまり人気がいいと、

情けないことにこれを嫉妬して、足をひっぱる連中が出てくるのが世の常だ。

藩主光長の異母弟永見大蔵は、頭にカビのはえた重臣荻田主馬・岡島壱岐らとはかり、「小栗美作は、わが息子掃部大六を養子にして、お家横領をたくらんでいる」と攻撃した。

美作の妻おかんは光長の妹だから、息子大六は光長の甥になる。跡を継がせても決して不自然ではない。そんなところからあらぬ噂をたてられ、お家の行く末を心配する「忠臣」どもが結束して、美作退治にのりだしたのである。

美作には独断専行の弊はあったが、人事なども実力主義で、私利私欲には走らなかった。むろん、息子大六を藩主になどと策謀した形跡も証拠もない。

幕府の決裁ははじめ、潔白の美作側の勝訴となったが、のち再審が行われ、一転して美作は切腹、永見・荻田・岡島らは流刑、高田藩はお取りつぶし。光長も家臣の統率力なしとされ、伊予松山に預けられた。

藩のために全力をあげて尽くした美作こそ、もっとも悲劇的な人物であった。要するに、藩主の光長が「阿呆である上にほとんど江戸住まいして統制を放棄していたところに原因がある」と、海音寺潮五郎は『列藩騒動録』の中でいっている。

毒を仕掛けた犯人は大槻伝蔵か(加賀騒動)

この事件は延享年間(一七四四―一七四七)というから、九代家重の時代に起こった騒動である。

明治になってから、河竹黙阿弥がこの騒動をもとにして「鏡山錦楓葉」という芝居を書いているが、美男美女の登場・密通・藩主の毒殺・蛇責めの拷問等々、大向こうをうならせる材料がたっぷりそろっており、伊達騒動と並んで騒動もの中の白眉といっていいだろう。

加賀百万石の六代藩主吉徳の近習大槻伝蔵は

足軽出身のお居間坊主。利発で美男だからたちまち吉徳に気に入られ、とんとん拍子に出世をとげ、藩政を牛耳るようになる。おごりたかぶった伝蔵は、吉徳の妾真如院と密通し、生まれた子供を世継ぎにすべく策謀をめぐらす。チャンスを待って吉徳とその子宗辰を暗殺、さらにその弟重熙を毒殺せんとするが失敗。奥女中浅尾の自白、証拠の恋文の発見等々から伝蔵一味の罪状があばかれ、ついに逮捕。伝蔵は流刑中に自殺、真如院は蛇責めの刑にあって殺された。「忠臣」前田直躬の苦心は、かくしてやっと報われる。——以上が、芝居や小説などで流布された俗説加賀騒動である。

事実はまるで違う。伝蔵の異例の出世は、彼の卓抜な財政的手腕がよく藩経済を立て直したからで、『加賀騒動』の著者若林喜三郎によると、当時、加賀藩の台所は火の車で、どうしても銀八千貫を都合しなければならないことになって、重臣前田直躬が金策に奔走したが工作はすべて完全に失敗。ところが、大槻伝蔵は五千貫を都合した上、借金分をすべてそれで済ませたという。つまり、三千貫を浮かせたわけだ。そのほか冗費の節減・税収の増加・河川工事など、その働きぶりは目ざましいばかり。無能の重臣連が嫉妬するのも無理はない。

そうこうするうちに吉徳が病死し、つづいて宗辰も病死、弟重熙が跡を継いだ。ところが三年後に、江戸藩邸において突如、奇怪な置毒事件が起きる。重熙の母浄珠院の居間の茶釜に毒を投じた者がいた。幸い被害者はなかったが、前田一派が伝蔵のしわざだと騒ぎだした。これに調子を合わせるように女中の浅尾が、伝蔵びいきの真如院から頼まれて毒を入れたと自白した。早速、真如院は座敷牢に入れられ、苛酷な取り調べをうけるうち、伝蔵と交わした恋文を発見され、さらに彼女は伝蔵との密通を白状する。しかし、置毒のことは一切否定しつづけた。

「これをどこまで信用してよいのか。その大槻の手紙というのものこっていなければ、真如院が白状したというのも、大槻の敵である前田側の記録にしかないことである」(海音寺潮五郎著『列藩騒動録』)

前田は置毒のことはほうっておき、もっぱら密通事件を問題にして、重熙に伝蔵グループの処刑を求めた。その結果、伝蔵は五箇山に流されて自殺、真如院は絞殺、浅尾は死刑、一族五十余名ことごとく死罪あるいは流刑にされたのだ。

一体、茶釜の中に毒を入れた仕掛け人はだれか。それはたぶん「忠臣」づらをした前田直躬であったろう、と海音寺潮五郎は推理している。

斉彬派は勝ったのか負けたのか(お由羅騒動)

数あるお家騒動の中でも、この事件は幕末最大の騒動といえるが、しかも文政七年(一八二四)から嘉永四年(一八五一)に至る四半世紀にわたって揺れつづけた事件で、お家騒動中の「最長不倒距離」を打ち立てたものとして特筆に価する。

家久から数えて十代目の藩主斉興に三人の子供がいた。次男は養子にいったので、正妻の子である長男の斉彬と、妾の子である三男の久光が残った。

だいたいおやじの斉興がさっさと長男に藩主の座をゆずって隠居してしまえばなにごとも起こらなかったのだろうが、このおやじ、斉彬が中年になってもなかなか隠居しない。しかも、正妻の死後は妾のお由羅ばかりをかわいがる。それのみか、西洋文化にあこがれる長男を敬遠し、久光の方により深い愛着を示しがちだった。

当然、斉彬派の連中は、お由羅にわが子久光を嗣子とする野望あり、と疑い警戒しはじめる。そんなときに、斉彬の子供がつぎつぎと早死にした。これぞお由羅一派の陰謀によるものだと

し、斉彬派の町奉行近藤隆左衛門、同じく山田清安ら六名が、お由羅派の重臣島津久徳・調所広郷・碇山将曹らの排斥を企てるがこれが露見し、切腹して果てた。このとき、彼らにくみした高木市助ら十数名も処罰される。

翌年にはさらに四人が切腹させられたのを皮切りに、昨年処罰された高木と仙波が切腹、村野伝之丞以下十一名が遠島。ほかに江戸家老の島津壱岐も切腹。しかも、ご丁寧なことに、昨年切腹した町奉行の近藤、山田および船奉行の高崎五郎右衛門の三人の墓をあばき、鋸引き磔にするというむごたらしさ。

斉彬党への弾圧はその後も執拗につづき、五十名を上回る者たちが切腹・遠島・追放処分を受けたり自殺に追いやられたりしたなかで、筑前に亡命した連中が藩主黒田斉溥にすがり、事件を幕府に訴える。時の老中阿部正弘らは事態を憂えて再三斉興に勇退をすすめた結果、ようやく隠居の内諾をとりつけ、おそまきながらこに斉彬の藩主就任が実現することになる。このとき斉彬四十三歳。

しかし、不思議なことに、彼が藩主になっても、あれほど斉彬派に弾圧を加えた連中を、ひとりも処罰しなかったことだ。与党の西郷隆盛などはもっとも憤激した一人だといわれているが、斉彬は終始この事件に対して傍観者的態度を崩さなかった。父斉興への遠慮と、これ以上騒動を深刻にさせぬための配慮からであったと思われる。

斉彬はしかし、在位わずか八年で急死している。お由羅派の仕掛けた毒にやられたのだという説が有力だ。海音寺潮五郎も毒殺説を固く信じており、「ぼくは斉彬に盛られた毒物の見当もつけている。亜砒酸系統のものだ」と決めつけている。

斉彬の死後、久光の子忠義が新藩主となった。お由羅の執念はかくして貫徹されたのである。

（風巻　紘一）

山手樹一郎長編時代小説全集　38

紅顔夜叉

発行——一九七九年六月二五日初版第一刷

著者——山手樹一郎©

装画——国貞（静嘉堂文庫提供）

装丁——玉井ヒロテル

発行者——和田欣之介

発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三—四—一六
〒一〇三　☎東京二七一—〇〇五一　振替東京〇—一六一七

印刷製本——城北印刷製本センター

◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします